

学 位 論 文

形容詞性接辞の意味変化に関する史的研究

——「-ぽい」と「-らしい」——

平成 24 年 3 月

岩崎真梨子

岡山大学大学院
社会文化科学研究科

序論	5
1. 本論文の目的	5
2. 話者の推測を表す「ーばい」とその成立	7
3. 「ーばい」と同様の意味変化を起こす接辞	10
4. 概観	12
4-1. 方法と調査資料	12
4-2. 先行研究	19
4-2-1. 「ーばい」の先行研究	19
4-2-2. 「ーらしい」の先行研究	33
本論	38
第1章 「ーばい」の意味用法と展開	38
0. はじめに	38
1. 近世：接辞用法の分類	39
2. 明治期・大正期：接辞用法の変化	42
3. 昭和期以降：属性を示す用法の成立	45
4. 昭和期以降：話者の推測的判断を示す用法の成立	47
5. おわりに	52
第2章 「ーばい」の上接部に関する考察	53
0. はじめに	53
1. 先行研究	54
2. 「ーばい」の上接部の分類	55
3. 「ーばい」の上接部の史的変遷	57
3-1. 語根接続	57
3-2. 動詞連用形接続	59
3-3. 形容詞語幹接続	61
3-4. 形容動詞語幹接続	64
3-5. 名詞接続	67
3-6. 句接続	71
3-7. 上接部省略	75
4. 句接続の「ーばい」の成立過程	76

5. おわりに	77
第3章 「ーぽい」の活用形	78
0. はじめに	78
1. 連体形に関する考察 ―修飾語句との関連と意味・用法の変化―	79
1-1. 近世(1800年代以前)	79
1-2. 近世(1800年代以降)～明治期	79
1-3. 明治期・大正期	80
1-4. 昭和期初め～終わり頃	81
1-5. 昭和期終わり頃以降	83
1-6. まとめ	84
2. 終止形に関する考察 ―連体用法との関連と意味用法の変化―	85
2-1. 近世～昭和前半ば	85
2-2. 昭和前半ば～昭和期終わり頃	88
2-3. 昭和期終わり頃以降	88
2-4. まとめ	92
3. 連用形に関する考察 ―意味用法と形式の変化―	92
3-1. 近世～明治期終わり頃	93
3-2. 明治期終わり頃～昭和期終わり頃	94
3-3. 昭和期終わり頃以降	95
3-4. まとめ	96
4. 過去形に関する考察	97
5. 語幹で用いられる「ーぽい」に関する考察	98
6. おわりに	100
第4章 話者の判断を示す「ーぽい」	101
0. はじめに	101
1. 話者の推測を示す「ーぽい」	102
2. 話者の観察している状況を示す「ーぽい」	104
3. 過去に観察した状況を示す「ーぽい」	106
4. 話者の内面を示す「ーぽい」	107
5. 話し相手の言葉の引用／相槌を示す「ーぽい」	108
6. やわらげ	109
7. 属性を示す用法における話者の判断	109
7-1. 属性を示す「ーぽい」の意味・用法	110

7-2. 属性を示す用法とその広がり	114
8. おわりに	117
第5章 「ーらしい」の意味用法の変遷	118
0. はじめに	118
1. 中世・近世前期：接辞用法	118
2. 近世中期：接辞用法の広がり	121
3. 近世後期：接辞用法と推量用法への派生	124
4. 明治期・大正期：接辞用法と推量用法	128
5. 昭和期以降：接辞用法と推量用法 — 現代語の「ーらしい」 —	134
6. おわりに	137
第6章 「ーらしい」の活用形	139
0. はじめに	139
1. 中世・近世前期：接辞用法の「ーらしい」	139
2. 近世中期：連体用法における変化	142
3. 近世後期：終止用法の変化	144
4. 明治期・大正期：活用形の増加と連体形・連用形の変化	147
5. 昭和期以降：終止形・連用形・未然形における変化	152
6. おわりに	154
第7章 「ーらしい」の連体用法に関する考察	155
0. はじめに	155
1. 先行研究	155
2. 近世における「ーらしい」の連体用法	160
3. 「Xに見える」意を表す連体形「ーらしい」と「ーらしき」	164
4. 「ーらしい」の推量用法	167
5. おわりに	168
結論	169
1. 「ーばい」の意味変化	169
1-1. 第1段階：接辞用法の段階	169
1-2. 第2段階：接辞用法における用法の変化	173

1-3. 第3段階：「YはXに見える」ことを示す接辞用法	178
1-4. 第4段階：話者の判断を示す用法	181
1-5. 第5段階：相手の発話を引用する用法	185
1-6. 第6段階：話者の推測を示す用法・相槌を示す用法	186
1-7. おわりに	187
2. 「ーらしい」の意味変化	189
2-1. 第1段階：接辞用法	189
2-2. 第2段階：接辞用法の広がり	190
2-3. 第3段階：推量用法の成立	193
2-4. 第4段階：接辞用法と推量用法	196
2-5. 第5段階：相槌を示す用法の成立	200
2-6. おわりに	203
3. 形容詞性接辞の意味変化	204
【参考文献】	206
【用例出典】	209

序論

1. 本論文の目的

形容詞を形成する接辞^{*1}に、「安っぽい」「怒りっぽい」「水っぽい」などの「-っぽい」がある。たとえば、以下のような例が見られる。

- (1)a 安っぽいクローゼットの戸を開け、乱雑に突っ込まれた服の中から、ベージュのチノパンツと白のTシャツを引っ張り出した。

(東野圭吾『さまよう刃』2004〈平成16〉)

- b 夢の中で、白くてほこりっぽい道を、わたしは歩いているのだ。

(川上弘美『センセイの鞆』2004〈平成16〉)

- c 何、目と目で通じ合っちゃってんだお前ら！ と一瞬むっとしてしまい、直後、そう思った自分をまるでひがみっぽいおばさんみたいじゃないかと思った。

(豊島ミホ『檸檬のころ』2005〈平成17〉)

一方で、この接辞は、近年になって意味・用法に変化が見られる。新しく見られるようになったと思われる例を、「少納言」(KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)^{*2}の「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo!ブログ」から挙げる(ヒット数1701。うち表示されるのは500)。

- (2) あいのりなんて、どーせヤラセ番組っぽいし、そういうこともありなんじゃない？

(「Yahoo!知恵袋」2005〈平成17〉)

- (3) 広島に出張したところからシクシクと痛みだしていたのであるが、ここにきてどうしようもなく痛いのである……。筋肉では無くどうもヘルニアっぽい……。『ボキッ!!』と鳴れば気持ち良いのだろうがならない……。

(「Yahoo!ブログ」2008〈平成20〉)

- (4) 家の近くに鳥が落ちているのですが、どうすれば良いですか？ 野生ではなくペットっぽい。足をケガしてるみたいで一応捕獲しました。

(「Yahoo!知恵袋」2005〈平成17〉)

- (5) ちなみに私は Lunascape っていうブラウザで見ますが、自動更新機能はありませんよ「表示」のなかの「更新」ってところに。IE にはそういう機能が無いっぽいですね。

(「Yahoo!知恵袋」2005〈平成17〉)

*1 先行研究で「接尾語」とされる場合も、本稿では「接辞」と表記し、引用の場合のみ原文に従う。

*2 検索結果は2011年10月7日18時40分のもの。

URL http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form

- (6) イラスト、私の誕生日、わくわく…そゆことでない？ とりあえず私は風邪ひいたっぽいです。インフルエンザ予防したのに… orz 皆さんも風邪ひくんじゃないゾ☆ (「Yahoo!ブログ」2008〈平成 20〉)

これらの例は、先に挙げた「安っぽいクローゼットの戸」「ほこりっぽい道」「ひがみっぽいおばさん」などという場合の「-っぽい」とは、形や意味用法が異なると考えられる。

(2)「あいのりなんて、どーせヤラセ番組っぽい」や(3)「筋肉では無くどうもヘルニアっぽい・・・。」は、話者が「あいのりというテレビ番組はヤラセ番組である」「痛みはヘルニアである」と判断していることが示されているのではないかとと思われる。このとき、「-っぽい」は、「どうせ」や「どうも」という、話者のある事態に対する認識を表す際に用いられる副詞と共起する。

(4)「野生ではなくペットっぽい」も(2)(3)と同様で、「落ちている鳥は(野生の鳥ではなく)ペットである」という判断が示されていると考えられる。また、この例は、「落ちている鳥」に対し、「野生の鳥ではなくペット」のように比較して判断している。

(5)の例では、「-っぽい」が「IE にはそういう機能が無い」という句を承けている。形のうえでは、(2)から(4)に挙げた名詞接続のものと非常に異なって見えるが、意味としては、(4)の「(落ちている鳥は)野生の鳥ではなくペットである」と同様で、「Lunaspape というブラウザには自動更新機能がある」けれど「IE にはそういう機能が無い」と判断している。なお、(3)の「筋肉では無くどうもヘルニアっぽい・・・。」についても、「痛み」は「筋肉によるものではなくヘルニア」というように比較して判断が成されている。

(6)「とりあえず私は風邪ひいたっぽいです。」は、「-っぽい」が「私は風邪ひいた」という句を承けている。話者が現在観察している状況が、「-っぽい」で示されていると考えられる。

以上の例を見ても明らかな通り、近年に新しく見られるようになった「-っぽい」は、「話者から X に見える／感じる」という判断を表すようになったのではないかと考えられる。これに対し、古くから見られる「安っぽいクローゼットの戸」「ほこりっぽい道」「ひがみっぽいおばさん」では、道／クローゼットの戸の性質、おばさんの性格を表しており、「-っぽい」は「上接部 X で表される特徴を有する」ことや「X を多く含む」「X という心的状態によく／すぐなる性格である」といったことを示す。両者の間には、意味のうえで大きな区別がある。

また、近年の小説を調査したところ、以下のような例が得られた。

- (7) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DK で、もう一つの部屋は寝室っぽい。

(山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』2004〈平成 16〉)

- (8) 「まあ、身体は絞ってるからね。マイクタイソンだって、巨人って感じじゃなかったし。ただ、日本人で、挑戦する男がいるなんて、昔は思わなかったけど、時

代は変わるもんだね」板橋香澄は感慨深そうに首を振った後で、「で、そうそう、その試合の結果、挑戦者が勝ったら、学はあなたに告白するっぽいんだよ」と続けた。

「はい？」わたしはまず、目をしばたたき、それから周囲を見渡し、さらには鏡に映る自分の顔が赤らんでいるのを確認し、口をぱくぱくとさせた。

(伊坂幸太郎「ライトヘビー」2007〈平成19〉)

これらは、(2)から(6)に挙げた目の前の状況についていうものとは異なると考えられる。

まず、(7)では、話者は「質素な部屋において画材や描きかけの絵が置いてある」状況を見ているが、「ーぽい」で示されるのは「もう一つの部屋は寝室」という、未だ入っていない部屋が何であるかについて述べている。(8)は、「学はあなたに告白する」という未実現の事柄を「ーぽい」が承けている。

以上の通り、ごく近年の例ではあるが、このような話者が直接確認できないもの・ことを「ーぽい」が承ける例も存する。

2. 話者の推測を表す「ーぽい」とその成立

先述の通り、近年の「ーぽい」は、話者の推測的判断を表していると考えられる。また、その判断は、目の前の状況を証拠としている。本論文では、こういった話者の推測を表す「ーぽい」の成立過程を、通時的に検討する。まず、現代語の例を参照すると、おおよそ次のようなことがいえるのではないと思われる。

「ーぽい」には、以下に示す2通りの意味・用法を見出せる。

(9) 六本木は子供っぽいなんていう発想も、私たちの周囲にはない。

(山田詠美『放課後の音符』1989〈平成元〉)

(10) 「ちがーう。西脇さんのことじゃない。あたし、あの人には好かれてんの」

「え、なんで？」

「うーん、同類だと思われてるっぽい」

(柴田よしき『やってられない月曜日』2010〈平成22〉)

(9)では「子供っぽい」によって「六本木」の性質が表されており、「ーぽい」は「(私の)六本木に対する認識」を示す形容詞として用いられていると考えられる。ここでの「子供っぽい」は、上接名詞「子供」が子供の持つ拙さを幼稚さを表すものであり、「子供っぽい」一語で「六本木」の性質を表す。

一方、(10)では、「同類だと思われてるっぽい」で「私が西脇さんにどう思われているか」という(話者の)認識が示されている。「同類だと思われてる」は「西脇さんにどう思われているか」を話者の言葉で表したものであり、「っぽい」は話者が認識している意味を示すのではないと思われる。この場合は、「西脇さんにどう思われているか」を上接部が示し、話者がそう認識しているということを「ーぽい」が表しているのではないか

と思われる。

以上のことから、(10)は「X っぽい」一語で性質を表す例、(11)は「(っ)っぽい」が話者の推測的判断を表す例というように分けられる。従って、「ーっぽい」には、

[Y=X っぽい]

のように形容詞性接辞を表す場合と、

[Y=X]っぽい

のように話者の推測的判断を表す場合の、2つのタイプが存すると考えられる。

これは、言い換えると、「(Y が) といった性質・特徴を有するか」を表していた接辞が、「話者から (Y が) どのように見えるか」を表すようになるということであると考えられる。

では、「ーっぽい」はいつ頃から、どのようにして「話者から (Y が) どのように見えるか」という意味を表すようになったのであろうか。「ーっぽい」は近世から見られる接辞であるが、話者の推測的判断を表すようになるのは、昭和期の終わり頃である。

(11) ドの次は「ボメ」のようです。雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッボメだ」と言うのだそうです。
(言語生活 1982.6 〈昭和 57〉)

この例における「ーっぽい」の上接部「(今日は) 雨」は「雨が降る」という未だ起こっていない事柄を表しており、「ーっぽい」は「ある事柄について、それが成立する可能性がある」ことを表すのではないかと考えられる。

(11)のような例が見られる前に、以下のような連体形の例が見られることが重要であると考えられる。

(12)a こちらを向いている角刈りのやくざっぽい男がおり、女の髪をつかんでカウンターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っていた。
(五木寛之「こがね虫たちの夜」1969 〈昭和 44〉)

b [写真を見ながら]湘南の海岸でしょうか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぽい男と肩を寄せ合っている。(泡坂妻夫『花火と銃声』1988 〈昭和 63〉)

これらの例では、話者から「(Y は) X に見える／感じがする」ことが表されていると考えられる。被修飾語 Y は、といったもの・人であるかがはっきり示されておらず、且つ、話者が知覚している特徴から上接名詞 X と認識されている。

また、ここでの「X っぽい Y」は、「こちらを向いている角刈りの男は、やくざである」「写真でトシ子が肩を寄せ合っている男は、やくざである」のように X と Y を同定関係で表すことが可能である。「ーっぽい」が、話者から目の前の人・もの・状況がどう見えているかを表すということは、「話者から見て Y は X である」と判断することに繋がるのではないかと考えられる。

本論文の目的は、形容詞性接辞が話者の推測・推量を表す過程で、まず連体用法におい

て話者から「Xに見える／感じる」ことを表す例が見られるようになり、その後、終止用法でも同様の変化が起こることを論じることにある。

なお、このような、何らかの証拠に基づく話者の認識を表す形式として、証拠性判断のモダリティが挙げられる。ここでは、証拠性判断のモダリティについて確認する。『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』（日本語記述文法学会編 2003年）では、証拠性判断のモダリティとして「ようだ」「らしい」「(し)そうだ」「(する)そうだ」を挙げられている。「概観」において、以下の通り記述されている。

「ようだ」や「(する)そうだ」は、話し手が頭の中で考えたり想像したりしたことを表すのではなく、外部に存在する情報を観察したり取り入れたりすることを通じて、その認識が成立していることを表す形式である。このような、その情報が何に基づくかということについての認識的な意味を「証拠性」(evidentiality)という。(p.164)

証拠性判断のモダリティとして、「ようだ」「みたいだ」「らしい」「(し)そうだ」「(する)そうだ」を挙げられている。

また、「ようだ」「らしい」と共起する副詞について、以下の通り述べられている。

【ようだ】

視覚的に観察されたことを述べる場合には、「見たところ」と共起し、推定用法では、「どうやら」「どうも」と共起する。

- ・ 見たところ、この野菜はあまり鮮度がよくないようだ。
- ・ {どうやら／どうも}、この人は何もわかっていないようだ。

比況の表現では、{まるで／あたかも}などと共起する。

- ・ あの人の口振りは、{まるで／あたかも}自分だけが正しいかのようだ。

(p.166)

【らしい】

推定用法では、「どうやら」「どうも」と共起する。

- ・ {どうやら／どうも}、この人は何もわかっていないらしい。

伝聞用法では、その文の内容が伝聞したことであることを予告する「何でも」「聞けば」「聞くとところによると」や、情報源を表す「～によると」「～によれば」「～の話では」「～から聞いたところによると」「～が言うことには」「～に言わせると」「噂では」などの表現と共起する。

- ・ {何でも／聞けば／聞くとところによると}、今年の夏は暑さが厳しいらしい。
- ・ {新聞によると／新聞によれば}、失業率が過去最高を記録したらしい。

- ・ 山本 {の話では／から聞いたところによると／が言うには／に言わせると}, あ
の映画はつまらないらしい。(pp.168-169)

「ーぱい」にも「どうやら」「どうも」と共起する例が見られるため、注意が必要である。

- (13) a 二日後、昼休みに鮎子は、雪子の隣に腰を下ろし、自分で作ってきた弁当を食べることにした。それから、「どうやら駄目っぽいです」と打ち明けた。

(伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006〈平成 18〉)

- b 「どうやら私の家族の誰かが、勝手なことをしてくれたっぽいし——」

と呟いた。(西尾維新『零崎曲識の人間人間』2007〈平成 19〉)

- (14) a ……そう言うアンタは？ 支倉に來た目的はこれで終わりでしょ。さっさと南部に帰れば？」

「いや、これがね、どうも支倉は当たりっぽいんだよなあ。

(奈須きのこ『DDD』2巻 2007〈平成 19〉)

- b 今、米国は 9100 ドルの株高になってますが、どうもあれはバブルっぽいんじゃないか。いつか日本がたどった道をたどってるんじゃないかという気がする。

(毎日新聞 1998.4.19〈平成 10〉)

こういった例では、「ーらしい」や「ーようだ」と同様、証拠に基づく話者の推測を表しているのではないと思われる。一方で、「まるで／あたかも」や「～によると」「～によれば」「～の話では」「～から聞いたところによると」「～が言うことには」「～に言わせると」「噂では」といった副詞と共起する例は見られない。

3. 「ーぱい」と同様の意味変化を起こす接辞

前節で見てきた通り、「ーぱい」は元は形容詞性接辞としての意味用法のみを有していたが、近年になって話者の推測を示す用法を獲得している。これは、「ーぱい」のみに見られる変化ではない。本論文では、「ーぱい」と同様の意味変化を起こす接辞として「ーらしい」を取り上げる。

「ーらしい」に形容詞用法（接辞用法）と推量（推定）用法が存することは、周知の通りである。以下の例を見られたい。

(15) [形容詞性接辞]

「こんどの戦さには、足利家の白旗を陣頭に進めて朝倉や浅井を討とう。そのように信長に申し伝えよ。よろこんで旗を樹てると申し伝えよ」

その声音までがしらしい。(司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉)

(16) [推量]

誠の足元では鮎村が転がったままだった。呻き声を漏らしながら立ち上がろうとした彼の腕を、どこからか現れた男が掴んだ。その様子から、この男も刑事らしいと誠は思った。
(東野圭吾『さまよう刃』2004〈平成16〉)

(15)では、「声音」の性質を「一らしい」によって表している。上接名詞「しお」は、「人を惹きつける魅力(のある態度)」を表すと考えられる。これは「しおらしい」の意味(かわいらしい、殊勝である、など)とは異なり、意味のうえで上接名詞を切り出すことは難しいと思われる。従って、「しおらしい」で一語の形容詞として用いられると考えられる。

(16)では、上接部において「この男は刑事である」という話者の判断が示されている。このとき、「一らしい」は、話者が「この男」を「刑事」であると蓋然的に同定する判断を表していると考えられる。また、波線部に示されるような話者の得た情報が、判断の根拠となっていると考えられる。

以上のことから、「一らしい」にも、

[Y=Xらしい]

[Y=X]らしい

という2つのタイプが存すると考えられる。

では、「一らしい」の推量用法はいつ頃から見られるのだろうか。まず、形容詞の「一らしい」は、中世以降に用例が見られる。一方、推量用法の例が見られるのは近世である。以下が初出例である。

(17) てい「サア一ぶくあがらんせ。いつたいおまいは、どこを尋ねさんすのじやいな。参宮じやあるが、おひとりか。但しは、おつれでもおますかいな 弥次「さやうさ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたアございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰瘤のあるおかたじやおませんかいな 弥次「さやう／＼

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編追加 1806〈文化3〉)

この例では、話者は弥次の連れかもしれない二人組を見ており、その特徴について述べている。ここでの「一らしい」は、「ひとり(の男)＝お江戸(の人)」であると推量しているのではないと思われる。

(17)のような例が見られるようになる前に、次のような連体形の例が見られることに注意される。

(18) 彼の若衆は、「先達ておつばねらしき女中の直に御出であそばし、奥さまの見ぬ恋にあこがれ給へば、しばしの間来てお心をなぐさめてかへりてくれ。しからば未／＼はそちが為に成るべし。

(八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉)

- (19) 女郎「向ふに人／＼。早く来さつせへよ」金十郎「明日の朝は茶漬けを食いの、ずい帰りだぜへ。今夜はおゝかた、菊園か菊の井といふ名代らしい晩だ」喜八「悪推ばかりおつせんす。行灯に無駄書き、もう帰るも古いやつね」

(奈蒔野馬乎人「^{左通}腔多雁多帳」1783〈天明3〉)

これらの例では、「さっき来た女中はおつぼねに見える」「今晚は菊園か菊の井という名代が来ると思われる」ことが表されているのではないかと思われる。どちらの例でも、話者から「YはXに見える／感じられる」ことが示されていると考えられる。

以上の通り、「ーらしい」についても、まず連体形で「Xに見える／感じられる」ことを表す用法が存在し、その後、終止形で「Xと推量する」ことを表す用法が見られる。

「ーらしい」は、「ーばい」よりも早くから見られ、話者の推量を表す形式として用いられており、その史的変遷は非常に興味深い。「ーばい」の意味変化は、しばしば若者言葉として着目され、「ーらしい」は各時代ごとに考察が成されているが、通時的な研究については考察の余地があるように思われる。また、「ーばい」「ーらしい」の意味用法の変化を関連づけて述べられたものも見当たらない。

本論文では、「ーばい」「ーらしい」が話者の推測的判断及び推量を表すようになる経緯を、段階に分けて示す。そのなかで、「YはXに見える」ことを表す連体用法が見られるようになる段階があり、その段階をきっかけとして話者の推測的判断が反映されるようになることを論じる。

4. 概観

4-1. 方法と調査資料

以下、本論文の構成を示す。

第1章から第4章にかけては、「ーばい」が話者の推測を表すようになる過程を、意味用法、上接部、活用形から明らかにする。

第1章では、「ーばい」が話者の推測を示す用法を獲得する過程を、意味用法の広がりを中心に、4期に分ける。1期：近世の「ーばい」は、形容詞である。用法は、「すぐ／よく～する（怒りっぱい）」「顕著な特徴（理屈っぱい）」「含有率・濃度が高い（水っぱい）」の3つに分かれる。2期：明治・大正期で、「顕著な特徴」を示す用法の意味が変化する。3期：昭和期の初め頃、「やくざっぱい男」で「男はやくざに見える」ことを表す用法が見られるようになる。この用法は、話者が「～に見える」ことを表す点で新しい。4期：昭和期の終わり頃、雨が降りそうなことを「今日は雨っぱい」という用法が見られるようになる。

第2章では、上接部を分類し、変遷を明らかにする。「ーばい」の上接部は主に品詞によって分けられる。近世から現代に至るまで、「ーばい」はどのような上接部においてもある程

度の造語力を有するが、特に広がりが見られるのは名詞接続、次いで形容動詞語幹接続である。また、近年には句を承ける例も見られるようになる。一方、語根接続（湿っぽいなど）や動詞連用形接続、形容詞語幹接続は、造語力は小さくなく、広がると言い難い。

第3章では、「一ぱい」を主に活用形で分類し、変遷を明らかにする。「一ぱい」は、初め連体形・連用形・終止形が見られ、大正期より「一ぱそう」「一ぱさ」のような語幹で用いられる例や、「一ぱかった」のような過去形が加わる。用例数、意味・用法を見ると、近世から昭和期の初め頃までにかけて、主に連体形（連用形）において変化が認められる。一方、それ以後、特に昭和期の終わり頃以降になると、終止形での変化が見られる。

第4章では、話者の判断を示す「一ぱい」について、その意味・用法を検討する。「一ぱい」によって表される話者の判断は、話者が直接知覚できるものに対するものと、直接知覚できないものに対するものに分かれる。一般的には、「一ぱい」は話者が直接知覚したもの・ことに対する判断を示す。

第5章から第7章にかけては、「一らしい」が推量用法を獲得する経緯について考察する。

第5章では、「一らしい」の意味用法の変遷について考察する。中世から近世半ばにかけては接辞用法のみであり、近世後期になると推量用法が見られるようになる。その後、現代に至るまで、接辞用法と推量用法に大きく2分される。一方、明治期・大正期や昭和期以降にも、上接部の変化が指摘される。

第6章では、「一らしい」の活用形の変遷を示す。「一らしい」の活用形は、主に連体形・連用形・終止形の3つであり、明治期以降に未然形や過去形が見られるようになる。上接部や意味用法の変化は連体形・終止形より生じ、その後連用形など他の活用形でも同様の変化が見られるようになる。

第7章では、「菅野らしい男を発見」のような、連体形で「(話者から) Y が X に見える」ことが表される用法に着目し、この用法と、「明日は雨が降るらしい」のような話者の推量を表す用法との関連を明らかにする。「一らしい」は、中世から近世の半ばにかけては、形容詞の例のみが見られる。しかし、1680年代になると、連体形で「(話者から) Y が X に見える」ことが表される例が見られるようになる。その後、1800年代になると、終止用法において「今のはどふも米八さんらしいヨ」(『春色梅児誉美』初編)のような話者の推量を表す例が見られることとなる。

結論では、それまでの章の内容を踏まえ、「一ぱい」と「一らしい」が話者の判断を示す表現として用いられるようになるプロセスを段階に分けて示す。

続いて調査資料を挙げる。

「一ぱい」の調査資料は、次の通りである。

近世文学作品『洒落本大成』『滑稽本集』『誹風柳多留 新装版』『浮世風呂』『浮世床 四十八癖』『花暦八笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人』『嘶本大系』

明治文学作品『明治開化期文學集』『坪内逍遙集』『女學雑誌・文學界集』

データベース『明治の文豪』『太陽コーパス』『新潮文庫の 100 冊』^{*3}

先行研究『国語辞典にない言葉』

大正データベース『大正の文豪』『太陽コーパス』『新潮文庫の 100 冊』

先行研究『国語辞典にない言葉』

昭和文学作品『昭和文学全集』『宮本百合子集』

データベース『新潮文庫の 100 冊』『朝日新聞』

先行研究『国語辞典にない言葉』『言語生活の耳』

平成先行研究『言語生活の耳』

小説（1900年代後半）：作品初出順 同一作者の作品はまとめて示す

山田詠美『放課後の音符』（1989）/吉本ばなな『白河夜船』（1989）『N.P.』（1990）『キッチン』（1991）『とかげ』（1993）『ハードボイルド・ハードラック』（1999）『デッドエンドの思い出』（2003）/唯川恵『さよならをするために』（1989）/山本文緒『パイナップルの彼方』（1992）『恋愛中毒』（1998）/藤野千夜『少年と少女のポルカ』（1996）「おしゃべり階段」（1999）/桐野夏生『OUT』（1997）『東京島』（2007）/風野潮『ビート・キッズ』 I（1998）『ビート・キッズ』 II（1999）/宮部みゆき『夢にも思わない』（1999）

小説（2000年代）：同上

伊坂幸太郎『オーデュボンの祈り』（2000）『陽気なギャングが地球を回す』（2003）『ラッシュライフ』（2005）「透明ポラーベア」（2005）『アヒルと鴨のコインロッカー』（2006）『陽気なギャングの日常と襲撃』（2006）『重力ピエロ』（2006）『チルドレン』（2007）「ライトヘビー」（2007）/『ゴールデンランバー』（2007）/野沢尚『反乱のボヤージュ』（2001）/舞城王太郎『煙か土か食べ物』（2001）『世界は密室でできている』（2001）『山ん中の獅見朋成雄』（2003）『阿修羅ガール』（2003）『好き好き大好き超愛してる』（2004）『みんな元気。』（2004）『熊の場所』（2004）『スクールアタック・シンдрーム』（2004）『SPEED BOY』（2006）/江國香織「僕はジャングルに住みたい」（2003）/東野圭吾『さまよう刃』（2004）『夜明けの街で』（2007）/壁井ユカコ『キーリ』 V（2004）・VI（2004）・IX（2006）『鳥籠荘の今日も眠たい住人たち』 2 巻（2007）/石田衣良『1 ポンドの悲しみ』（2004）/川上弘美『センセイの鞄』（2004）/瀬尾まいこ『幸福な食卓』（2004）/西尾維新

*3 『新潮文庫の 100 冊』における翻訳作品は、初出の特定が困難なものが含まれるため除いた。

『零崎双識の人間試験』(2004)『零崎軋識の人間ノック』(2005)『零崎曲識の人間人間』(2007)『零崎人識の人間関係 匂宮出夢との関係』(2008)『零崎人識の人間関係 零崎双識との関係』(2009)『零崎人識の人間関係 戯言遣いとの関係』(2010)/奈須きのこ『空の境界 the garden of sinners』上(2004)『DDD』1巻(2007)・2巻(2007)/本多孝好『真夜中の五分前 side-B』(2004)/山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』(2004)/豊島ミホ『檸檬のころ』(2005)『青空チェリー』(2005)/日日日『ちーちゃんは悠久の向こう』(2005)『うそつき』(2005)『ピーターパン・エンドロール』(2006)/阿部和重『グランド・フィナーレ』(2005)/恩田陸『夜のピクニック』(2006)/柊野浩一『ショートソング』(2006)/あさのあつこ『ガールズ・ブルー』(2006)/有川浩『図書館戦争』(2006)『図書館内乱』(2006)『図書館危機』(2007)『図書館革命』(2007)『別冊図書館戦争Ⅰ』(2008)『別冊図書館戦争Ⅱ』(2008)/藤谷 治『誰にも見えない』(2007)/北尾トロ『危ないお仕事!』(2008)/柴田よしき『やってられない月曜日』(2010)/桜庭一樹『GOSICK VII』(2011)

漫画 多田かおる『愛してナイト』(1982-1984)/樹なつみ『花咲ける青少年』(1990-1994)『八雲立つ』(1992-1995)/やまざき貴子『っポイ!』(1992-1994)/高屋奈月『フルーツバスケット』(1999-2006)『星は歌う』(2008-2010)/相田裕『GUNSLINGER GIRL』(2002-2010)/空知英秋『銀魂』(2004-2005)/岩永亮太郎『Pumpkin Scissors』(2007-2008)/椎名軽穂『君に届け』(2006-2010)/枢やな『黒執事』(2009)/西炯子『甥の一生』(2009)

新聞 「朝日新聞」(1989-1997)/「読売新聞」(1997-1998)/「毎日新聞」(1997-1998)

雑誌 『an・an』(1994, 1998, 2006, 2008)/『non-no』(1999-2008)/『FRaU』(2003)/『Cancam』(2006)/『with』(2006)/『papyrus』(2007)/『spring』(2007, 2008)/『ダ・ヴィンチ』(2007, 2008)/『H』(2007)/『MEN'S non-no』(2008)/『popteen』(2009)/『mina』(2007, 2008)/『MORE』(2007, 2008)/『steady』(2008)

近世においては洒落本・滑稽本などに見られるが、『嚟本大系』では用例は得られなかった。

明治期・大正期については、『新潮文庫の100冊』『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』のデータベースを中心に調査している。明治初期から半ば(明治1年:1868年~明治20年:1887年)までや、戦前・戦時中については作品数が少ないこともあり、『明治開化期文学集』『坪内逍遙集』『女学雑誌・文学界集』『昭和文学全集』で補うこととした。

昭和期の終わり頃以降は、形容詞性接辞としての用法に加えて話者の推測を表す用法が見られるようになるが、話者の推測を表す例は、特に(くだけた)会話文に多く見られる。

このため、漫画や雑誌などを調査対象に含めている。小説・漫画に関しては 1980 年代以降、幅広く調査することを意識したが、作品は任意に選出した。雑誌は 1990 年代以降のものを調査しており、選出は小説・漫画と同じく任意である。

上述によって採取した用例数は以下の通り。

【用例数】

近世	明治	大正	昭和	平成	合計
82	176	165	1012	1681	3116

「ーらしい」については以下の通りである（先行研究から引用したものは省く）。『新潮文庫の 100 冊』『明治の文豪』『大正の文豪』は、全作品から用例を採集すると用例数が多く処理しきれないと判断し、時代が偏らないよう注意したうえで、任意で作品を選出した。選出した作品は以下の通りである（作家は 50 音順、作品は初出順に挙げる）。

『新潮文庫の100冊』

赤川次郎「女社長に乾杯！」1982〈昭和 57〉/阿川弘之「山本五十六」1977〈昭和 52〉/
 安部公房「砂の女」1962〈昭和 37〉/有吉佐和子「華岡青洲の妻」1966〈昭和 41〉/池
 波正太郎「剣客商売」1972-1989〈昭和 47-64〉/石川達三「青春の蹉跎」1968〈昭和 43〉/
 泉鏡花「婦系図」1908〈明治 41〉/五木寛之「風に吹かれて」1968〈昭和 43〉/伊藤
 左千夫「野菊の墓」1906〈明治 39〉/井上ひさし「ブンとフン」1970〈昭和 45〉/井
 上靖「あすなろ物語」1958〈昭和 33〉/井伏鱒二「黒い雨」1966〈昭和 41〉/遠藤周
 作「沈黙」1966〈昭和 41〉/大岡昇平「野火」1952〈昭和 27〉/梶井基次郎「城のあ
 る町」1924〈大正 12〉・「橡の花」1925〈大正 13〉・「雪後」1926〈大正 14〉・「冬の日」1927
 〈昭和 2〉・「ある崖上の感情」1928〈昭和 3〉・「愛撫」1930〈昭和 5〉・「交尾」1930
 〈昭和 5〉・「のんきな患者」1931〈昭和 6〉/川端康成「雪国」1935-1947〈昭和 10-22〉/
 北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和 38〉/倉橋由美子「聖少女」1965〈昭和 40〉/沢
 木耕太郎「一瞬の夏」1978〈昭和 53〉/椎名誠「新橋烏森口青春篇」1985-1987〈昭和 60-62〉/
 司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉/島崎藤村「破戒」1906〈明治 39〉/
 高野悦子「二十歳の原点」1971〈昭和 46〉/竹山道雄「ビルマの竪琴」1947-1948〈昭
 和 22-23〉/太宰治「人間失格」1948〈昭和 23〉/立原正秋「冬の旅」1968-1969〈昭和 43-44〉/
 筒井康隆「エディプスの恋」1977〈昭和 52〉/壺井栄「二十四の瞳」1952〈昭和 27〉/
 田辺聖子「新源氏物語」1978-1979〈昭和 53-54〉/谷崎潤一郎「痴人の愛」1924〈大
 正 13〉/長与善郎「青銅の基督」1923〈大正 12〉/夏目漱石「こころ」1914〈大正 3〉/
 新田次郎「孤高の人」1969〈昭和 44〉/野坂昭如「プアボーイ」1968〈昭和 43〉/林
 芙美子「放浪記」1928〈昭和 3〉/樋口一葉「大つごもり」1894〈明治 27〉・「にぎり
 え」1895〈明治 28〉・「たけくらべ」1895〈明治 28〉・「ゆく雲」1895〈明治 28〉・「う

つせみ」1895〈明治 28〉・「われから」1896〈明治 29〉/福永武彦「草の花」1957〈昭和 32〉/藤原正彦「若き数学者のアメリカ」1977〈昭和 52〉/星新一「人民は弱し、官吏は強し」1978〈昭和 53〉/堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和 8-9〉/松本清張「点と線」1957-1958〈昭和 32-33〉/三浦綾子「塩狩峠」1968〈昭和 43〉/三島由紀夫「金閣寺」1956〈昭和 31〉/武者小路実「友情」1919〈大正 8〉/村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」1985〈昭和 60〉/柳田国男「遠野物語」1910〈明治 43〉/山本周五郎「さぶ」1963〈昭和 38〉/山本有三「路傍の石」1923〈大正 12〉/吉村昭「戦艦武蔵」1966〈昭和 41〉/吉行淳之介「砂の上の植物群」1963〈昭和 38〉/渡辺淳一「花埋み」1970〈昭和 45〉

『明治の文豪』

尾崎紅葉「金色夜叉」1897-1902〈明治 30-35〉/国木田独步「たき火」1896〈明治 29〉・「おとづれ」1897〈明治 30〉・「源叔父」1897〈明治 30〉・「糸くず」1898〈明治 31〉・「河霧」1898〈明治 31〉・「鹿狩」1898〈明治 31〉・「まぼろし」1898〈明治 31〉・「わかれ」1898〈明治 31〉・「忘れえぬ人」1898〈明治 31〉・「置土産」1900〈明治 33〉・「郊外」1900〈明治 33〉・「死」1900〈明治 33〉・「巡査」1902〈明治 35〉・「少年の悲哀」1902〈明治 35〉・「空知川の岸边」1902〈明治 35〉・「運命論者」1903〈明治 36〉・「窮死」1907〈明治 40〉・「渚」1907〈明治 40〉/田山花袋「重右衛門の最後」1902〈明治 35〉・「酒中日記」1902〈明治 35〉・「蒲団」1907〈明治 40〉・「生」1908〈明治 41〉「田舎教師」1909〈明治 42〉/長塚節「土」1910〈明治 43〉/夏目漱石「吾輩は猫である」1905-1906〈明治 38-39〉・「草枕」1906〈明治 39〉・「坊ちゃん」1906〈明治 39〉・「虞美人草」1907〈明治 40〉・「坑夫」1907〈明治 40〉・「野分」1907〈明治 40〉・「三四郎」1908〈明治 41〉・「それから」1909〈明治 42〉・「門」1910〈明治 43〉・「彼岸過迄」1912〈明治 45〉・「行人」1912-1913〈大正元-2〉・「硝子戸の中」1915〈大正 4〉・「明暗」1916〈大正 5〉/二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治 20〉・「其面影」1906〈明治 39〉・「平凡」1907〈明治 40〉/森鷗外「うたかたの記」1890〈明治 23〉・「舞姫」1890〈明治 23〉・「キタ・セクスアリス」1909〈明治 42〉・「鶏」1909〈明治 42〉・「杯」1910〈明治 43〉・「普請中」1910〈明治 43〉・「カズイスチカ」1911〈明治 44〉・「百物語」1911〈明治 44〉・「妄想」1911〈明治 44〉・「雁」1911-1915〈明治 44-大正 4〉・「興津弥五右衛門の遺書」1912〈明治 45〉・「かのように」1912〈明治 45〉

『大正の文豪』

芥川龍之介「或阿呆の一生」1927〈昭和 2〉・「齒車」1927〈昭和 2〉・「玄鶴山房」1927〈昭和 2〉・「蜃気楼」1927〈昭和 2〉・「文芸的な、余りに文芸的な」1927〈昭和 2〉/有島武郎「或る女」1911-1913〈明治 44-大正 2〉・「惜しみなく愛は奪う」1917〈大正 6〉/

葛西善三「暗い部屋にて」1920〈大正 9〉・「酔狂者の独白」1927〈昭和 2〉/久米正雄
「学生時代」1918〈大正 7〉/倉田百三「出家とその弟子」1916〈大正 5〉/里見弴「多
情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉/島崎藤村「春」1908〈明治 41〉・「家」1910-1911〈明
治 43-44〉・「千曲川のスケッチ」1911〈明治 44〉・「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉・「新
生」1918-1919〈大正 7-8〉・「夜明け前」1929-1935〈昭和 4-10〉/徳田秋声「あらくれ」1915
〈大正 4〉・「縮図」1941〈昭和 16〉/長与善郎「青銅の基督」1923〈大正 12〉

中世抄物資料『日葡辞書』『史記抄』『中華若木詩抄』『湯山聯句抄』『玉塵抄』

キリシタン資料『エソポのハブラス』

辞典『日本国語大辞典 第二版』『時代別国語大辞典 室町時代編』

近世文学作品『嘶本大系』『浮世草子集』『假名草子集成』『黄表紙 川柳 狂歌』『洒落
本 滑稽本 人情本』『井原西鶴①』『井原西鶴③』『近松門左衛門集①』『近
松門左衛門集③』『上方歌舞伎集』『江戸歌舞伎集』『廓の大帳』上『洒落
本大成』1-3 巻『春色梅児誉美』『春色辰巳園』『浮世風呂』『浮世床 四十
八癖』『東海道中膝栗毛』『花暦八笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人』『近
松全集』1 巻

明治データベース『新潮文庫の 100 冊』『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』

大正データベース『新潮文庫の 100 冊』『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』

昭和データベース『新潮文庫の 100 冊』『大正の文豪』

文学作品『昭和文学全集』13 巻『海野十三全集』1 巻『昭和文学全集』赤川次郎『ヴ
ァーゲン・ロード』(1983)

平成文学作品 吉本ばなな『キッチン』(1991)『満月』(1991)/桐野夏生『OUT』(1997)/
舞城王太郎『阿修羅ガール』(2003)/川上弘美『センセイの鞆』(2004)/東
野圭吾『さまよう刃』(2004)『夜明けの街で』(2007)/伊坂幸太郎『アヒ
ルと鴨のコインロッカー』(2006)『ゴールデンズランバー』(2007)/恩田
陸『ネバーランド』(2000)『夜のピクニック』(2006)/有川浩『図書館戦
争』(2006)『図書館革命』(2007)/角田光代『八日目の蟬』(2008)/ 桜庭一
樹『GOSICK VII』(2011)

新聞記事「産経新聞」(1997)/「毎日新聞」(1997)

中世は、抄物資料『中華若木詩抄』『湯山聯句抄』、キリシタン資料『エソポのハブラ
ス』には用例が見られなかった。

近世は、上方・江戸で意味用法に大きな差はないと思われるため、特に区別はしない。
資料のジャンルや作者によって異なるようである。

明治期・大正期・昭和期は、各年代の用例が得られるよう調査している。用例の大部分

を占める『新潮文庫の 100 冊』では、昭和初期から中期（戦前・戦時中）の作品が少なく、用例が得られないため、『昭和文学全集』などで補う。

上述によって採取した用例数は以下の通り。

中世	近世	明治	大正	昭和	平成	合計
70	856	1977	2115	4863	1223	11104

なお、「厭味ったらしい」「憎たらしい」の類については、接尾辞「-たらしい」が下接していると考えられるため、考察対象には含めない。また、「新らしい」「珍らしい」「素晴らしい」についても、「-らしい」が後接したものとは考えにくいいため、考察対象には含めない。

4-2. 先行研究

4-2-1. 「-ぽい」の先行研究

まず、各辞典において「-ぽい」がどのように記述されているか見てみたい。

『岩波 国語辞典 第5版デスク版』 1994〈平成6〉

=っぽ-い ≪名詞・動詞連用形に付け、形容詞を作る≫…の傾向が強い。「俗-」「赤-」「おこり-」「水-」（水が多い）「色-」（色が多い）

『角川必携国語辞典』 1995〈平成7〉

ぽい **造語** [「～っぽい」の形で]…という感じが強くする。「水っ-」「熱っ-」

『集英社 国語辞典 第一版』 1997〈平成9〉

-っぽ-い （名詞・動詞連用形に付いて）…のようである。…の傾向が強い。…の度合いが強い。「水-」「色-」「おこり-」「白-」▷形容詞の活用をする。

『新選 国語辞典 第七版/ワイド版』 1998〈平成10〉

-っぽい [形容詞をつくる]①…を多くふくんでいる。「水-」②…の傾向がつよい。「あき-」

『三省堂 国語辞典 第六版』 2008〈平成20〉

っぽ・い（接尾→形）…の・（…する）傾向（ケイコウ）が強い。…という感じが強い。「水-・忘れ-・男-・苦（ニガ）-・皮肉-」 **派生**-っぽさ（→名）

参照した辞典によると、「ーばい」の意味用法は「(…の) 傾向・度合いが強い」あるいは「…という感じが強い」の何れかである。また、『日本国語大辞典 第二版』では、「ーばい」の意味用法及び語例を以下のように挙げている。

① 名詞に付いて、それを含む度合いが大きい、それによく似た性質である、の意を表わす。多くは、好ましくないことについていう。「水っばい」「ほこりっばい」「粉っばい」「熱っばい」「理屈っばい」「愚痴っばい」「色っばい」「艶っばい」「子供っばい」「大人っばい」など。② 色の名に付いて、その色を帯びているの意を表わす。「赤っばい」「青っばい」「黒っばい」「白っばい」「黄色っばい」など。③ 形容詞・形容動詞の語幹に付いて、その性質が表面に現われている、いかにもそういう感じであるの意を表わす。好ましくないことについていう。「荒っばい」「衰れっばい」「俗っばい」「安っばい」「きざっばい」など。④ 動詞の連用形に付いて、すぐに…する傾向が強い、の意を表わす。好ましくないことについていう。「飽きっばい」「忘れっばい」「おこりっばい」「惚れっばい」「うたぐりっばい」など。

『日本国語大辞典 第二版』では、「それによく似た性質である」「その色を帯びている」といった意味も見られるが、上接品詞は『三省堂 国語辞典 第六版』と大きく変わらない。

研究論文については、大きく以下の通りに分かれる。

- ・意味用法の分類に関するもの……国松(1970), 山下(1995)
- ・意味用法の変化に関するもの……小島(2003), ケキゼ(2003a)(2003b)
尾谷(2000)(2005)(2011), 小出(2005), 濱田(2010)
- ・上接部に関するもの……久保(2009), 梅津(2009), 竹島(2010)
- ・「ーばい」と「ーらしい」の比較に関するもの……黄(1998)
- ・成立に関するもの……新山(1960)

ここでは、主に意味用法に関するものについて挙げておく。

国松(1970)では、上接品詞に着目し、「ーばい」がつき易い上接語の特徴や、意味用法を示されている。分類は以下の通りである。

・動詞プラス「ばい」の場合

その動詞は多く自動詞であり、ほぼマイナスの要素を持つものである。その多くは人間の精神や行為にかかわる語で、その中でも特に感情などの精神状況を示すものが多い。また、その動詞の類義語群の中では、基本語的なものに限られ、文章語的なもの(漢語・文語)・俗語的なものはない。

さらには「ばい」がついた形では例外なく、マイナス的要素が示され、その多くは「ー

—やすい」と置きかえられ「すぐに——するというよくない傾向がある」という意を現わすものである。

・形容詞プラス「ばい」の場合

大部分は色彩形容詞（の語幹）であり、その場合は、その色の要素が大きく他の要素を圧しており、その色にきわめて近い状態を示している。例外は「荒っぱい」と「安っぱい」である。「荒っぱい」は、人間の態度その他から受ける印象のときに用いられ、「荒い」と類義的意味であるが、実際は「荒っぱい」のほうがよく使用されよう。

「安っぱい」は「安い」とは別のことばと考えたほうがよく、人間の態度とか、所有にかかわるものに用いられ、品がないとか、だめだという強いマイナスの要素を持ったことばである。

・形容動詞プラス「ばい」の場合

つきうる語がきわめて限定されており、人の性格、外観などの他人に与えるマイナスの印象の強い若干の語であり、しかも「ばい」がついた形で一語のように考えてもよいものである。

「ばい」がついた形は、「いかにも……だという感じだ」とも考えられ、同時にもとの形と同じような意味内容をになっているともいえるものであるというところである。だが、これらの語を「ばい」のつかない語と特に区別するルールのようなものは特にない。

・名詞プラス「ばい」の場合

(a) 自然物および自然現象——油・粉・ほこり・水・すじ・(骨・熱)

油・水のような液体状のもの、粉・ほこりの微細なもの、筋・骨のように概して細長いもの、熱のように目には見えないものと分けられる。

本来それを必要としないものに、それらがマイナスの印象を与える程度に全体として混入している状態を示す（「油」「水」「粉」「ほこり」「すじ」「骨」プラスばい）。

はっきりそうだとはいえないがどこことなく熱があるようだ（「熱っぱい」）

(b) 人間活動の主体——いなか・男・女・おとな・子供・(不良)

どこことなくその要素のほうに現れている（いなかっぱい・不良っぱい）。

通常の数度以上にその特質を強く現す（女っぱいしぐさ）。

本来ならば女の特質が期待される対象に、男の要素が現れている（男っぱい女）。

(c) 人間活動精神及び行為——色・つや・理屈・すじ・骨・いたずら・浮気

「精神」（人の性格・外観など）と「行為」の二つに分かれる。「精神」には「色」

「つや」「骨」(あの男は骨がある),「行為」は「理屈」「いたずら」「浮気」「すじ」。

いかにもその要素が強く感じられることを示す(「精神」グループ)。

動詞グループの語と共通性を有し、「すぐ——する」ことを示す(「行為」グループ)。

山下(1995)では、「ーぼい」に 3 つの意味用法を認める。各意味用法は、主に上接品詞によって分けられる。

④すぐにそのような状態になってしまう傾向がある

動詞

名詞(「愚痴っぼい」等)

形容動詞(「浮気っぼい」等)

⑤そのものの性質が外に濃厚に表出された状態である

人間に関係するコトを表す名詞(「艶ー」・「色ー」等)、

名詞(「男ー」・「女ー」・「大人ー」等)

形容詞・形容動詞

動詞(「むせっぼい」等)

⑥そのものが必要以上に多く含まれ、過剰と感じられる状態である。

モノ名詞(「熱」・「水」・「粉」等)

山下(1995)では、「ーぼい」の意味分類が全て上接品詞によるものではないことも指摘されている。たとえば、動詞に結合した「むせー」「しめー」などは⑤の意味を表し、名詞あるいは形容動詞に結合した「浮気ー・愚痴ー」などは、反対に「そのような状態になる傾向がある」という④の意味を表す。

また、「ーぼい」の生産力について、〈結合する動詞の意味や性格に制約があり臨時的な結合が起りにくいことから、「ぼい」が動詞連用形と結合して新たな形容詞を派生(造語)する生産性は低い〉とされ、これに対し、〈名詞や形容動詞語幹に結合する場合は「先生っぼい・タレントっぼい・有名人っぼい・不機嫌っぼい」など臨時的な結合がいくらかも可能である。〉と述べられている。⑤の用法の生産性が高いということになろう。

国松(1970)ならびに山下(1995)で検討されているのは、形容詞生接辞の「ーぼい」の意味用法の分類であり、分類基準は上接品詞と意味による。1990年代では、未だ「ーぼい」が話者の推測を表すといったことは示されていない。国松(1970)が「どこことなく」「はっきりそうだとはいえないが」といった意味を示されている点が両者において特に異なる。以下に挙げる小島(2003)においても「ーぼい」が「どこか X のように見える部分がある」

「どちらかという X」ということを表すと指摘されており、「どことなく」「はっきりそうだとはいえないが」という意味に着目した点は重要と思われる。しかし、大きな分類としては山下(1995)に挙げられている「すぐにそのような状態になってしまう」「そのものの性質が外に濃厚に表出された状態」「そのものが必要以上に多く含まれ、過剰と感じられる状態」としてよいのではないかとと思われる。

本論文でも、「ーぽい」は概ね上接部によって意味・用法が分類されると考えるが、ただし、何に対して「ーぽい」が用いられるかによっても意味が異なる点には注意したい。たとえば、「体が熱っぽい」というと、体における熱量の多さと取れるが、「声が熱っぽい」というと声が情熱的な様を表す。同様に、「やくざっぽい口調」というときは「口調が乱暴である」といった特徴を示すが、「やくざっぽい男」というときは「男がやくざの特徴を有する」ことと「男がやくざに見える」ことを示し、意味・用法が異なるためである。

続いて、「ーぽい」に話者の判断を表す用法を認めるようになる 2000 年代の先行研究を確認する。

尾谷(2000)(2005)(2011)

尾谷(2000)では、「ーぽい」を以下の通り二分されている。

- 基本的な「ぽい」の用法としてすでに慣習化されて unit status を有するもの
水っぽい、埃っぽい、粉っぽい、飽きっぽい、怒りっぽい、ホレっぽい、忘れっぽい、俗っぽい、理屈っぽい、荒っぽい、湿っぽい、色っぽい、白／赤っぽい、大人／子供っぽい、熱っぽい
- 若者言葉風の新規と感じられる表現
 - ・元々大学の友人達と作ったサークルが原型になっているため、その名前を踏襲しているのだ。ちょっと大正ロマンの頃の探偵事務所っぽくてよいではないか。
 - ・「種」の研究が流行らない理由は簡単で「科学っぽく」無いからだ。
 - ・もう終わってるっぽいですよ。(健康診断に遅刻してきて、遠くから様子を伺っている時)
 - ・もうこれで最後っぽいですね。(みんなで資料を整理している時)
 - ・あ、もう出来てるっぽいね。(テレビの CM。新婚夫婦が遠くから建設中のマイホームを見て)

また、〈基本的な「ぽい」の用法としてすでに慣習化されて unit status を有するもの〉は、

- a 「物理的な含有量」を表す(水っぽい、埃っぽいなど)
- b 「属性の含有量」(子供っぽい、安っぽい、俗っぽい、白っぽい、荒っぽいなど)

c ab の中間的な用法（色**っ**ぽい、熱**っ**ぽいなど）

の 3 つに分類されており、「若者言葉風の新規と感じられる表現」は b の用法からの拡張用法であるとされる。元は「X 性の顕著さ」を表していた形容詞性接辞の「ーぽい」が、「X カテゴリーの成員である可能性が高い」という推量も表すようになった、という変化を指摘されている。

尾谷(2005)では、この意味用法の変化について、更に詳しく言及されている（以下、二重傍線部は岩崎による）。

「ある対象 Y が、X の持つ属性を多く含んでいる」（＜属性の含有量＞）というのであれば、そこから誘導推論として導き出されるのは、「ある対象 Y が X の属性を多く持っているというのであれば、Y は X カテゴリーの成員である可能性が高い」という含意であろう。例えば(11a)はコートの色について断言しているが、(11b)は「白色の特徴が基準値以上に多く含まれている」と述べるに止まっており、白色だと断言していない。しかし「白っぽいコート」と言われれば、少なくとも「白色カテゴリーに属する可能性が最も高い」と推論するのは人間の自然な認知活動である。

(11)a. 白いコート

b. 白っぽいコート

そのような含意と伴に使用されたことで、ポイが可能性の高さを表す推量の意味を持つようになったと考えられる。つまり、推論によって得られる含意が慣習化するという語用論的強化によって接尾辞のポイが推量化（つまり助動詞化）したと考えられる。ただし、語用論的に強化された含意には 2 種類あると考えられる。1 つは「X ポイ」というのであれば、それは X カテゴリーに属する可能性が高い」という＜推量＞の推論であり、もう 1 つは「X ポイ」というのであれば、「X デアル」という断言を避けている」という＜非断定＞の推論である。

また、形式的な面にも着目されており、接辞と助動詞との関係を、

	用例	形式	品詞	意味
1-a	水っぽい、油っぽい、粉っぽい	[名詞+ぽい]	接尾辞	物理的な含有量
1-b	子供っぽい、大人っぽい	[名詞+ぽい]	接尾辞	属性の含有量
2-1	単独過半数っぽい／必殺技っぽい	[名詞+ぽい]	助動詞	推量
2-2	もう終わってるっぽい。	[V(終)+ポイ]	助動詞	推量

のようにまとめられている。更に、2-2 のように「動詞の終止形」について助動詞の意味を表す「ーぽい」が見られるようになったのは、既存の助動詞「ーらしい」「ーみたいだ」

「ーようだ」への類推によるものと述べられている。

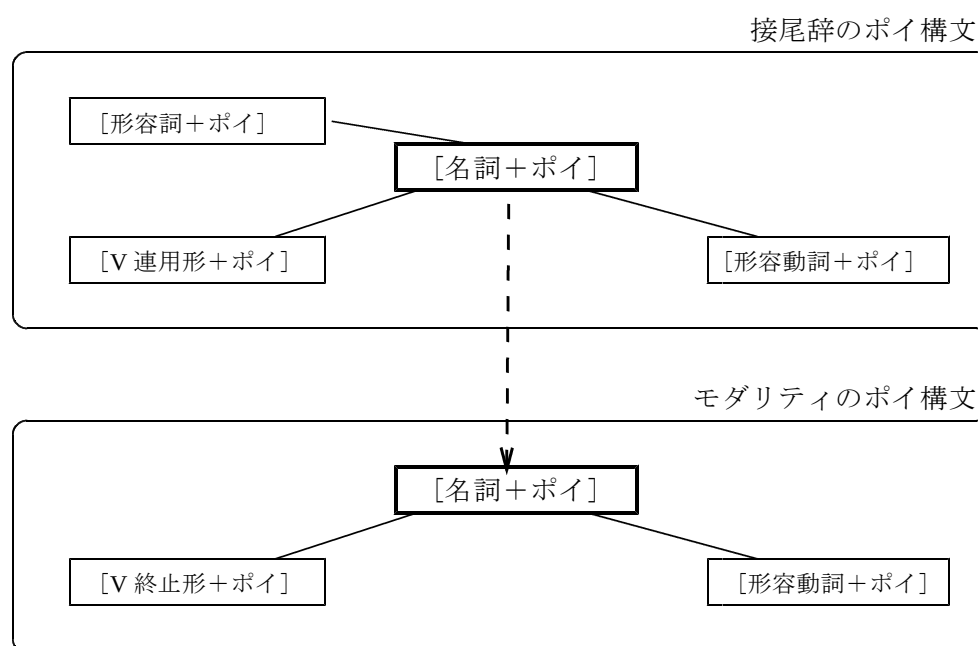
また、尾谷(2011)では、形式的側面からの分析を以下の通り示されている。

Web サイト上に見られるポイの用例を無作為抽出し、どのような品詞に接続しているかを調査しているが、その結果は以下の通りである。

表 5. 6

Type	延べ数
[名詞+ポイ]	808
[形容動詞+ポイ]	35
[V 終止形+ポイ]	53
[V 連用形+ポイ]	17

この結果は接辞用法とモダリティ用法が混じっているものだが、それでも「V 終止形+ポイ」が 53 例と割合が低いことを承け、尾谷(2011)では、〈接尾辞の場合同様、モダリティ用法のプロトタイプも[名詞+ポイ]であると判断してよいであろう。〉とされる。これは、図 5. 11 として示されている。



名詞接続の「ーぽい」が「X に属する可能性が高い」といった意味を表すようになるとされる点については、本論文も同様である。しかし、次に挙げる二点は異なる。

まず、「白っぽいコート」は「色合い」を表す形容詞性接辞であり、そこから尾谷氏が 2-1 と区別されているような例が見られるとは考えにくい。

次に、尾谷(2005)で 2-1 と区別されているもののなかには、本論文では形容詞性接辞(尾谷氏の区分では 1-b)とするものが含まれる。尾谷氏は、次に挙げる 4 例を「推量の助動詞」とされている。

- (14) a. 東芝 RD-X5 は Amazon が最安値っぽい。
b. ありや、風邪っぽい....
c. 自民党単独過半数っぽいね。
d. ディメンジョンって必殺技っぽいね。

これに対し、本論文では、(14)d のようなものは形容詞性接辞の場合もあると考える。これは、(14)d が「(ディメンジョンは実際には必殺技ではなく) 必殺技っぽい」場合と「(ディメンジョンは実際に必殺技であり) 必殺技っぽい」場合に分かれるためである。つまり「ディメンジョン」が何であるかが話者にとって明確な場合はその特徴を述べる形容詞性接辞である。一方、「ディメンジョン」が話者にとって何なのか分らない場合は、「ーっぽい」は話者の推測を表すと考えられる*4。

また、尾谷氏の分析によると「ーっぽい」のモダリティ用法は「推量」とされるが、その場合、同様に「推量」を表すとされる「ーらしい」や「ーみたい」との関係を明らかにする必要はあろう。「ーらしい」と「ーみたい」の間にも意味・用法の差異は指摘されているため、「推量」で記述可能かという疑問も残るのではないかと思われる。

ケキゼ(2003a)

ケキゼ(2003a)では、「Y は X っぽい」のように用いられる「ーっぽい」について検討されている。意味用法を「安定した用法」と「新奇的な用法」に大きく 2 分し、更に「安定した用法」は 5 分類、「新奇的な用法」は 2 分類されている。また、意味用法の記述に際し、「前接語」を表す場合は X、「X の表す概念」を表す場合は[X]と表記する。

「安定した用法」は、次の通りである。

*4 尾谷(2011)では以下の通り用例を挙げられている。

- | | |
|--------------------------|-----------|
| (57) a. この部屋は埃っぽい。 | (形容詞の接尾辞) |
| b. このジュースは水っぽい。 | (形容詞の接尾辞) |
| (58) a. もうイベントは終わってるっぽい。 | (モダリティ) |
| b. アップデートできてないっぽいです。 | (モダリティ) |
| c. これって、必殺技の名前っぽい。 | (モダリティ) |
| d. どうやら Amazon が最安値っぽい。 | (モダリティ) |

(58)c の場合、「これ」は必殺技と分かっていないように感じられるが、しかし、いずれにせよ 2 通りの解釈が可能なのではないかと思われる。

X が知覚的属性を表す場合（黒っぽい、湿っぽいなど）

用法 1：Y は、知覚属性[X]を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。ただし、その値は最大値には至らない。

X が内的属性を表す場合（安っぽい、色っぽいなど）

用法 2：Y は、内的属性[X]を感じさせるような知覚的属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。

X がモノを表す場合（3 分類）

X が男、大人、田舎など

用法 3：Y は、[X]の典型例が持つ性質・属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。

X が埃、水、骨など

用法 4：Y は、好ましくないモノ[X]を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。

X が行為を表す場合（怒りっぽい、忘れっぽい、飽きっぽいなど）

用法 5：Y は、話者の暗黙の基準値よりも「[X]をすることが多い」という好ましくない性質を持つ。

以上を踏まえ、「安定した用法」のスキーマは、「Y は[X]にかかわる属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む」であるとされる。

「新奇的な用法」は以下の通りである。

用法 6：Y のカテゴリー認定

- ・（はっきり見えないものについて）それ、橋っぽくない？
- ・（空を見上げて）どうやら明日は雨っぽい。

用法 7：あいまい化

- ・ちょっと不安っぽい感じ。
- ・「反抗的だ」「悪い芽だ」って、学園長室に呼ばれてしまうような大変っぽいことになってしまったし。

[www6.big.or.jp/~ fumyu/Family.html](http://www6.big.or.jp/~fumyu/Family.html)

用法 6 は、用法 3 に対する拡張であるとされ、その成立について以下のように述べられている。

用法 3「ぽい」が表す意味「[X]の典型例が持つ性質・属性を多く含む」ということから、この正体のわからない対象 Y は[X]である可能性が高いという推量判断を表す意味が出て来る。つまり、例文(10)（「橋っぽくない？」という例文を指す...岩崎注）で言うと、「橋」の典型例が持つ性質・属性を多く含むことから、問題の対象は「橋」である可能性があるということである。このような認識に基づいて、「ぽい」の意味は、推量的な要素を含むカテゴリー判断へと拡張していく。

用法 7 は、断定を避ける表現になっているとされる。こういった用法は、用法 1 の「黒っぽい」などにおいて、「最大値には至らない」ことを表す、つまり「黒」に対し程度が低いことを「ーっぽい」が表すことと関連するとされ、

[X]の程度を下げることによって、「X だ」という断定が避けられ表現がやわらげられるということになる。

と述べられている。

二重傍線部の指摘については、本論文も同様に考える。また、近年の「ーっぽい」にカテゴリー化という用法が見られるようになり、話者が「X の可能性が高い」と判断していることが示されるという点についても首肯できると思われる。ケキゼ(2003a)では現代語の「ーっぽい」について検討されているが、本論文では、カテゴリー化やあいまい化といった用法がいつ頃からどのように成立したかを歴史的に明らかにする。

小島(2003)

「ーっぽい」の上接部を品詞ごとに分類し、特に名詞に接続する用法において意味の傾向が 2 通りに分かれると指摘される。名詞接続の「ーっぽい」は、以下の通り分類されている。

- c1 「艶っぽい」「骨っぽい」「水っぽい」の類……それが多い、またはそれが目立つ様子であることを表す。
- c2 「大人っぽい」「子供っぽい」の類……いかにもそういう印象を与える様子であること、または、そのものの性質の特徴的な一端を持ち合わせている様子、それに通じる要素が感じられる様子を表す。

小島氏は、c2 の用法が更に変化し、「どこか X のように見える部分がある」「どちらか」というと X」であることを表すようになったと指摘されている。

c1 の場合、全体を構成するいくつかの要素の中で X が一番目立つ・強いということで、実際に X というものや状態が存在する。しかし、c2 の場合、「X っぽいと形容されるもの(仮に A とする)」を構成する要素と X を構成する要素とのどこかに共通性があり、「A」が総体として X に近似の存在であるということを表しているのであって、X の存在を表しているわけではない。

c2 において「A」が総体として X に近似の存在である」ことを表す「X っぽい」の X が「モノ」から「コト」へと変化したものが、以下のような例であるとされる（下線は岩崎

による)。

- ・ [略]お兄さん、行方不明なんだって？ 高校で知り合った友だちから訊かれると、うん、でももう死んでるっぽい、と明るく言っただけ。(藤野千夜「ラブリープラネット」『おしゃべり怪談』所収 講談社文庫 p.124)
- ・ なんかやる気ないっぽい感じの絵でも
- ・ 世論は作られるっぽいよね
- ・ たぶん登場ポーズが描きたかったっぽい CG 塗りです
- ・ BS デジタルはいずれスクランブルがかかるっぽい
- ・ 親に見られたっぽい(泣)

以上のような例が見られることから、

「っぽい」が「みたいだ」や「らしい」「という感じである」あるいは「そうだ」というような意味で用いられている。いずれも極度に口語的ではあるが、「っぽい」がその種の推量・推定を表す助動詞的なものとしての用法を獲得しつつあると言ってよい。

とされている。

小島氏が指摘される意味用法の変化については、以下の2点にやや疑問が残る。

1 つは、二重傍線部に述べられる「「A」が総体として X に近似の存在」であることを表していた c2 の「一っぽい」が、「どこか X のように見える部分がある」「どちらかという X」であることを表すようになったという変化の過程である。

もう 1 つは、「コト」を承けているとされる例の意味・用法を明確には示されていない点である。特に、「なんかやる気ないっぽい感じの絵でも」や「たぶん登場ポーズが描きたかったっぽい CG 塗りです」のような連体形を取る例は、それ以外の終止用法の「一っぽい」と同様に推量・推定的としてよいのか、より詳細に検討する必要があると思われる。

小出 (2005)

「一っぽい」を「辞書類に登録されている用法(旧用法)」と「近年に見られる用法(新用法)」に分け、新旧用法の関係ならびに「旧用法」「新用法」個々の広がりについて検討されている。ここでの新用法とは、

- ・ おいしいっぽい
- ・ あるっぽい
- ・ 疲れすぎたっぽい

のような承接形式を取るものを指すとされる(用例は小出(2005)による)。

各変化の過程については、以下の通り示されている。

旧用法	“YがXを通常値より多く含む”	例：水 <u>っ</u> ぽい酒
	↓①……<Xのカテゴリの変化。モノから属性へ>	
	“Yが属性Xを通常値より多く含む”	例：黒 <u>っ</u> ぽい服
	↓②……<Xの指示先の変化。属性そのものから属性を持つものへ>	
	“YがXの持つ属性を通常値より多く含む”	例：夏 <u>っ</u> ぽい服
③……<形態的变化。モノ・属性の表現からコトの表現へ>		
新用法	“Xという事態成立の可能性を多く含む”	例：雪が降る <u>っ</u> ぽい
	↓④……<モダリティの変化。事態目当て性の消失>	
	“Xであるとする判断の可能性を多く含む”	例：会ってみたい <u>っ</u>
	↓⑤……<Xのカテゴリの変化。モダリティ表現からメタ言語表現へ>	ぽい
	“Xという表現成立の可能性を多く含む”	例：風邪をひいた <u>っ</u>
		ぽい感じ

小出(2005)では、「新用法」を細かく分類されている点で他の先行研究と区別され、「ーぽい」がメタ言語表現を有するという指摘は参照されるべきものであると思われる。ただし、形態的变化を経て「ーぽい」が新用法を獲得するとされているが、この点については本論文と異なる。本論文では、属性を示す「ーぽい」において既に話者の推測的判断が反映されるようになり、その意味変化から「ーぽい」が話者の推測的判断を示すことになったと考える。

濱田(2010)は、接辞の「ーぽい」に考察を絞って述べられているが、近世から平成にかけて用例を検討されており、意味の変遷、上接要素の傾向について検討されている点で興味深い。濱田(2010)では、近年の「ーぽい」に、

- ⑨ 今時の女の子っぽい、しっかりしたメイク。 (『音楽と人』11月号)
- ⑩ だから、みんな、私服も女の子っぽいって思うみたいだけど、体にフィットしたTシャツとジーンズのシンプルな格好ばかり。 (2002/05/01 読売新聞大阪)

のような例が見られることを指摘され、その理由を次のように述べられている。

これら近年増加している上接要素は、大正や明治期に作られた「ぽい」の用例が現代でも根強く見られるのに比べて、一つの上接要素に対する用例数が少ない。話し手そ

れぞれが対象の特徴や属性を見出し、それを上接要素になる語の特徴、属性と照らし合わせている。主観的判断であるため、個人個人で上接要素になる語に対するイメージや見出している特徴、属性が異なることもある。その主観的判断が上接要素を増やし、特徴さえ見出すことができれば上接要素になることが可能だということである。

二重傍線部については、近年の「ーばい」の造語力とも関連する重要な指摘であると思われる。従って、「ーばい」の表す「主観的判断」については、詳細な検討が必要であると思われる。

また、昭和後期より見られ、現在では広く使用されている上接要素として「嘘」を取り上げ、これを「判断を下す」語であるとされる。「本当っぽい」や「駄目っぽい」「大丈夫っぽい」などもこれに当たるとされ、こういった語が上接要素に見られるようになったことで、それ以外の語でも判断を表すようになるとされる。これは小島(2003)の指摘に通ずるものである。以下のような用例を挙げられている。

- ⑱ 「第一の犯行は嵐の騒がしい夜、みんなが酔ったのを見て敢行されたでしょ？
あれは計画的犯行っぽくありませんよ」 (有栖川有栖『孤島パズル』)
- ⑲ 「正直、ヤだね。父さんも母さんも、明日にならないと帰ってこない。確かにキミはどうも嵯峨野家の二人目の子っぽい。」 (米澤穂信『ボトルネック』)

また、⑱や⑲のように「ーばい」が判断で使用されているか否かは、「(話し手が認識した属性、特徴、モノゴト) だからーばい」という形に当てはまるか否かで区別されるとしている。

濱田(2010)は、「ーばい」の「判断を下す」用法を広く取られているように思われる。たとえば、⑱は主に「ない」の部分が判断を担っており、「計画的犯行っぽく」は「第一の犯行は嵐の騒がしい夜、みんなが酔ったのを見て敢行された」ことの性質を述べているのではないと思われる。「判断を下す」用法に分類される条件として、「話し手が認識した属性・特徴・モノゴトだから」という意味で用いられていることとされており、会話文中で用いられる体言接続の「ーばい」の多くは「判断を下す」ものになると考えられる。どのような判断が下されているのかを明らかにする必要があると思われる。

なお、本論文では「ーばい」の成立には考察が及ばない。宝暦以前に用例が見当たらないことから、時期としては近世後期^{*5}の成立であり、江戸の言葉である可能性が極めて高

*5 佐藤喜代治編『国語学研究事典』により、宝暦年間(1751-1764)を境とする。

いと考えられる。

新山(1960)は、「ーぱい」ならびに「しょっぱい」「すっぱい」などに見られる「ーぱい」の成立について、近世及び中世の口語資料を調査し、検討されている。目的としては、上田万年氏の「P 音考」*6、ならびに大槻文彦氏の『大言海』の説*7を再考することにある。

新山氏の調査によると、

「ばい・ぱい」を有する形容詞は江戸時代後期を中心とし、宝暦九年「俚言集覧」の記載を上限とする。そして、上田・大槻両博士が、それぞれその祖語と考えられる「…はゆし・おほし」について見ると、「ーおほし」は一例も見当たらない。一方、「ーはゆき」は、古今著聞集の「こそばい」を始め、パジェスの日仏辞書、ロドリゲスの大文典にも見え、更に江戸時代、近松の浄瑠璃、西鶴の浮世草紙にも見えている。

となり、「ーぱい」の例は近世後期以前には見られないことが示されている。また、方言資料（「浪花文書」文政2頃など）における記述を参照したうえで、「ーぱい」「ーぱい」と「はゆし」「おほし」は、

語史的には連続するが、そこに地域的な断層のある事を認めないわけには行かない。と指摘されている。結論として、「ーぱい」「ーぱい」成立は、

「ーぱい」「ーぱい」は関東方言の感性的なものの表現で、擬態のないし擬声的な副詞が促音・P音を含む副詞(すっぺり・しっぱり・さっぱり・いっぺい・ろくそっぱ)に類推し、形容詞的な言い切りをした〈パロルの表現〉が、〈その個人のラング中に型として存在するようになり、更にその個人の属する言語社会の語彙、即ち社会的ラングとして、関東方言中に固定した。

とされている。

*6 「P 音考」では、「すはゆし」の「は」や「おほし」の「ほ」について、
熟語法の時に、上古の形態を維持するといふ心理的連想法の大法だけは、恰も P H W の濁音が何時も B の一個にて代表せらるるといふ事と共に一貫して進みたる者なりと謂つべし。
と述べられている。

*7 「ーぱい」については「形容詞ノ語尾、多しの略転」との語源説明が付されている。「ーぱい」については、新山(1969)に、
「ぱい」には独立して接尾語としての辞項はないが、ショッーぱい(形)(一)シホハユシ、シホッパイ。(二)シハシ、シミッターナリ。
とあり、「しほーはゆし」の条では「鹽映しノ義ト云フ」と語原解釈が施されている。
のように、各語の項目において「はゆし」との関連が指摘されていることが記述される。

4-2-2. 「ーらしい」の先行研究

「ーらしい」の先行研究は、以下の通り分かれる。

- ・主として意味用法に関わるもの
……外山(1969), 北原(1981), 大鹿(1995), 吉田(1971), 小島(1996), グループ・ジャマシイ(1998)など
- ・「ーようだ」「ーみたいだ」との相違に関わるもの
……柏岡(1980), 中畠(1990), 田野村(1991), 紙谷(1995), 三宅(2006)など
- ・時代別に論じるもの……前田(1995), 原口(1971), 鈴木(1988), 亀井(2003)
- ・成立に関わるもの……村上(1981)

ここでは、意味用法に関わる先行研究、特に助動詞と接辞の区別について論じられているものを取り上げる。また、時代別に論じているものは、「ーらしい」の史的変遷を検討する際に参照する。

「ーらしい」の意味用法は、一般に、形容詞と助動詞／モダリティに分かれる。グループ・ジャマシイ(1998)では、「Nらしい」と「…らしい」として分類されている。

Nらしい

- a 最近は子供らしい子供が少なくなった。
- b 今日は春らしい天気だ。

「Nらしい」のaは〈同じ名詞を繰り返してその名詞の表すものの中の典型的なものを表す。〉、「Nらしい」のbは〈名詞に付き、そのものの典型的な性質がよく表れていることを表す。〉のように記述される。一方、「…らしい」については、

…らしい

- a 天気予報によると明日は雨らしい。
- b 彼はどうやら今の会社を辞めて、自分の会社を作るらしい。
- c 兄はどうも試験がうまくいかなかったらしく、帰ってくるなり部屋に閉じ込めてしまった。

のような例を挙げられており、〈文末に付いて、話し手がその内容をかなり確実度の高いことがらであると思っていることを表す。その判断の根拠は外部からの情報や観察可能なことがらなど客観的なものであり、単なる想像ではない。〉と記述される。

「ーらしい」を、名詞を承ける形容詞用法のものと、活用語の言い切りを承ける推量用法（助動詞／モダリティ）とに分けるのは、先行研究でも一般的である。しかし、本論文

では、通時的な変化を明らかにするにあたり、形容詞語幹接続の「ーらしい」（可愛らしい、憎らしいなど）や形容動詞語幹接続（馬鹿らしい、もっともらしいなど）についても形容詞の「ーらしい」に含めて考察する。

次に、推量を示す「ーらしい」と接辞の「ーらしい」の区別について言及されている先行研究を取り上げる。既に多くの先行研究で指摘されている通り、推量を示す「ーらしい」と接辞の「ーらしい」を明確に区別することは困難であると考えられる。

以下、外山(1969)と吉田(1971)を参照する。

外山(1969)^{*8}

「らしい」の発生が接尾語よりの類推であると考えられることからいっても、両者の関係はきわめて密接である。助動詞「らしい」が現実の一つの客観的事実・条件から、ある事がらの状態を推定するのに対し、接尾語「らしい」は、そのような客観的事実・条件が、ある事がらの属性概念であるとして表現するのである。

吉田(1971)

- ・助動詞「らしい」……話者・表現者の推量判断作用が認められる
- ・接尾語「らしい」……それ（話者・表現者の推量判断作用…岩崎注）が無いかまたは著しく稀薄であり、その事がらの属性概念を表わす

外山(1969)によると、「ーらしい」の発生は〈接尾語よりの類推である〉と指摘されているが、それを歴史的事実と照らし合わせて述べられたものは見当たらない。本論文では、まず、接辞の「ーらしい」に、「YはXに見える」ことを示す例が見られるようになり、それを契機として推量用法が成立するのではないかとする。

また、吉田(1971)は、接辞の「ーらしい」と助動詞の「ーらしい」は、以下の通り「である」を挿入し得るかし得ないかで見分けられるとされている。

一概にはいえないけれども、主として体言につく「らしい」には、接尾語が多い。もっとも、体言と「らしい」との間に「である」を挿入しうるもの（「兄らしく」は「兄であるらしく」、「春雨らしい」は「春雨であるらしい」、「客らしかった」は「客であるらしかった」、「必要らしい」は「必要であるらしい」などの例の如き）は、助動詞であり、「可愛らしい」「男らしい」「末っ子らしく」などには「である」が挿入し難いので、これらの「らしい」を接尾語とするという意識別法がある。

*8 『助詞助動詞詳説』の「九 らしい」の執筆を担当されている。

これについては、北原(1981)でも同様の指摘がなされている。北原氏は、以下の 2 例^{*9}について述べられている。

- a 玄関に来たのはお客さんらしい。
- b すっかり商人らしくなった。

これらのうち、b の「らしい」は「商人」と結合して一個の複合形容詞を構成しているが、a については「玄関に来たのは」と「お客さん」が対応し、「玄関に来たのはお客さん(である)」に「らしい」が添加していると解釈されている。

小島(1996)

小島氏は、通時的な観点も踏まえて、「一らしい」が接辞と助動詞に分化していく過程を検討されている。鈴木(1988)を参照し、明治期や大正期に、「今日感覚では接尾語とも言い難い」例が存することに着目される。たとえば、

- (8) 迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。(『吾輩は猫である』)
- (9) 五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。(『芋粥』)

のような例に対し、これらを、

「推定」というほどの意味はないものの、「はっきりとはいえないがそのように見える」という助動詞の意味につながるような意味を持っている。

とされる(用例は小島(1996)より引用。下線は岩崎による)。明治期・大正期におけるこういった「助動詞の意味につながるような」例の存在を承け、「一らしい」の現代にかけての推移について、以下の通り述べられている。

明治期以降の「らしい」を見ると、本来、「らしい」は、単に「そう呼ぶにふさわしい状態である」という語で、基本的には、実際にそうであるかどうかには無関心な表現だったものと考えられる。それが、時代が下るにつれ、実際にそうであるかどうかに関心を持つようになり、その結果、いわば中間的な用法が消えていき、実際にそうであるものについての接尾語「らしい」という表現と、「実際はどうだかわからない」

*9 時枝(1950)207 頁より引用されたもの。

ということを積極的に含んでいる助動詞「らしい」とに分化していったと考えられるのではないか。

接辞用法と推量用法が、現代語のようにはっきりと区別されていなかった時期があり、それが次第に分化していくというのは、通時的な検討を踏まえた参考になる指摘である。

ただし、鈴木(1988)にも述べられている通り、小島(1996)などで挙げられている形容動詞語幹接続の例は、専ら明治期・大正期に用いられるもので、昭和期には用例数が低減し、終わり頃に至ってはほぼ見られない。また、推量用法の「ーらしい」が近世に既に見られることから、接辞から推量用法が派生したということとは直接は結び付きにくいように考えられる。両用法の関係を明らかにするうえで、近世における「ーらしい」の意味用法を検討する必要があるのではないと思われる。近世の「ーらしい」に着目した先行研究として岡部(2004)や山本(2010)が挙げられるため、第7章で確認する。

三宅(2006)では、「ーらしい」を典型を表す「典型的属性表示」と推量を表す「実証的判断」に分類されている。更に、名詞接続の「ーらしい」では、「典型的属性用法」と「実証的判断」のどちらの用法か確定できない例が見られることを指摘されている。

「典型的属性表示」と「実証的判断」は、名詞に直接、後接した場合、どちらの用法かが確定出来ず、あいまいになることも多い。次例のようなものを参照されたい。

(38) 帰り際、新人らしい看護師が一所懸命掃除をしていました。

(39) 最寄りの地下鉄駅に降りると芝居見物らしい人の波が国立文楽劇場の方に続いている。

(40) 若い学生と一緒に、カウンターでコーヒーを飲む教授らしい老人を見た。

これは、両者が全く異質なものであるということを示している。

また、三宅氏は、「ーらしい」の「実証的判断」は、「典型的属性表示」から意味的に拡張したものであるとの仮説を立てられており、次のように述べられている。

「典型的属性表示」の用法における、ラシイに前接する名詞が持つ概念そのものと、典型的な属性との関係を考えてみよう。例えば「(いかにも) 子どもラシイ」という時の、「子ども」という概念と、「子ども」が持つ典型的な属性との関係である。「子ども」が持つ典型的な属性は、文脈に応じて様々なものが考えられる(“純真”“すぐ泣く”など)が、いずれにしても、それらは「子ども」という概念そのものにとって、「密接である」「目立つ」「容易に類推ができる」ようなものである。「密接である」「目立つ」「容易に類推ができる」ということを「近接的である」と言い換えるとする、典型的属性表示の用法の「[名詞]ラシイ」における、名詞の概念そのもの

と、その名詞の典型的な属性との間には、「近接的」な関係が成り立っていることになり、そのような「近接性」を保証しているのがラシイと言えるのである。

この「近接性」を、「命題」（統語的には「節」）のレベルまで拡張した場合に獲得される用法が、ラシイによる実証的判断ではないかと思われる。

二重傍線部にある指摘を通時的に検討したいと考える。

以上を見ると、推量の「ーらしい」は、接辞の「ーらしい」から派生したものとされている。しかし、それについての通時的な研究については充分に行われていないように思われる。両者の区別は、外山(1969)で述べられている通り、ある人・物の属性を表す場合は接辞であり、事柄に対する話者の推測を表す場合は推量と捉えればよいのではないかと考えられる。その条件として、北原(1981)に示される通り、上接部と「ーらしい」との間に「である」を挿入し得るか否かで判断することが可能であるが、連体用法ではその区別が困難になる場合があることが三宅(2006)でも指摘されている。これを踏まえ、本論文では、「ーらしい」の意味用法の変遷を通時的に明らかにしたうえで、接辞の用法から推量表現が成立する過程を示す。

なお、本論文における表記については以下の通りである。

〈 〉 参考文献等からの引用を示す。

/ 新聞記事や漫画の吹き出し内での改行を示す。

[] 筆者による補足内容を示す。

本論

第1章 「一ぱい」の意味用法と展開

0. はじめに

近年の「一ぱい」には、

- (1)a 「まあ、身体は絞ってるからね。マイクタイソンだって、巨人って感じじゃなかったし。ただ、日本人で、挑戦する男がいるなんて、昔は思わなかったけど、時代は変わるもんだね」

板橋香澄は感慨深そうに首を振った後で、「で、そうそう、その試合の結果、挑戦者が勝ったら、学はあなたに告白するっばいだよ」と続けた。

(伊坂幸太郎「ライトヘビー」2007〈平成19〉)

- b 「だからね、俺が辞めて、で、俺がいないとどれだけ困るか、上司たちに分からせてやろうと思ったんすよね」

「で、おまえが辞めて、みんなは困ったのか」

「いやあ」とカズは笑う。「全然、困ってないっばいです」

「早まったな、カズ」

「早まりました。毎日、後悔してますよ」と言うのがどこまで本心なのか判然としなかったが、カズはつらそうに言った。

(伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』2007〈平成19〉)

のような例が見られる。これらは、「安っばい時計」「怒りっばい人」「水っばい酒」のような人やものの性格・性質を表すものとは異なる。「一ぱい」が承ける「彼女ができた」は、話者（母親）が最近中二になった息子の様子をそう捉えたということを示している。また、『日本語文法ハンドブック』では、〈「どうやら明日は雨っばい。」のように、状況からの判断を表す〉用法が見られるとの指摘がある(p.398 より引用)。この「明日は雨（が降る）」は、発話時において雨が降っているのではなく、その可能性のある事柄を示していると考えられる。

ここでは、「一ぱい」を意味の観点から分類し、その展開を示す。これによると、「息子に彼女ができたっばい」や「どうやら明日は雨っばい」のような、ある状況を踏まえて話者の判断を表す用法は、昭和期の終わり頃に成立する。本章の目的は、こういった「一ぱい」の意味用法がどのように成立し、用いられているかを明らかにすることにある。

1. 近世：接辞用法の分類

近世の「ーぽい」は形容詞を形成する接辞であり、人やものの性質・性格を示す。その用法は、3 分類される。まず、上接部に「性質・状態」を示すものを取るか、「行為」を示すものを取るかで分かれる。行為を示すものを取る場合は、「すぐ／よく～する」という容易性を示す。これに対し、性質・状態を示すものを取る場合は、更に、顕著な特徴を示す用法と割合を示す用法に分かれる。上接部が人やものに混合されない場合は、「その特徴が強い」（顕著な特徴）ことを示し、上接部が人やもの、空間などに対し混合される具体的なものを指す場合は「割合の高さ」（含有率・濃度が高い）を示す。構文としては、「A(の性質)=B」（【この酒】は【水っぽい】）となり、B は A の性質・性格を示す形容詞性接辞である。

まずは、実例を示して3つの意味用法を確認する。以下に挙げるのは、顕著な特徴を示す用法の例である。

(2)a ちよつと覗きやれよと怨みツぽい女

（呉陵軒可有等編『誹風柳多留』9 編 1774〈安永 3〉）

- b Ⅲににくいこともねへのさ。それだけど今じやアかみさんはいれるし。いゝなぶりごろなこぞうたとおもつて。いゝやうにされたからよん所なくあいそづかしさⅢちつとぐちつぽいやうだが。何もみれんの残らねへものが。

（作者未詳「大門雛形」1794〈寛政 6〉以後）

- c 「都て高田馬場の體、上の方に料理茶屋一軒 卒八「だいぶ荒ツぽい書きやうだね」
（滝亭鯉丈『八笑人』4 編上 1828〈文政 11〉）

- d 和次「コウ鳥渡見な、アレ舐先の方に後を向いて腰を掛けて居る年増の、ソレ藍微塵の衣物を着て居る」矢場「ムウ餘程婀娜ツぽい後ツつきだ」

（為永春水『和合人』4 編 1845〈弘化 2〉）

人やものに対して用いられ、「（上接部に示される）特徴が強い」ことが示される。上接部は動詞連用形「怨み」や名詞「愚痴」「理屈」、形容詞語幹「安」「荒」、形容動詞語幹「哀れ」「気障」などである。この用法は、上接部が最も多様であり、表すものも幅広い。近世では、人の言動や容姿に対して用いられる（(2)abd）のが殆どだが、ものの特徴を述べる場合（(2)c）もある。

続いて、割合の高さを示す用法の例を挙げる。

- (3)a 麦めしもはやくどかべりが来る物なり。ひしきめしは水ッぽく力なし。雑水は咽がかわき。
（鈍九齋章丸「残座訓」1784〈天明 4〉）

- b まきヲやぬしやアきたねへ事をいゝなんすねぬしのうちは水気とやらのある所で
さんすかさぞしめつほうさんしやうネウしみつたれといわぬ斗り
にすこしあそひかける

（うくひす谷 白眼「三千之紙屑」1801〈寛政 13〉）

- c 張吉「其事々々。あんまり白ツばい顔ぢやア、思ふ様に洒落も地口も出やア爲ねへ」
(為永春水『和合人』4 編上 1845〈弘化 2〉)

主にもの、及び人の身体部位に対して用いられ、「(上接部の) 含有率が高い、濃度が高い」ことが示される。上接部は「水」「骨」などの名詞や語根「湿」、「白」「黒」などの形容詞語幹である。

最後に、容易性を示す用法の例を挙げる。

- (4)a ほんにお前は余程腹たちっばいよ
(山手馬鹿人「粹町甲閨」1772-1781〈安永年間〉)
- b そして好男ほど浮虚で飽ツばい物さ。
(式亭三馬『浮世風呂』2 編下 1810〈文化 7〉)
- c ほんに客人程疑りツばいものアおざりいせんよ
(鼻山人「花街寿々女」上巻 1826〈文政 9〉)

人・ものの性格・性質に対して用いられ、「すぐ／よく～する」ことが示される。上接部は主に「飽き」「忘れ」など動詞連用形であり、「自分の意思では制御できないこと、意図せずそうなる」行為に限られる。

次に、3つの意味用法がどのような関係にあるかについて詳しく検討する。初出例の(5)は、顕著な特徴を示すと同時に割合の高さも示している。

- (5) 見に行てしめつほく出る拂藏
(呉陵軒可有等編『誹風柳多留』初編 1765〈明和 2〉)

この例では、「藏の湿り気の多さ」「売られていく藏を見る人の沈痛な気持ち」とが示されているとある(宮田正信校注『誹風柳多留』参照)。このように、「湿っばい」は「場所・物」に対しては具体的な「湿り気」が含有されて「湿り気の多さ」を示し、一方で「人の心情」に対して用いられる場合は「湿り気」という具体的なものではなく「沈んだ気持ち・雰囲気」を示す。

このように、「一ぱい」は人との双方の性質・状態を示す接辞である。しかし、近世の「一ぱい」では人の容姿・性格・言動について述べる例が8割以上を占め、人に対して用いられる傾向のある接辞であると思われる。また、3つの意味用法は何に対して用いられるかで区別される。

まず、顕著な特徴を示す用法は、主に人の言動・容姿に対して用いられる。(6)は言動、(7)は容姿について述べたものである。

- (6)a 綾なんじやアおつせんあんまりでおすわなわたしが気もちつたアさつしてみなんしな 藤宵にさはいだ事かありやアすんでしまつた事だはないつ迄胸にもつていてうらみばい事をいふ
(五岳山人「通客一盃記言」1807〈文化 4〉)
- b 女房「ハイ／＼、そしたら皆様およろりと」トかへり行く。茶見「わからなく理窟ツばい嬬アだぞ」
(滝亭鯉丈『和合人』2 編下 1823-1829〈文政 6-12〉か)

(7)a 和次「コウ鳥渡^{ちよつと}見な、アレ舐^き先の方に後を向いて腰を掛けて居る年増の、ソレ藍微塵^{きもの}の衣物を着て居る」矢場「ムウ餘程婀娜ツ^{ぼい}後ツつきだ」

(為永春水『和合人』4編下 1845〈弘化2〉)

b 喜次「ノホン、其處で今一人の人形は、ぐつと仇ツ^{ぼい}中年増といふのだから、古人段付をしたらば、何程ぐらゐの相場だらう」

(梅亭金鷲『七偏人』2編上 1857〈安政4〉)

(6)は話し相手(綾)や女房の言葉や態度に対し、「一^{ぼい}」を用いてその特徴を表していると考えられる。一方、(7)は容姿を中心に述べられていると思われる。なお、(5)と(6)の相違は、意味・用法の差異に関わるのではなく、いずれの例でも「特徴が強い」ことが示されている。

割合の高さを示す用法は、人の容姿、なかでも身体的特徴を示す際に用いられる。

(8)a しかし大江^{おほえやま}山のすつてん童子^{どうじ}にでもさらはれると是非^{さう}然^みさ。その時^み実沢^み山^{だくさん}でヤンヤといはれるは恐^{おそれ}ながら且^{さけ}ばかりス。酒^{さけ}肥^ぶでお腹^{はら}に酒が絶えねへから酒塩^{さかしほ}いらず。おかこさんなどは骨^{ほね}多^たくて吐^{はき}出^だされる。

(式亭三馬『四十八癖』4編 1818〈文政元〉)

b 張吉「其事々々。あんまり白ツ^{ぼい}顔ぢやア、思ふ様に洒落も地口も出やア爲ねへ」土場六「ヲウ白ツ^{ぼい}とは」張吉「白ツ^{ぼい}とは白ツ^{ぼい}事よ。解らずば言つて聞かせやう。

(為永春水『和合人』4編上 1845〈弘化2〉)

(8)aであれば骨が多い、(8)bであれば白みが強いことが示されている。なお、「骨っぼい」「水っぼい」などは上接部が含有されるものであり、そのものが外見に現れることはないが、(8)bのような色彩を表すものについては、その性質が外見にも現れる。

容易性を示す用法は、主に人の性格を表す。

(9)a そして好男ほど浮虚で飽ツ^{ぼい}物さ。

(式亭三馬『浮世風呂』2編下 1810〈文化7〉)

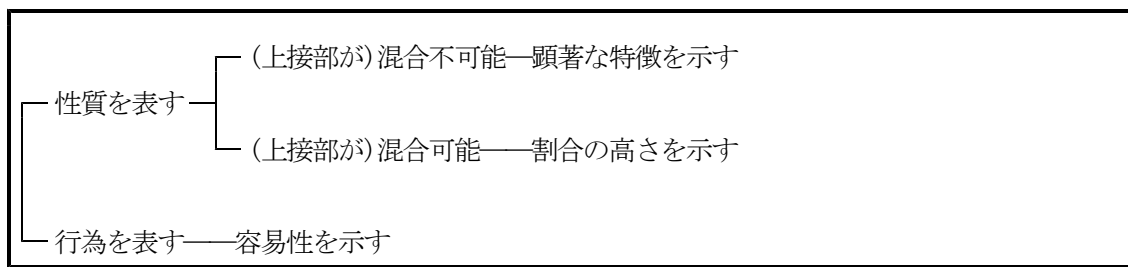
b 將基をさして飯のくはれるほどになれば能けれど、おのしがやうな物あきをする者は、万一に飽ツ^{ぼく}て、何を一ツとげた事がねへ。

(式亭三馬『浮世風呂』前編 1809〈文化6〉)

これらの例では、「(いい男は／お前は)すぐ飽きる」ことが示されている。

このように見ていくと、近世の「一^{ぼい}」は人について用いられるのが主だが、顕著な特徴を示す用法では言動、割合の高さを示す用法では身体的特徴、容易性を示す用法では性格を表すというように区別されている。

近世の「一^{ぼい}」の意味用法をまとめると、次頁のようになる。



2. 明治期・大正期：接辞用法の変化

近世に挙げた用法は、明治期・大正期にかけて、以下の通り変化する。

- ① 顕著な特徴を示す用法の意味に下位分類が生じる。
- ② 顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法において、人物以外に「一ぱい」を用いる例が増加する。
- ③ 正体不明のものに対して「一ぱい」が用いられるようになる。
- ④ 顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法において、「一ぱい」の前文脈に修飾語／句を伴うものが見られるようになる。

変化は①→②→③→④の順で生じ、更に細かく見ると、①・②・③の変化は明治期の半ば頃、④の変化は明治期の終わり頃である。

まずは、① 顕著な特徴を示す用法の意味に下位分類が生じることについて見ていく。顕著な特徴を示す用法の意味は、近世から明治期の初め頃までは「顕著な特徴のみを有する」ことを表す。これに対し、明治期の半ばより、以下のような「本来持たない特徴を有する」ことを表す例が見られるようになる。

- (10) a あ「私ア素人っぱい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」(三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」1885〈明治18〉)
- b 豊頬で、眼鼻だちのちまちまと調った顔つきも子供ッぽく、二十四とはとても受け取れなかった。 (里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

(10) a の「素人っぱい」は、遊女が自分の行動について述べているもので、玄人なのに素人のようである(遊女でありながら遊女らしからぬ)という意味で解されると考えられる。(10) b の「子供っぽく」も、二十四歳にしては不相応に幼いことが表されている。

その後、明治期の終わり頃より、「本来持つ特徴を有する」ことを表す例が見られるようになる。

- (11) その下からさすがに子供っぱい小さな足を食み出してゐる
(田村俊子「あきらめ」1911〈明治44〉)

この例は、15歳の少女の足について述べるものである。「さすがに」ともある通り、いかにも子供に相応しい足であることを表していると取れる。

近世より見られる「顕著な特徴を有する」ことのみを示す用法、たとえば「安っぽい看板」は、実際の値段が安い・高いを問題としているのではない。言い換えれば、「一ぱい」の元々の意味用法では、その人・ものが本来どういったものであるかということを問題とせずにその性質や性格を示すものであると考えられる。これを仮に、その性質・性格の持ち主（主体）の属性が意味に影響する／しないというように区別する。影響する場合は、その上接名詞の「典型」とのずれが生じるか／生じないかということが含意される。

明治期に至って(10)(11)のような例が見られるようになったのは、「素人」「子供」のような上接名詞がそれ自体形容詞的であり、「素人中の素人」や「子供らしい子供」のような「典型」を示すことによるのではないと思われる。遊女が素人っぽい事をすれば、自然にその「典型」とのずれが生じる。一方、「子供っぽい足」というときは、「典型」とのずれは生じない。

続いて、② 顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法において、人物以外に「一ぱい」を用いる例が増加する変化について見ていく。明治期の半ば以降、顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法では、以下のような「もの」に対して「一ぱい」が用いられる例が増加する。

(12)a 包圍には安^{まわり}っぽい^{やすつ}虚飾^{はでな}置物や額は見えず、

(若松賤子「小公子」1890-1892〈明治 23-25〉)

b 差し向いの朝酒に、理窟ッ^ッっぽいお談義を、やや辟易の態で、ならぼうまくほぐらかして了おう了見だった。(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(13)a 其人が學校の歸りよ。小倉の白^つっぽい縞の袴を穿いて、風呂敷包を抱えて、向ふからてくてく歩いて来るのよ。(田山花袋「手紙」1909〈明治 42〉)

b 私は埃^っっぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。(梶井基次郎「檸檬」1923〈大正 12〉)

このことから、近世の「一ぱい」が主に人に対して用いられていたのに比べて、明治期では、顕著な特徴を示す用法・割合を示す用法の「一ぱい」が用いられる場が広がったと考えられる。容易性を示す用法では、こういった変化は見られない*10。

同じく明治期の半ば以降、③ 正体不明のものに対して「一ぱい」が用いられるようになるという変化が生じる。

(14)a 凄じき勢で空中に投擧られた、石や、瓦や、砲車や、家屋や、其他種種なる

*10 容易性を示す用法には、人以外のものの性格を示す例が少ない(14例／128例)。以下、もの・生き物の性質を示す例を挙げる。

○紺染メハよこれ^つっぽいとこなや言イ (呉陵軒可有等編『誹風柳多留』33編 1806〈文化 3〉)

○忘れ^っっぽいモズがあちらこちらの枝につき刺した子ネズミの死骸に彼は眼を奪われたのだった。

(開高健「パニック」1957〈昭和 32〉)

何やらの黒ツぽき物体を、ばツと計火光の裡に照した、

(嵯峨の屋おむろ訳^{*11}「セバストウポルの落城」1901〈明治34〉)

- b 何しろ、胸はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッぽいもののがもやもやしているし、大苦しみの最中で、はっきりとは憶えてませんが、……そうですか、その時にあなたもいらしたんですか」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

これらの例では、「何やら」や「なんだか」が共起しており、「物体」「もの」が何であるかはっきりとしないと解される。一方で、正体が分からないなりに、その外見に現れる性質として「黒っぽい」「黄色っぽい」という色彩が示されている。従って、「一ぽい」によって「(正体不明のものが) 上接名詞 X に見えた」ことが表されていると考えられる。人やものの正体がよく分からない場合に「X に見える」ことを表すのは、次期に見られる属性を示す用法・話者の推測を示す用法に通ずる。ただし、属性を表す用法・話者の推測を表す用法では、「A=X」であることが成り立つ。たとえば、「やくざっぽい男」であれば「男はやくざである」ということが可能である。一方、(14)では「物体は黒である」「目の前でもやもやしているものは黄色である」とはいえず、「物体の色は黒である」「目の前のもやもやしているものの色は黄色である」ことを表していると考えられる。つまり、上接部 X はあくまで正体不明のものの部分的な性質を表す。従って、明治期は、「正体不明のものが、X に見える」ことを表す「一ぽい」が見られるようになった時期と考えればよいであろう。なお、「X に見える」意は、近世の終わり頃において「顔色が白っぽい」など目に見える性質について述べる例が見られる。

最後に、④ 顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法において、「一ぽい」の前文脈に修飾語句を伴うものが見られるようになる点について検討する。これは、明治期の終わり頃に生じる変化である。

(15)a 手前共に口を聞く様な安っぽい男じゃないと、(夏目漱石「坑夫」1907〈明治40〉)

- b 白ペンキで塗った安っぽい卓の上を、琥珀色の液体が、盛りあがって流れて来た。
(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

これらの例では、波線部の内容も「一ぽい」と同様に被修飾語を説明していると思われる。(15)a では「手前共に口を聞く様な」「安っぽい」の双方が「男」を修飾していると考えられる。同様に、(15)b では「白ペンキで塗った」「安っぽい」が「卓」を修飾している。この場合、ただ「安っぽい男」「安っぽい卓」というよりも、その男／卓がどういう人／ものであるかがより具体的に示されるのではないかと思われる。

なお、先に人以外のものについて述べる例が容易性を示す用法では見られにくいとした

*11 トルストイ作。以下同様。

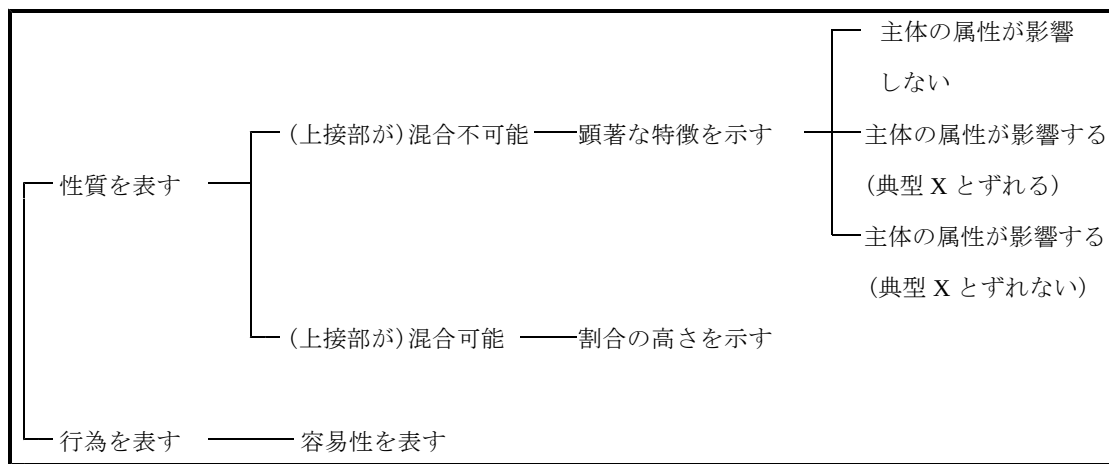
が、こういった修飾語句を伴う例についても見られにくい^{*12}。容易性を示す「ーぽい」は、近世に引き続き、人の性格について述べる。

(16) a お花は不審顔、『叔母さんと私と約束した事あつて、何だツたらう。』『おほほゝゝ。お花さんは忘れツぽいわねえ。 (広津柳浪「櫨紅葉」1901〈明治34〉)

b 『お前はよツぽど疑ぐりツぽい女だ。 (岩野泡鳴「断橋」1911〈明治44〉)

基本的な用法のなかでも、この用法は最も変化が少ないことが明らかである。

明治期・大正期の「ーぽい」の意味用法は、近世に引き続き3つに分類されるが、顕著な特徴を示す用法の意味が3つに分かれる点で変化があるといえる。



3. 昭和期以降：属性を示す用法の成立

昭和期の初めより、属性を示す用法が見られるようになる。ここでの「ーぽい」は、これまでに示したものと同様、人やものの「顕著な特徴を示す」形容詞性接辞であり、上接部は主に名詞である。構文としては、「A(の性質)=B」(【あの男】は【やくざっぽい])だが、A が正体不明のものになっている点で変化があり、A と上接名詞 X を照らし合わせる点に話者の推測が示される。たとえば、以下のような例が見られる。

(17) a やがてその後ろの方から、学生っぽい女の子が戸惑った感じで現れた。カートは押しておらず、布製の大きなスーツケースを引いている。

(山本文緒『恋愛中毒』1998〈平成10〉)

b あの、調布駅の地下通路ですれ違った、男だか女だか判んない、長髪の、オタ

*12 以下の2例に留まる。

○独逸の歴史家モムゼンは専門以外のことは何でも忘れっぽいので聞えた男で (薄田泣菫「茶話」1916-1918〈大正5-7〉)

○性こりもなく惚れっぽいくせに、心そこの情は案外に浅く、 (瀬戸内晴美「みれん」1963〈昭和38〉)

クっばいピンクのシャツの人じゃん何で!?

(舞城王太郎『阿修羅ガール』2003〈平成15〉)

正体不明の人・ものの特徴を捉えたうえで、「～に感じられる／見える／聞こえる」ことが示される。(17)aでは「後ろの方から現れた女の子は学生に見える」、(17)bでは「ピンクのシャツの人はオタクに見える」ことが示されていると考えられる。被修飾語である「女の子」や「ピンクのシャツの人」は、それだけでは内容が不十分であり、「ピンクのシャツの」といった修飾語や「ーばい」によってどういう人物であるかが示されている。また、これらの例では、「後ろの方から現れた女の子は学生だ」「ピンクのシャツの人はオタクだ」というように、被修飾語(Y)と上接名詞(X)を同定関係(Y=X)と見なすことができる。ただし、「ーばい」は両者が同定関係にあることを表すわけではなく、あくまで話者のなかでそのように感じている／見えていることを表す^{*13}。

この用法は、昭和期の初め頃ではただ正体不明のものを上接部として言い表すのみであるが、昭和期の終わり頃以降は話者の視点を介して「Xに見える」ことを表す例が見られるようになる。その場合は、「ーばい」が「話者から見た状況」を表すと考えられる。

以下、実例で検討する。まず、昭和期の初め頃の例を挙げる。

(18)a 田舎に着いた日、その地方は五月の嵐っばい天候であった。俵に乗って市から村へ通じる寂しい一本道にかかると、荒い幅広い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。 (宮本百合子「伸子」1928〈昭和3〉)

b 暫くして、佃が露骨に喧嘩っばい調子で詰問した。
(宮本百合子「伸子」1928〈昭和3〉)

c 熱くなると、居たまらなくなった風が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪^{あぶら}っばいコロッとした身体 of 感触がゾツときた。 (小林多喜二「蟹工船」1929〈昭和4〉)

これらの例では、それだけでは説明不十分な「天候」「調子」「(コロッとした身体 of 感触)」がどういったものか／どのように感じられるかが、上接名詞「五月の嵐」「喧嘩」「皮膚の脂肪」として表されている。これらの例では、「話者が知覚した正体不明のものを、(話者によって)最も適当な言葉で言い表すならば上接部」であるという照らし合わせが示されており、話者によって「AはXに見える」と述べる例ではない。

一方、昭和期の終わり頃では、以下のような例が見られるようになる。

(19)a こちらを向いている角刈りのやくざっばい男がおり、女の髪をつかんでカウンターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っている

*13 繰り返しになるが、3節に示した「(正体不明のものに対し)目の前のもやもやした黄色っばいもの」という場合は、「目の前のもやもやしたものは黄色だ」のように同定関係で解釈することはできない。

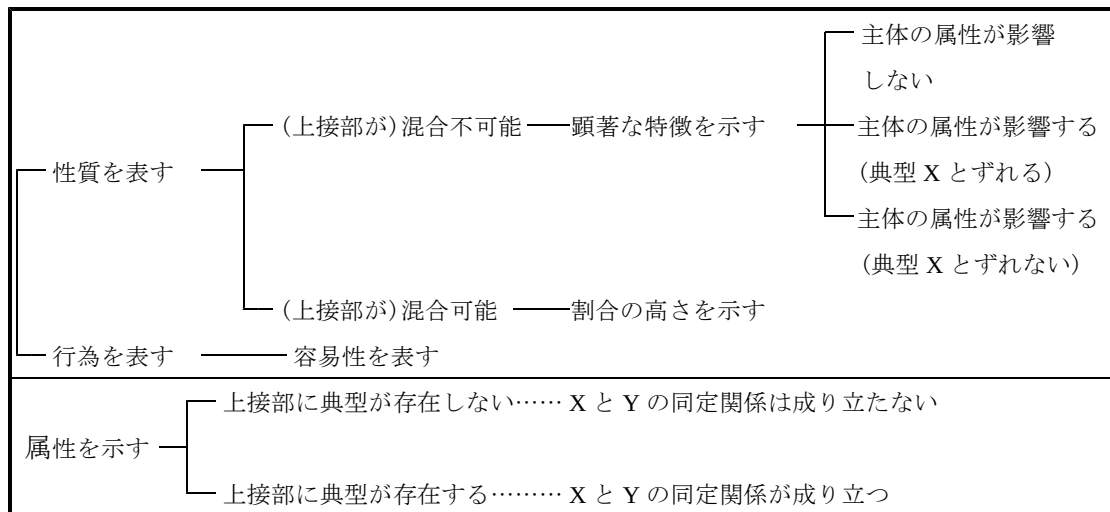
た。(五木寛之「こがね虫たちの夜」1969〈昭和 44〉)

- b [写真を見ながら]湘南の海岸でしょうか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぽい男と肩を寄せ合っている。(泡坂妻夫『花火と銃声』1988〈昭和 63〉)

これらの例では、「こちらを向いている男」「トシ子が肩を寄せ合っている男」が「やくざ」の特徴を有しており、「話者からはやくざに見える」ことが示されている。ここでの上接名詞「やくざ」には、「やくざらしいやくざ」という属性の典型が存在すると思われる。正体不明の「男」の有する特徴は、「やくざ」に属するに相応しいものであると考えられる。このように、正体不明の人・ものと照らし合わされる属性に典型があると考えられる場合は、上接名詞 X と被修飾語とが同定関係(あの男はやくざだ)となり、且つ、上接部の典型であるということも表れるのではないかと考えられる。

(18)と(19)の差異として、話者の視点を踏まえていることが明確か否かということが挙げられる。加えて、(18)は、聴覚や触覚など、視覚以外を証拠とする点でも、(19)とは異なるのではないと思われる。(19)は、話者がある人・ものを見て、それが「X という属性のもの」即ち「X に見える」と判断していると考えられる。ここでの「っぽい」は「A=X」という断定を表すのではなく、話者の蓋然性判断を表している。

以上見てきた通り、昭和期以降では、これまでに見られなかった意味用法が成立する。ここで、属性を示す用法が成立した段階での「っぽい」の意味用法を以下にまとめる。



4. 昭和期以降：話者の推測的判断を示す用法の成立

昭和期の終わり頃より、話者の推測的判断を示す用法が見られるようになる。この用法では、ある状況(α)について、「A=B」が成立することを推測する。従って、状況や事柄、文脈などをうけ、そのなかで「A=B」を成立することが述べられる。構文としては、「α：[A=B]っぽい」である。また、この用法には、次の3つのパターンが見られる。

I. ある状況を話者の言葉で言い表す。

II. 話者が捉えた状況から、推論を経て上接部（推測内容）を導き出す。

III. 話し相手の推測内容に基づき、話者の判断を示す。

まず、I・IIとIIIは形のうえで区別される。IとIIは主に句を承け、IIIは上接部を省略し「(っ)ぽい」のみで用いられる。

また、IとIIは、「ーぽい」の上接部が示す内容と判断の在り方において異なる。まず、Iの「A=B」はある状況を言い換えたものである。以下に用例を示す。

(20)a 「あの子、林くんと付き合っていない？」

父さんが「ハア？」と眉をしかめた。私はそれを横目に、「まだ付き合っていないっぽい、何となく」と言った。(豊島ミホ『檸檬のころ』2005〈平成17〉)

b でも、旦那さんが浮気したら？ 彼女の答えは明瞭だった。

「殺します」

ひゅーつと誰かが口笛を鳴らした。

デビューがそんなふうだったから、職場の男性社員たちは、すっかりびびってしまった。

「あの歳だから結婚を意識するのはまあいいとして、浮気したら殺すってのはなあ。しかも何となく本気っぽいもんなあ。あの人、過去に絶対何かあるよ。

男に裏切られて、怨念みたいなものを抱えてる、とかさ」未婚者の一人はそんなふうに行った。(東野圭吾『夜明けの街で』2007〈平成19〉)

(20)aでは「あの子と林くん」の様子を見ている「私」が、現状としては「あの二人は、まだ付き合っていない」と捉えており、(20)bでは、「彼女」の様子を見ていた「社員」が、「彼女は旦那が浮気したら本当に殺す」と捉えていることが示されていると考えられる。ここでの「ーぽい」は、 $\alpha=[A=B]$ (例：私が見ている状況(α)=[あの子と林くん(A)=まだ付き合っていない(B)])が成立する可能性の高さを示す。どちらも「何となく」が共起しており、「ーぽい」で示される内容は、話者にとって「そう捉えてはいるが、確実なものではない」ものであると考えられる。

これに対し、IIの場合は、「A=B」はある状況から導き出された推論である。従って、 α と「A=B」は異なる内容を指す。以下に用例を示す。

(21)a 「だからね、俺が辞めて、で、俺がいないとどれだけ困るか、上司たちに分からせてやろうと思ったんすよね」

「で、おまえが辞めて、みんなは困ったのか」

「いやあ」とカズは笑う。「全然、困っていないっぽいです」

「早まったな、カズ」

「早まりました。毎日、後悔してますよ」と言うのがどこまで本心なのか判然としなかったが、カズはつらそうに言った。

(伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』2007〈平成19〉)

- b 『接地、エンジンカット！ ローターが完全に止まるまで各員近づくな！』

副操縦士の怒鳴るような指示の後、無線を通さず直に金属の破碎音が聞こえた。ヘリはかなりコンテナから離れているはずなのにここまで聞こえるということは、無事着陸とはいかなかったようだ。

[中略]

「ヘリはどうなった」

真っ先に尋ねた堂上に、小牧が難しい顔で答えた。

「着陸か着陸転倒か微妙なとこだな。けっこうハデに壊れたっぽい。操縦者二名が負傷で済んだのは何よりだけど」(有川浩『図書館革命』2007〈平成19〉)

これらの例では、話者は「職場のみんな」や「ヘリ（事故現場）」を見ることのできない状況にあると思われる。話者が見ている状況をAとすると、「職場のみんな」「ヘリ（事故現場）」を直接見ることのできない状況(α)から、「職場のみんなは全然困ってない」「ヘリはけっこうハデに壊れた」というBを推測していると考えられる。この場合は、「(話者が見た)状況 → 推論 → ーぽい」というように、推論を経て上接部が導き出される。ここでの「ーぽい」は、証拠に基づく推論「A=B」が成立する可能性が高いことを示すと考えられる。

Ⅲの例については以下の通りである。

- (22)a 「今日、テストあるっぽいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ぽいよね」と相づちをうつ。
(産経新聞 1998.2.21〈平成10〉)

- b 「またふられたの？」

夕食のためにようやく二階から降りてきた直ちゃんに声をかけた。

「っぽいね」

直ちゃんは肩をすくめると、自分の席に着いた。

(瀬尾まいこ『幸福な食卓』2004〈平成16〉)

6例見られる。(22)aでは「今日テストある」、(22)bでは「またふられた」という話者の推測内容を聞いた話者が、話し相手の推測内容を「ーぽい」によって肯定しているのではないと思われる。

以下、話者の推測的判断を示す用法の変遷を見ていく。初出例は以下の通りである。

- (23) 雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッポメだ」と言うのだそうです。

(言語生活 1982.6〈昭和57〉)

ここでの「今日は雨っぽい」は、「雨が降りそうな」状況を話者の感覚で表したものであると考えられる。これは、いわば、話者がある状況をどう捉えているかを示したものであり、推測の意は強くないと考えられる。話者の推測を示す用法の例では、このような「話

者が実際に見た状況を、話者が感じた通りに言い表す」ものが一般的である。以下の例も同様である。

(24) 翌日、席についてぐったりしている私に、辻本くんが声をかけてきた。

「どうしたの、元気ないっぽいけど」

昨日は眠りが浅くて、ばくぜんと不安な夢を何度も見た。朝、鏡を見たら目の下にくろぐろとクマがあった。うんざりだ。

(豊島ミホ『檸檬のころ』2005〈平成17〉)

(25) 一段落するまで様子を眺めていた手塚が一人になった郁に駆け寄ってきた。

「何だったんだ？」

「いや、何か……小牧教官の知り合いっぽい。耳が不自由なんだって」

何かワケありみたい、と付け足したくなるのは柴崎の野次馬根性が伝染ったのかもしれないが、彼女に向けた小牧の笑顔は何か特別のように見えた。

(有川浩『図書館内乱』2006〈平成18〉)

(24)は話者(辻本くん)が目の中の「私」を見たうえで、「元気ない」と捉えている。(25)についても同様に、話者は「小牧が彼女に特別な笑顔に向けて話す様子」を目の前で見えており、「彼女」を「小牧教官の知り合いである」と捉えている。

これらの例は、話者が見た状況を「っぽい」で表すことから、昭和期より見られる属性を示す用法の延長上にあると考えられる。属性を示す用法は、AとBが同定関係にならない場合は顕著な特徴を示す用法となる。

○やくざっぽい男(男=やくざ)……属性を示す用法

○やくざっぽい口調(口調≠やくざ)……顕著な特徴を示す用法

これに対し、話者の推測を表す用法は、上接部がある状況(人の様子など)を表しているか、あるいは個人を特定するものなどであるため、必ずAとBとが一致する。

一方、話者が捉えた状況から、推論を経て上接部(推測内容)を導き出す例は、近年にのみ見られる。

(26) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DKで、もう一つの部屋は寝室っぽい。

(山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』2004〈平成16〉)

(27) どのような経緯であの美人はあんなに怒っているのかと論理的に頭を働かせて、正解であろう結論に辿り着く。

「——あの。寝てません。寝てませんから、全然」

「……最悪ですね。いったい今までどんな躰をされてきたのさ、石杖[イシヅエ]さんは」

ビンボー！ 間違いない、初日から居眠りぶっこいたっぽいです俺！

(奈須きのこ『DDD』2巻 2007〈平成19〉)

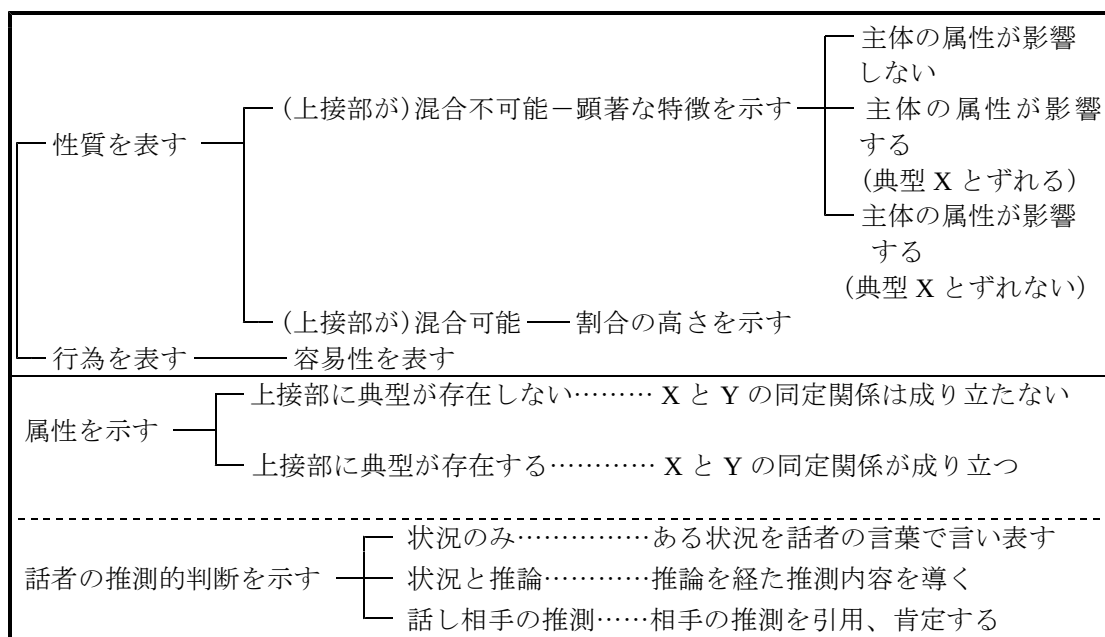
(26)は、話者は「質素な部屋において画材や描きかけの絵が置いてある」状況を見ているが、「ーぼい」で示されるのは「もう一つの部屋は寝室」という、未だ入っていない部屋が何であるかについてである。(27)は、相手が怒っていることや発言などから「初日から居眠りぶっこいた」ことを導いている。(24)や(25)が、話者が知覚したものや状況を「ーぼい」で言い表しているのに対し、これらは見ていないものに対し用いられている。

Ⅲについては、「ーぼい」がⅠのような話者の推測的判断を示す用法を獲得したことによって見られるようになったのではないと思われる。また、初めは、「テストあるっぽいよね」「ぼいよね」というように、相手の発話にも「ーぼい」が含まれており、相手の発話の引用を示すものが見られる。

- (28) 「頭も間も悪いことを自覚してるなら自重を覚えろ、いい加減！」
「そういう嫌味なこと言わなかったらせっかく正義の味方っぽいのに！」
「っぽくなくて結構だ、そんなもん！(有川浩『図書館内乱』2006〈平成 18〉)」
- (29) 「なんや!？」
「何か逃げたーっ そっちいったーっ」
「サルか!？」
「…っぽい！」 (西炯子『甥の一生』2巻 2009〈平成 21〉)

これらの例でも、(28)は「っぽい」自体が話し相手の発話からの引用であり、(29)は話者の推測内容を肯定し、省略したものであると考えられる。(28)は「(正義の味方)っぽくなくて結構だ」、(29)「(サル)っぽい！」と補える。

以上のことから、話者の推測を示す用法が成立した段階での「ーぼい」の意味用法は、次の通り分類される。



5. おわりに

意味用法の広がりを中心に「ーぽい」の展開を四期に分けて検討してきた。これによると、「ーぽい」が話者の推測を示す用法へと広がったのは昭和期の終わり頃であり、そのきっかけとして、属性を示す用法が見られるようになったことが重要であると考えられる。以下、ここまでに述べてきたことをまとめる。

まず、近世（一期）では、「ーぽい」は形容詞性接辞であり、その意味・用法は 3 通りに分かれている。これに対し、明治期・大正期（二期）には、4 つの変化が見られる。特に、正体不明のものに対して「ーぽい」が用いられる例が見られ、その例において「X に見える」ことが示される点が重要である。昭和期の初め以降（三期）では、正体が不明の人やものに対し「A は B に見える」ことを表し、且つ A と B が同定の関係にある例が見られるようになる。本論文では、これを属性を示す用法とする。この用法は、昭和期の終わり頃になると、話者から見て「(正体不明の) A = (上接部) B」であることを表すようになる。昭和期の終わり頃以降（四期）では、話者の推測を表す「ーぽい」が見られるようになる。まずは、属性を表す用法において、「(話者から見て) やくざっぽい男」のような話者の視点を踏まえて「A=B」であることを表す例が見られる。その後、話者が見ている状況を「ーぽい」で表すもの（雨が降りそうな状況：今日は雨っぽい）と、見ていないものに対しても「ーぽい」で表すもの（話者が仕事部屋にいる状況：もう一つの部屋は寝室っぽい）とに分かれる。

「ーぽい」はもともと知覚に基づく性質を表す形容詞であり、色彩についていう場合などで「～に見える」ことが表される。明治期において正体不明のものに対し「～に見える」ことが表される例が見られるが、これはあくまでそのものの色彩について述べるもので、話者の推測的判断を反映するものではない。しかし、明治期で正体不明のものに対し「ーぽい」が用いられるようになったことと、「ーぽい」の上接部に「素人っぽい」「子供っぽい」のような人やものの属性（人／ものを性質・年齢・職業などによって分類した場合の一区分）が加わったことから、昭和期の初め頃に正体不明のものに対し「A は B に見える」ことを表す意味・用法が見られるようになるのではないかと思われる。この用法では A と B とが照らし合わされており、昭和期の終わり頃になると話者による照らし合わせも行われるようになる。このとき、話者がある状況／話し相手の推測内容を踏まえて照らし合わせを行った場合は、「ーぽい」が話者の推測的判断を表すと考えられる。

第2章 「ーぽい」の上接部に関する考察

0. はじめに

近年、「ーぽい」の造語力は非常に強く、上接部の増加が著しいように思われる。この一環として、句を承ける「ーぽい」の出現が挙げられる。初出例は以下の通りである。

- (1) NHK 第一放送屋のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっぽいじゃない。猫はそうじゃない。」 (言語生活 1986.5〈昭和61〉)

このような「ーぽい」は、「ーぽい」の造語力ならびに意味・用法の変化に関わるとして、尾谷(2000)(2005)(2011)・ケキゼ(2003)・小島(2003)・小出(2005)・などで取り上げられている。用例数は多くないが(3116 例中 94 例)、近年の小説や雑誌、漫画では、しばしば見られる表現である。

- (2)a [息子の史也は]最近中二になって彼女ができたっぽいのにまだまだあどけない。
(舞城王太郎『みんな元気。』2004〈平成16〉)
- b オレの人生って、4年周期ぐらいでチャンスがくるっぽいんですよ。オリンピックみたいな。20～21歳で事務所に入って、25歳で氷室さんに楽曲を提供してもらって、30歳手前からいろんな番組出させてもらえるようになって。
(『non-no』No.863 2008.12.5〈平成20〉)
- c 千広 「仕事がみつからない？」

サクヤ「うん…//バイト…して/たんだけど/やめちゃって//それからまた/捜してるっぽい/んだけど…//上手く…/いってないん/だと思う//このところ/避けられてる…/っていうか…/食事もちちゃんと/とってくれなくて」

(高屋奈月『星は歌う』7巻 2010〈平成22〉)

こういった例が見られることも、近年の「ーぽい」の生産力の強さを示すものではないかと思われる。

また、「今どきの気になる日本語」を取り上げた『続弾！問題な日本語』(2005)では、次のような言い方が取り上げられている(下線は岩崎による)^{*14}。

しかし近年では、「白熱灯っぽい蛍光灯」「夏っぽい服装」「今っぽい発想」「普通っぽい人」「古っぽい考え方」「嫉妬っぽい男」など、かなり幅広い語に使われるようになってきた。「アダルトっぽい」「レースっぽい」「あゆっぽい (=浜崎あゆみっぽい)」のように外

*14 執筆は砂川有里子氏による。

来語や固有名詞に付く例も見られ、かなり自由に使える生産的な接尾語に変わってきているようです。しかし、まだまだ俗語や若者言葉といった印象がぬぐえないものが少なくありません。

これらは、「白熱灯のような蛍光灯」「夏らしい服装」「今風の発想」「普通に見える人」「古くさい考え方」「嫉妬深い男」のように、それぞれ別の表現で言い分けられていたものが、すべて「っぽい」一語で間に合わされているわけです。(p.112)

さて、「っぽい」の使用はさらにどんどん広がって、ご質問にあるように活用語の終止形に付いたり、文そのものに付いたりする例が見られるようになっていきます。「俺は勘違いしてるっぽい」「ついに内臓がやられたっぽいよ」「今日はガンガン行くぞ～っぽいスタートとなりました」「それ以上は飲まないほうがいいですよっぽいこと言われた」など、インターネットのサイトには斬新な「っぽい」の使われ方が数多く見られます。(p.113)

今回の調査資料では、「今日はガンガン行くぞ～っぽいスタートとなりました」のような、終助詞を承ける「ーっぽい」は見られなかった。また、インターネットで検索をかけても、あまり多くは得られないようである^{*15}。先行研究では、久保(2009)に「～ダメだよねっぽい事も言われたことがありました」という例が挙げられている(後述)。

「ーっぽい」の上接部の広がり、第1章で示した意味用法の展開と切り離せないものと考えられる。しかし、「ーっぽい」の通時的な研究は未だ少なく、(1)(2)のような「ーっぽい」がいつ頃から、どのように用いられているかといった詳細な記述を行っているものは見当たらない。本章では、「ーっぽい」の上接部の変遷を通時的に示し、第1章で示した意味・用法の変遷とどのように関わるかについて検討する。

1. 先行研究

たとえば、久保(2009)では、終助詞を承ける「ーっぽい」を考察対象に含められており、上接部を最も広く示されているのではないかとと思われる。久保氏は、「現代にみられるようになった用法」として、「それっぽい」「概言のムード」「内容節」を挙げられており、

*15 2011年10月11日2時13分の検索結果は以下の通り。検索はGoogle(<http://www.google.co.jp>)による。

【ぞっぽい】 ちょ www 放送されたぞ! っぽいやつ (<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14423372>) 1例

【よっぽい】 0例

【ねっぽい】 0例

「～ぞっぽい」の例についても、連体形であり、「ちょ www 放送されたぞ!」は台詞の引用、あるいは名詞句のような働きをしているのではないかとと思われる。

それぞれに対し以下のような例を挙げられている（以下、引用箇所の下線は久保(2009)による）。

●それっぽい

1. わぁん、ないない。鞆の中身くらい整頓しておいてよお。あ……さわった……それっぽい……あった！ 久美沙織『MOTHER』（1989）四九

「それっぽい」の意味用法は、〈上接語の典型的な特徴がどこことなく感じられる〉とされる。

●概言のムード

2. 僕がいる大学は冬休みになるとインテンシブと言う猛勉強週間があります。（略）
このインテンシブのせいで成人式に出席できないっぽいです。

2006.10.29|Diary|Comment

<http://firguel.jugem.cc/?month=200610>

3. まだどこのブログにも報告はあがってないっぽいが、このイベントに参加した人はどのくらいいたのだろうか。

shintateanifty.com/nikki/2006/04/rengou_campaign_cfDe.html-44k-

4. この日本という国名、いつから使われてるかとか、いろいろ微妙っぽいんだよね。
難しいというか。聖徳太子の「日出る処の天子、日没する処の天子に書を致す、恙なきや云々」あたりが元になってるっぽいけど。

http://www.kotokaji.jp/kotobabura/2007/09/post_33.php

[以下用例省略]

これらの「一っぽい」について、〈自分の状況や調査から判断を下しており、「ようだ」と同じ働きをしていると考えられる。〉とされている。

●内容節

12. そういえば、連れ合いには、講義を聴いている時間を勉強時間にカウントしたらダメだよっぽい事も言われたことがありました。 『司法書士7ヶ月合格法』
こういった例は、「というような」の意で用いられているとされる。

以上の通り、久保氏は指示代名詞「それ」を承ける例や、動詞のテイル形やタ形、助動詞など活用語の言い切りを承ける例に対し、それらの表す意味用法と併せて「現代にみられるようになった用法」に位置づけられている。ただし、この分類では基準が上接部と意味用法の2通りに分かれているという難点が指摘される。

2. 「一っぽい」の上接部の分類

まずは、「一っぽい」の上接部にどのようなものが見られるか、品詞を基準として分類する。初出例が見られる近世では、以下の上接部が存する。

(3) [語根] 見に行てしめつほく出る拂藏

(呉陵軒可有等編『誹風柳多留』初編 1765〈明和2〉)

[動詞連用形] ほんにお前は余程腹たちつばいよ

(山手馬鹿人「粹町甲閨」1772-1781〈安永年間〉)

[形容詞語幹] あらつばい仲人をする庄之介

(『誹風柳多留』15編 1780〈安永9〉)

[形容動詞語幹] 花琴ばからしいあわれつばい事をおいゝなんすかへ

(梅暮里谷峨「廓の癖」1799〈寛政11〉)

[名詞] 役人のほねつばいのハ猪牙に乗セ (『誹風柳多留』2編 1767〈明和4〉)

「しめ」を語根とすることについては、松井(1983)において、

「しめ」は「しめやか」・「じめじめ」などの「しめ」、「むか」は「むかつく」「むかむか」などの「むか」で、語根または語基などと言われる要素と見るべきであろうか。

のように記述されている。動詞連用形接続の「湿りつばい」^{*16}が見られること、他の語根接続の例として「むかつばい」「ごそつばい」などが見られること^{*17}から、語根接続としたほうがよいのではないかと考えられる。

続いて、現代語の例を挙げる。

(4) [語根] 外気は乾燥しているのに、どここの家の毛布も湿つばい。

(産経新聞 1998.7.7〈平成10〉)

[動詞連用形] 怒りつばい性格で記者ともめたこともある。

(毎日新聞 1998.7.26〈平成10〉)

[形容詞語幹] 安つばい仕立ての青いジャンパーに白いシャツ、

(宮部みゆき『夢にも思わない』1999〈平成11〉)

[形容動詞語幹] 芥子之助は皮肉つぼく笑った。

(泡坂妻夫『喜劇悲奇劇』1982〈昭和57〉)

[名詞] 「どうして、あの人と寝ているといつも真冬つばいのかしら。」

「あ、わかるわかる。」 (吉本ばなな『白河夜船』1988〈昭和63〉)

*16 用例は以下の通り。

○ 気のせいかいやに湿りぼく腰の落つきが悪い。 (伊藤左千夫「浜菊」1908〈明治41年〉)

*17 用例は以下の通り。

○ 「…なアんだ。また間へやがった。ばかに読めない奴だなア。訳をつけてみろよ、訳を！」「わかりませんよ」 肚でむかッぼくなりながら (細田民樹「Wee」1924〈大正13〉)

○ ぐつと理解のいくものがあつて、縫い直しのごそつばい銘仙より、お古でもしなやかな縮緬のほうがいいと思うが、素直にはなれなかつた。 (幸田文「きもの」1965-1968〈昭和40-43〉)

[句]「ん？大丈夫です大丈夫」とか僕は応えるけど全然大丈夫じゃないっぽい。

(舞城王太郎『世界は密室でできている』。2001〈平成13〉)

[上接部省略]「今日、テストあるっぽいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ぽいよね」と相づちをうつ。(産経新聞 1998.2.21〈平成10〉)

以上の例から明らかな通り、近世に比べて上接部が増加している。

句接続の「ーぽい」は、動詞テイル形・タ形・ル形や、形容詞ナイの終止形、助動詞(ナイ・タイ)、副助詞(ダケ)などを承ける(用例については後に挙げる)。

文頭とするものは、「ーぽい」が会話文の始めに位置し、上接部が省略されている例を指す。ここでは、「テストあるっぽいよね」という相手の発話を承け、「(テストある)ぽいよね」と繰り返しているのではないと思われる。

以上の上接部の用例数を、時代別に整理して示すと以下のようなになる。

【表1】

	近世	明治	大正	昭和	平成
語根	5	31	17	58	13
動詞連用形	22	19	25	41	43
形容詞語幹	26	63	51	307	309
形容動詞語幹	13	22	15	91	144
名詞	16	41	57	512	1075
句	0	0	0	3	91
文頭	0	0	0	0	6
合計	82	176	165	1012	1681

3. 「ーぽい」の上接部の史的変遷

3-1. 語根接続

語根接続は、「湿っぽい」が用例の多くを占めるが、(6)(7)に示す通り、「湿」以外の語根を承ける例も見られる。

(5)a ぬしのうちは水気とやらのある所てさんすかさぞしめっほうさんしやうネウ

(うくひす谷白眼「三千之紙屑」1801〈享和元〉)

b おつと承知／＼ア、川風でしめっぽいト (露曉「四季の花」1814〈文化11〉)

(6)a 羞明(まばゆし)といふ事を、〈略〉東奥にて、まじぽひと云

(越谷吾山「物類称呼」1775〈安永4〉)

b よく見なさろ、金だあよ、コリヤハアまじっぽくでなり申さぬ

(感和亭鬼武「旧観帖」1805-1809〈文化2-6〉)

「しめ」に関しては先に述べた通りである。「まじ」については、『日本国語大辞典 第二版』に、

まじ-くさ【副】（「ましくさ」とも。「と」を伴って用いることもある）まじめな顔をして、目ばかりぱちぱちさせているさまを表わす語。

まじ-くじ【副】（「ましくし」とも。「と」を伴って用いることもある）しきりにまばたきをしたり眼を動かしたりするさまを表わす語。きょろきょろ。まじまじ。まじくら。

まじ-まじ【副】（多く「と」を伴って用いる）① しきりにまばたきなどをして眠れないさまを表わす語。まじりまじり。② 事に動じないさま、平気であるさまを表わす語。しゃあしゃあ。ずうずうしく。③ ひるまないではっきりと言ったり見つめたり見きわめようとしたりするさまを表わす語。④ 様子を見ながらとりつく島もないさま、決断できず手をこまねいてぐずぐずしているさまを表わす語。

などが挙げられており、この「まじ」ではないかと思われる。

上接部を全て示すと、以下の通りである。

【語根接続の上接部】

おどろ, ごそ, しと, 湿, しよ, まじ, むか

「湿」以外の上接部を取る例は以下の通りである。

- (7) a 「…なアんだ。また問へやがった。ばかに読めない奴だなア。訳をつけてみろよ、訳を！」「わかりませんよ」肚でむかッぽくなりながら

（細田源吉「Wee」1924〈大正 13〉）

- b ぐつと理解のいくものがあつて、縫い直しのごそつぽい銘仙より、お古でもしなやかな縮緬のほうがいいと思うが、素直にはなれなかつた。

（幸田文「きもの」1965-1968〈昭和 40-43〉）

- c ▼ 12 月 9 日 NHK テレビ、三億円事件特集から（N=アナウンサー T=多摩農協職員）。

T「シトッポイ封筒でしたね」、

T「いや、シトッポイ」、N「は？」

T「シトッポイ……。濡れているようになって言ったら良いんでしょうか」

（言語生活 1976.2〈昭和 51〉）

d ▼昭和五六年七月十五日NHKラジオ「消費者生活案内」で主婦連の臼井ナオミさんが、「格別ショッポイということはございませんでした」と言うのを耳珍しく聞いた。塩からい味はショッパイということが多く、「塩はゆし」の転音かと辞書は説く。 (言語生活 1986.10〈昭和 61〉)

e は…/話が/おどろっぽく/なってきたな/——っ

(樹なつみ『八雲立つ』1巻 1992〈平成 4〉)

(7)a「むか」は腹立ちを表す「むかむか」、(7)b「ごそ」は衣類などの肌触りを表す「ごそごそ」、(7)c「しと」は濡れている様を表す「しとしと」などからきているのではないと思われる。このように、語根接続の「ーぽい」の上接部の多くは副詞に由来するものようである。(7)dの「しょ」は、元は「塩」であると推測され、「しょっぱい」「しょっからい」などの「しょ」と同じものであると考えられる。(7)eの「おどろ」は「おどろおどろしい」によるものと思われ、形容詞の語幹の一部であろう。

3-2. 動詞連用形接続

近世では、以下のような例が見られる。

(8)a 初手はあだな遊でわかつた客が何かうらみつぽくなつて何の事もないにいゝつて
れば (富岡の都にすむ流女某「部屋三味線」1789-1801〈寛政年間〉)

b よごれぽい裾で女郎にいやがられ 箕山

(呉陵軒可有編『俳風柳多留』41編 1808〈文化 5〉)

c そして好男ほど浮虚で飽ッぽい物さ。

(式亭三馬『浮世風呂』2編下 1810〈文化 7〉)

d 倩夫のうわさから傍で油をかけられるとあぶらをかけるとハうれしがらせる事也うかれッぽいのハ乗地になつて
(暇名垣魯文「萬國航海西洋道中膝栗毛」9編上 1870-1876〈明治 3-9〉)

「恨み」「飽き」「浮かれ」など、人の感情に関連する動詞が殆どである。「汚れ」のような自然とそうなるものも少数ながら存する。

「ーぽい」が承ける動詞連用形の上接部を、動詞の意味に基づいて分類すると、以下の通りである。

【動詞連用形接続の上接部】

① 飽き、浮かれ、疑り、恨み、怒り、感じ、ひがみ、惚れ、腹立ち、忘れ

② 遅れ、むせ

③ 湿り、濡れ、汚れ

①は人の感情に関連するもので、(8)にも挙げた通り、動詞連用形接続の「ーぽい」の殆どを占める。

- (9) a ^{にいさん} 兄様は^{ほんたう} 本當に^{くちやかま} 口 喧しくつて、^{おこり} 憤 つぼくて、^{そつちゆうわたし} 始 終 私 を^{しか} 叱つてばかりみるけれど、
それでも^を 叔母様の^{とこ} 所に^あ 居るよりは、^{よつぽどきぐらう} 餘程氣苦勞が^な 無いわ。

(小栗風葉「一腹一生 (承前)」1901 〈明治 34〉)

- b 「厭きつばいのじゃない薬が利かんのだ」

(夏目漱石「吾輩は猫である」1905-1906 〈明治 38-39〉)

- c ^{ねえ} 「姐さんは^を 小田原^だ だツたね。」と^{ねん} 念を^お 押すやうにいふと、
「まア^{いや} 嫌だ、^{なんど} 何度^き お聞きなさるの……ほんとに^{わす} 忘れツばい^{かた} 方ね。」

(柴田流星「実印と預金帳」1909 〈明治 42〉)

一方、用例数が少なく、現代語では用いられないものも存する。たとえば、以下のよう
な例である。

- (10) a お前はよつぽど疑ぐりツばい女だ。 (岩野泡鳴「断橋」1911 〈明治 44^{*18}〉)

- b 病人を相手にして、るつ子のほうが先に感じつぼくなっていたんじや、話にな
らない。 (幸田文「きもの」1965-1968 〈昭和 40-43〉)

「疑りつばい」は 3 例、「感じつばい」は 1 例である。これらについても (8) (9) と同様
で、「すぐに X する」ことを表すと思われる。

⑥は人の生理現象に関連する。

- (11) a どうも烟せぼくて実に弱った。

これが人間の飲む烟草というものである事は漸くこの頃知った。

(夏目漱石「吾輩は猫である」1905-1906 〈明治 38-39〉)

- b 羽蟲が飛んでゐるやうに曇り、爛漫と咲いた櫻がむせつばい匂ひを放散させて
ゐる。

(今東光「青い夜の飛躍—或は招魂祭に於ける小さな歴史—」1925 〈大正 14〉)

- c ▼「つばい」の流行は隠然たるものがある。わが採集帳には目下九十九類、教
養地位かねそなえたれっきとした人のものも多い。その最近のもの。

(ハイハイが) 少し遅れつばい場合は、小児科の先生に見て頂きましょう。

NHK ラジオ第一放送、6 月 8 日、「相談コーナー・育児」で、担当医師のこと
ば。 (言語生活 1983.8 〈昭和 58〉)

これらの例では、「X のような状態である／特徴がある」ことが表されており、「遅れつ
ばい」に関しても、赤ん坊の成長に関連することなので、生理現象の一つと考えてよいの
ではないかと思われる。これも、制御できない動詞であるという点では他の上接動詞と共
通している。

©は自然現象に相当し、(人の感情や生理現象として) 制御できずにそうなるというよ

*18 明治 44 年連載、大正 8 年単行本。

りは、「自然と X の状態になる」ことを表すと考えられる。ただし、「濡れっぽい」に関しては「濡れ」が名詞的に用いられている可能性が高い。

(12) a 気のせいかいやに湿りぼく腰の落つきが悪い。

(伊藤左千夫「浜菊」1908〈明治 41〉)

b 私も彼女も終戦までは、美しい仏租界の中に住んでゐたため、よごれっぽい虹口の街が嫌ひなのであった。(武田泰淳「腹のすゑ」1947〈昭和 22〉)

(13) ▼三月五日、NHK「あなたのメロディ」で〇〇氏のコメント、「この曲は青春にあふれています」若さはあふれても、青春はあふれないから日本語はややこしいですネ。彼は以前にも「濡れっぽい曲」という表現をしたことがある。

(言語生活 1972.5〈昭和 47〉)

(13)の「濡れ」は、「濡れ場」などの「濡れ」と推測され、名詞あるいは語根とみてもよいようなものであると思われる。従って、意味としては「濡れる」ことではなく「男女の情事」を表すと考えられる。

3-3. 形容詞語幹接続

形容詞語幹接続の「ーぽい」は、近世から現代まで見られる上接部と、時代が下るにつれて増加する上接部とに大きく分かれる。近世から現代まで見られるのは、「安っぽい」「荒っぽい」である。時代が下るにつれて増加するのは、主に色彩を表す語を承ける「ーぽい」であるが、他に「苦っぽい」のような感覚を表す形容詞語幹を承ける例などが存する。まず、形容詞語幹接続の語例を以下の通り分類する。

【形容詞語幹接続の上接部】

㉑	荒, 安
㉒	青, 赤, 黄色, 黒, 白, 茶色
㉓	おし
㉔	甘, いがら, えがら, 寒, 苦, ねむ
㉕	浅, あぶな, 卑し, 遅, 軽, 暗

㉑は一語の形容詞とみてよいものであると思われる。㉒は色彩を表す形容詞の語幹を承ける「ーぽい」である。㉓は人間の感情、㉔は人間の感覚を表す形容詞の語幹を承ける「ーぽい」である。㉕は属性を表す形容詞で、対となる形容詞（あるいは形容動詞）が存する（浅⇔深 危険⇔安全 卑⇔尊 遅⇔早 軽⇔重 暗⇔明）。

分類した形容詞語幹のうち、「ーぽい」の上接部として定着していると考えられるのは㉑㉒である。㉔㉕については各語の用例数が少ない（後述）。

まず、④の用例を挙げる。

(14) a 母あれさ。またあらつぽい事のみにやる。

(滅放海「^{後篇}契情実之巻」1804〈文化元〉)

b 卒「ヘンその面／＼と安つぽくいふけれど、是でも合引をかけて、拵て見せてへほんにヨ。よつぽどこせへばえのする顔だぜ」

(滝亭鯉丈『八笑人』3編下 1823〈文政6〉)

c 通「ヲツト當時の戯作者輩の顰に倣ふ安つぽい著述に有ず

(暇名垣魯文「^{萬國航海}西洋道中膝栗毛」6編下 1870-1876〈明治3-9〉)

「荒つぽい」「安つぽい」は、近世から現代にかけて見られる形容詞である。

続いて⑤の例を挙げる。近世から明治前期にかけて見られる「しろつぽい」「くろつぽい」には、現代語のものとは異なるものが存する。

(15) a ヘン、隈取といひなせへ。隈ゑどりだけ古風で素つぽひ

(式亭三馬『浮世風呂』4編下 1813〈文化10〉)

b 一トロたべて見るとおいしくなツて外のおさかななんぞより牛が好きになツたのだから私の牛を食べるのハしらうとじやアないくろツぽいのでスヨ

(暇名垣魯文「^{牛店雑談}安愚楽鍋」3編下 1871-1872〈明治4-5〉)

「しろつぽい」は「いかにも素人のような」、「くろつぽい」は「玄人らしい」という意味で用いられている。これらは、明治期の初め頃までしか見られない。一方、色彩を表す「白つぽい」「黒つぽい」は近世後期から現代まで見られる。

(16) a ソレ酒を呑めば目の淵がほんのりと櫻色になるはサ、所を呑めねへから顔が白ツぽいと言つたが惡いか」 (為永春水『和合人』4編上 1845〈弘化2〉)

b さてハ車やかといはんすれども。腕のたくましきに不似あひなる。色の白きのが一ツの不審。たゞし雪の如く白きにあらねど。他の車夫にくらぶるときにハ。幾らか白ツぽき肌の色なり。

(坪内逍遙「^{二讀三歎}当世書生氣質」1885-1886〈明治18-19〉)

また、色彩を表す形容詞語幹を承ける「一ぽい」は時代が下るとやや増加する。近世から明治期の半ばにかけては「黒つぽい」「白つぽい」のみ見られる。それ以降になると、次のような例も見られるようになる。

(17) a ^ぬ居 ^{さうらふ}候 ^{ふうつうおり}に風通織の御小袖黒の御羽織着せて主人たる身が赤つぽい ^お ^{そでくろ} ^お ^{はおりき} ^{しゆじん} ^み ^{あか} ^{ふたこ} ^{はおり} ^を ^な ^ぎ ^が ^は ^で ^き ^{ぬの} ^こ ^き 双子の羽織
小名木川出来の布子着て、 (幸田露伴「新学士」1895〈明治28〉)

b 一人のは赤黒く一人のは著しく黄色つぽい調子が目に付いた。

(寺田寅彦「写生紀行」1921〈大正11〉)

c 例の老人が茶色つぽい木綿の袷を着て (北条民雄「望郷歌」1937〈昭和12〉)

(18) これが緑雨なればこそ、あの時代の、青ツぽいセンチメンタリズムの恋愛至上主義に対して、胸のすくような痛快味にもなるんだが、今更どうもそんな考え方

は、ちっと時代錯誤じゃアないですか」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(17)は色彩を表す形容詞語幹につき、且つ「一ぱい」で色彩を表す例である。また、(18)に挙げた通り、「青っぱい」は「未熟である」といった意味を表す場合もある。

続いて、㉔㉕の人間の感情・感覚を表す形容詞の語幹を承ける例を挙げる。

(19) ちっとをしツぽい種^{しゆ}だけれど、仕^{しかた}方がない語^{かた}ツてきかせん。うつけたまはれツ。
ドハ^{あい}ン。ヲヒュヒュウツ(繼)相^{あい}か^{あい}はらず元^{ぼく}氣^きだ^{だん}なア僕^{ぼく}の奇^き談^{だん}たアなんだ。

(坪内逍遙「^三談^三當世書生氣質」1885-1886〈明治 18-19〉)

(20)a その折お前は何となく睡っぽくなるだらうから

(薄田泣菫「茶話」1916-1918〈大正 5-7〉)

b 庄九郎は苦っぽく笑った。(司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉)

(19)のような感情を表す形容詞には「一ぱい」はつきにくいようで、用例はこの1例のみである。感覚を表す形容詞は、感情を表す形容詞よりは多く見られる。

続いて、㉔属性を表す形容詞の語幹を承ける例を挙げる。

(21)a 人間は実に浅っぽいもので、極皮相で人を判断してしまふ

(徳富蘆花「思出の記」1900-1901〈明治 33-34〉)

b それにしてもあの清見貴山などが何といふ好い加減な軽っぽい説教を千鶴子に向っていつて聞かせるのであらう (広津和郎「若き日」1943〈昭和 18〉)
「大きっぱい」や「小さっぱい」などは、今回の調査では得られなかった。

(21)から明らかな通り、属性を表す形容詞の語幹を承ける「一ぱい」は、上接する形容詞の属性を特徴として有することを表すのではないと考えられる。(21)aの「浅っぱい」は「浅はかな」、(21)bの「軽っぱい」は「軽薄な／中身の無い」といった意味で解される。「浅はか」や「軽薄」は、「浅い」「軽い」のような程度性のある形容詞に対し、人の評価を伴う語であると考えられる。このことから、属性を表す形容詞の語幹につく場合でも、「一ぱい」が表すのは話者の評価、特に良し悪しを述べており、評価を表しにくい「大きい」や「小さい」にはつきにくいのではないかと考えられる。

以下も属性を表す形容詞の語幹を承ける例だが、(21)とは異なり、上接部は客観的な属性を表すものと考えられる。

(22) 北海道言葉の卑しっぽい訛が聞き辛い。(深田久弥「あすなろう」1932〈昭和 7〉)

(23) ▼通勤電車の中。もう中年と呼ぶべきサラリーマン二人の会話で、「今朝はおそっぽいから遅刻だな」。「——ぽい」は最近流行語を造るに恰好の接尾辞だが、おそいですむことばでさえ変化させるこの力。(言語生活 1982.8〈昭和 57〉)

(24) [コンクールの直前に]「なんとなく/あぶなっぽいなあ/ビーハイヴ[バンド名]も」
「えっ//ど どーして」

「ほら/新しい/ベースのやつよ/高橋ってんだけど//わりとうまい/らしいんだけど/

大っきいステージ/今回はじめて/らしくって/も一大変」

(多田かおる『愛してナイト』7巻 1984〈昭和59〉)

このうち、(22)の「卑しっぽい」は、「卑しい」が元々「下品な」など話者の評価を必要とする形容詞であると思われる。一方、(23)(24)は属性そのものと解釈してよく、(23)は速度、(24)は困難さの度合いを表していると考えられる。すべて1例ずつであり、生産性の低いグループである。また、(23)(24)は話者が現状を観察したうえで「遅い感じ」「危ない感じ」と判断していると考えられるが、「遅そう」「危なそう」としたほうが自然なように思われる。

3-4. 形容動詞語幹接続

形容動詞語幹接続の例は、時代が下ると上接部が増加する。

【形容動詞語幹接続の上接部】

㉑	哀れ, みじめ, 残念, 不機嫌, 不満, ショック
㉒	婀娜, 浮気, 気障, 俗, アホ, 厭味, オシャレ, きゃしゃ, 軽薄, 単純, 知的, 上品, スケベ, バカ, 派手, 皮肉, まじめ, まとも, やんちゃ, 陽気, イタズラ好き, 手持ちぶさた, 投げやり
㉓	好き, ショック
㉔	悪戯, 大切, 駄目, 茶目, 特別, 無理
㉕	アナクロ, アンティーク, カオス, カジュアル, ストレート, トренд, モード, ポジティブ, ミーハー
㉖	駄目

㉑は人の感情を表す形容動詞の語幹、㉒は人の性質や様子を表す形容動詞の語幹である。太字は近世から大正期に初出例が得られるものであり、全て現代まで用いられている。太字でないものは昭和期以降に用例が得られる。時代が下ると、外来語や複合語を承ける例も見られるようになる。

一方、㉓から㉖は昭和期以降に初出例が得られるものである。㉓は感情だが、好きになる相手が存在する点で、話者の感情を表すだけの㉑とは区別される。㉔についても、㉑や㉒とは異なり、話者が何らかの主題について上接部 X であると評価(判断)する必要のある形容動詞である(～は大切である／～は特別である／～することは無理であるなど)。㉕は㉔と似ているが、「カジュアル⇔トレンド」のように、幾つかあるジャンルのうちの1つを表すため、区別した。㉖は話者の推測を表す「一ぱい」である。

㉑㉒のなかでも外来語や複合語を承ける例が見られるようになることや、近年に至って

も造語力があることや、㉔から㉕のような広がりを見せることから、形容動詞語幹接続の「ーぽい」は造語力が高いと考えられる。

まず、近世から大正期に初出例が得られる語の例を挙げる。

(25) おれの顔さへ見ると、あわれっぽい事ばかりいふから

(曲山人補綴「仮名文章娘節用」1831-1834〈天保2-5〉)

(26)a 矢場「ムウ餘程婀娜ッぽい後ッつきだ」

(為永春水『和合人』4編下 1845〈弘化2〉)

b 為清から口が掛かつたから往つて見ると猿坂さんで、例の氣障ッぽいので弱つてゐる所へ

(朧月亭有人「春色恋廻染分解」初中 1860〈万延元〉)

(27)a 浮ッぽくて不可エなア (三遊亭圓朝「松枝宿の子」1890〈明治23〉)

b 高さ五丈三尺五寸、何と云つても、大きなものであるけれども、其面部は元祿時代の彫刻であつて、極めて俗ぽい佛様で唯善男善女の淨財を待つてをられるやうな顔付である。

(鈴木禎二「旧都の春を訪ねて」1917〈大正6〉)

形容動詞は、「哀れ」のような人の感情を表すものか、あるいは「氣障」「俗」など人の性質・様子を表すものに限られる。「穏やか」「静か」「賑やか」のような、二義的には人の性質・様子についてもいえるが、ものや空間の属性を示すようなものにつく例は得られなかった。

続いて、昭和期以降に新たに見られる形容動詞語幹接続の「ーぽい」の例を挙げる。

(28)a 母はいつも姉を愛するおかげで、みじめっぽくなっているのが嫌だつた。

(幸田文「きもの」1965-1968〈昭和40-43〉)

b 膨らんだ唇を小生意気に結んで、不機嫌ぽい顔で讓次をみてゐたのが

(森茉莉「或殺人」1962〈昭和37〉)

(29)a 真子は皮肉っぽく言い、人形に打込んでゐる夏は炎暑にも気付かなかつたほどなのにと思つた。

(芝木好子「面影」1969〈昭和44〉)

b ちょっといい男/だった/けど//軽薄っぽいや

(多田かおる『愛してナイト』1巻 1982〈昭和57〉)

(30)a いつかこれくらいの/高さから彼女を見て/いつか それなりに/彼女をわかる時がきて//そりゃ今は/友達っポくて/好きっポくて/大切っポくて/でもやっぱり友達じゃなくて/彼女でもなくて/仲間っポくもない

(やまざき貴子『っポイ!』1巻 1992〈平成4〉)

b 何だ……?/何か これ かなり ちょっとと…//ちょっと スゴく//ショックっぽい——

(やまざき貴子『っポイ!』1巻 1992〈平成4〉)

以上は上接部が感情を表す例である。(28)(29)は人の様子・言動に対し用いられており、近世から大正までに見られたものと同様である。一方、(30)は人に対する自分の感情を示している。「好きっぽい」「ショックっぽい」の2語しかなく、特に「ショックっぽい」は

(30)b の 1 例のみである。「ーぽい」の用法のなかでは、定着していないもののように思われる。

これに対し、感情を表さない上接部を承ける場合は、人の様子やあるものの位置づけが示される。

(31)a 君は私を見ていたづらっぽく微笑んだ。

(田村泰次郎「肉体の悪魔」1946〈昭和 21〉)

b ん〜 これじゃあ/今度は親父が/ヤクザっていじめられ/そーだな//もっとダメっぽい/親父に… (空知英秋『銀魂』5 巻 2004〈平成 16〉)

(32)a ハットの鎌田はおしゃれでいつもストライプの三ツ揃のスーツを身に着け、ちよっとアナクロっぽいかんじの中折れ帽をかぶっていた。

(椎名誠「新橋烏森口青春篇」1985-1987〈昭和 60-62〉)

b 宇野さんがこれを選ぶって意外！ いつも「男ウケ」をあまり意識してないトレンドっぽいファッションが多いよね。

(『steady』No.24 2008.11.7〈平成 20〉)

(31)については、上接部が感情と関わらないが、意味・用法は(28)(29)に同様である。一方、(32)は、人の様子や言動ではなく、被修飾語がどういった位置づけ(ジャンル)にあたるかが示されているのではないと思われる。たとえば、(32)bの「トレンドっぽい」は、女性の服装の一ジャンルとして、「トレンドの要素を持つもの」を示す。完全にトレンドではないが、分類するならばトレンドに近い服装となる。他に、「カジュアル」や「ヒッピー」「モード」など、服装のジャンルを示す語は様々あり、そのなかで最もトレンドに近いのが「トレンドっぽい服装」となる。そのため、「カジュアルっぽいパーカー」や「ヒッピーっぽいテイスト」といった例も見られる。

2000年代になると、話者の推測的判断を表す例も見られるようになる。

(33) 二日後、昼休みに鮎子は、雪子の隣に腰を下ろし、自分で作ってきた弁当を食べることにした。それから、「どうやら駄目っぽいです」と打ち明けた。

「駄目っぽい？」雪子が鋭い視線を放ってくる。

「この間の、チケットの話なんですけど、行けそうもないです。その日、ちょうどイベントが入っちゃったんですよ」

(伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006〈平成 18〉)

ここでの「駄目」は「劇を観に行くことができない」ことを表していると考えられる。鮎子は、劇のチケットを手に入れるのだが、その日は会社のイベントが入ってしまい、劇を観に行くことができなくなりそうな状況である。鮎子はこの状況を承けて、「どうやら駄目っぽいです」と雪子に打ち明けている。「ーぽい」は、完全にそうとは言いきれない不確定な状況下で、話者が「駄目」とであると推測的に判断していることを表すと考えられる。また、この「駄目っぽい」は「どうやら」と共起しており、話者の判断が確信を得て

のものでないことが示されている。

3-5. 名詞接続

最も上接部ならびに意味・用法に変化の見られる上接部である。上接部の増加に伴い、近世から明治期半ばまで、明治期半ばから昭和期の初め頃まで、昭和期の初めから終わり頃まで、昭和期の終わり頃以降に分けて示す。

近世では、具体的な物質（自然物）や人の行為に関わる理屈・愚痴などを承ける。

(34) a 弥次「ヲツト／＼、なるほどいゝ酒だ。水ツぽくてねからのめぬ。もふいっばいつゞけよふ
(十返舎一九『東海道中膝栗毛』7編上 1808〈文化5〉)

b その時実沢山でヤンヤといはれるは恐ながら旦那ばかりス。酒肥でお腹に酒が絶えねへから酒塩いらす。おかこさんなどは骨^{ほね}多くて吐出される。

(式亭三馬『四十八癖』4編 1818〈文政元〉)

c 女房「ハイ／＼、そしたら皆様およろりと」トかへり行く。茶見「わからなく理窟ツぽい嬢アだぞ」(滝亭鯉丈『和合人』2編下 1823-1829〈文政6-12〉か)

d おや／＼ぬしはぐちツぽい人ざいますよなにあの人とわけかあるものか

(馬鹿清「青楼奇談 初夢草紙」1828〈文政11〉)

意味としては、「水」「骨」など具体的な物質（自然物）が上接名詞の場合はその含有量が多いことが表され、「愚痴」「理窟」では人物の性格や言動の特徴が表される。

【名詞接続の上接部①】

② 骨，水
① 愚痴，理窟

明治期半ばにおいて、「一ぽい」が承ける名詞の範囲は広くなり、人物の属性（集合）を表すものが見られるようになる（(35)a 初出）。

(35) a あ「私ア素人っぽい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」(三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」1885〈明治18〉)

b その下からさすがに子供っぽい小さな足を食み出してゐる。

(田村俊子「あきらめ」1911〈明治44〉)

このような例は、これまでの上接名詞が「具体的な物の性質」を表すのに対し、「(人物の年齢・性質・職業などに基づく) 属性」が対象の性質を表している。この点で、「水っぽい」「骨っぽい」といった上接名詞とは区別されると考えられる。

また、明治の終わり頃以降、色彩を表す名詞を承ける「一ぽい」が見られるようになる。

(36) a 茶っぽい脊広の衣から手巾を取り出して

(幸田露伴「付焼刃」1905〈明治38〉)

- b 母は大きな紺^{はい}つ^{おほ}ぽい^{こん}風呂敷^ふ敷^ろ敷^{しき}の中に内^{なか}職^{ないしよく}の竹串^{たけぐし}をいつ^つぱい^そ包^{しよ}んで其^まれ^ちを負^おつて町へ行^ゆかうとした。(小川未明「悪人」1917〈大正6〉)

形容詞語幹接続でも色彩を表す「一ぱい」でも上接部の増加が見られることから、名詞で色彩を表すものも承けるようになったのではないと思われる。

また、近世より存する㉔㉕でも、新しい上接名詞が見られるようになる。以下、新しく見られるようになる上接名詞のみを示す。明治期以降に見られるようになった名詞は、㉔㉕に分類して示す。

【名詞接続の上接部②】

㉔ 煙，粉，塩，砂，熱

㉕ 意地，色，艶，涙，埃

㉔ 子供，素人

㉕ 褐，紺，茶，鼠，紫

昭和期の初め頃以降、「N の N」という形の上接名詞が見られるようになる。このような、上接名詞が更に別の名詞や修飾語句を伴い、一つの名詞と取れるものを㉔グループの語例とする。

- (37) a 田舎に着いた日、その地方は五月の嵐^{あらし}つ^はぽい^あ天候であつた。俵に乗って市から村へ通じる寂しい一本道にかかると、荒い幅広い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。(宮本百合子「伸子」1928〈昭和3〉)

- b 熱くなると、居たまらなくなった虱^{いば}が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚^{あぶら}の脂肪^{あぶら}つ^はぽい^あコロツとした身体^{あぶら}の感触がゾツときた。(小林多喜二「蟹工船」1929〈昭和4〉)

この時期に新たに見られるようになった上接名詞とその分類は以下の通りである。

【名詞接続の語例③】

㉔ 垢，汗，脂，皺，塵埃，露，毒，煤煙

㉕ 人情

㉔ げす，書生

㉕ 灰

㉔ 五月の嵐，皮膚^{あぶら}の脂肪^{あぶら}

昭和期の終わり頃以降、名詞接続の「一ぱい」は急速に増加する。また、新たに固有名詞や指示詞などを承けるようになる。

まず、外来語を承ける例を挙げる。

- (38)a 「あれよ、グレイっぽい着物とか洋服を着ていると、お手伝いもしますっていう意味なのよね。私も持っていないから困っちゃう」

(山口瞳「居酒屋兆治」1979〈昭和54〉)

- b 一方、50年代には生まれてもいなかった主婦(24)も「セピアっぽい感じが何ともいえない」といい、週に3日も通う。(朝日新聞 1987.6.13〈昭和62〉)

上の例は、㊤色彩を表す名詞に含まれる。

また、次のような修飾語句を伴う名詞や、複合語も見られるようになる。

- (39)a ……/シェラ…?//なんだか/きれいな女性^{ひと}っぽい

(多田かおる『愛してナイト』3巻 1982〈昭和57〉)

- b 若いギャルたちとの楽しい語らいのために、時代おくれっぽくなりたくない愛すべき努力か。(言語生活 1982.8〈昭和57〉)

- c ▽箱根の温泉で耳にした、小学校上級生ぐらいの男の子の会話から。温泉から上り、ズボンをはいて、その上に子供用の浴衣をはおり、
「あの子たち(女友達を指しているらしかった)、見たがりっぽいから、やばいぞ。」(言語生活 1987.5〈昭和62〉)

(39)aは二重傍線部「きれいな女性」で一つの上接名詞であると考えられる。(39)bcについても同様である。

続いて、固有名詞や人称代名詞を承ける例を挙げる。

- (40)a ▼通勤の朝、国電の車内に女子大生風のふたり連れ、

A「そろそろ品川じゃない」

B「ほんと品川ッポイわよ」(言語生活 1977.5〈昭和52〉)

- b おおっ!!/さらに/京都っぽく/着物美人!!

(樹なつみ『八雲立つ』2巻 1995〈平成7〉)

- (41)a 先日、東京渋谷駅近くの公衆電話で。しゃべっていたのは学生風の男性。「ダサイなあ。でも、そこがいかにもお前ッポイよ。」旧世代としては、「お前らしいよ」と言わないと、どうも落ち着かないんですが。(言語生活 1980.1〈昭和55〉)

- b 私が演じるあゆは、自然体で飾らない女の子。元気で明るくて負けず嫌いで、自分っぽいかなって思うんですよ。言葉遣いが汚いところも、私が普段しゃべってる言葉に近いかなって思いますね(笑)

(『spring』No.217 2007.10.23〈平成19〉)

(41)aにもある通り、固有名詞や人称代名詞を承ける例では、「っぽい」を「らしい」と言い換えることが可能なものが存する。(40)aは、用例からは(話者が)品川にいる状況か否かが分からないため、「いかにも品川っぽい」のか「どうやら品川っぽい」のか判然としないが、(40)bは、話者が京都で着物美人を見て発話している例であり、「着物

美人というのがいかにも京都らしい、ということが示されていると考えられる。また、「さらに」という副詞からも、着物美人というのが京都の特徴の一つであると話者が捉えていることが明らかである。以上は、「ーぽい」が話し言葉において「ーらしい」に近接したことを示唆する例であると考えられる。

次に、指示詞を承ける例を挙げる。

(42)a 「そーかあ/おれいちども/英次から/それっぽいこと/聞いたこと/ねーぞ」

(多田かおる『愛してナイト』4巻 1983〈昭和58〉)

b 男性の目でこうあってほしいという女性像を「お嬢様」に仕立てている面もありますね。つきあうのはホンモノじゃ息苦しいけど、それっぽい「お嬢さん」ならいいなあって。
(朝日新聞 1986.2.5〈昭和61〉)

c 「きもち/悪ーい」

「ベタベタ/しちゃってさ/————っ」

「なにイッ/今のどーゆー/意味ッ」

「だってねエ/まー/わかるけどオ」

「陸深さんって/アッチッぽい/し————」

(樹なつみ『花咲ける青少年』1巻 1990〈平成2〉)

「それっぽい」に関しては、前文脈の内容を承け、その内容を断定せずを示していると考えられる。一方、「それ」以外の指示詞を承ける例は、(42)cの1例のみである。「それ」以外の指示詞を承けることは少ないと考えられる。

今期は、(38)から(42)までに挙げたような、新しく見られるようになった名詞以外にも、様々な名詞を承けるようになる。

(43)a ▼六月末のある日の午後、とあるデパートの水着売り場で三、四名のOLが買物をしている。ワイワイと相談しているが、なかなか品が定まらない。と、その中の一人が言った。

「これいいんじゃない。夏っぽくて。」

耳なれないが、それが新鮮で、思わずふりむいてしまった。「ぽい」をつけた新語としては季節にあっている。(埼玉県浦和市 遠藤孝子さん)

(言語生活 1975.9〈昭和50〉)

b それはそうと、私も最近、どことなく、ノイローゼっぽい行為をしていることに気づく。
(坂上弘「遠足の秋」1978〈昭和53〉)

c あなたの/ファンって/カミソリっぽいの/持ってそーな子が/多そうじゃない

(多田かおる『愛してナイト』3巻 1982〈昭和57〉)

d 急にドアが開いて、ゆみこが入ってきたんだよ。あんまり普通に入ってきたもので、死んでたことを忘れて、ゆみこ？ って言ったら、しーって言って、人さし指をたてて、笑った。……やっぱり、夢っぽいな。

(吉本ばなな「ムーンライト・シャドウ」1986〈昭和61〉)

形容動詞語幹接続における新しい例と同様、何らかの位置づけ（一つのジャンル）を表している名詞であるという特徴が挙げられる（夏：季節の一つ、ノイローゼ：病名の一つ）。また、濱田(2010)にも指摘されていた通り、「夢⇔現実」など対義語を持つものも存する。しかし、(43)c のような、分類の困難な名詞も承ける。今期では、「ーぽい」は名詞であれば制限なく承けることが可能であると思われる。

【名詞接続の上接部④】

㉔	オカマ, 少女, 大人, 不良, やくざ, 女, 男, 娘, 玄人, 年寄り, 男性, 娘, 女子高校生, 少年, ガキ, 青年, お嬢様, 優等生, カップル, ヤング…
㉕	グレー, セビア
㉖	きれいそうな ^{ひと} 女性, 見たがり, 時代遅れ, 特別扱い, 怒鳴り声, 死後の世界…
㉗	秘密, 内証, 冗談, 遠慮, 瞑想／田舎, 下町／春, 夏, 秋, 今, 現代, 夏休み／嘘, 本当, 真実／純文学, 漫画, 教科書／子犬, 虫／ノイローゼ, プレゼント…
㉘	品川, 京都, 九州, 日本, ローマ, 蒼井優, 佐和子, ベッキー, シンデレラ…
㉙	お前, 私, 自分
㉚	それ, アッチ

3-6. 句接続

句接続の例は、句がどういった形を取るかによって分類する。活用語の言い切りを承ける場合と、形容動詞語幹・名詞（形式名詞）・副助詞が句を包摂する場合とに分かれる。

初出順に示すと、1900 年代後半から用例が見られるのが、動詞のテイル形を承ける例、形容動詞語幹が句を包摂する例、形容詞の言い切りを承ける例である。その後、2000 年代になると、動詞のル形・タ形、テイタ形や、助動詞を承ける例が見られる。また、名詞（形式名詞）・副助詞が句を包摂する例が見られるようになる。

なお、初出例は次のような「N の動詞連用形」の形であり、以下の 1 例のみである。

- (44) ○「熱っぽい、水っぽい」は耳なれているが、次のような例に出合って、ハッとした。F 女史「自信のありっぽい子どもたちですから……」（NHK 教育 TV 一月二十九日夜）（言語生活 1969.2〈昭和 44〉）

これは、名詞接続に「N の N」という形の例や、同じく名詞接続で「見たがりっぽい」など動詞連用形で名詞として扱われる上接部が既に見られることから、派生したものと思われる。子供たちの「自信のありそうな」様子を表しているのではないと思われる。

動詞テイル形を承ける例を挙げる。

- (45)a NHK 第一放送昼のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いている

っばいじゃない。猫はそうじゃない。」 (言語生活 1986.5〈昭和 61〉)

b なんかつ私の恋心、バレてるっぼくない？

(舞城王太郎『阿修羅ガール』2003〈平成 15〉)

c [省略]両足を前に投げだすような感じで座席に深くもたれかかって背もたれに後頭部を乗つけて目を閉じて、それきり動かなくなってしまった。……本当に疲れてるっばい。(壁井ユカコ『キーリ』VI 2004〈平成 16〉)

20 例見られる。(45)a の「犬は人の言うことを聞いている」のような、恒常的な性質・性格を表す例や、(45)b のような話者の推測内容を表す例、(45)c のような一時的な状態を表す例など様々である。

形容動詞語幹を承ける例を挙げる。上接部は二重傍線部であると考えられる。

(46)a 「カールは/来ないのかなァ」

「来ないですよ/普通//でも/あの姫の/事だから/おもしろがって/呼んだりして」

「どうかな/ナジェイラ殿下は/あのカールだけは/苦手っばい/らしいぜ」

(樹なつみ『花咲ける青少年』6 巻 1992〈平成 4〉)

b 「それに、これまで休んだ分を今学年で取り戻すのは無理っばいしさ、息がゼイゼイしてるうちに投げやりな気分になっちゃって」

(野沢尚『反乱のボヤージュ』2001〈平成 13〉)

6 例見られる。形容動詞語幹は「苦手」「好き」といった話者の感情を表すものと、「無理」「明らか」「駄目」など、ある事柄に対する話者の判断を表すものとに分かれる。

形容詞の終止形を承ける例を挙げる。

(47)a 何でか気になるんだ/見てると/イライラすんのに//きっとオレは/あいつが嫌いなんだ/だから “気に障る” /ってヤツなんだ//——けどそうじゃ/ないっポイ気もする (やまざき貴子『っポイ！』1 巻 1992〈平成 4〉)

b 「ねえ、ちょっと」といかにも心配げに声をかけてくるのは眩しい光に包まれたさっきの女の人で、ひっくり返った僕の顔を覗き込んでいる。「ん？大丈夫です大丈夫」とか僕は応えるけど全然大丈夫じゃないっばい。

(舞城王太郎『世界は密室でできている。』2001〈平成 13〉)

c それでもやっぱりエチオピアの難民、月の裏のウサギ、別の時空の宇宙人たちを助けてあげて欲しいっばい。(舞城王太郎『阿修羅ガール』2003〈平成 15〉)

10 例見られるが、うち 9 例は(42)ab と同じく否定を表す「ない」の終止形を承ける。(42)c の 1 例のみ「別の時空の宇宙人たちを助けてあげて欲しい」という句を承ける。

動詞のタ形を承ける例を挙げる。

(48)a 「焦る？//それとも/ホッとした？」

「————// (っかんね。) //ホッとしたっポイ/気もするケド/焦りっポイ気もする」 (やまざき貴子『っポイ！』2 巻 1993〈平成 5〉)

- b 有名な書家が頭を殴られて死にかけたっぽいんだからもちろん事件になるのに、これではちゃんとした書類を作成することが出来ない。

(舞城王太郎『山ん中の獅見朋成雄』2003〈平成15〉)

- c 曲の全体像が浮かび上がった。高校生が作ったものとしては、十分すぎるほど完成度が高い。やっぱり、普段聴いているプロの演奏にはどうしたって及ばないものの、こんなものを作れるなんて、辻本くんは凄い。……まあ、あのバンドとあのバンドを足したっぽい、とか、感じないこともないけれども。

(豊島ミホ『檸檬のころ』2005〈平成17〉)

22 例見られる ((48)b のような補助動詞を承ける場合もここに含める)。(48)b のような、過去に起きた事柄(出来事)を表すものも存するが、一方で、(48)ac のような「気持ち」「曲の感じ」に対する話者の認識を表したものも存する。出来事を表す例は22例中9例であり、話者の認識を表す例は13例である。

動詞のル形を承ける例を挙げる。

- (49)a 「今日、テストあるっぽいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ぽいよね」と相づちをうつ。
(産経新聞 1998.2.21〈平成10〉)

- b 「なー、そう邪険にするなよー。仲良くしようよー。ほら。オレたち気が合うっぽくない？ つーか気が合えよー。もっと食べ物くれよー」

(奈須きのこ『DDD』2巻 2007.8.10〈平成19〉)

13 例見られる。(49)a のような未だ起きていない事柄(出来事)を表すものと、(49)b のような話者から見えている状況に対する認識を表すものに分かれる。出来事を表す例は2例であり、話者の認識を表す例は11例である。

動詞のテイタ形を承ける例を挙げる。

- (50)a 「話それ/ちゃったけど//なんで/[プレゼントに買ったのが]モゲ太？」
「ああ…/兄さん家で/気にしてたっ/ぽいから…」

(高屋奈月『フルーツバスケット』19巻 2006〈平成18〉)

- b 「何だ、じゃないっすよ。あの事件の時、青柳さん、正義の味方みたいで、もてもてだったんじゃないっすか？ 凜香ちゃんだって、すげえ感謝してたっぽいし。てっきり、やったのかなあ、って」

(伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』2007〈平成19〉)

- c 「———なあツラヌイ。霧栖はこの事を知っているのかな」
「……知ってたっぽいです。だって銇車さんのお家を教えてくれたの、キリスさんだし」
(奈須きのこ『DDD』2巻 2007〈平成19〉)

上述の3例である。話者が過去に見た状況を言い表していると考えられる。

次に、形式名詞・副助詞・名詞を承ける例をまとめて挙げる。意味・用法は共通しており、ある話者が人やもの、事柄をどう捉えているかが示される。

形式名詞を承ける例は、4 例である。

- (51) a 私が書いたような、私怨を晴らさんがためっばいレスは基本的に皆に放置されるのが、このマナー知らずの掲示板のマナー以前の暗黙の了解だ。

(舞城王太郎『阿修羅ガール』2003〈平成 15〉)

- b 「国のためには自分の人生がどうなってもかまわない。そう本気で思ってる政治家は稀れだ、って」

「だろうねえ。政治家が死ぬのは、病気とか汚職がばれて、はずかしくて自殺する、とかだけ」

「金田はその稀れなほうっばい、って旦那が言うには」

(伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』2007〈平成 19〉)

副助詞を承ける例は、3 例である。

- (52) a そんな飼主代理を心配してくれたのか、黒犬はトコトコと走ってきて、ふんふんと鼻をあててくる。訂正、こいつ心配してねえ。美味しそうな匂いに惹かれてやってきただけっばい。(奈須きのこ『DDD』2 巻 2007〈平成 19〉)

- b 小牧教官と毬江ちゃんがお揃いで指輪してるのもちょっと羨ましいけど周囲にバレバレの環境で別に今さら敢えてしてるしがいるとも思えないしまた隊のみんなにからかわれる的になるだけっばいしなー。

(有川浩『別冊図書館戦争 I』2008〈平成 20〉)

- c 「髪とかさあ/メチャクチャ校則違反じゃん/先生も一応/注意してる/けど//なんか形/だけっばい」(高屋奈月『星は歌う』4 巻 2009〈平成 21〉)

名詞を承ける例は、4 例である。

- (53) a 『C』・・・か『D』で——/ "6" ~ "9" っばいから/助けに来て~~~~みたいなことが手紙に・・・

(岩永亮太郎『Pumpkin Scissors』7 巻 2007〈平成 19〉)

- b ……そう言うアンタは？ 支倉にきた目的はこれで終わりでしょ。さっさと南部に帰れば？」

「いや、これがね、どうも支倉は当たりっばいんだよなあ。

(奈須きのこ『DDD』2 巻 2007〈平成 19〉)

話者以外の人物の認識が示される例は(51)b の 1 例である。(51)から(53)は、句の部分の一つの名詞句の働きをしており、名詞接続の例と大きくは異ならないのではないと思われる。

助動詞を承ける例を挙げる。

- (54) a 「お父さん」と私は言うが、狂乱の父には聞こえていないっばい。

(舞城王太郎『みんな元気。』2004〈平成 16〉)

- b 「教育委員会の言いなりって感じよねー。推薦図書入れろの望ましくない図書

外せの。教育委員会に限ったことじゃなくて、とにかく権威のあるところからの要請に逆らえないっばい」

「何それウザー！ 何でそんなのわざわざねじ込んで来るわけー!？」

(有川浩『図書館戦争』2006〈平成 18〉)

c 「あんっ…が/がんっ…おうっ!!」

「「あんたが/頑張ったから」/って言いたいっばいよ…多分//いやあ/でも/ほんと/
そーよ/貞子」

(椎名軽穂『君に届け』1 巻 2006〈平成 18〉)

5 例見られる。いずれの上接部も、話者が現在把握している状況を表している。特に、(54)ac は目の前の状況を表す。

「ーばい」が句を承ける場合、大部分は活用語を承けると考えてよいと思われる。しかし、3-5 で確認した通り、「ーばい」は名詞を承ける場合において特に生産的であり、活用語を承ける「ーばい」を圧倒する。

3-7. 上接部省略

話者が、相手の発話を承けて会話の初めに「(っ)ばい」を用いる例を指す。

(55)a 「今日、テストあるっばいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ばいよね」と相づちをうつ。

(産経新聞 1998.2.21〈平成 10〉)

b 「またふられたの？」

夕食のためにようやく二階から降りてきた直ちゃんに声をかけた。

「っばいね」

直ちゃんは肩をすくめると、自分の席に着いた。

(瀬尾まいこ『幸福な食卓』2004〈平成 16〉)

c 「頭も間も悪いことを自覚してるなら自重を覚えろ、いい加減！」

「そういう嫌味なこと言わなかったらせっかく正義の味方っばいのに！」

「っぼくなくて結構だ、そんなもん！(有川浩『図書館内乱』2006〈平成 18〉)

d 「なんや!？」

「何か逃げたーっ そっちいったーっ」

「サルか!？」

「…っばい！」

(西炯子『甥の一生』2 巻 2009〈平成 21〉)

6 例見られる。上接部が省略される場合の「ーばい」は、(対話している)相手の発話内容を承けていると考えられる。(55)a では「今日テストある」、(55)b では「またふられた」を「ーばい」が承けているのではないと思われる。

また、(55)ac のような相手の発話に「ーばい」が使用されるものと、(55)bd のような相手の発話に「ーばい」が使用されないものに分かれる。ac が相手の発話内容を繰り返

したうえで上接部を省略していると解釈できるのに対し、bd は「一ぱい」が上接部と切り出された形になっていると考えられる。

4. 句接続の「一ぱい」の成立過程

近年になって「一ぱい」が承けるようになった上接部として、句が挙げられる。ここでは、句接続の「一ぱい」の例がいつ頃から見られるか、通時的に用例を見ていき、その成立に至る過程を示す。

近世では、具体的な物質（自然物）や人の行為に関わる理屈・愚痴などを承ける。

- (56) a しかし大江山のすつてん童子にでもさらはれると是非然さ。その時実沢山でヤンヤといはれるは恐ながら旦ばかりス。酒肥でお腹に酒が絶えねへから酒塩いらず。おかこさんなどは骨^{ほね}多くて吐出される。

(式亭三馬『四十八癖』4編 1818〈文政元〉)

- b 女房「ハイ／＼、そしたら皆様およろりと」トかへり行く。茶見「わからなく理窟ツぱい嬢アだぞ」(滝亭鯉丈『和合人』2編下 1823-1829〈文政6-12〉か)

- c おや／＼ぬしはぐちツぱい人ざいますよなにあの人とわけかあるものか
(洒落本 馬鹿清「青楼奇談 初夢草紙」1828〈文政11〉)

意味としては、「骨」など具体的な物質（自然物）が上接名詞の場合はその含有量が多いことが表され、「愚痴」「理窟」では人物の性格や言動の特徴が表される。

しかし、明治期半ばにおいて、「一ぱい」が承ける名詞の範囲はやや広くなり、人物の属性（集合）を表すものが見られるようになる（(57)a 初出）。

- (57) a あ「私ア素人っぱい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」

(三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」1885〈明治18〉)

- b その下からさすがに子供っぱい小さな足を食み出してゐる。
(田村俊子「あきらめ」1911〈明治44〉)

- c 素人っぱいことを訊くやうだが、今度の一件について何にも心当りはねえかね
(岡本綺堂「半七捕物帳」1923〈大正12〉)

- d 思ひなしか挙措振舞まで落ちついて、大層大人っばく成って行った
(高見順「故旧忘れ得べき」1936〈昭和11〉)

このような例は、これまでの上接名詞が「具体的な物の性質」を表すのに対し、「(人物の年齢・性質・職業などに基づく) 属性」が対象の性質を表している。この点で、「水っぱい」「熱っぱい」といった上接名詞とは区別されると考えられる。このような名詞接続の「一ぱい」の増加は、意味のうえでも「一ぱい」の変化に大きく関わるのではないかと思われる。

その後、明治期の終わり頃になると、以下のような修飾語句を伴う例が見られるように

なる。これらは【修飾語句＋「ーぽい」（＋名詞）】で一つの名詞句のように働いており、「ーぽい」が上接部を長く取るようになるきっかけになったのではないと思われる。

(58)a と老兵が奇麗な小刀を以て【まだ半熟の白つぽき西瓜】を刮しつゝ言た、

(嵯峨の屋おむろ訳「セバストウポルの落城」1901〈明治34〉)

b その標札は【木理の込んだ黒っぽい板】に、緑の油で名前を派手に書いたものである。
(夏目漱石「三四郎」1908〈明治41〉)

c 明いてゐる處から、曇つてゐるらしい白ツぽい光線が射し込んでゐた。

(里見弴「恐ろしき結婚」1917〈大正6〉)

d そのころの先生には【まだ非常に若々しい書生っぽいところ】が多分にあったような気がする。
(寺田寅彦「夏目漱石先生の追憶」1932〈昭和7〉)

更に、昭和期の初め頃より、「NのN」を承ける「ーぽい」が見られるようになる。

(59)a 田舎に着いた日、その地方は五月の嵐っぽい天候であつた。

(宮本百合子「伸子」1928〈昭和3〉)

b つまみ上げると、皮膚^{あぶら}の脂肪ッぽいコロッとした身体の感触がゾッときた。

(小林多喜二「蟹工船」1929〈昭和4〉)

こういった経緯から、「Nの～ぽい」の形を取る以下の例が見られるようになったのではないと思われる。

(60) ○F女史「自信のありっぽい子どもたちですから……」

(言語生活 1969.2〈昭和44〉)

5. おわりに

以上、「ーぽい」の史的展開を踏まえ、「ーぽい」の上接部の変遷及び句接続の「ーぽい」が成立する経緯について検討した。

近世から現代に至るまで、「ーぽい」はどのような上接部においてもある程度の造語力を有する。しかし、特に広がりが見られるのは名詞接続、次いで形容動詞語幹接続である。一方、語根接続（湿っぽいなど）や動詞連用形接続、形容詞語幹接続は、造語力は大きくなく、広がるとは言い難い。

また、近年に見られる句を承ける例は、名詞接続において上接部が修飾語句を伴うものが見られるようになったことにより、見られるようになったのではないかと考えられる。

第3章 「ーぽい」の活用形

0. はじめに

「ーぽい」の活用形の変遷について検討する。調査資料によると、「ーぽい」の活用形は以下の通りである（各活用形における最も古い例を挙げる）。

【連用形】 見に行てしめつほく出る拂藏

（呉陵軒可有等編『誹風柳多留』初編 1765〈明和2〉）

【連体形】 役人のほねつほいのハ猪牙に乗セ （『誹風柳多留』2編 1767〈明和4〉）

【終止形】 ほんにお前は余程腹たちっぽいよ

（山手馬鹿人「粹町甲閨」1772-1781〈安永年間〉）

連用形・連体形・終止形はほぼ同時期から見られる。

「ーぽかつ(た)」は、ここでは過去形とする。過去形は大正期まで見られない。

【過去形】 久しぶりで本郷通りを溯って行つたが、街筋は少し埃っぽかつたので、赤門を入り、大学構内の樹の多い方へ、向けるともなく足を向けた。

（久米正雄「学生時代」1918〈大正7〉）

また、語幹で用いられるものについても考察対象に含める。

○ 赤くって、黒くって、瘡せていて、湿っぽそうで、それで所々皮が剥げて、剥げた中から緑青を吹いた様な味が出ている。 （夏目漱石「坑夫」1907〈明治40〉）

○ んで、一日の仕事の疲勞と消化作用の熱っぽさとで睡氣を催して暫く茶の間に假睡をしてか （中村星湖「歌さんの幻影」1917〈大正6〉）

語幹で用いられる例は明治期以降に見られ、上に挙げた通り、形容動詞化したものや名詞化したものなどが見られる。

各時代における用例数を示すと、以下の通りである。

【表1】「ーぽい」の活用形

	近世	明治	大正	昭和	平成
連体形	38	112	102	613	780
終止形	19	10	8	66	320
連用形	25	53	47	274	466
過去形	0	0	1	22	36
語幹	0	1	7	37	79
合計	82	176	165	1012	1681

1. 連体形に関する考察 ―修飾語句との関連と意味・用法の変化―

上接部が長くなることと、話者の推測的判断を表すようになることが重要である。1800年代以前は「X ぽい Y」が修飾語句を伴わない（1期）。一方、1800年代以降になると、連体詞や程度副詞などの修飾語句を伴うものが見られるようになる（2期）。更に、明治期以降になると、連体修飾節が長いものが見られるようになる（3期）。昭和期以降では「NのX ぽい」のように上接部自体が長くなる例も見られるようになる（4期）。さらに、昭和期の終わり頃以降、意味・用法も変化し、話者の推測を表すようになる。このとき、「ーぽい」は「どことなく」「なんか」といった副詞と共起する（5期）。

1-1. 近世（1800年代以前）

以下のような、「X ぽい」のみで被修飾語 Y を修飾する例が見られる。

- (1)a 役人のほねつぽいのハ猪牙に乗セ

（呉陵軒可有等編『誹風柳多留』2編 1767〈明和4〉）

- b ちよつと覗きやれよと怨みツぽい女 （『誹風柳多留』9編 1774〈安永3〉）

- c あらつぽい下女ひな皿がわり納メ （『誹風柳多留』21編 1786〈天明6〉）

これらは、「ーぽい」が修飾語句を伴わないものである。

1-2. 近世（1800年代以降）～明治期

修飾語句や程度副詞を伴う例が見られるようになる。

- (2) 女房「ハイ／＼、そしたら皆様およろりと」トかへり行く。茶見「わからなく理窟ツぽい嬢アだぞ」（滝亭鯉丈『和合人』2編下 1823-1829〈文政6-12〉）か

- (3) 「為清から口が掛かつたから往つて見ると猿坂さんで、例の気障ツぽいので弱つてゐる所へ」（朧月亭有人「春色恋廻染分解」初中 1860〈万延元〉）

(2)は「わからなくて」と「理屈っぽい」がともに被修飾語「嬢」を修飾していると考えられる。一方、(3)は、まず「気障っぽい」が「様子」を修飾し、「例の」が「気障っぽい様子」を修飾していると考えられる。以上2例には、「ーぽい」の外にある修飾語句が、被修飾語 Y にかかるか、「X ぽい Y」にかかるかという区別があると思われる。

また、近世以降、程度副詞が共起する例も見られるが、これは(3)と同様で、程度副詞が「X ぽい Y」を修飾している。

- (4)a 「都て高田馬場の體、上の方に料理茶屋一軒」卒八「だいぶ荒ツぽい書きやうだネ」（滝亭鯉丈『八笑人』4編上 1828〈文政11〉）

- b 和次「コウ鳥渡見な、アレ舐先の方に後を向いて腰を掛けて居る年増の、ソレ藍微塵のきものを着て居る」矢場「ムウ餘程婀娜ツぽい後ツつきだ」

（為永春水『和合人』4編下 1845〈弘化2〉）

- c 喜次「ノホン、其處で今一人の人形は、ぶつと仇ツばい中年増といふのだから、古人段付をしたらば、何程ぐらゐの相場だらう」

(梅亭金鷲『七偏人』2編上 1857〈安政4〉)

(4)a を例とすると、「だいぶ」が「荒っぽい書きよう」を修飾していると考えられる。

(2)(3)(4)に挙げた例は、(1)に比べ、Yを修飾する成分が長くなっていると考えられる。「一ばい」はそのなかの一つであり、Yの前に位置する。修飾する成分が長いということは、それだけYを詳細に表すということであると思われる。

1-3. 明治期・大正期

修飾語句を伴わない例は以下の通りである。

- (5)a あ「私ア素人っぽい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」(三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」1885〈明治18〉)

- b 力也、一半は菅公に奇禍あり、あはれツぽき詩歌ありて、人の同情を惹くが故也。

(大町桂月「文芸時評」1901〈明治34〉)

- c ある時は湿っぽい茶座敷の中で、四方から焚火に焙られているような苦しさがあつた。

(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉)

これに対し、修飾語句を伴う例は以下の通りである。まず、「X ばい Y」を修飾する例を挙げる。

- (6)a ^{ふところ}囊中ハ^{あつたか}金満さうだと眼が付て不斗惡氣が起り^{あらっぽい}チト兇暴い舉動だが仲間の奴といひ合せ難波橋の中島で剝にかゝつた (轉々堂主人「巷説兒手相」1879〈明治12〉)

- b さてハ車やかといはんとすれども。腕のたくましきに不似あひなる。色の白きのが一ツの不審。たゞし雪の如く白きにあらねど。他の車夫にくらぶるときにハ。幾らか白ツぽき肌の色なり。

(坪内逍遙「^{一説三載}当世書生氣質」1885-1886〈明治18-19〉)

- (7)a ここには極くノンキな人もいるが又非常に理窟っぽい人もいる。

(島崎藤村「千曲川のスケッチ」1911〈明治44〉)

- b 『お前はよツぽど疑ぐりツばい女だ。 (岩野泡鳴「断橋」1911〈明治44〉)

- c ましてナオミは非常に飽きっぽいたちで、どんな遊びでも初めは馬鹿に夢中になります、決して長つづきはしないのでした。

(谷崎潤一郎「痴人の愛」1924〈大正13〉)

以上は、程度副詞と共起する例である。程度副詞の他には、以下のようなものが挙げられる。

- (8) ^{ちとせや}千歳屋の^{べんきち}辨吉といふ^{ねいさん}大姐かぶ。さまで上^{じやうとう}等といふ^{かほだち}兒容にハあらねど。所謂仇ツぽ^{いはゆるあだ}き^{ちうどしま}中年増。 (坪内逍遙「^{一説三載}当世書生氣質」1885-1886〈明治18-19〉)

- (9)a 忽ち一聲轟然として天地を震撼しながら爆發した地雷火の音、第一第二の鋒頭皆

に當ツて轟く歟と思ふ、と同時に燃昇ツた萬丈の猛火は、宛然天を焦す計、凄じき勢で空中に投擧られた、石や、瓦や、砲車や、家屋や、其他種種なる何やらの黒ツぽき物体を、ばツと計火光の裡に照した、

(嵯峨の屋おむろ訳「セバストウポルの落城」1901〈明治34〉)

b こうなると、紬の羽織では何だか安っぽい受附の気がする。

(夏目漱石「三四郎」1908〈明治41〉)

(8)は連体詞、(9)は話者の不確かな判断を表す副詞と共に起する例である。

次に、修飾語句と「X っぽい」が Y を修飾する例を挙げる。

(10)a 持参のビールハ疾にかたむけフラスコの徳利をかたはらへころがし地まわりの水ツぽいさけをさしつおさへツして

(暇名垣魯文「^{萬國航海}西洋道中膝栗毛」6編下 1870-1876〈明治3-9〉)

b と老兵が奇麗な小刀を以てまだ半熟の白ツぽき西瓜を刮しつゝ言た、

(嵯峨の屋おむろ訳「セバストウポルの落城」1901〈明治34〉)

c 明いてゐる處から、曇つてゐるらしい白ツぽい光線が射し込んでゐた。

(里見弴「恐ろしき結婚」1917〈大正6〉)

(10)a は「地まわりの酒」であり、「水っぽい酒」であると考えられる。(10)b は「半熟の」「白ツぽき」が「西瓜」を修飾しており、更に「まだ」が「半熟の」を修飾していると考えられる。また、(10)c のような修飾節を伴うものも見られる。(10)のような例が見られることから、近世に比べて、修飾語句が長くなっていると考えられる。

なお、以下のような「一っぽい」の後に修飾語句が見られるものも見られる。

(11)a 雨がはれあがって、しめっぽい六月の空の下に、高原地の古い町が、濺んだような静さと寂しさ とで、彼女の曇んだ目に映った。

(徳田秋声「あらくれ」1915〈大正4〉)

b 褐っぽいじみな仙台平に、ところどころ黒く滲んだ涙のあとをポンポンとはたいて、「さア、ここにいると、いつまでもお直さんが寝られないから二階へ行こうよ」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

こういった例も、Y を修飾する成分が長くなっている例と考えられる。これらの例は、「一っぽい」と被修飾語との間に修飾語句が挟まれているため、「X っぽい Y」という結び付きが弱いのではないと思われる。

1-4. 昭和期初め～終わり頃

昭和期の初め頃以降は、以下のような「N の X」が上接名詞となる例が見られる。修飾語句を伴うのではなく、上接名詞自体が長く取れる例である。

(12)a 田舎に着いた日、その地方は五月の嵐っぽい天候であつた。俵に乗って市から

村へ通じる寂しい一本道にかかると、荒い幅広い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。
(宮本百合子「伸子」1928〈昭和3〉)

- b 熱くなると、居たまらなくなった風が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪^{あぶら}ッぽいコロッとした身体の感触がゾッときた。
(小林多喜二「蟹工船」1929〈昭和4〉)

これらの例の上接名詞は「五月の嵐」「皮膚の脂肪」であると考えられる。まず(9)aのような例が見られた後、上接名詞のなかに「Nの」が取りこまれる例が見られるようになったのではないと思われる。また、これらの例が、意味のうえでもそれまでの「ーぽい」と異なることは、第1章で述べた通りである。「NのXぽい」は、話者がYをどう捉えたかということを表しており、意味としては「YはXに見える／感じられる」となる。この点で、話者の視点を介した推測的判断を表す例と考えられる。

(12)に挙げた2例は、「NのX」という長い上接名詞を承けること以外にも、「嵐」「脂肪」という、接辞「ーぽい」から意味／形のうえで切り出すことが可能な名詞を承けている点で重要である。たとえば、「地まわりの水っぽい酒」は「地まわりの水／っぽい酒」のように上接名詞で区切ると意味が取れなくなるが、「五月の嵐っぽい天候」は「五月の嵐のように感じられる天候」を表し「五月の嵐／っぽい天候」としても意味が通じる。(12)のような上接名詞が接辞から切り出せる点は、「ーぽい」が話者の推測を表す用法を獲得するうえで重要である。これは、話者の推測を表す「ーぽい」は、上接部と接辞が切り出され、[[X]っぽい(Y)]の形を取るためである。

そのため、昭和期以降、上接名詞を切り出すことが可能で、かつ修飾語句が長い例も見られる点にも注意される。

- (13)a そのころの先生にはまだ非常に若々しい書生っぽいところが多分にあったような気がする。
(寺田寅彦「夏目漱石先生の追憶」1932〈昭和7〉)
- b そつとガーゼで拭いてやりました。青ぶくれの顔が却つて透きとほるやうに見え、へんに不気味な大人っぽい感じなのですが、よく見るとさう悪い顔だちでもありません。
(神西清「死児変相」1949〈昭和24〉)
- c こちらを向いている角刈りのやくざっぽい男がおり、女の髪をつかんでカウンターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っていた。
(五木寛之「こがね虫たちの夜」1969〈昭和44〉)

(13)aは[非常に[若々しい][書生っぽい]ところ]、(13)bは[[へんに[不気味な][大人っぽい]感じ]のように修飾されているのではないかと考えられる。一方で、これらは、「非常に若々しい書生」「へんに不気味な大人」と区切っても上接部の意味として成り立つ。このことから、上接名詞Xが接辞「ーぽい」から意味／形のうえで切り出すことが可能である。また、修飾語句を多く伴う点に話者からどう見えているかということが表されているのではないかと考えられる。

なお、今期以降、程度副詞や話者の不確かな判断を表す副詞以外の副詞とも共起するようになる。たとえば、以下のようなものである。

(14) a どこかで聞いたような名ではあったが、すぐにおもいあたらなかったのもかく玄関まで出て行ってみると、そこに、十九歳ぐらいの、学生ふうだが仕立のよい外套に派手なマフラをした、まだこどもぼいところのあるのがひよろ長く立っていた。 (石川淳「処女懐胎」1947〈昭和 22〉)

b 倉庫にそった杏の樹立の暗がりにひそんで、なお大人たちと獲物の動静を監視する決心をしている兎口を残して僕と弟は倉庫の表口へ廻り、屋根裏の僕らの住居へいつも湿っぽい手すりに軀を支えながら登って行った。

(大江健三郎「飼育」1958〈昭和 33〉)

これらの例における「まだ」や「いつも」は、時間を表す副詞である。

1-5. 昭和期終わり頃以降

昭和期の終わり頃になると、次のような副詞と共起する例が見られる。

(15) a それはそうと、私も最近、どことなく、ノイローゼっぽい行為をしていることに気づく。 (坂上弘「遠足の秋」1978〈昭和 53〉)

b 湘南の海岸でしょうか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぽい男と肩を寄せ合っている。相手の男の名もアルバムに書き込んでいます。藤上千次という組の者です。 (泡坂妻夫『花火と銃声』1988〈昭和 63〉)

「どことなく」「何か」といった副詞は、不確かな内容に対し話者が判断する場合に用いられるものであると考えられる。これらの例は、前期に挙げた(13)に同様、上接名詞 X を接辞「-っぽい」から切り出すことが可能である。更に、(15)のような例では、話者から「Y は X に見える」ということを表しており、話者の推測的判断が表されていると考えられる。

また、昭和期の終わり頃には、

①句を承ける例が見られるようになる。(1969 年に初出例)

②上接部が省略されるものが見られるようになる。(1998 年に初出例^{*19})

といった変化も見られる。まず①の例を見ていきたい。

(16) a ○「熱っぽい、水っぽい」は耳なれているが、次のような例に出合って、ハッとした。F 女史「自信のありっぽい子どもたちですから……」(NHK 教育 TV

*19 初出例は終止形を取る。

○代表的なのが「ぽいよね」。「今日、テストあるっぽいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ぽいよね」と相づちをうつ。いずれも、語尾は、なげやりに下げる。当然、語気も弱める。「田舎っぽい」「色っぽいよね」とはニュアンスが異なる。 (産経新聞 1998.2.21〈平成 10〉)

一月二十九日夜)

(言語生活 1969.2 〈昭和 44〉)

- b 何でか気になるんだ/見てると/イライラすんのに//きっとオレは/あいつが嫌いな
んだ/だから "気に障る" /ってヤツなんだ//——けどそうじゃ/ないっポイ気もす
る (やまざき貴子『っポイ!』1巻 1992〈平成4〉)

(16)a は句接続の初出例である。ここでの X は「N の + 動詞連用形」を取るが、「N の N」のものは前期より見られるため、そこから派生したものと思われる。

次に、「ーぼい」の上接部が省略され、会話の文頭で用いられる例を挙げる。

- (17) 紅葉「ホラ 早く/いこいこっ//席とってあるけど/ちゃんと始めっから/録んなく
ちゃっ」

燈路「録ってどうする訳/…ってそういえば/何の劇やるんだっ/たっけ？」

紅葉「「シンデレラ/っぼいもの」!!」

燈路「…"ぼいもの"/って何…」

潑春「「シンデレラ/っぼいもの」/ってコト…」

燈路「だからっ "ぼいもの"/って何!!」

(高屋奈月『フルーツバスケット』15巻 2004〈平成16〉)

この例では、「何の劇やるんだっけ？」という問い掛けに対する「劇のタイトル」が「シンデレラ」ではなく「シンデレラっぼいもの」である。それを初めて聞いた燈路が、どういふことか分からず、「シンデレラ」という明らかな部分を省略して「(っ)ぼいもの」という不明な部分が何かを問うている。これは相手の発話内容を省略して引用したものであり、「ーぼい」自体には意味などは含まれないと思われる。

1-6. まとめ

以上の通り、連体形の例を見てきた。連体形の「ーぼい」は、「X ぼい Y」が修飾語句を伴わない例と、伴う例に分かれる。修飾語句は、「X ぼい Y」を修飾する場合と、「X ぼい」とともに Y を修飾する場合に分かれる。後者は、Y をより詳細に表すことが可能である。近世(1800年代以降)にも例は見られるが、明治期以降では修飾語句がより長くなる。

昭和期では「[N の X ぼい]Y」といった形も見られるようになる。このとき、上接名詞は接辞「ーぼい」から意味・形のうえで切り出すことが可能である。また、昭和期の初め頃から「ーぼい」は連体形で Y の属性を表し、「Y は X である」という同定関係を表す用法が見られるようになる。こういった属性を示す用法の例では「なんか[[X ぼい]Y]」のように、不確かなものに対する話者の判断を表す副詞と共起する例が見られる。

2. 終止形に関する考察 ―連体用法との関連と意味用法の変化―

続いて終止形について検討する。「ーぽい」の終止形の例は、主題・主語に対して用いられる。また、主題は省略される場合がある。

終止形の例が増加するのは昭和後期以降であり、近世から昭和前期まで、「ーぽい」の中心的な活用形ではないと考えられる。また、この時期の終止用法の「ーぽい」は、連体用法に置き換えることが可能であり、意味のうえでは連体用法と大きく異ならない。ただし、昭和期の半ば頃以降には、上接部が長く取れる例が見られるようになる。これに対し、昭和期の終わり頃以降、話者の推測を表す用法が見られるようになる。

以上のことを踏まえて終止用法を段階に分けると、1期は近世から昭和期の半ば頃まで、2期は昭和期の半ば頃から昭和期の終わり頃まで、3期は昭和期の終わり頃以降となる。

2-1. 近世～昭和期半ば

まずは近世の用例を挙げる。「ーぽい」が主題・主語に対して用いられる例では、人やものの性質、あるいは言動に対する評価が表される。また、これらは全て連体形に置き換えることが可能である。

(18)a ほんにお前は余程腹たちっぽいよ

(山手馬鹿人「粹町甲閨」1772-1781〈安永年間〉)

b 紺染メハよこれっぽいとこなや言ィ (『誹風柳多留』33編 1806〈文化3〉)
以上は、主題が副助詞ハで表される例である。

(19)a 第一やたいぼねが気に入らねへ小便所の二階^{けへ}にあるが大さうらしひよしにしろ
出しものが水ッぽひ火入のたどんがくづれてるいそがしくてそまつになるなら
さみしひ茶やへ河岸をけへるは^{トおとらもへこん}_で帯へ手をはさむ

(振鷺亭主人「見通三世相」1796〈寛政8〉)

b ソレ酒を呑めば目の淵がほんのりと櫻色になるはサ、所を呑めねへから顔が白
ッぽいと言つたが悪いか」 (為永春水『和合人』4編上 1845〈弘化2〉)
以上は、主語がガ格で表される例である。

(18)a であれば「腹立ちっぽい人／性格だ」というのと同様である。(19)a は「水っぽい出しもの」であり、(19)b は「白っぽい顔」である。

また、主語に対して「ーぽい」が用いられる場合は、(19)a「出しもの」や(19)b「顔」のような、部分的なものが取りあげられている。これに対し、(18)のような主題に対して「ーぽい」が用いられる場合は、「人」や「性格」というように、(19)に比べて全体的な性質・性格について述べていると考えられる。

次の例は、主題が省略されるものである。「お前は愚痴っぽい」と解される。

(20) 跂「寐言をいつたのなら、何様な失禮^{ど ん しつれい}な事だつて當^{あたりめへ}然だから、咎^ねめるところは無

へけれど」茶め「宜いわサ、愚痴ツぽい。^{どうせ}何瀬^{ゆうべ}みんながタツからの醉^{よひたふれ}倒だものヲ、何をするか知れやアしねへ」(梅亭金鷲『七偏人』4編下 1862〈文久2〉)

これについても、(18)(19)に同様、連体形に置き換えることは可能であり、「愚痴っぽい人だ」あるいは「愚痴っぽいことを言う」のように解される。

なお、主題が行為・事柄になっているものも見られる。

- (21)a モシ久しくつかひませんから、近頃の文句をさつぱり存じませぬ。一モシなまじつか鸚鵡石でつかふもあんまりしろつぽいから、ふるウい所の高麗屋をひとつ、エヘン。(○聲色つかひ古風の體)

(式亭三馬「客者評判記」下 1811〈文化8〉)

- b ヅブ「サアやるベエ」アバ「ム、やるベエはい」が、圖武公タテはチョイ／＼と手先をさはる計りで行きてへもんだ。どうも足^そ下のやうに、むやみに腕を引摺んだり、ひつぱらつたりしては、あんまり白ツぽい。相手になる者が怪我をするは。

(滝亭鯉丈『八笑人』2編上 1821〈文政4〉)

(21)a では「鸚鵡石を使う」こと、(21)b では「むやみに腕を引摺んだり、ひつぱらつたり」することに対し、「白っぽい」(素人のようである)とされている。こういった例では、話者の経験や知識に基づく判断により、その行為が「白っぽい」ことが表されていると考えられる。これらは、行為に対する評価であるため、「鸚鵡石を使う／むやみに腕を引っ摺んだり引っ払ったりするのは、白っぽいことだ」のように、被修飾語 Y を補いにくい例と考えられる。

表1に挙げた通り、終止形の用例数は近世19、明治期10、大正期8に対し、昭和期66、平成320である。以下、明治期から昭和期半ばにかけての例について検討する。

- (22)a お花は不審顔、『叔母さんと私と約束した事あつて、何だツたらう。』『おほほゝゝ。お花さんは忘れツぽいわねえ。ほら、何何時だツたツけねえ、一所に寄席に行かうツて、約束した事があつたぢやないかね。』

(広津柳浪「櫛紅葉」1901〈明治34〉)

- b 「あなたはほんとに厭きつぽい」と細君が独言の様にいう。

(夏目漱石「吾輩は猫である」1905-1906〈明治38-39〉)

- c 何故こう信州人は理窟ツぽいだろう、とはよく聞く話だが、一体に人の心が激しいからだと思う。(島崎藤村「千曲川のスケッチ」1911〈明治44〉)

- d 母様の涙は少し鹹つぽいが、忠朝の墓の水は冷っこい。

(薄田泣菫「茶話」1916-1918〈大正5-7〉)

- e 「非常管制の警報らしいが、何分位消えているんだっけ」

「お父さんは、忘れつぽいのね。三十秒の間消えて、また三十秒つき、それからまた三十秒消えて、それからあと、ずっと点くのですよ」

(海野十三「空襲葬送曲」1932〈昭和7〉)

f あなたは純情なんて何もなくてただ浮気っぽいから公明正大に人前に言ったり
振舞ったりできないのでせう(坂口安吾「青鬼の禪を洗ふ女」1947〈昭和 22〉)
近世と同様で、主題が示される例では、人・ものの性格や性質が表される。近世と同様、
連体形に置き換えることが可能であり、人の性格についていう場合は「X っぽい人」、(22)d
は「鹹っぽい涙」であると考えられる。

次に、主語について用いられる例を挙げる。

(23)a そう思っていると何だか壁が湿っぽい。(夏目漱石「倫敦塔」1904〈明治 37〉)

b 阿兄は小銃弾とは違って、やることが荒っぽい。

(桜井忠温「戦場の悪戯者—空想の兵器—運命の弾丸—」1925〈大正 14〉)

(23)a は「湿っぽい壁」、(23)b は「荒っぽいこと(をやる)」と置き換えられると考え
られる。なお、(23)a は副詞「何だか」が共起しているが、これは壁の性質(湿り気)に
ついて述べているものであり、「壁=湿」と判断しているとは考えられない。

最後に、主題が示されない例を挙げる。

(24)a 『そんなら、お前、歸つて來たら直に顔を見せて遣らう位な氣が出たつて罰も
當るまいぢやないか』『愚痴ツばいなア、俺ア懷手で遊んでる身体ぢやアねえ
や。家もあり親方もありやアそれ／＼ 用もあらアな』

(川上眉山「左巻」1901〈明治 34〉)

b 人づきのわるい無愛想で、怒りっぽい。(武者小路実「友情」1919〈大正 8〉)
主題が示されない例では、程度副詞などを伴わず、「X っぽい」のみで用いられる。連体
形への置き換えは(22)に同様で、「X っぽい人」となると考えられる。

ここで、今期の終止形と共起する表現を見ておこう。

(25)a 仁ちつとぐちつばいやうだが。何もみれんの残らねへものが。

(作者未詳「大門雛形」1794〈寛政 6〉以後)

b ^{ふところ}囊中ハ^{あつたか}金満さうだと眼が付て不斗惡氣が起り^{あらつぽ}ちト兇暴い舉動だが仲間の奴とい
ひ合せ

(轉々堂主人「巷説兒手相」1879〈明治 12〉)

(26)a 「都て高田馬場の體、上の方に料理茶屋一軒」卒八「だいぶ荒ツばい書きやう
だネ」

(滝亭鯉丈『八笑人』4 編上 1828〈文政 11〉)

b 「何うだかさ、お前さんだつて工場でも随分浮気っぽいよ。」と厭な目をし
た。

(小栗風葉「転々」1909〈明治 42〉)

(27)a 初手はあだな遊でわかつた客が何かうらみつぽくなつて何の事もないにいゝつ
のればその子はのろくなつたを見ぬいてうちやつておくを

(富か岡の都にすむ流女それかし「部屋三味線」1789-1801〈寛政年間〉)

b ぬしのうちは水氣とやらのある所てさんすかさぞしめつほうさんしやうネウ

(うくひす谷白眼「三千之紙屑」1801〈享和元〉)

c 「もと、何処へ行つたんです」

「何処って方々行きました。然しどうも厭きっぽいもんだから」

「じき厭になるんですか」

(夏目漱石「それから」1909〈明治 42〉)

(25)は程度が低いことを表す副詞、(26)は程度が高いことを表す副詞である。また、(27)のような話者による事態の認識を表す副詞が前に現れることもあるが、(27)aは「何か～なる」、(27)bは「さぞ～(だろ)う」、(27)cは「どうも～ものだ」のように、「一ぱい」の後ろの語と対応していると考えられる。。

2-2. 昭和期半ば～昭和期終わり頃

上接部が修飾語句を伴うものが見られるようになる。

(28) するとあなたはわたしの手を握った。いつものようにあたたかくて湿っぽい。

(倉橋由美子「パルタイ」1960〈昭和 35〉)

(29) そして彼が辛そうに身体を少し屈めると、いつでも飾られた夏子の写真がその華やかさの中心をなすように、眼の片隅に飛び込んで来るのだ。それは無邪気そう
な、幸福そうな 子供っぽいともいえる微笑をほころばせて、勝気な黒い瞳に物怖じすることなく自分の命を見詰めている。(福永武彦「告別」1963〈昭和 38〉)

(28)は、「わたしの手はいつもあたたかくて湿っぽい」ことを表しており、連体形への置き換え(いつもあたたかくて湿っぽいわたしの手)が可能である。(29)は、波線部と「一ぱい」とが「微笑」を修飾していると考えられる。こういった修飾語句を伴う例は、(28)が初出であり、それまでは見られない。同時期の主語について用いられる例では、

(30)a 「栗本さん、お子さん幾人です？」

「いや、一人もないよ。どうして？」

「時々口の利き方がおやじっぽいからね」驚いて亜井の顔を見た。

(三木卓「巣の中で」1973〈昭和 48〉)

b 「きのうから西日本は梅雨にはいったんですって。ラジオが言ってたわ」

冴子は風に手をかざして、

「なんとなく風が湿っぽいみたいよ」(五木寛之「戒厳令の夜」1975〈昭和 50〉)

のような例が見られる。(30)bは「なんとなく」と共起しているが、修飾語句を伴う例や上接部が長い例は見られない。

2-3. 昭和期終わり頃以降

修飾語句を伴う例が増加する。また、句を承ける例が見られるようになる。

(31)a ……/シエラ…?//なんだかきれいな女性っぽい

(多田かおる『愛してナイト』3巻 1982〈昭和 57〉)

b [友人に六本木は子供っぽいと言われて]いったい彼女たちのいう子供っぽい

てどういうことなんだろう。(山田詠美『放課後の音符』1989〈平成元〉)

- c 「だって、深文さんって不思議な色気があるもん。髪短いから中性的に見えるけど、首すじとか肩とか、よく見ると女っぽい」

(山本文緒『パイナップルの彼方』1992〈平成4〉)

(31)a は上接名詞そのものが長く、且つ副詞「なんだか」と共起している。(31)bc については、波線部が「一ぱい」の意味に関わるものと考えられる。これらの例は、前期までのものと異なり、連体形に置き換えにくいと考えられる。

(31)a は、話者が「シェラ」という名前から「きれいそうな女性」を連想しており、「(シェラという名前からして、その人は) きれいそうな女性っぽい」となる。「一ぱい」は、話者が未だ会ったことのないシェラという女性の外見の特徴を表している。外見の特徴を表す点ではこれまでの性質・状態を表す「一ぱい」と同様だが、この例は主体を被修飾語とした連体形には置き換えられない。これは、上接名詞に「一そう」が含まれており、話者が「シェラ」を見ていないことが大きいのではないと思われる。あくまで話者がそう連想していることなので、「きれいそうな女性っぽい感じの名前」のように、話者の感覚を表す言葉が被修飾語となると考えられる。

(31)b は話者が「彼女(友人)たちのいう子供っぽい」というものが何かを考えているため、「～ということ」のような意になると思われる。ここでの「こと」は、「お前は愚痴っぽい」といったときの「愚痴っぽいことを言う」とは異なり、「こと」の内容が漠然としていると考えられる。

(31)c は、首すじや肩といった部分的な性質を踏まえ、「深文」を「(細かい部分もよく見ると、全体として不思議な色気があり) 女っぽい」と述べているのではないと思われる。被修飾語は「雰囲気」や「感じ」などとなるのではないと思われる。

「一ぱい」が表す主題が状況や雰囲気を指す例は、連体形「一ぱい」でも「こちらを向いているやくざっぽい男」のような例が見られるが、この例でも「男」はその正体がはっきりとしない。

続いて、句接続の例を挙げる。

- (32) NHK 第一放送昼のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっぽいじゃない。猫はそうじゃない。」(言語生活 1986.5〈昭和61〉)

この例では、犬という動物の性格が主題となっており、「ワンチャンは人の話を聞いているっぽい」で一つのまとまりになっていると考えられる。

- (33)a 「カールは/来ないのかなァ」

「来ないですよ/普通//でも/あの姫の/事だから/おもしろがって/呼んだりして」

「どうかな/ナジェイラ殿下は/あのカールだけは/苦手っぽい/らしいぜ」

(樹なつみ『花咲ける青少年』6巻 1992〈平成4〉)

b 「ウソウソ 今のは/ちょっと見栄張っちゃいました/実は/そのバーコードは/僕の父親で/援交にハマって/家庭をほうり出して/女の子と心中しようと/してるんです！」

「ウソをつけェ/君は父親は/死んでるっぽいぞなんか！」

「だから/なんで われてんのオ/なんでしてんだよオ!!」

(空知英秋『銀魂』8巻 2005〈平成17〉)

(33)aは[ナジェイラ殿下は[あのカールだけは苦手っぽい]らしいぜ]、(33)bは[君は[父親は死んでるっぽいぞ]なんか!]>となると考えられる(上接部は二重傍線部)。abとも「ナジェイラ殿下」「君」という人物(主題)に対し、更に主題を含む句で「(上接部の内容は真偽不明だが)そのような感じがする」ことを表している。ここでの「一ぽい」は、推量的判断を表していると考えられる。

その後、上接部に主題を含み、かつその内容が未実現である例が見られるようになる。

(34) 失明するかと思ったモヒ寛の目は飛び出たものをそのまま元の場所に押し込んだだけで復活したらしいし、脳に障害が残るかと思ったモヒ寛の頭は手術の後に倍の大きさに膨らんで一週間くらいどっかの宇宙人みたいだったらしいけど、それからすぐに縮んで元の大きさに戻って手足も普通に動くし普通に喋れるしご飯も前とおんなじように食べれるみたいだし、鼻だけが前より低くなっていびつに曲がっているものの、どうやらモヒ寛は大体元通りに戻るっぽいとのこと。

(舞城王太郎『山ん中の獅見朋成雄』2003〈平成15〉)

(35) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DKで、もう一つの部屋は寝室っぽい。

(山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』2004〈平成16〉)

(35)は、モヒ寛を治療している現在の状況から、その後、「元通りに戻る」という未実現の事柄を推測している。(35)は、話者は「質素な部屋において画材や描きかけの絵が置いてある」状況を見ているが、「一ぽい」で示されるのは「もう一つの部屋は寝室」という、未だ入っていない部屋が何であるかについてである。(32)や(33)が、話者が知覚したものや状況を「一ぽい」で言い表しているのに対し、これらは見ていないものに対し用いられている。

この段階になると、以下のような副詞「どうやら」を伴う例が見られるようになる。

(36)a 二日後、昼休みに鮎子は、雪子の隣に腰を下ろし、自分で作ってきた弁当を食べることにした。それから、「どうやら駄目っぽいです」と打ち明けた。

(伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006〈平成18〉)

b 「どうやら私の家族の誰かが、勝手なことをしてくれたっぽいし——」

と呟いた。

(西尾維新『零崎曲識の人間人間』2007〈平成19〉)

「どうやら」は、「どうも」などと並び、話者の不確実なことに対する認識を表す副詞

である。「どうやら」と共起する例が見られるようになるのも、「ーぼい」が話者の推測的判断を示すようになったためであると考えられる。

また、連体形でも挙げた通り、「ーぼい」の上接部が省略され、発話の初めに用いられる例が見られるようになる。(37)が初出例である。

(37) <◆トレンドチャート コトバ>ぼいよね

このところの社会不安は元気はつらつの女子高生にも暗い影を落としている。
言葉にも、キャピキャピのコギヤル系から、けだるさ漂うアンニュイ系への移行が見られる。代表的なのが「ぼいよね」。「今日、テストあるっぼいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ぼいよね」と相づちをうつ。いずれも、語尾は、なげやりに下げる。当然、語気も弱める。「田舎っぼい」「色っぼいよね」とはニュアンスが異なる。
(産経新聞 1998.2.21〈平成 10〉)

この例では、「テストあるっぼいよね」を受けて「【テストある】(っ)ぼいよね」と答えているのではないと思われる。連体形で挙げた「シンデレラっぼいもの」「"【シンデレラ】(っ)ぼいもの"って何!？」と、省略の仕方は同様であると思われる。ただし、(37)の「ぼいよね」は相手の言葉を肯定して繰り返しているが、「"ぼいもの"って何!？」は「ーぼい」がタイトルについていることへの疑問を表しており、「ぼい」の意味するところに疑問の焦点がある点で異なっている。この差異は、「ーぼい」の意味ではなく、その後にくる「(ぼいもの) って何!？」という疑問の形や、「(ぼい) よね」という終助詞の意味によると考えられる。

一方、以下のような相手の問い掛けを受けるものも見られる。

(38)a 「またふられたの？」

夕食のためにようやく二階から降りてきた直ちゃんに声をかけた。

「っぼいね」

直ちゃんは肩をすくめると、自分の席に着いた。

(瀬尾まいこ『幸福な食卓』2004〈平成 16〉)

b 「なんや!？」

「何か逃げた一つ/そっちいった一つ」

「サルか!？」

「…っぼい！」

(西炯子『甥の一生』2巻 2009〈平成 21〉)

これらの例は、話し相手の発話が疑問文になっており、それに対して話者が「っぼいね」「…っぼい！」というように「ーぼい」を用いて答えている。省略されている上接部は、「またふられた」「サル」という相手の発話内容であると考えられる。(38)a は相手の発話を受けてただ肯定・同調しているだけだが、(38)b では相手の問い掛けに対し、話者自身がどう思うかを判断し、そのうえで肯定・同調している。

2-4. まとめ

昭和期の半ば以降になると形のうえでの変化が見られ、昭和期の終わり頃以降になると、意味・用法の変化が見られるが、それまでの変化は専ら連体形・連用形が担っていたのではないと思われる。

また、昭和期半ば以降の変化について、用例からも明らかな通り、上接部が主に名詞、形容動詞、句に見られるという偏りが指摘される。このことから、「一ぱい」の意味・用法の変化は、連体形（連用形）の名詞接続から起こったと考えるのが自然であると思われる。

3. 連用形に関する考察 ―意味用法と形式の変化―

連用形は、用言を修飾するものと修飾しないものに分かれる。各時代の用例数は表2の通りである。

【表2】

	近世	明治	大正	昭和	平成
用言を修飾する	20	28	39	209	354
用言を修飾しない	5	25	8	65	112

また、用言を修飾する場合は、明治期終わり頃以降になると、知覚動詞も修飾するようになる。そこで、近世から明治期終わり頃までを1期、知覚動詞が加わる明治期の終わり頃から昭和期の終わり頃までを2期とする。1期・2期は、ともに連体用法と同様の意味用法を示す段階である。

その後、昭和期の終わり頃以降になると、

- ① 「X ぽくない」のような否定表現になる例が増加する。
- ② 「Y は X ぽく」で「Y は X に見える／感じられる」という話者の推測的判断を表す例が見られるようになる。
- ③ 修飾語句とともに用いられる例が見られるようになる。

という2つの変化が生じる。これを3期とする。

なお、否定表現の用例数は表3の通りである。

【表3】

	近世	明治	大正	昭和前期	昭和後期	平成
否定(ない)を伴う	2	0	0	0	1	37

3-1. 近世～明治期終わり頃

まず、用言を修飾する例を挙げる。

(39)a 見に行てしめつぽく出る拂藏

(呉陵軒可有等編『誹風柳多留』初編 1765〈明和2〉)

b 初手はあだな遊でわかつた客が何かうらみつぽくなつて何の事もないにいゝつ
のればその子はのろくなつたを見ぬいてうちやつておくを

(富か岡の都にすむ流女それかし「部屋三味線」1789-1801〈寛政年間〉)

c 眼七「それだけ尚卒「ヘンその面／＼と安ツぽくいふけれど、是でも合引あひびきをか
けて、拵て見せてへほんにヨ。よつぽどこせへばえのする顔だぜ」

(滝亭鯉丈『八笑人』3編下 1823〈文政6〉)

d 「食たくなつてもか……」

ト愚痴ッぽく言懸けて、フトお政と顔を視合わせ、

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

e 『お栄さん僕はそんな声を聴かされると何だか哀れッぽくなつて堪りません』

(国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」1901〈明治34〉)

修飾する用言は、人の言動であることが殆どである(acd)。また、変化を表す動詞「なる」を修飾するものも見られる(be)。

否定表現になる例は、以下の通りである。

(40)a 京談であきッぽくなく遊ぶなり(似実軒編「誹風末摘花」3編 1791〈寛政3〉)

b お肴でよいがね余り骨ッぽくないものにしまし

(松亭金水「兩個女兒郭花笠」4編下 1836〈天保7〉)

人の言動やものの性質として、「Xぽい」ことが打ち消される。言動やものに「Xぽい」性質がないことを表していると考えられる。先に示した通り、近世に2例見られるが、その後、昭和期の終わり頃に至るまで見られない形である。

続いて用言を修飾しない例を挙げる。

(41)a 麦めしもはやくどかべりが来る物なり。ひしきめしは水ッぽく力なし。雑水は
咽がかわき。

(鈍九齋章丸「残座訓」1784〈天明4〉)

b 弥次「ヲツト／＼、なるほどいゝ酒だ。水ッぽくてねからのめぬ。もふいっば
いつゞけよふ

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』7編上 1808〈文化5〉)

c 浮ッぽくて不可エなア

(三遊亭圓朝「松枝宿の子殺し」1890〈明治23〉)

d 急に自分の躰が見窄しく、安ッぽく、只唯下らないものに思はれて、

(小栗風葉「一腹一生」1901〈明治34〉)

これらは、人やものの性質・性格を表しており、意味・用法としては連体形と同様(水っぽいひしきめし、水っぽい酒、浮気っぽい人、安っぽい体)であると考えられる。

3-2. 明治期終わり頃～昭和期終わり頃

知覚動詞を修飾する例が見られるようになる。

(42)a ガスの深い夜で、店々のあかりが湿ッぽく見える。

(岩野泡鳴「放浪」1910〈明治43〉)

b 畏怖というと仰山すぎるし、同情というともまるで憐れっぽく聞こえるし、この顔から受ける僕の心持は、何と云って可いか殆んど分らないが、

(夏目漱石「彼岸過迄」1912〈明治45〉)

c それは人間の元気な小娘を見るのと少しもかわりがなかった。

美しいより寧ろ艶っぽく感ぜられた。

(志賀直哉「濠端の住まい」1925〈大正14〉)

知覚動詞は話者から「～に見える」「～と聞こえる」ことを表すものである。「一ぽく」を含む一文において、話者の視点が入り込むと考えられる。(42)cのような例についても同様であると思われる。

以下、知覚動詞以外の動詞を承ける例を挙げる。

(43)a 物好きなその人達は早くも新聞の記事を見て問題となっている女が自分に違いないと目星をつけているのではあるまいかと葉子は何事につけても愚痴っぽくひけ目になる自分を見出した。

(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治44-大正2〉)

b 芳江はいきなり荒っぽく起って行ってGの背中を二つばかり強く撲った。

(志賀直哉「雨蛙」1924〈大正13〉)

c 安心して高笑いがこみ上げて来るので、湯口に口をあてて荒っぽく嗽いをした。

(川端康成「雪国」1935-1947〈昭和10-22〉)

一方、用言を修飾しない例は、次の通りである。

(44)a おこりっぽく、夫を口ぎたない言葉でののしるなど、希代の悪妻として有名だが、後代の誇張もあるらしい。(島崎藤村「家」1910-1911〈明治43-44〉)

b ガスの色といふものは、遠目には水っぽく、近くによるとむらさきで、ちよつとはなれると青くなるなど、私は思った。

(稲垣足穂「タルホ五話(クリスマスの夜の前菜)」1925〈大正14〉)

c 教室は古びて挨っぽくて、神秘めいてほの暗かったのである。

(井伏鱒二「休憩時間」1930〈昭和5〉)

(45)a 少し儼を持ったように挨っぽくぶくぶくする量の上には丸盆の上に大学病院から持って来た薬瓶が乗せてあった。

(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治44-大正2〉)

b 取り払はれた人家のあとに、白ぽく、且の光を受けてゐる土の面にも

(吉江喬松「農民と文芸」1922〈大正11〉)

(45)のような連体修飾成分の一部として見られる例については、連体用法でも取り上げた、この時期の「ーぽい」を含む連体修飾節が長くなるという特徴と一致する。

3-3. 昭和期終わり頃以降

否定を表す連用形「ーぽくない」の例が増加する。否定を表す連用形は2通りに分かれる。1つはある性質を持たないことを表すもので、もう1つは疑問の形を取るものである。

(46) 家賃はやや高くても、室内の造作があまり安っぽくなく、新しいのが気に入っていたが、それも他人に汚された様子はない。

(田久保英夫「蕾」1979-1981〈昭和54-56〉)

(47)a あなたはあなたよ。そんなふうに慰める時の彼女は、大人びているけれども決してお姉さんぽくはない。彼女は、妹のような存在や、どこかに連れだって歩く仲間のような友だちを持たない。彼女はいつもひとりで独立している。

(山田詠美『放課後の音符』1989〈平成元〉)

b でもやっぱり友達じゃなくて/彼女でもなくて/仲間っぽくもない

(やまざき貴子『っポイ!』1巻 1992〈平成4〉)

これらは、上接部Xの性質・特徴を持たないことを示すと考えられる。

次に、疑問の形を取る例を挙げる。

(48)a 「ねエ…あの子の/つけてる宝石/本物っぽくない？」

「まっさか/あんな大きな/^{イミテーション}偽物に決まってる/わよ」

「そっ…/そうよ/ねエ」(樹なつみ『花咲ける青少年』1巻 1990〈平成2〉)

b 日本人が一人もいなくてそろそろ本気で焦ってきた。「すいませ〜ん」と言ってみても誰にも日本語なんて通じない。近くに降り立った、荷物の大きな褐色の肌のおばあちゃんにホエアイズザステーション?とか訊いてみてもベラベラベラベ〜ラ! って巻き舌で何かまくしたてられるだけでそれ一体どこの言語? つかここどこ? アメリカじゃないっぽくない?

(舞城王太郎『阿修羅ガール』2003〈平成15〉)

これらの例は、「YはXぽい」(a: あの子のつける宝石は本物っぽい、b: ここはアメリカじゃないっぽい)と話者が判断しており、それを聞き手に問い掛けていると考えられる。

また、(49)のような話し相手の発話を引用する例が見られる点、(50)のような話者の推測的判断を示す例が見られる点でも新しい。

(49) 「頭も間も悪いことを自覚してるなら自重を覚えろ、いい加減!」

「そういう嫌味なこと言わなかったらせっかく正義の味方っぽいのに!」

「っぽくなくて結構だ、そんなもん！（有川浩『図書館内乱』2006〈平成 18〉）」
この例では、話し相手の「正義の味方っぽいのに！」を承けて「（正義の味方）っぽくなくて結構だ」と答えていると考えられる。

話者の推測的判断は、「X は Y ぽく」で「Y は X に見える／感じられる」ことを示す。

(50) a 正直なところ、紙に描かれた似顔絵は、全身を描いた大雑把なもので、犯人の特徴を表現しているとは言いがたかった。曖昧で、煙が描かれているのと大差ない。ただ、「犯人は、男が二人に、女が一人だったそうだ。男はホストっぽくて、女は露出度の高い服を着ていた」という河崎の説明を聞いた瞬間、わたしはその場に座り込みそうになった。

（伊坂幸太郎『アヒルと鴨のコインロッカー』2006〈平成 18〉）

b 私は本気で好きになり、告白。彼は嬉しいと言ったものの彼女と別れる気はないっぽく、私もつき合っほしいとも別れてほしいとも言えなくて、4、5 回お泊りに行ってしまいました。

（『mina』No.22 2007〈平成 19〉）

これらの例でも、話者が「Y は X ぽい」と判断していることが表されていると考えられる。

これまでも見られたのと同様の用言を修飾する例／しない例については以下の通りである。

(51) a 瀬尾由加子は、同年齢の女生徒と比べると、笑い方も喋り方も、歩き方も足の組み方も、あらゆる点で垢抜けておとなっぽく見えました。

（宮本輝「錦繡」1982〈昭和 57〉）

b 「結婚式の二次会なんかには、一万円も出せないってわけね」
厭味っぽく笑って、月子はお茶をすすった。

（山本文緒『パイナップルの彼方』1992〈平成 4〉）

(52) a 髪はやや茶色っぽく、針金のような直髪で、肉体的な魅力はありません。

（田辺聖子「それだけのこと」1983〈昭和 58〉）

b 「ごめんなさい。お待たせして。レジがすごく混んでて」
彼女は私に向かってそう言った。おっとり優しい声と微笑みはどちらかというとおばさんぽく、そこに悪意は感じられなかった。

（山本文緒『恋愛中毒』1998〈平成 10〉）

3-4. まとめ

以上の通り、連用形について検討してきた。連用形「ーぽく」自体の意味・用法は変化しないが、一文で見ると変化が生じていると考えられる。まず、明治期以降に「ーぽく」を含む一文が長くなる例・知覚動詞「見る」「聞く」などを修飾する例が見られるように

なり、昭和期の終わり頃では話者の推測を表す例が見られるようになる。そして、一文で見た場合の変化は、連体形と同様であると考えられる。

4. 過去形に関する考察

過去形「一ぽかつ(た)」は、大正期より見られる。ただし、大正期・昭和期の初めに見られる 2 例については、回想の場面で用いられているため、「一ぽかった」の形を取るのではないかと考えられる。

- (53)a 久しぶりで本郷通りを溯って行ったが、街筋は少し埃っぽかつたので、赤門を
入り、大学構内の樹の多い方へ、向けるともなく足を向けた。

(久米正雄「学生時代」1918〈大正 7〉)

- b 香もなく花も貧しいのぎ蘭がそのところどころに生えているばかりで、杉の根
方はどこも暗く湿っぽかつた。(梶井基次郎「笈の話」1928〈昭和 3〉)

これに対し、昭和期の終わり頃になると、過去にどのような状態であったかということが表される例が見られるようになる。

- (54)a 「少しはまじめに恋をしなさいよ。」全くかげりのない明るい口調だったので、
かえってずっしりきた。「昔っから君、大人っぽかつたものね。年上の人が好きなんだね。」
(吉本ばなな『白河夜船』1988〈昭和 63〉)

- b 「松山先生なんて、私より、ずっと大人の男の人って気がしてた。でも、今日、
見た時は、なんだか、ちょっと少年ぽかつたわ」

(山田詠美『放課後の音符』1989〈平成元〉)

(54)a は現在でも「年齢より大人びた」となる可能性があるが、既に大人になっている「君」に対し「大人っぽい」を用いることはやや不自然であり、過去における性格と考えるとよいのではないと思われる。(54)b は既に少年ではない「松山先生」が一時的に「少年ぽかった」のであり、過去の状態を表していると考えられる。

また、近年では以下のような例が見られる。

- (55)a そうして、目が覚めればあの女の姿がなくなっていたというワケだ。

「——何なんだ、あいつ」

思わず呟く。冷静になって思い出してみれば、^{りようぎ}両儀は俺と同一年ぽかつた。女、
というより少女という形容の方がしっくりくる。

(奈須きのこ『空の境界 the garden of sinners』上 2004〈平成 16〉)

- b 「何のために、つけたんだ」響野が、納得いかない、という顔つきで問い質す。
「深い意味はないけど、さっきも言った通り、怪しい男っぽかつたからだよ。
掏った財布の中にはさ、免許もなかったんだ。仕方がないから、あの発信機、
ちょうどいいや、と思って、あの男の居場所を後で調べようと思ったんだ」

(伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006〈平成 18〉)

- c 「おじいちゃんの部屋も、行き届いていて、いつでも清潔だし、お医者さんは、去年とちがう人だったけど、若くて、名医っぽかった。

(藤谷治『誰にも見えない』2007〈平成19〉)

これらの例は、過去において「Xに見えた」ことを表しているが、現時点でも「YはXぽい」ことを表すと考えられる。

また、2000年代では、「一ぽかった？」で疑問を表す例も見られる。

- (56)a 「あたしも見たよ、あの子」

貴子が呟くと、梨香が振り向いた。

「あら、そうなの？ 幽霊っぽかった？」

「顔は見なかったけど、後ろ姿だけ。妙にリラックスしてた。だから、他の学年の子だと思ってた」

(恩田陸『夜のピクニック』2006〈平成18〉)

- b 「金を借りたままどこに逃げていたのか、訊いた？」

「逃げるつもりはなかったらしいですよ。実家の父親が入院したのも真実だったし、借りたお金も返すつもりだった、らしいです」父親の看病で時間も精神も余裕がなくなり、鮎子に連絡するのが遅くなった、と彼は言った。

「本当っぽかった？」

「どうなのでしょうね」実際、鮎子も、彼の言葉の信憑性については分からなかった。真実の訴えにも、必死の言い訳にも聞こえた。

(伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006〈平成18〉)

これらは(55)同様、過去において「YはXに見えた」ことを表す例である。聞き手に対し、どう見えたか(Xに見えたか否か)を確認していると考えられる。

過去形は、主に昭和期の終わり頃から「一ぽい」の活用形の一つとして見られ、人やものが過去においてどういった状態であったかを表す。これは、「一ぽい」が話者にとってどう見えるかを表すために見られるようになった意味・用法ではないかと思われる。

5. 語幹で用いられる「一ぽい」に関する考察

語幹で用いられる「一ぽい」には、名詞化したもの・形容動詞化したもの・動詞化したものが見られる。大正期以降、「一そうだ」について形容動詞化したもの・接辞「一さ」について名詞化したものが見られる。昭和期以降に「一すぎる」について動詞化したもの・接辞「一め」について名詞化したもの、推量を表す「一そうだ」につく例が見られる。名詞化した「一ぽさ」以外は、用例数などから見て生産的でない。

【一ぽそう】

- (57)a いら／＼した。英さんも亦、始終怒りつぽさうに黙つてゐた。

(田村俊子「第一印象」1917〈大正6〉)

- b 彼女はちらとぼくをみてすぐ視線をそらせたが、その眼にはわかawakaしい、いたずらっぽそうな輝きがのこっていた。(開高健「裸の王様」1957〈昭和 32〉)

以上2例である。これら「一ぽそう」の例は、ある人が「Xのような様子」であることを表しているものと考えられる。

【一ぽさ】

語幹で用いられる「一ぽい」のなかで最も多く見られるのは名詞化した「一ぽさ」である。

- (58)a 伊藤公追弔演説会以来の独り激昂を思はずまた参禅論に於いてしたため、神経が再び非常に過敏になつてゐるのが、今、路上の放浪者として、初冬のしめッぽさと冷氣とに当つて、義雄は夏以来の働きを一度期に目の前に浮べた。

(岩野泡鳴「憑き物」1920〈大正 9〉)

- b それから折よくはいり加減になっていた風呂に飛び込んで、汽車の煤煙や埃ッぽさからさばさばとなつて来ると、いきなり茶の間の真中に大の字なりにねころんでみた。

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

- c 杉の梢が日を遮り、この径にはいつも冷たい湿ッぽさがあった。

(梶井基次郎「笥の話」1928〈昭和 3〉)

- d 彼女はこまごまとした世話を見るのが好きなたちで、まして二十五にもなっているがどうにも子供ッぽさの抜けぬ中山に、眼に見えないところまで気をつけてやるのを嬉しがっていた。

(武田麟太郎「市井事」1933〈昭和 8〉)

- e 子供ッぽさを残した表情と共に、それは歳月というものを感じさせる写真だった。

(沢木耕太郎「一瞬の夏」1981〈昭和 56〉)

- f 純粋に男が好きなトシヒコは、女になろうとする男などに興味はなかった。そのままヤマダは日に日に女ッぽさを増して今日に至る。

(藤野千夜『少年と少女のポルカ』1995〈平成 7〉)

- g 今年ッぽさ満点の小物を散らしたから凝ってるように見えて印象的。

(『FRaU』No.282 2003.2.11〈平成 15〉)

以上に挙げた通り、名詞化した「一ぽさ」は格助詞を伴い、主題あるいは主語が X の性質を有することを表している。

【一ぽすぎる】

- (59)a あいつはおれが、理屈ッぽすぎると言って非難した。

(安部公房「砂の女」1962〈昭和 37〉)

- b ◇俗ッぽすぎないか。

(毎日新聞 1998.3.16〈平成 10〉)

- c 「綺麗な/ワンピース…っ」

「お前には/少し大人ッぽ/すぎねえか? //服が泣くな」

(高屋奈月『星は歌う』1巻 2008〈平成 20〉)

5 例見られる。上接部の性質が過剰であることを表していると考えられる。元々、「水っぽい」や「骨っぽい」は過剰であることを表すが、顕著な特徴を表す場合は目立つ性質ではあっても「過剰」の意味にはならないため、「水」「骨」など何かに含有されるものではない名詞を承ける場合は、過剰であることを表すために「一すぎる」がついた可能性がある。

【一ぼめ】

- (60) 雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少ない目」のメをつけて「雨ッポメだ」と言うのだそうです。

(言語生活 1982.6 〈昭和 57〉)

1 例のみである。用例によると、「わずかに雨の可能性がある」場合に用いられるとされている。ここでは、「少ない一少なめ」の関係と同様に捉えられており、「雨っぽい」が「雨が降りそうな」状況を表すのに対し、「雨っぽめ」はそれよりも程度が低いと解されているのであろう。しかし、「雨の降る可能性が低い」のではなく、「雨があまり降りそうでない」場合に用いられるとすることも可能ではないかと思われる。

【一ぼそう】

- (61) 「浅井さんの思春期って灰色っぼそうだよね」

「有生の思春期なんて真っ黒だよ、真っ黒。皆子に会うまでは、」

(壁井ユカ子『鳥籠荘の今日も眠たい住人たち②』2007 〈平成 19〉)

1 例のみである。語幹「灰色っぼ」は「思春期が暗い」ことを表し、「そうだ」が話者の推量を表していると考えられる。

語幹で用いられる「一ぼい」は、特に形容動詞化したものや動詞化したものの場合、古くからある語で用いられている。一方、名詞化した「一ぼさ」に関しては、(58)g「今年っぼさ」なども見られ、主に雑誌や新聞において生産性を持つと考えられる。

6. おわりに

「一ぼい」を活用形ごとに検討すると、最も用例数が多く、変化が著しいのは連体用法である。連用用法は、連体用法とほぼ同様の変化を呈す。また、否定を伴う例が増加する、話者の判断を示す例が見られるようになるといった変化は、近年になって生じたものである。

終止形の「一ぼい」は、昭和期半ば以降に至るまで用例数の割合が低く、近世から昭和期の終わり頃までの終止形の意味・用法は、連体用法と大きく異ならない。しかし、昭和期の終わり頃以降、ある状況を「一ぼい」で言い表す例が見られるようになり、連体用法と同様には解釈できない用法が見られるようになる。

また、過去形・語幹で用いられる「一ぼい」については、遅くとも大正期より見られることが明らかとなった。

第4章 話者の判断を示す「ーぽい」

0. はじめに

近年の「ーぽい」には、話者の推測的判断を示す用法が見られる。

- (1) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DKで、もう一つの部屋は寝室っぽい。

(山崎ナオコ『人のセックスを笑うな』2004〈平成16〉)

この例では、話者は「質素な部屋において画材や描きかけの絵が置いてある」のを見ており、そのうえで、未だ入っていない部屋に対し「もう一つの部屋は寝室っぽい」と述べている。「ーぽい」は、話者が「もう一つの部屋は寝室の可能性が高い」と推測していることを示しているのではないかと考えられる。(1)に挙げた通り、近年の「ーぽい」には、話者が直接は知覚していない／できないことに対し、Xと推測する用法が見られる。

一方で、「ーぽい」には、次のような目の前で観察している状況そのものを言い表す例も見られる。

- (2)a 「さいわいなことにスポンサーがついて、フランス留学の話が出ました。/わたしもいっしょにフランスへ、というわけにはいきませんでした。/“りっぱな画家になる日を、ひとりさびしく日本で待つわ”わたしはけなげにいいました。/“待ってるよ”とはいわずに、杉野はフランスへ旅立ちました。/そのあとで、美咲がこの世に突如、出現しました」

「うそっぽい」

美乃里が母さんのことを、下から見上げるような目をした。

「そうなのよ。/ところがこれが現実。/里部咲子二十五歳に、現実におこったことなのよ」 (毎日新聞連載小説 鈴木ひろみ「自画像」1997.5.12〈平成9〉)

- b 「あそこ」と塚本が言った。「犬がいる、犬が」

慌てて視線を動かす。早く見つけなければ塚本に見放されてしまう気がした。

確かに犬がいた。二十メートルほど離れたところを歩いていた。歩道の上をのろのろと進み、時折、鼻を地面に擦りつけている。首輪もせずに徘徊していた。

「犬がこんなところにいるなんて珍しいですね。首輪もないから野良犬でしょうか」

「柴犬っぽいな。柴の入った雑種かな」

塚本の言葉を聞きながら、河原崎は、父を思い出していた。毛が薄汚れて、居場所もなく、邪魔にされながらもうろついている姿が、自分の父親と重なってしまったのかもしれない。 (伊坂幸太郎『ラッシュライフ』2005〈平成17〉)

これらの例では、目の前で聞いたこと／見えている人に対し「ーぽい」が用いられている。(2)aなら「(母親の話が)嘘に聞こえる」こと、(2)bなら「(二十メートルほど離れたところを歩いている犬が)柴犬に見える」ことを表していると思われる。

(1)(2)の例は、どちらも話者が観察している状況を踏まえて「ーぽい」と判断している点では共通しており、上接部によって表される内容は「状況から推測するもの」と「状況を言い表すもの」とで異なる。(1)の「状況から推測したもの」は、そのものを直接知覚し、判断することはできないのに対し、(2)の「状況を言い表すもの」は、「ーぽい」で示されるものを直接知覚している。

ここでは、(1)(2)のような、ある状況を踏まえて話者が判断する「ーぽい」の意味・用法について検討する。

1. 話者の推測を示す「ーぽい」

上述の通り、「ーぽい」が話者の判断を示す場合、(1)のような観察している状況とは異なる内容を示すものか、あるいは(2)のような話者が観察している状況そのものかを示すもので大きく区別される。

観察している状況とは異なる内容を示す場合、「ーぽい」は話者の推測を示していると考えられる。

- (3)a でも記憶は体ほど頑丈ではないらしくて、モヒ寛[人名]は頭に怪我を負った前後の記憶をすっかり失っていた。自分がどうしてマワシー丁で自分の家から一キロも離れた山の中にいたのかも判ってなかった。つまりモヒ寛は自分がどうしてその怪我を負ったのかを憶えてなかった訳で、これには警察も困った。有名な書家が頭を殴られて死にかけたっぽいんだからもちろん事件になるのに、これではちゃんとした書類を作成することが出来ない。

(舞城王太郎『山ん中の獅見朋成雄』2003〈平成15〉)

- b 『接地、エンジンカット！ ローターが完全に止まるまで各員近づくな！』
副操縦士の怒鳴るような指示の後、無線を通さず直に金属の破碎音が聞こえた。ヘリはかなりコンテナから離れているはずなのにここまで聞こえるということは、無事着陸とはいかなかったようだ。

[中略]

「ヘリはどうなった」

真っ先に尋ねた堂上に、小牧が難しい顔で答えた。

「着陸か着陸転倒か微妙なとこだな。けっこうハデに壊れたっぽい。操縦者二名が負傷で済んだのは何よりだけど」(有川浩『図書館革命』2007〈平成19〉)

(3)a は、話者は「モヒ寛が頭に怪我を負って、マワシー丁で自分の家から一キロも離れた山の中にいた」という過去の状況を知っている。一方、過去の状況に対する理由にな

っており、話者が過去の状況を根拠として導き出した推測内容であると考えられる。「一ぱい」で示されているのは、「モヒ寛は頭を殴られて死にかけた」ことである。上接部は、(3)b についても、「(へりが) けっこうハデに壊れた」ことは、実際にその様子を見て判断した内容ではなく、副操縦士の指示や無線を通さずに聞こえた金属の破碎音などを根拠としていると考えられる。根拠となる状況からは上接部が直接知覚できない例では、「一ぱい」はその推測内容（上接部）が成立する可能性があることを示す。こういった例は 6 例見られる。

また、未実現の出来事を承ける例も見られる。

- (4) 失明するかと思ったモヒ寛の目は飛び出たものをそのまま元の場所に押し込んだだけで復活したらしいし、脳に障害が残るかと思ったモヒ寛の頭は手術の後に倍の大きさに膨らんで一週間くらいどっかの宇宙人みたいだったらしいけど、それからすぐに縮んで元の大きさに戻って手足も普通に動くし普通に喋れるしご飯も前とおんなじように食べれるみたいだし、鼻だけが前より低くなっていびつに曲がっているものの、どうやらモヒ寛は大体元通りに戻るっぱいとのこと。

（舞城王太郎『山の中の獅見朋成雄』2003〈平成 15〉）

- (5) 二日後、昼休みに鮎子は、雪子の隣に腰を下ろし、自分で作ってきた弁当を食べることにした。それから、「どうやら駄目っぱいです」と打ち明けた。「駄目っぱい？」雪子が鋭い視線を放ってくる。「この間の、チケットの話なんですけど、行けそうもないです。その日、ちょうどイベントが入っちゃったんですよ」

（伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006〈平成 18〉）

- (6) 板橋香澄は感慨深そうに首を振った後で、「で、そうそう、その試合の結果、挑戦者が勝ったら、学はあなたに告白するっぱいだよ」と続けた。

（伊坂幸太郎「ライトヘビー」2007〈平成 19〉）

それぞれの上接部を見ると、(4)の「モヒ寛は大体元通りに戻る」と(6)の「学はあなたに告白する」は、まだ起こっていないことである。(5)は、鮎子は差出し人不明の芝居のチケットを受け取っており、芝居に行く予定にしていたのだが、イベントが入ったために「駄目っぱい」と述べている。「駄目」は「芝居を見に行けない」ことを表している。いずれの例でも、「一ぱい」はその可能性があることを示すと考えられる。ただし、(4)は「～っぱいとのこと。」とある通り、話者の判断を示しているのではなく、他者の判断を引用したものである。これを除くと、「一ぱい」が未実現の出来事を承ける例は、3 例しか見られない。

話者からは見えないものを、見えている状況を根拠として示すとき、そこには話者の推測が働くと考えられる。話者の推測を示す「一ぱい」は、話者の判断を示す「一ぱい」のなかでは用例数が少なく、一般的にはなっていないようである。

2. 話者の観察している状況を示す「ーぽい」

話者から見える／聞こえる状況、つまり観察している状況を「ーぽい」で示す例について検討する。

初出例は以下の通りである。

- (7) 雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッポメだ」と言うのだそうです。

(言語生活 1982.6 〈昭和 57〉)

この例では、「雨が降りそうな」状況を「(今日は) 雨」と表している。話者が知覚によって観察している状況が X と同定できる点は、話者の知覚を示す用法と同様だが、上接部が(不確かな)事柄である点で異なる。発話時では未だ雨は降っておらず、「ーぽい」は「雨が降りそう」な状況を表し、「雨が降る」という事柄が成立する可能性があることが示されるのではないと思われる。このように、「ーぽい」がある事柄が成立する可能性があることを推測する場合、上接部が事柄を示し、話者が発話時に観察している状況がその根拠になると考えられる。

話者が観察している状況を示す例は、動詞のテイル形を承ける例が最も多く、11 例(52 例中)見られる。

- (8)a グッチ裕三は野川の堤防の近くまで来ると誰かのウチの塀の陰にささっと身を潜める。丸っこい身体を素早く隠して、そこから野川の様子をうかがっているっぽい。
(舞城王太郎『阿修羅ガール』2003 〈平成 15〉)

- b 後ろのほうはエンジン音がかなりうるさく座席の下から直に車輪の震動が伝わってくる。広くて一見特等席なのにどうりで座っている人がいないはずだとキーリは少しばかり後悔したが、ハーヴェイのほうは気にしたふうもなく、両足を前に投げだすような感じで座席に深くもたれかかって背もたれに後頭部を乗つけて目を閉じて、それきり動かなくなってしまった。……本当に疲れてるっぽい。

(壁井ユカコ『キーリ』VI 2004 〈平成 16〉)

- (9) 「そーなんだよ/もう修羅場!/って感じで//貞子とー…/三浦健人? だっけ?/と 3 人でいて/貞子/泣いてるし/風早 若干/切れてるし/てか風早/貞子の事/すきだとか/言ってて/——」

「は!/?/何それ/告白!/?」

「いやー/なんか/貞子/「誤解されちゃう」/とか言ってたから/一応つつこんどいたけど/…//え、違った??」

「いや/しらねーけど//それだけ/聞いてたら/普通に告白/してるっぽく/ね?」

(椎名軽穂『君に届け』9 巻 2009 〈平成 21〉)

- (10) 「ほんとにここまででいいのか? 連れの兄さん、どっか悪いんだろ?」

「大丈夫です。のんびり歩きますから」

微笑んでキーリは答え、助手席の隣でキーリに寄りかかって眠っていた青年の肩を軽く揺さぶった。

「ハーヴェイ、着いたよ。起きられる？」

耳もとに声をかけると、すうすうと寝息を立てていた青年が薄く目をあけて瞬きをした。まだ少し寝呆けているつぼい青年に手を貸して二人でトラックを降りる。

(壁井ユカコ『キーリ』IX 2006〈平成 18〉)

動詞のテイル形を承ける例は、話者が観察している目の前の状況を、話者の言葉で表現したものであり、(8)や(10)のような、情景を描写していると考えられるものも存する。

また、動詞のタ形を承ける場合でも、直前に見た状況である場合は、目の前で観察している状況を示していると考えてよいのではないかと思われる。

(11)a 『なんか何もできねえうちに一件落着いたつぼいけどよ……あの一家、このままずっと一緒に暮らせるのか？』(壁井ユカコ『キーリ』V 2004〈平成 16〉)

b 風早「黒沼聞いたら/きっと喜ぶな！//平野と遠藤の/おかげだって！」

平野「えっ」

遠藤「なんか役に/立ったつぼい…！？」

(椎名軽穂『君に届け』2巻 2006〈平成 18〉)

(11)a は、家を出ていた青年が帰るのを見届け、その帰り道での会話である。(11)b は、風早の言葉を聞いた直後である点が重要であると思われる。家に青年が帰ったことや、自分たちが過去にした行為ならびに現在の自分たちについて、「役に立った」と判断していると考えられる。話者の言葉で言い表すならば、現在の状況は「一件落着いた」「役に立った」となることが示されていると考えられる。こういった例は4例見られる。

また、名詞を承ける例も4例見られる。

(12)a 「裕子ちゃんにもきつといい人見つかるよ」と私は言う。

「むかつく」と言う裕子ちゃんは、ぶち切れ一寸手前つぼいけど、笑う。「ホント枇杷ちゃんも言われたら言い返さないと済まない子だよな」

(舞城王太郎『みんな元気。』2004〈平成 16〉)

b 「聞いてますよー、香坂大地の本作ってるんですってね！ いつ出るんですか？」

「さあいつになるやらねえ」

投げやりに答えた折口は「郁ちゃんお茶ちょうだい、渋〜いの。甘い物もあるといいな」などと甘えながらまっすぐ玄田のいる隊長室に向かった。

お茶を淹れに立ちながら、郁は声を潜めて上官たちに声をかけた。

「どうしたんでしょうね？」

「取材の予定は入ってなかったからな」

そこで言葉を濁した堂上に、小牧が付け加えてくれたのは分からなからうとい

う配慮らしい。

「甘えに来たのか暇潰しか、今日は前者っぼいけどね」

甘えに来た、という言い方が郁にはまだ読み取れない独特の二人の関係を思わせる。
(有川浩『図書館危機』2007〈平成 19〉)

(12)a は目の前にいる裕子ちゃんの様子を示しており、(12)b は折口の行動を観察して示したものである。

以上の通り、目の前で観察している状況を示す「ーぼい」は、話者の言葉で目の前の状況を言い換えており、そこに話者の判断が働いていると考えられる。「ーぼい」は話者からそのように見える、感じられるといったことを表している。

なお、以下に挙げる形容詞の言い切りを承ける例は、目の前の状況のみを表すわけではなく、過去から現在までに観察してきた状況に基づいた判断となっている。これについても、現在把握している状況に基づいて判断しているため、ここに挙げる。

(13)a 何でか気になるんだ/見てると/イライラすんのに//きっとオレは/あいつが嫌いなんだ/だから “気に障る” /ってヤツなんだ//——けどそうじゃ/ないっポイ気もする
(やまざき貴子『っポイ!』1巻 1992〈平成 4〉)

b 私は本気で好きになり、告白。彼は嬉しいと言ったものの彼女と別れる気はないっぼく、私もつき合っほしいとも別れてほしいとも言えなくて、4、5回お泊りに行っていました。
(『mina』No.22 2007.11.20〈平成 19〉)

c [日記を見て昨日のことが]……夢じゃ……/……ないっぼい……!!
(椎名軽穂『君に届け』10巻 2010〈平成 22〉)

(13)ab は、目の前の状況のみではなく、やや長期的な観察となるが、自分自身／彼の様子から「彼女のことが気になるのは気に障るから、ではない」「彼女と別れる気はない」と感じられる／見えることが示されていると考えられる。(13)c は日記を見ながらの発言だが、「夢じゃない」というのは昨日のことを述べている。

3. 過去に観察した状況を示す「ーぼい」

2 節に挙げたような、目の前の状況だけではなく、過去に観察した状況から判断する例も見られる。一つは動詞のタ形を承ける例であり、もう一つは過去形「ーぼかった」の例である。

(14)a [郁の両親が郁の仕事ぶりを見に来たあとのこと]デザート付きで約束した昼飯のことだ。

「そんでご両親、あんたの仕事ぶりのほうは何て？」

「あー、おかんはけっこうどーでもよかったっぼい。二日目とかめちゃくちゃ暇持て余してたし。じゃあ来んなって感じだけど。おとんは手強かったな、抜き打ちでレファレンス吹かけられてしかも手塚と比べられた」

そりゃきつついわ、と柴崎が完全に他人事で笑う。

(有川浩『図書館内乱』2006〈平成18〉)

b 「告白場面を」「みてきた/みてきた——！」

「まじで//どーだった？/風早」

「なんか/断ってたっばい」 (椎名軽穂『君に届け』7巻 2008〈平成20〉)

これらの例では、話者が過去に見た状況から、過去における「おかんの様子」「風早の様子」を示していると考えられる。こういった例は7例見られる。

過去形「ーぽかった」の場合も同様である。

(15)a 「さっきから疑問に思ってたんだが。ツラヌイ、なんでここにいるんだ？」

きょとん、と顔を見合わせるカイエとツラヌイ。

「いえ。先輩にレポート渡しにいったら、ちょうどお仕事に行くっぽかったので。その、誘惑に負けてついフラフラと尾行なんぞ一つ」

正直イケる、と確信したらしいストーカー。

(奈須きのこ『DDD』2巻 2007〈平成19〉)

b 「しよーた」

「あ、龍」

「わり/もーみんな/作業してる/よな」

「あーなんか/しよーたに/聞きたい事/あるっぽ/かった」

「そか」 (椎名軽穂『君に届け』9巻 2009〈平成21〉)

「ーぽかった」が承けている「ちょうどお仕事に行く」「しよーたに聞きたい事ある」は、「先輩」「みんな」の過去における行動・様子を表している。以上の2例である。

目の前の状況を示す例に比べて用例数は少ないが、話者にとって過去の状況がXに見えたということを示す例も存する。前の前の状況を示す場合と同様、話者にとってどう見えたかということが示される点に、話者の判断が表れていると考えられる。

4. 話者の内面を示す「ーばい」

状況ではなく、話者の心情を承ける「ーばい」が6例見られる。心情を承ける「ーばい」も、話者がどのように感じているかが示されている点で、判断を下していると考えられる。

(16)a でも ヒナの事/言えない/私 天野/好きっポイみたい…

(やまざき貴子『っポイ！』1巻 1992〈平成4〉)

b 「ごめんね、寝てた？」と言って利緒は泣いている。「寝てない。何、どうした？」

「うん、ちょっとね、今さ、彼氏と二人で喋ってんだけど、あのね、私、やっぱりなんか、哲朗のこと好きっばいのね？」

(舞城王太郎『Dead for Good』2004〈平成16〉)

- (17) うちのクラスの/須田/一ノ瀬に/フラれたんだって//まだ江藤や笹川も/チャレンジ
するって言う/てたっけ//焦る?//それとも/ホッとした?//————// (っかんね。)
//ホッとしたっポイ/気もするケド/焦りっポイ気もする

(やまざき貴子『っポイ!』2巻 1993〈平成5〉)

これらの例では、話者が現在を含む一定期間、X という心情であることを表していると考えられる。「一ぱい」は、「確実に X とはいえないが、そのような感じがする」ことを示すのではないと思われる。(16)a が「好きっばいみたい」となっている通り、「一ぱい」は不確かなものを推し量るのではなく、話者がどう感じているかを示すものであると考えられる。また、この用法は、「一ぱい」によってその心情を X と断定しないという表現にもなっているように思われる。

5. 話し相手の言葉の引用／相槌を示す「一ぱい」

近年、相手の発話を承けて、それを肯定する用法が見られる。

- (18) 「今日、テストあるっばいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ばいよね」と相づちをうつ。
(産経新聞 1998.2.21〈平成 10〉)

- (19)a 「またふられたの？」

夕食のためにようやく二階から降りてきた直ちゃんに声をかけた。

「っばいね」

直ちゃんは肩をすくめると、自分の席に着いた。

(瀬尾まいこ『幸福な食卓』2004〈平成 16〉)

- b 「なんや!？」

「何か逃げた一つ そっちいった一つ」

「サルか!？」

「…っばい！」

(西炯子『甥の一生』2巻 2009〈平成 21〉)

(18)は、話し相手が「今日はテストがある」ことを推測しており、話者はその推測を承けて「ばいよね」で肯定している。話し相手の発話にも「一ぱい」が用いられており、(18)の「ばいよね」は「今日はテストがあるっばい」をそのまま肯定し、上接部を省略したものであると考えられる。

これに対し、(19)は話し相手の発話に「一ぱい」が用いられていない。話し相手は、「直ちゃんはまたふられた」「逃げたのはサル」と推測しており、話者は「一ぱい」でそれを肯定している。この場合、「一ぱい」は相手の推測を肯定し、断定はしないが自分もそう思うという話者の推測を示していると考えられる。

以下の「それっばい」についても、(19)と同様であると思われる。

- (20) 「飼い犬の染子が、海へ行こうとしていた主人公達の車を追ってきた」

「じゃ、海か」

如月が、染子の頭をなでる。驚いたことに染子は、お座りの格好で、ワンと答えた。

「だってよ」

「海に連れて行ってこと？」

「それっぽいな」 (あさのあつこ『ガールズ・ブルー』2006〈平成 18〉)

この例では、話し相手が染子の様子を見て「染子は海に連れて行けと言っている」と推測しており、如月の「それっぽいな」は、話し相手の推測を肯定していることを示していると考えられる。

6. やわらげ

以下は、「一ぽい」がある場合とない場合とで、大きく意味が異ならないと考えられる例である。

(21) それでもやっぱりエチオピアの難民、月の裏のウサギ、別の時空の宇宙人たちを助けてあげて欲しいっぽい。そっちの方がやっぱりいいような気がするっぽい。

自意識とか自己像なんて誰にでもあるんだから、そんなこと問題にする必要ないっぽい。 (舞城王太郎『阿修羅ガール』2003〈平成 15〉)

この例では、話者の願望や考えを「一ぽい」が承けている。「そっちの方がいい気がするっぽい」と「そんなこと問題にする必要ないっぽい」は、自分の考えを断定するのではなく、「不確かだけれどそのような感じである」と曖昧に述べているのではないと思われる。

7. 属性を示す用法における話者の判断

第 1 章でも述べた通り、属性を示す用法においても、「X に見える・聞こえる・感じられる」という話者の判断が示される。属性を示す用法の例も、多くは一人称主体の小説に見られるものであり、その場の状況を踏まえて「X に見える・聞こえる・感じられる」と判断していると考えてよいのではないと思われる。

(22) a 私は「創路」とフェルトペンで大きく書かれた紙を胸の前で持って、他の出迎えの人々の間に立った。ハワイからの到着便があったのか、土産物を沢山載せたカートを押して日焼けした若者や親子連れがゲートから出て来る。やがてその後ろの方から、学生っぽい女の子が戸惑った感じで現れた。カートは押しておらず、布製の大きなスーツケースを引いている。あの子だ、と思った時、向こうも私に気がついたようだった。目をぱちくりさせてからこちらに向かって歩いて来た。 (山本文緒『恋愛中毒』1998〈平成 10〉)

b 水無月さんは再び眼鏡の下から僕を見た。仕事の時だけ掛けているのできつと

老眼鏡なのだろう。鼈甲っぽい重そうな鼻眼鏡はお洒落といえないこともないが、郵便局の窓口にも似たようなのが置いてあったなと思った。（同上）

- c えーっと俺のはどれやろ。あっちゃー、どれも炭酸入りみたいで泡がパチパチ跳ねている。あからさまにコーラなやつと、ウイスキーみたいな琥珀色なやつは見るからにパス。しゃあないからいちばんジュースっぽい桃色のやつを取った。（風野潮『ビート・キッズⅡ』1999〈平成 11〉）

以上に挙げた通り、「X っぽい Y」が現れるのは、地の文の語り手が誰か・何かを探している場合であったり、ふと目についたものや人に対して述べる場合であったりする。話者が見ている状況を踏まえて、「Y は X に見える」ことが示されると考えられる。目の前の状況／過去の状況を示す「ーっぽい」と異なるのは、上接部がその人の社会的地位や、種類であり、Y にとって一つの属性となっている点である。(18)c であれば、コーラ・ウイスキー・ジュースなど、飲料水というカテゴリのなかの一属性である「ジュース」を指している。また、過去に見た人物について述べるものも見られる。

- (23)a 「そもそも彼女とは、俺が薬局の前に置いてあるサトちゃん人形に回し蹴りし
てるときに出会ったんだよ。彼女はそれを見て、サトちゃんの隣にいる、なん
だっけ、サトコちゃん？ そうあのピンクの象に蹴り入れて、そしたら薬局の
中から、少しだけブルーがかった白衣、じゃないなあ、ブルーなんだから、と
にかく薬剤師っぽい恰好したおやじが出てきて、てめえら、ふざけんじゃねえ
ぞ、って黄色いプラスチックのバケツに入った水を店先にぶちまけて、俺と彼
女はあわてて駆け出して、それで仲良くなったんだ。それから一緒に靴屋の倉
庫に盗みに入ったりしてね。自分で言うのもなんだけど、本当にいいコンビだ
ったよ」（藤野千夜「おしゃべり怪談」1999〈平成 11〉）

- b 先日、バリバリのキャリアウーマンっぽいスーツ姿の女性が牛井屋さんで勢い
よく食事していたんですよ。それを見ていたら、彼女には牛井屋で食べている
姿を見られることに対するプライドよりも、大きな誇りが他にあるんだと思
いました。（『an・an』No.1523 2006.8.9〈平成 18〉）

属性を示す用法は、174 例見られる。このうち、9 割以上は話者の判断が反映されてい
るように思われる。

7-1. 属性を示す「ーっぽい」の意味・用法

ここで、属性を示す「ーっぽい」の意味・用法について検討し、顕著な特徴を示す用法の
「ーっぽい」と属性を示す用法の「ーっぽい」がどのように異なるかを示す。

以下、形容詞性接辞として用いられる「ーっぽい」の例を挙げる。

- (24) [割合の高さを示す用法]

- a 朝の膳の上には白い味噌汁に高野豆腐に黒豆がならんでいる。
何もかも水っぽい舌ざわりだ。 (林芙美子「放浪記」1928〈昭和 3〉)
- b 緋の筒袖を着、汚れてはいるが白の前掛をかけ、茶っぽい首巻きをした主人は、
煤の垂れさがっている釜の側で、煙管をくわえていたが、
(武田麟太郎「釜ヶ崎」1933〈昭和 8〉)

[顕著な特徴を示す用法]

- c とにかく他の先生がたに比べてよほど書生っぽい質素で無骨な様子をしておられたことはたしかである。 (寺田寅彦「田丸先生の追憶」1932〈昭和 7〉)
- d すると眇眼のおんなが、およそ彼女の顔とは不調和な色っぽい声で、——「でも、こちらは唄えそうな顔をしていらっしゃるわね」
(尾崎士郎「人生劇場」1933-1951〈昭和 8-26〉)

(24)ab は「水気が多い」「茶色がかっている／茶に近い」ことを示す。(24)cd は「書生の特徴が感じられる」「色気が感じられる」ことを示す。これらは、同じ体言接続の接辞用法の例でも、「X と感じられる」ことが示されるものである。

(22) (23) と (24) が大きく区別されるのは、「話者の感覚で述べるならば Y は X」であると照らし合わせることができる点である。改めて (24) を見ると、(24)ab は上接名詞の表す「水気」や「茶 (の色)」が Y に割合として含まれるものであり、「Y は X である」とはいえない。また、(24)d についても、「声は色」とはいえない。(24)c のみ「質素で無骨な様子は書生である」といえそうだが、これは「とにかく他の先生がたに比べてよほど」とある通り、その様子をしている人が「先生」であるということが分かる。この場合、Y (先生) を X (書生) と同定することは不可能である。Y は話者にとって不確かなもの・ことである必要があると考えられる。

たとえば、同じ「やくざっぽい」でも、X と Y が同定できる場合とできない場合とがある。同定できない例は以下の通りである。

- (25)a はじめてやくざっぽい口調をつかい、(野坂昭如「エロ事師たち」1966〈昭和 41〉)
- b 考へてみればじつにをかしな親孝行ですけれど。でも、母が送ってくれた金だと思ふと、そのためならどうしてもこいつらと徹底的に闘はなくちやならないつて気持がフツフツと煮えたぎる。実際そんな具合でしたよ。ああいふのは、かなりヤクザっぽい心理なんぢやないでせうか。

(丸谷オ一「だらだら坂」1973〈昭和 48〉)

これらの例は、「Y はやくざに感じられる」「Y はやくざに見える」といった意味を表すのではなく、「Y にはやくざの有する性質・特徴が感じられる」という Y の性質・特徴を表していると考えられる。

これに対し、X と Y が同定できる例は以下の通りである。

- (26)a こちらを向いている角刈りのやくざっぽい男がおり、女の髪をつかんでカウ

ターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っていた。
(五木寛之「こがね虫たちの夜」1969〈昭和44〉)

- b [写真を見ながら]湘南の海岸でしょうか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぽい男と肩を寄せ合っている。相手の男の名もアルバムに書き込んでいます。

藤上千次という組の者です。(泡坂妻夫『花火と銃声』1988〈昭和63〉)

これらの例では、「男」が何者であるか、「X っぽい Y」と述べられた時点では確定できていない。話者は、「その男はやくざの特徴を有しており」、「(自分からは)やくざに見える」と判断している。このとき、「一っぽい」は「X に見える」ことを意味すると考えられる。「一っぽい」の表す「やくざに見える」は、「断定はしないが少なくとも話者のなかでは男をやくざと同定している」と判断しているということではないかと思われる。また、X と Y が同定できない例は、「口調」「心理」などその人の一部分が被修飾語となるが、同定できる例では「男」「人」など全体を指す語となる。

また、(25)の「やくざっぽい口調／心理」と(26)の「やくざっぽい男」を比較すると、「やくざな心理／口調」とはいえても「この心理／口調はやくざだ」はやや不自然である。これに対し、「やくざっぽい男」の場合は、「やくざな男」「この男はやくざだ」といえると考えられる。つまり、「心理／口調」について述べる「やくざ」は、「やくざの持つ乱暴さや野蛮さ」を表す形容詞と捉えたほうがよく、「男」について述べる「やくざ」は、「やくざという肩書き、やくざである人物の典型」を表すと捉えるべきものであると考えられる。

同様の区別は、「嘘っぽい」や「本当っぽい」といった例にも見られる。以下は、X と Y が同定できない例である。

- (27)a まるっきり想像上のストーリーでも読者から「私がモデルではないか」「全く同じことがあった」といった声がかかる。

「私は嘘っぽいことは嫌い。いつも命懸けで書いていますから」と言い切る。

(産経新聞 1998.7.12〈平成10〉)

- b 逆に、「日の丸・君が代に反対した英雄」として、持ち上げてくる人たちもいた。

「活動家のような人たちに発言を求められるたび、うそっぽい感じがしていやだった。決して、日の丸・君が代がいやだから言った、ということではなかったのに」と振り返る。

(朝日新聞 1997.6.9〈平成9〉)

- (28)a 「私が言葉を探していたのはね、言おうとすることがあまりに平凡なんで、嘘っぽく聞こえるんじゃないかと思ったからなんだ」

(宮部みゆき『夢にも思わない』1999〈平成11〉)

- b 適当な嘘がどんどん積み重なっていく。自分らしくない澁みのない喋り方が口から滑りでて我ながら本当っぽく聞こえた。

(壁井ユカ子『鳥籠荘の今日も眠たい住人たち②』2007〈平成19〉)

(27)a は、小説を書くうえで「嘘っぽいことは嫌い」と述べており、ストーリー自体は想像上のものである。そのため、Y と X は同定の関係にはならない。(27)b は、「活動家のような人たちの言動」を「嘘っぽい」としているが、これは「活動家のような人たちが嘘をついていることを表しているのではなく、彼らの言動が「胡散臭い」ことを意味していると考えられる。また、(28)に挙げた通り、「嘘っぽい」「本当っぽい」の類は、実際に「嘘でない」「本当でない」ことが明らかになっており、「X ぼく聞こえる」の形では必ず実際とは逆の内容を示す。以上の例から明らかな通り、「嘘っぽい」「本当っぽい」において X と Y が同定できない場合、その話が本当に「嘘」か「本当」かが明らかになっているということがある。中身の分かっている場合は、X と Y を照らし合わせ、同定する用法にはなり得ないのである。

これに対し、以下の例では、「Y は X である」と照らし合わせ、同定することが可能である。

(29) 「要するに決断を先送りにして、周りの空気に流されながら行き先を決めていくタイプだな。行きたくもない高校に通い、吸いたくもない煙草を吸い、やはりみんなが行くからという理由で名前も聞いたことのない私立の大学を卒業する。そうしてろくな志もないくせに会社員になって、ずるずると生活をするんだよ。退屈な日常に嫌気がさして、で、賭けごとに手を出して、またずるずると落ちていくタイプだ」

「写真を見ただけでよくそこまで分かるね。さすが響野さんだ」久遠がからかう。

「私は何でも分かるよ。今度の現金輸送車の襲撃だってこの男が主犯じゃないさ」

「それは俺も同感だ」成瀬は言った。実際にあの時の様子を思い出してみれば、林という男は現行のリーダーシップを取るタイプには到底見えなかった。

「成瀬さんが言うとは本当っぽいなあ」久遠がにやにやとしながら言った。

「私が嘘しか言わないみたいじゃないか」

それではまるでおまえは本当のことを言うことがあるみたいじゃないか、と口の先まで出かかるが、話をつづけた。

(伊坂幸太郎『陽気なギャングが地球を回す』2003〈平成 15〉)

響野が推測した「今度の現金輸送車の襲撃は、この男が主犯じゃない」という内容は、この会話が成された時点では真偽を確かめようのない、不確かな推測内容である。このとき、「成瀬さんが言うとは本当っぽいなあ」は、「(成瀬が同じことを言うと) 本当に聞こえる」ことを示していると思われる。また、同時に「真実味がある」という意味も示していると思われる。

7-2. 属性を示す用法とその広がり

前節から、体言を承ける「ーぽい」が「話者から（Y が）X に見える」という話者の判断を示すとき、形容詞性接辞では「（Y が）X の性質・特徴を有する」ことのみが示され、話者の推測を示す用法では「（Y が）X の性質・特徴を有する」ことと「（Y が）X に感じられる／見える」ことの両方が表されると考えられる。「（Y が）X に感じられる／見える」という話者の判断を示すには、「X=Y」という同定関係が成り立つこと、Y が実際にはどういったもの・人なのかが分からないことを、文脈から読み取れることが必要である。

特に連体形の場合は、「X に感じられる／見える」ことを表し得る「ーぽい」でも、「X の性質・特徴を有する」ことを表す意味合いが強く感じられる。これは、連体形が被修飾語 Y の性質・特徴を表す用法を呈することによるのではないかと思われる。「嘘っぽい」「本当っぽい」の例において、連体用法では「うさんくさい」「真実味のある」といった、いかにも嘘／本当の話らしいことが示されている。これに対し、終止用法では話者からどう見えるか／聞こえるかということが示されている。この連体用法・終止用法の差は、名詞接続においても顕著である。以下は、人やものの属性を示してはいるが、同時に、それが話者にとってどう見えているかを示しているものでもある。

(30) a 居合いの道場主って/言ってたけど/昔は名主とか/庄屋とか いわゆる/大地主じゃ/なかったのかなア//他の家は/結構かたまって/建ってるのに一軒だけ/特別扱いっぽいもンね (樹なつみ『八雲立つ』1巻 1992〈平成4〉)

b この人 知的で/ヒルシャーさんの/好みっぽいなア… トリエラの/恋路がピンチ/だよ… (相田裕『GUNSLINGER GIRL』10巻 2008〈平成20〉)

(31) [郁が声を掛けた少女は耳が聞こえなかった。それを小牧に指摘された]
一段落するまで様子を眺めていた手塚が一人になった郁に駆け寄ってきた。
「何だったんだ？」
「いや、何か……小牧教官の知り合いっぽい。耳が不自由なんだって」
何かワケありみたい、と付け足したくなるのは柴崎の野次馬根性が伝染ったのかもしれないが、彼女に向けた小牧の笑顔は何だか特別のように見えた。

(有川浩『図書館内乱』2006〈平成18〉)

これらの例でも、話者にとって「Y は X に見える」という判断が表されていると考えられる。ただし、目の前の／過去の状況を話者の言葉で言い表すものとは異なり、発話時に見えている状況を踏まえて、あるものや人の性質・特徴が示されている。以下のような句接続の例も同様である。

(32) a NHK 第一放送昼のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっぽいじゃない。猫はそうじゃない。」 (言語生活 1986.5〈昭和61〉)

- b 私は見た目がハデに見えるらしく、周りからは「彼氏いそう」「遊んでるっぽい」
とか言われるんですが、実はぜんぜん。(『spring』No.221 2008.2.23〈平成 20〉)
- (33) 「カールは/来ないのかなァ」
「来ないですよ/普通//でも/あの姫の/事だから/おもしろがって/呼んだりして」
「どうかな/ナジェイラ殿下は/あのカールだけは/苦手っぽい/らしいぜ」
(樹なつみ『花咲ける青少年』6 巻 1992〈平成 4〉)

- (34) 「館長が早く復帰してくれたらいいんだけどねえ……」
柴崎のぼやきも珍しく深刻だ。
「具体的にはどういう感じに問題なの」
「教育委員会の言いなりって感じよねー。推薦図書入れろの望ましくない図書外
せの。教育委員会に限ったことじゃなくて、とにかく権威のあるところからの要請
に逆らえないっぽい」
「何それウザー！ 何でそんなのわざわざねじ込んで来るわけー!？」

(有川浩『図書館戦争』2006〈平成 18〉)

これらの例では、犬や人の性質が、話者にとって「X に見える／感じられる」ことが示
されていると考えられる。観察は、目の前だけではなくやや長い期間で行われていると考
えられる。

また、属性を示す用法では、判断に他者が関わるものや、過去における判断を示すもの
も見られる。まず、判断に他者が関わる例を挙げる。

- (35)a 「ねェ…あの子の/つけてる宝石/本物っぽくない？」
「まっさか/あんな大きな/偽物に決まってる/わよ」
「そっ…/そうよ/ねェ」 (樹なつみ『花咲ける青少年』1 巻 1990〈平成 2〉)
- b 「これって、凄く青春っぽくない？ 高校生活最後の行事。歩行祭の、一番終わ
りの頃になって、ようやくこれまで口きいたことのない、憧れのクラスメート
と話してる」
融は絶句したが、つられて笑った。
「だな。しかも、腹違いのきょうだい。超メロドラマ」

(恩田陸『夜のピクニック』2006〈平成 18〉)

目の前で観察している状況から、「あの子のつけてる宝石は本物に見える」「この状況
は青春に感じられる」と判断している。そのうえで、さらに話し相手（聞き手）に疑問の
形で伝えている。

また、以下のような、他者にとってどう見えるか／感じられるかを示すものも見られる。

- (36)a 同じサークルの A 子は、話をマイナスな方向に脚色して広める、困った人。私
についても、「彼と 10 日くらい会ってない」と言っただけで「二人はもうダメ
っぽい。というのも彼のほうが彼女に飽きてきてて他に好きな女が……」と変

えて広めていた。迷惑な想像力。(20 歳・大学生)

(『non-no』No.857 2008.9.5 〈平成 20〉)

b [制服に]ベストをプラスすると落ち着いて見えるっぽい。

(『popteen』No.348 2009.10.1 〈平成 21〉)

(36)a であれば、「彼と 10 日くらい会ってない」という発話内容を、A 子が「二人はもうダメ」というように解釈(想像)していることが「一ぱい」によって示されている。(36)b では、「制服の上にベストを着る」ことが他者によって「落ち着いて見える」ことが「一ぱい」によって示されている。これらの「一ぱい」は、話者から「X のように見える／聞こえる／感じられる」かを表すのではなく、話者からすると「他者にとって X のように見える／聞こえる／感じられる」ことを示しているのではないかと思われる。以下の例も同様である。

(37) とにかく頭を使ってるっぽいことは積極的にやる！ においもリラックス効果がある=脳に刺激を与えるってことにちがいない！

(『popteen』No.348 2009.10.1 〈平成 21〉)

(38) [東京ディズニーランドは]男同士で行くのもなんかなあって感じで。だからやっぱり彼女と行きたい！ 温泉行ってマッサージもいいな。あ、でもマッサージはなんか(彼女を)使ってるっぽくてイヤかも。

(『KERA』No.140 2010.4.16 〈平成 22〉)

(37)の「頭を使ってるっぽいこと」は、読書なりクロスワードパズルなり、ある人が頭を使っていると思うことがそれにあたる。「読書が頭を使う」かどうかは個々人によって判断が異なると考えられる。(38)は、「マッサージ」は他者に「彼女を使っていると見られる」ことを示していると考えられる。

次に、過去における判断を示す例を挙げる。

(39)a そうして、目が覚めればあの女の姿がなくなっていたというワケだ。

「——何なんだ、あいつ」

思わず呟く。冷静になって思い出してみれば、両儀[リョウギ：人名]は俺と同じ年ぽかった。女、というより少女という形容の方がしっくりくる。

十七歳といったら学生だ。という事は高校に行ったのだろうか。いや、それにしてもこの部屋は殺風景すぎる。部屋にあるのはベッドと冷蔵庫と電話機、それと上着掛けに吊された四着の革ジャンと、洋服入れらしい箆笥だけだ。テレビもオーディオもない。読み捨ての雑誌もなければテーブルさえなかった。

(奈須きのこ『空の境界 the garden of sinners』上 2004 〈平成 16〉)

b 「おじいちゃんの部屋も、行き届いていて、いつでも清潔だし、お医者さんは、去年とちがう人だったけど、若くて、名医っぽかった。——やっぱりお金があれば、ああいういい所で、余生を送れるんだなあー」

(藤谷治『誰にも見えない』2007 〈平成 19〉)

- c 「そっか、それもそうだよね……大丈夫だってわかったら、駅員さんから連絡、あると思う？」

「どうかなあ。でもあの駅員さん、いい人つぼかったから、連絡はくれると思う」
(柴田よしき『やってられない月曜日』2010〈平成 22〉)

これらの例では、過去に出会った人（両儀・お医者さん・駅員さん）が、「(過去の場において) Xに見えた」ことが示されていると考えられる。上接名詞が示すのは、その人にとって恒常的な性質や特徴である。また、連用形でも、過去において「Xに見えた」ことを示す例が1例見られる。

- (40) 正直なところ、紙に描かれた似顔絵は、全身を描いた大雑把なもので、犯人の特徴を表現しているとは言いがたかった。曖昧で、煙が描かれているのと大差ない。ただ、「犯人は、男が二人に、女が一人だったそう。男はホストつぼくて、女は露出度の高い服を着ていた」という河崎の説明を聞いた瞬間、わたしはその場に座り込みそうになった。背中に、あるはずのない氷が、落ちる。商品棚に寄りかかった。やっぱり、あいつらだ。やっぱり、あの時の三人がペット殺しだ、わたしは内心で繰り返す。

(伊坂幸太郎『アヒルと鴨のコインロッカー』2006〈平成 18〉)

この例では、犯人を見た時点において「男はホストに見えた」ことが表されていると考えられる。

属性を示す用法は、連体用法において人やものの特徴・性質を示すという接辞としての意味を強く示すものもある一方で、終止用法において話者からどう見えるか／感じられるかということを示すものもある。また、他者からどう見えるかを示したり、過去にどう見えたかということを示したりする場合もある。以上のことから、話者の推測を示す用法や、話者が観察している状況を言い表す用法に比べると、最も意味・用法が広く、近年の「一ぱい」の主となる意味・用法なのではないかと考えられる。

8. おわりに

以上、話者の判断を示す「一ぱい」について検討した。

話者が直接知覚することのできないもの・ことに対して「一ぱい」が用いられる場合、その「一ぱい」は話者の推測を示していると考えられる。一方で、話者の判断は、目の前で見えている状況や過去に見た状況を示す場合にも用いられる。特に、目の前で見えている状況を、話者の言葉で示す用法が、話者の判断を示す「一ぱい」のなかで一般的であると考えられる。

また、話者の内面を示す場合や、自分の意見をはっきりと言わず、曖昧にする場合にも用いられる。近年では、相手の推測内容を肯定する場合にも用いられており、話者の判断を示す「一ぱい」の用法は、未だ広がりを見せていると考えられる。

第5章 「ーらしい」の意味用法の変遷

0. はじめに

「ーらしい」の意味用法の変遷を、主に上接部の変化に着目し、検討する。意味用法による区分は、

1. 中世・近世前期……接辞用法のみが見られる
2. 近世中期……接辞用法が変化する
3. 近世後期以降……推量用法が成立する

の大きく3通りである。

一方、明治期以降は主に「ーらしい」の形に変化が見られ、

4. 明治期・大正期……形容詞／形容動詞語幹接続の語が盛んに見られる

活用語の言い切りを承ける例が定着する

上接部と「ーらしい」が切り出される例が見られる

5. 昭和期以降……形容詞・形容動詞語幹接続の語が見られなくなる

といったことが指摘できる。

1. 中世・近世前期：接辞用法

村上(1981)にもある通り、中世の「ーらしい」の例は、抄物資料やキリシタン資料に見られる。初出例は(1)aである。

- (1)a 或ル乳母、姫君ヲ養ヒテ、余リニホメントテ、童ワガ養姫ハ、御美目ノウツクシク、御目ハ細／＼トシテ愛ラシクオワシマス〔ゾ〕ヤトイフヲ……

(巻一 86・6)[村上 1981]

- b カハル時分ニ人ラシイ人カアラハ、秦ニ天下ヲ取ラレマイモノヲソ。

(史 四 355・14)[村上 1981]

- c 適婉トハ筆勢ノツヨイヲ云タソ、ツヨイト云テ、鬼々神ノヤウニテアイソモナイソ、美人ノウツクシウ、アイソラシイヤウナ事カ中ニマシツテアルソ

(玉 三五 489・12)[村上 1981]

- (2)a 全體ハ鳥テ、モノヲ云ハ、人ノ様ナハ、アマリハケ[化け]ラシイソ。

(史 四 248・16)[村上 1981]

- b 酷吏ハ、人アタリカ、ナサケナウ、ツヘラシイホトニ、ヨウモナイ者ソ。

(史 一九 624・7)

中世では、(1)のような名詞接続の例と、(2)のような語基・語根接続の例とが見られる。何れも「Xの性質を有する」ことを示す形容詞であると考えられる。

(2)のような語基・語根接続の場合は、上接部「ばけ」「つべ」のみでは意味が取れな

い。これらは、「ばけばけし」や「つべつべし」などの一部であり、接辞「ーらしい」が下接した「ばけらしい」「つべらしい」で「化け物じみた」「残酷な」といった一語の形容詞としての意味を有する。意味のうえでも形のうえでも、接辞「ーらしい」は切り出せないものと考えられる。

名詞接続の例は、形としては切り出すことができるが、意味のうえでは切り出せないと考えられる。まず、(1)a「愛らしい」や(1)c「愛想らしい」は、上接名詞「愛」「愛想」が「愛おいしい気持ち」「人に対して好印象を与える(言動)」であるのに対し、「愛らしい」「愛想らしい」は「そういった気持ちを抱くような性質がある(様子)」ことを示している。上接名詞の元の意味は認められるが、「Xらしい」で人の性質や状態を示す形容詞である。つまり、上接名詞と接辞がそれぞれに独立した意味を持つのではなく、「Xらしい」で1つの意味を持つ語であると考えられる。(1)bの「人らしい」についても、上接名詞「人」が「立派な・徳のある人物」を指し、「人らしい(人)」で「そういった性質・性格を備えた(人)」であることを示す。ここでの上接名詞「人」は、意味としては「立派な」という形容詞であると考えられる。

また、『日葡辞書』『羅葡日辞書』には、以下のような語が挙げられている。

(3) [日葡辞書]

- a Xõneraxij. シャウネラシイ(性根らしい)例, Xõneraxij fito.(性根らしい人)分別があり、しっかりとして、すぐれているように見える人。
- b Vonagoraxij. フナゴラシイ(女らしい)女性に固有な(もの)、または、女性的な(もの)。例, Vonagoraxij fito.(女らしい人)女のように柔弱な男。
- c Votocoraxij. フトコラシイ(男らしい)男らしく雄々しい(こと)。例, Votocoraxij vonna.(男らしい女)雄々しい女。
- d Xucqeraxij. シュッケラシイ(出家らしい)言うことやすることなどがいかにも僧侶らしい。
- e Zocuraxij. ズクラシイ(俗らしい)すなわち, Zocuno yõna.(俗のやうな)俗人のように振舞う、話す、または、俗人のようである。

(4) [羅葡日辞書] (用例は『時代別国語大辞典 室町時代編』より引用)

- a フトコラシキ女。一男の仕事をする、雄々しい女(羅葡日・Virago)
- b フナゴラシク色好ミナル者。一柔弱で好色である。(羅葡日・Galbinus)

「性根」「女」「男」「出家」といった上接名詞は、そのみで1つの意味を成すと考えられる。しかし、先に挙げた「人らしい」に同様、これらの「ーらしい」も意味としては形容詞であり(点線部参照)、上接名詞を切り出すことは不可能ではないかと思われる。

たとえば、(3)b「女らしい」は、上接名詞「女」は人の性別を区別する語と捉えるのが一般的であると思われる。しかし、「女らしい」は、点線部にも示した通り「女性的な」「柔弱な」といった意味を表す。つまり、ここでの「女」は女の性質・性格を指すと考え

られる。(3)d「出家らしい」は、「出家」というと「僧侶になること」を意味するが、「出家らしい」の上接名詞は「出家した人の性質」を示していると考えられる。他の語についても同様で、「ーらしい」が後接する場合、その上接名詞はXの性質を示すと考えられる。

続いて、近世前期の「ーらしい」について検討する^{*20}。中世と比すると、意味・用法は大きく異ならないが、形容詞／形容動詞語幹接続の例ならびに副詞接続の例が見られるようになるという変化が見られる。また、中世の語とはあまり連続せず^{*21}、「つべらしい」「ばけらしい」といった語基・語根接続の例は見られなくなる。

名詞接続の例は、以下のようなものが見られる。

(5) 口もとしほらしき事、おもひやられた。

(編者未詳「きのふはけふの物語」1596-1644〈慶長-寛永年間〉)

(6)a 仁物らしき男、杓の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、ある家のぬしよびいれて、
(安楽庵策伝「醒睡笑」1巻 1623〈元和9〉)

b 其方ハやさしや、秀句らしき事を云、

(中川喜雲編「私可多咄」1671〈寛文11〉)

「ーらしい」の意味は、「Xの性質を有する」であると考えられる。

(5)の上接名詞「しお」は、「人を惹きつける魅力(のある態度)」を表すと考えられる。これは「しおらしい」の意味(かわいらしい、殊勝である、など)とは異なり、意味のうえで上接名詞を切り出すことは難しいと思われる。

(6)の「仁物」や「秀句」についても、中世の「女らしい」や「出家らしい」に同様で、名詞Xと「Xらしい」の上接名詞Xの意味は異なると考えられる。「仁物らしい」は「人らしい」と同じく「仁物」が「立派な・徳のある人物」を表し、形容詞として働く名詞である。「秀句」は「秀でた句」であり、これについても「人」や「仁物」同様、形容詞として働いていると思われる。

(5)(6)のような名詞接続の例を見たとき、「しお」と「仁物」「秀句」では、「仁物」「秀句」のほうが意味のうえで切り出し易いのではないと思われる。

次に、形容詞／形容動詞語幹接続の例を挙げる。

(7)a 親である人、おきゝあれ、錢をせぬとハかたことや。もつともらしきいけむなれと、そちが錢をは、うらがぜぬかいはする事をおもへ、たゞ。

(安楽庵策伝「醒睡笑」4巻 1623〈元和9〉)

b ささやきまはりて、しさいらしくつぶやくひげ口の、よだれ見ぐるし

(作者未詳「難波物語」1655〈明暦元〉)

*20 第一章でも述べた通り、上方・江戸の資料で大きな差は見られないため、区別せずに扱う。

*21 中世から意味・用法を変えずに残るのは「愛らしい」のみである。

- (8) あるへいモシ、豕肉ハたべませんとサ。鴨や白魚をたべますとさ こりんヲヤ、
こわらしい (振鷺亭主人「振鷺亭嘶日記」1626〈寛永 3〉)

近世前期より新しく見られるようになった例についても、意味・用法としては中世に見られたもの、ならびに近世前期の名詞接続のものと同様で、「X の性質を有する」ことを示すと考えられる。

形容動詞語幹接続は、上接部「もっとも」「しさい」が形・意味ともに切り出せるが、「ーらしい」がつくことにより元の意味とは異なる形容詞を形成する。

形容詞語幹接続は、「こわ」のみでは意味が成り立たず、接辞から切り出せないと考えられる。

副詞接続「さもとらしい」に関しても、「さもある」(しかるべき身分・家柄である)・「さもとある」(意味は「さもある」に同じ)の「さもと」であるが、そのみでは意味を取れず、形容詞語幹接続の例に同様、形・意味ともに接辞から切り出せないと考えられる。

2. 近世中期：接辞用法の広がり

近世中期以降についても、「ーらしい」は形容詞である。しかし、これまでのものとは異なる名詞接続の例が見られるようになる。

- (9) 或者、めをわづらひしが、吉岑へ目薬を取にやりてさしたれば、すきとなをりたといふ。とつとぬけたる男聞て、目薬が吉岑に沢山にござるかといふ。一山の内にどこにもござるといふ。をれもとりに行ませうといひしが、あくる晩にきたりて、けふよしミねへ行て尋たが、目薬らしい物ハなかつたといふ。

(作者未詳「当世手打笑」1681〈延宝 9〉)

この例では、上接名詞が目に見える個体である。「目薬らしいもの」で目薬の性質を有するものを示していると考えられる。また、話者が指している(手に入りたい)のは「目薬」であるが、見当たらなかったため、「目薬らしいもの」とすることで「目薬の性質を持ち、そう見えるもの」を広く指しているのではないかと思われる。

この場合の「ーらしい」は「X の性質を有する」ことを示し、「X らしい Y」で「(上接名詞 X を中心として) X の性質を有し、X に見えるもの」を広く指し示しているのではないかと思われる。「ーらしい」が性質を有することを示す点では、中世から近世前期までの意味・用法と同様だが、X が目に見える個体を指し、連体用法においてこれまでと異なる意味が見られるようになることは、大きな変化であると考えられる。

また、以下のような例も見られるようになる。

- (10)a 中小性らしき侍、本町を通りけるに、町のなかはにてせきたのはなをふみきり、おりふし、かひ草履ももたせざれば、僕におゝせて、此あたりにそうりあきな

ふところやあると云つけける。

(鹿野武左右衛門等「枝珊瑚珠」2巻 1690〈元禄3〉)

- b 大名の買物使らしき侍の、挟箱持一人めしつれ、中奉書入るよしにて、三百枚売りわたし、代銀請取り、その人帰られさまに、ひとつふたつ狂言しばめの物語仕り申候が、財布を取残してゆかれし。

(井原西鶴「万の文反古」3巻 1696〈元禄9〉)

「ーらしい」は「(Yは)Xの性質を有する」ことを示し、「XらしいY」で「YはXであることを断定せずに示す」のではないかと考えられる。(10)aであれば、侍は「中小姓」の性質を有し、実際には「侍は中小姓」である。この一文は物語の始めに位置しており、ある登場人物を、とりあえず「中小姓の性質を有し、そのように見える者」として挙げているのではないと思われる^{*22}。(10)bについても同様である。

(9)や(10)の「ーらしい」は、被修飾語YにあたるものがXの性質を有し、個体Xと判断できるものを指す。個体Xと判断できるものを指す例は、以上に挙げた通り、中世の半ばから見られるようになる。ただし、(9)は「目薬らしいものはなかった」のように未実現の事態で用いられており、「目薬のように見えるもの」を広く指し示すのに対し、(10)に挙げた例では、実在する人物Yに対して用いられており、Yの正体(属性)は不明だが、とりあえず「Xに見える」ことが示される点で異なると考えられる。

時代が下ると、「YはXに見える」あるいは「Xと思われる」ことを示す例において、被修飾語が省略されるもの、話者の視点を伴うものが見られるようになる。

- (11)a 又年比三十計なる呉服屋の手代らしきが、さらしの衣唐木綿の香の図の紋つ^{ママ}ぶじたるが、かすかに見えすきておかし。(編者未詳「二休咄」1688〈貞享5〉)

- b 「それはあんまりくりがすぎる。さうした事ではみぢんない。そなたかまひのない身なれば、今世間前髪^{ごろ}比の人迄各別にしやれて、年がまへなる女のしかも後家らしきを、おしなべてすける時なれば、そちを名高き至り後家といひなし、色ずきの浮気大臣共にかづけ、見事にのぼさし段／＼の道行こしらへて、其の間でとる事ぢやが。(八文字自笑「野白内証鑑」4巻 1710〈宝永7〉)

(11)aは、「年齢が三十くらいで呉服屋の手代に見える人」であることが示されていると考えられる。(11)bのは、「相当な年配であるうえに、後家の性質を有し、そう見える

*22 他に、新しい人物が登場した際にも見られる。

- わるさした子供ミな／＼にげちりしが、兄でらしい子、師匠のまゑへゆき、おまへ様を坊主寺やが、山ぶじやと申ますと告る。(矢木ひれすけ作・序「軽口腹太鼓」1752〈宝暦2〉)
- 此音を聞しにや、十八九にて美しい妾のよふな者立出、ハア、梨子が落たハと拾ひあげた処へ、旦那らしき人も立出しが、彼妾のよふな者が、申、むいて上ふと手をたゞき、

(西口舎可候「臍が茶」1797〈寛政9〉)

人」のことを広く指していると考えられる。

- (12) 彼の若衆は、「先達ておつぼねらしい女中の直に御出であそばし、奥さまの見ぬ恋にあこがれ給へば、しばしの間来てお心をなぐさめてかへりてくれ。しからば末／＼はそちが為に成るべし。

(八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉)

この例では、若衆がおつぼねの特徴を有する女中を見ており、そのうえで「先程来た女中はおつぼねに見えた」ことが示されているのではないかと考えられる。

その他の名詞接続の例については、以下の通りである。

- (13)a 十五六なる少人^{せうじん}の、との茶小紋^{ぢやうもん}の引かへし、かのご繻子^{じゆす}のうしろ帯、中わきざし、印籠巾着^{いんろうきんちやく}もしをらしく、(井原西鶴「好色一代男」2巻 1682〈天和2〉)
b 転輪^{テンリン}聖王^{ゼウワウ}から伝わ^{ウツ}つた大事な道具もみんな売^{ウツ}て仕舞かういへば味噌らしいが仏^{マウゴ}に忘語^{マウゴ}なし梵天^{ホンデン}帝釈^{タイシヤク}天^{ウソ}をかけて嘘ではない

(仲夷治郎「白増普言経」1744〈寛保4〉)

- c あちはひ トヤといふもの あがしらぬことゞもはなしたるがまことらしいうそらしいいとおぼつかなし ものびやくそくしたる

(偷空斎主人「阿房枕言葉」1749〈寛延2〉)

以上の例では、上接名詞が目に見えるものとして示されない。(13)ab「しおらしい」「味噌らしい」は、料理に用いる「しお」「味噌」ではなく、「人を惹きつける魅力」「得意げな様子」を表すと考えられる。

(13)cの「まこと」や「うそ」についても、「まこと」や「うそ」は目に見えるものではなく、「ーらしい」で「真実味のある」「うさんくさい」ことを表す。ただし、「まこと」「うそ」は本来目に見えるものではない。そのため、「あの話は嘘だ」のように「X=Y」であることを示し得る。

また、今期の名詞接続の「ーらしい」の意味・用法として、亀井(2003)に以下のような例が挙げられている点に注意される(用例下線は亀井氏、出典は岩崎が補足)。

- (14)a せめて一ごんいさぎよく弓取らしい詞をきかせ。はぢをすゝいでくれよとて
(近松門左衛門「姫山姥」1712〈正徳2〉)
b きりやうのよい人を斯波ノ左衛門よし将と名付。心にいさみをつけたらばをのづとくすりもまはらんと。いしやしゆのさしづなれ共ほんのおとこはならぬ故。
男らしい女中のお尋にてかく迄談合なりしこと

(近松門左衛門「雪女五枚羽子板」1708〈宝永5〉)

これらの例では、(話者が)上接名詞に対して抱く(典型的な)イメージが発話に関わるのではないかと考えられる。亀井(2003)では、(14)aのような「ーらしい」について、

対象 A に対して「A らしい」という語が発せられており、「それが本来持っている性

質を見せている」「A というにふさわしい様子である」と解することができる。
と述べられており、一方、(14)b のような「ーらしい」については、

A ではない別の対象 B に対して「A らしい」といっているもの、あるいは A らしくあることを望んでいるものである。この場合「A のような様子である・A に似ている」という意味になる。

とされる。

形容詞／形容動詞語幹接続、副詞接続の例については前期と同様である。

(15) [形容詞語幹接続]

- a 中にも旅功者ぶる奴をとらへて、「長の旅やつれでさへいとらしき男」と、菅笠のひものあたりしほうげたをなでて、
(八文字自笑「野白内証鑑」5 巻 1710〈宝永 7〉)
- b 大学柄の人形をこのうち一つこれかかはいらしいといふ類これをかまとゝ言といふ也
(陳可憐「会海通窟」1743〈寛保 3〉)

(16) [形容動詞語幹接続]

- a 我はたゞ、母様は傾城と、一季半季の者にまで、触れ回りとる村時雨、縁には付かじと願ひしに、あの立野の阿呆面、敷銀に目がくれて、嫁に取らうといやらしい。
(近松門左衛門「五十年忌歌念仏」1707〈宝永 4〉)
- b これ／＼物問はう。備前屋と申す傾城屋はいづかた。その御内に松風殿と申す傾城。御存じならば教へてたべ。我ら当所不知案内。頼み入るとぞ堅苦し。フウ子細らしい物の言ひやう。
(近松門左衛門「女殺油地獄」1721〈享保 6〉)

(17) [副詞接続]

亡人共の中にさもとらしき女性上臈など、娑婆にては土をも踏まぬやうなる姿成(なる)が
(作者不明^{*23}「小夜嵐物語」1698〈元禄 11〉)

形容詞語幹接続ならびに副詞接続の例は、上接部が意味・形ともに「ーらしい」から切り出せず、形容動詞語幹接続の例は、意味としては切り出せないと考えられる。

3. 近世後期：接辞用法と推量用法への派生

近世後期以降、「ーらしい」は終止用法で推量を示すようになる点で大きく変化する。また、1700 年代後半に、以下のような副詞を承ける例、ならびに連体形の例が見られる点にも注意したい。

*23 『国書総目録』では「井原西鶴？」とある。

- (18) 幸「何サ、あれでも女に懸けては、ばんばの忠^{ちうざ}左サ。しかし菊さんとやらが、能くしてやつて、くんなんせばいいが。」琴「あの子は、どうもちつと。」幸「どうした。」琴「ちつとだから。」幸「とは。」琴「ちつとうぬぼだから。」幸「ム、さうらしいよ。」
(夢中山人「南閨雑話」1773〈安永2〉)

ここでの上接部「そう」は、話し相手が発話した「あの子はちつとうぬぼれ屋だ」というのを承けており、「そうらしい」で「あの子はうぬぼれ屋に見える」ことを表していると考えられる。上接部は意味・形ともに接辞から切り出すことが可能であり、話者からどう見えているかを示している。湯沢(1954)ではこれを推量の例とされているが、「うぬぼ」は人の性質を示すものであり、話者から「Xに見える」ということは示されているが、形容詞とみてよいのではないと思われる。

話者から「Xに見える／思われる」ことを示す例は、連体形にも見られる。

- (19) 女郎「向ふに人／＼。早く来さつせへよ」金十郎「明日の朝は茶漬けを食いの、ずい帰りだぜへ。今夜はおゝかた、菊園か菊の井といふ名代らしい晩だ」喜八「悪推ばかりおつせんす。行灯に無駄書き、もう帰るも古いやつね」

(奈蒔野馬乎人「^{左通}啞多雁多帳」1783〈天明3〉)

- (20) 財布持ち「昔は代物を貸した上に、代をば、やつぱり貸した方から取りに回つたそうだが、ほんの事か知りませぬ。どうやら嘘らしい事だぞ」

(万象亭竹杖為輕「従夫以来記」1784〈天明4〉)

以上の例では、「おおかた」「どうやら」といった副詞が共起しており、「(今夜は)菊園か菊の井といふ名代らしい」「昔は代物を貸した上に、代をもやはり貸した方から取りに回ったという話は嘘らしい」というのが、話者にとって「そう見える／思われる」内容であり、ここでの「-らしい」は推量を示しているのではないかと考えられる。

1800年代以降、終止用法の推量の例が見られるようになる。

- (21) てい「サアーぷくあがらんせ。いつたいおまいは、どこを尋ねさんすのじやいな。参宮じやあるが、おひとりか。但しは、おつれでもおますかいな 弥次「さやうさ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたアございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰瘤のあるおかたじやおませんかいな 弥次「さやう／＼」

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編追加 1806〈文化3〉)

- (22) 目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいネ

(式亭三馬『浮世風呂』3編 1811〈文化8〉)

- (23) よね「ヲヤ丹さんまだ宅へおかへりでないか。今に梅次さんと ^{いま} ^{うめじ} ^{いつしよ} 一所にかへるから、ちつと待てお出ヨト、いひながら完^{まつ}尔^{いで}笑ひ、酒乱の客 ^{につこりわら} ^{なまゑひ} ^{きやく} のともして多寡^た橋^{かばし}の、方^{かた}へ過^{すぎ}行^{ゆく}後^{うしろ}かげ、丹はびつくりお長はかけ出し ^だ 長「ヲヤ米八さ^だんじやアありま

せんか 丹「ナニ／＼^{よね}米八ではねへト、口にはいへど心にギツクリ。^{いま}今米八が
其^{そこ}近處から、かへり^{きた}來らば大變と、思^{おも}へば何かそは／＼して「サアもふよか^{かへ}ア販
らふの 長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八さ^んらしいヨ。かくさずとい
ゝじやアありませんかト (為永春水『春色梅児誉美』初編 1833〈天保 4〉)

これらの例では、話者がある根拠に基づいて「[A は X である]らしい」のように推量している。(21)は「いかにもお江戸らしい人だが」と取ることも可能であり、やや判断の難しい例である。これに対し、(22)は「(目のふちへ紅を付るのは)役者から出た事である」、(23)は「(さっき見えたのは)米八さんである」と話者が判断しているため、推量の例と考えてよいと思われる。その根拠は話者が見聞きしたことや、人の様子・言動であり、(その場の)知覚に基づく判断であると考えられる。

以下、前期と同様の意味用法の例を挙げる。

次のような名詞接続の例は、「X の性質を有する」ことを示す。

(24) a 不気転な幽霊じやな 幽霊なら幽霊らしい 怖い事も何もない そのやうに震
わずとも あら恨しやと あの十三さんを悩ましたがよいわいなア

(並木十輔「けいせい陸玉川」1767〈明和 4〉)[亀井 2003]

b 此ごろはやりのびろうとまがいの美女結び、「赤いのはあんまり子どもらしいか
ら、鵜茶のにしてくんなさい」と、上下をたづねさせ、

(山東京伝「江戸春一夜千両」1786〈天明 6〉)

(25) a 仇「それだつても夫婦より合てまん／＼たるわたずみ、あまのさかほこおさせ
たまひツサ、氣障じやアねへかのう、いやらしい

(為永春水「春色辰巳園」後編 1834〈天保 5〉)

b 自慢らしいいふことが皆へこたこじや。じやによつて、江戸子はへげたれじや
といふはいな。

(式亭三馬『浮世風呂』2 編上 1810〈文化 7〉)

(24)は、(話者が)上接名詞に対して抱く(典型的な)イメージが発話に関わる。(24)a は、亀井(2003)にもある通り、「一らしい」が上接名詞 X の典型的な性質を示していると考えられる。典型的な性質を示す例は、「幽霊に対して幽霊らしくしろ」と述べている点から判断される。(24)b は、「赤色」が「幼さ」を表しており、典型的なイメージは関わっているが、「子供に対して子供らしい」というのとは異なる。

これに対し、(25)は「しお」「自慢」に典型はなく、典型的なイメージとは関わらず、「X の性質を有する」ことが示されると考えられる。

(24) (25)のような「X の性質を有する」ことを示す例と、(19) (20)のような推量を示す例とは、性質を示される人やものが明らかであるか否かで区別されると思われる。上述の例によると、

【接辞】

○「X (幽霊)」に対して「X (幽霊)らしい」

○「X でないもの（赤色）」に対して「X（子供）らしい」

○「X でないもの（夫婦より合て…という言い回し／江戸っ子）」に対して「X（いや／自慢）らしい」

【推量】

○「話者からは分からないこと（今晚来る女郎／昔は代物を貸した上に、代をもやはり貸した方から取りに回ったという話の真偽）」に対して「X（菊園か菊の井といふ名代／嘘）らしい」

という差異によって区別されるのではないかと思われる。

また、以下の例は、「ーらしい」が「YはXに見える」ことを示すものである。

(26) a 向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中を、ながして下せへといつたら、ハイとこいて、六十ばかりのぼゞアめが、たはしをもつて、きやアがつて、おせなかを、あらひませうかとぬかしやアがる
(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編上 1806〈文化3〉)

b 卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて表へ出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたトいふがいひがかりで喧嘩よ。それから聞きねへ、其色男をノ聞きねへ、むごくぶちのめすもんだから、きねへ」
(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之巻 1820〈文政3〉)

先の「中小姓らしい侍」などに同様だが、(26)では話者の視点を介して「Y（向こうの流しにいるやつ／門口で突き当たったやつ）はX（かの年増／でんぼう）に見える」ということが示されている。話者からどう見えるかという判断が示されていると考えられる。

形容詞／形容動詞語幹接続、「そうらしい」以外の副詞接続に関しては、前期と同様である。

(27) [形容詞語幹接続]

a そこで鼠どもがこいつはふしぎだ 六部や順礼のふんどしは、みなかはいらしい歌三味せんのねがするに なぜ北八とやらがふんどしは、義太夫三味せんのねがするだろふといふと (十返舎一九『東海道中膝栗毛』2編下 1804〈享和4〉)

b するとかわいらしい禿が、鹿の子のふり袖を着て、
(三笑亭可楽作「新作種がしま」1811〈文化8〉頃)

(28) [形容動詞語幹接続]

a 唐から日本へはしか見まひとハ、あんまりあほうらしいことじや。
(玉路堂左牛「新撰軽口麻疹噺」1803〈享和3〉)

b 串戯にもそんなことをいはれたことのない私、馬鹿らしい程一途の氣性、何が證古にいふのだへ。(為永春水『春色梅児誉美』初編 1832〈天保3〉)

(29) [副詞接続] 大双紙にさもとある人と見ゆ今さもとらしきといふも是也

(谷川士清「和訓栞」1777-1862〈安永6-文久2〉)

いずれも、「Xの性質を有する」ことが示されると考えられる。

4. 明治期・大正期：接辞用法と推量用法

明治期・大正期の「ーらしい」は、

① 形容詞／形容動詞語幹接続の例が、現代語に比べて盛んに見られる。

という特徴が挙げられる。これは、昭和期の初め頃以降になると徐々に見られなくなる。

また、明治期・大正期以降の特徴として、

② 活用語の言い切りを承ける「ーらしい」が定着する。

③ 「ーらしい」が形のうえで上接部から切り出される例が見られるようになる。

④ 相手の発話を承け、それを肯定して推量する。

の3点が挙げられる。

まず、① 形容詞／形容動詞語幹接続の例が、現代語に比べて盛んに見られる点について見ていく。

(30) a 課長の首になる、そのまた恐らしい髯首が暫らくの間眼まぐろしく水車の如くに廻転している内に次第々々に小いさく成って……

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

b その不思議な沈黙が、互に呼び交わす惨らしい叫び声よりも却って力強く人々の胸に響いた。

(有島武郎「生れ出づる悩み」1918〈大正7〉)

(31) a 縹致は好くっても品行は方正で、曾て浮気らしい真似をした事はなく、唯一心に勉強してお出でなさるから漢学は勿論出来るシ、英学も……今何を稽古してお出でなさる

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

b にっと片頬に笑みを湛えて妹は君に悪戯らしい眼を向ける。

(夏目漱石「虞美人草」1907〈明治40〉)

c 悪名ばかり負っているものには、他人の、——殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。

(芥川龍之介「報恩記」1922〈大正11〉)

これらの「ーらしい」は、現代語では「ーそうな」などが後接したほうが自然に思われる。

こういった明治期・大正期の「ーらしい」について、鈴木(1988)では以下の通り述べられている。

a. 明治前期以降、今日と異なるラシイの意味・用法は漸減する。

b. 今日と異なるラシイは、明治前期と大正期に特に目立つ。

c. 今日と異なる意味・用法のラシイの中では、接尾語としてのラシイが助動詞ラシイより大きな割合を示す。

- d. 今日と同じ意味・用法の中では、助動詞としてのラシイの割合が漸増して行く。

ここに挙げられる b のなかに、「ーらしい」が「ーそうだ」「ーようだ」などと置き換えられる「ーらしい」が含まれる。いずれも、明治後期から大正期にかけて「ーらしい」が凌駕するが、昭和期に入ると「ーそうだ」「ーようだ」のほうが優勢になるとある^{*24}。

続いて、② 活用語の言い切りを承ける「ーらしい」が定着する点について検討する。まず、近世における活用語を承接する例を見ておきたい。現代語では、「ーらしい」は活用語を承接して推量の意を表すが、近世ではその用法はまだ十分に定着していない時期であったとされる。湯沢(1954)(1962)では、以下のような活用語を承接する「ーらしい」の例が挙げられている(用例出典は岩崎による補足)。

(32)a 知行から此比取られたらしき中間が封じ文出して、此上書一つお目借りしましよと云へば (井原西鶴「好色盛衰記」五ノ第四 1688〈元禄元〉)

b ゑゝしこなしたらしいなんぞいの、いやらしいといふて立のきますと、男の方からしたいます (狂言「傾城暁の鏡」1708〈宝永 5〉)

c あの〇〇さんはおぬしに余程気があるらしい
(二世為永春水「いろは文庫」12 編 出版年不明)

d ame ga furu-rashii, it looks like rain; (J.C.ヘボン『和英語林集成』1867〈慶応 3〉)

湯沢氏によると、(32)a は「語形が文語的」、(32)b は「「しこなしたらしい」で、一語の形容詞と見るべきが如くである」と述べられており、助動詞「ーらしい」とはみなされていない^{*25}。

また、原口(1971)では、『いろは文庫』の例として、湯沢(1954)の例に加えて、新たに次の 3 例を挙げられている(下線は原口(1971)による)。

(33)a まア那分^{あのみん}じやア大丈夫、そんな気は何所へかなくなつて仕舞たらしい。(一三編七八回、五五七ノ一)

b お腹も餘程大きくなつて、乳が黒くなりました处では、最^もう大かた五月ぢかく

*24 なお、すべての形容詞／形容動詞語幹接続の例が現代語では見られないというわけではなく、「可愛らしい」「馬鹿らしい」などは近世から現代まで見られるものである。用例は以下の通り。

○これまでも可愛らしいと思わぬことはなかったが、今日はしみじみと其美しさが身にしみた。
(伊藤左千夫「野菊の墓」1906〈明治 39〉)

○何だか馬鹿らしいような気がした。
(田山花袋「蒲団」1907〈明治 40〉)

○その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰り返して憚らなかった。
(夏目漱石「道草」1915〈大正 4〉)

*25 助動詞の「ーらしい」について、湯沢(1962)では〈助動詞としては現代口語の「らしい」の如き重要な地位を占めるに至つて居ない。〉とし、これは「げな」「そうな」「ような」が、用いられるためであると述べられている。

なつて居るらしく見えますが、貴公^{あなた}あんな事をなすつて、何様^{どうし}為やうと思し召しますエ。(一四編八三回、五九五ノ四)

- c 実は鹽谷の浪人で、其内に大星といふ人も交つて居るらしいが、名を変へて居る様子だから分かりかねると咄して聞せた人がございますから、夫が真正^{ほんたう}なら大変だが、(一五編九〇回、六四七ノ五)

その後、明治期以降になると活用語を承接する「ーらしい」が定着する。これについては、先に挙げた原口(1971)が詳しい。原口氏では、〈明治前期の資料では、ごくわずかの用例が諸書に散見するだけのようである。〉とされ、以下の例を挙げられている^{*26}。

- (34)a 万世橋の南の樹木の際で、八九人の車夫が寄り集まつて上へ錢や札を並べ、何か的中ものをしてゐる傍に、柿を喰ひながら、うろ／＼して見張りをして居るらしい者も見えました。

(明治八年十一月九日、東京日日、二巻四三一ノ四ノ三二)

- b オ、其曲者で思ひ出したが此茶店の婆さんハ先きから外してゐるらしいが東京者だけあつてぬかりハないがモシ先生屹度一癖ありますぜといふ所へ、

(岡本起泉『嶋田一郎梅雨日記』〔明治一二〕二編中、七五ノ上ノ七)

これに対し、明治期の半ばを過ぎると、上接部末は、テイル形・ル形・タ形、助動詞、形容詞の言い切りなど、様々な形を取るようになる。

- (35) 皆その隣の家の者の住居にしてある座敷に塊まっているらしい。

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

- (36) これまで何事も打ち明け合つて、お互の間に秘密と云うものを持っていたことのない二人が、厭でも秘密のあるらしい、他人行儀の挨拶をしなくてはならなくなつたのである。

(森鷗外「雁」1911-1915〈明治44-大正4〉)

- (37) 七月頃、海軍編集書記を辞したらしい。(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

- (38) 人々は全たく此处に人あることを気がつかぬらしい。

(国木田独歩「酒中日記」1901-1904〈明治34-37〉)

- (39)a ずっと見渡すに、上流の人は割合いに少いらしい。

(森鷗外「青年」1910-1911〈明治43-44〉)

- b 悪魔には、この花のさいたのが、骨を折っただけに、大へん嬉しいらしい。

(芥川龍之介「煙草と悪魔」1916〈大正5〉)

^{*26} 文語風文体の例として「ーらし」についても挙げられている。以下、原口(1970)の例を挙げる。

○此節大坂では、銅貨一厘錢の相場が十圓に付八十錢と迄騰貴し故、是迄拂底の処尚々種切になり、此原因は奸商等の仕業にて沖繩県へ輸送するとか言ふらし。

(明治一三年二月一七日、いろは新聞、四巻一六七ノ四ノ二九)

○浩爾が泰然驚く色なく。借金の淵に日を暮るも。其融通のさすがにも。尚おこなはるゝ故なるらし。

(坪内逍遙『当世書生気質』〔明治一八一 一九〕四回、七六ノ上ノ一三)

- c そういう下等な打算よりほかに、人間の心を動かすものを、一つだって知ってないらしいね。
(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

しかし、様々な形が見られるようになるとはいっても、明治期から大正期にかけての活用語の言い切り＋「らしい」の例は、連体形を取るものの割合が高いようである。

以上のことから、「一らしい」の推量用法は、最初は名詞を承けるものであり、その後、活用語の言い切りを承けるようになっていったと考えられる。このことと関連して、近世から明治期・大正期までは、活用語の言い切りを承接しても、推量用法の例とは言い難いものが見られる点には注意される。明治期、活用語を承接する形が一般的になってから、活用語の言い切りを承ける「一らしい」が定着すると考えられる。

- ③ 「一らしい」が形のうえで上接部から切り出される例を挙げる。

- (40) [省略]元來大和琴の曲は初は獨奏の物にて發達いたした、らしい事です、それは管搔、又は空搔等の名に就て、考えへて見ても、さう思はれます、

(松本操貞「国楽改良意見」1895〈明治 28〉)

- (41) 世人の敗徳汚行は多くは奢侈に起因し、社會の腐敗墮落亦之に基づくものなり、先日慈善事業家たる原胤昭氏來りて、余に揮毫を需めらる、其は原氏が保護の下に立つ衆くの人々に誠告せらるゝ爲めなりと云へり、乃ち「らしく」ぶるなの六字を題して與へた、平々凡々たる語の如くなれども貴賤貧富を別たず男女老少を問はず宜しく服膺すべきの價值ありと思ふ、紳士にあらずして紳士ぶるか、紳士にして資格に似合はしからぬ所謂紳士らしくせぬ結果は、自己の一身に止まらず社會の表面にまで種々の弊毒を流布せしむるものである。

(清浦奎吾「社会の腐敗救治意見」1901〈明治 34〉)

(40)は、句点によって上接部と「一らしい」とが区切られている。(41)は、「らしく」とある通り、上接部が省略されている。紳士でないのに紳士のように振る舞うというような、「Xらしくするのがよくない、そのようにするな」ということを「らしく」ぶるな」と表現しているのではないかと思われる。省略された上接部は、紳士など人物の属性を表す名詞であると考えられる。(40)(41)のような例にある通り、明治期になると、「一らしい」が形のうえでも上接部から切り出される例が見られるようになる。

最後に、④ 相手の発話を承け、それを肯定して推量する例を挙げる。これは、副詞「そう」を承ける場合に見られる。

- (42)a 「それを今だに謎だと思ってるんですか」

「宗近の阿爺の口占ではどうもそうらしいよ」

(夏目漱石「虞美人草」1907〈明治 40〉)

- b わきにいた武子はそれに賛成した。

「本当にあの方は綺麗な手をしていてよ」

野島はそう云われてから注意して見たが、

「そう云えばそうらしい」

位に切りわからなかった。

(武者小路実「友情」1919〈大正 8〉)

「そうらしい」は、話し相手の推量を承け、話者がその内容を肯定し、推量していると考えられる。たとえば、(41)aは「それを今だに謎だと思ってる」、(41)bは「あの方は綺麗な手をしている」という相手の発話内容に対し、その内容を肯定し、真であると推量している。

以上が明治期・大正期特有の、あるいは明治期・大正期以降に見られる「ーらしい」の意味・用法である。以下、前期から見られる「ーらしい」の例を挙げる。

(43)a ニッコリとした口元の塩らしいところを見ては是非を論ずる違がない。

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治 20〉)

b まことに痛わしい様な、いじらしい様な、その時の神経系統をそのまま真綿に包んで大事にしまっていてやりたい様な気がする。

(夏目漱石「坑夫」1907〈明治 40〉)

c 親鸞 (ほほえむ) お前の問い方は愛らしいな。

(倉田百三「出家とその弟子」1916〈大正 5〉)

(44)a 御うちの若様も、御器量よしとて人はいへど、まだ／＼かのやさしく女らしいき所は及びたまはじ。

(三宅花圃「露のよすが」1895〈明治 28〉)

b 淋しい内にも春らしい空気が凡ての物を撼かした。

(長塚節「土」1910〈明治 43〉)

c 白い雲の影は海に映るほどの日で、その静かさは熱帯らしい静かさであった。

(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉)

(45)a 此道中君も中々お大名らしきお大名様なり、

(南新二「滑稽 道中すごろく」1895〈明治 28〉)

b 女優らしい女優を持たず、カフェらしいカフェを持たない当時の路上に葉子の姿は眩しいものの一つだ。

(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治 44-大正 2〉)

c 尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼っている頃でしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だったのでしょう。

(夏目漱石「ころ」1914〈大正 3〉)

(43) (44)については、これまでに見られたものと同様の形容詞性接辞である。(42)は「ーらしい」がつくことによって「Xらしい」で人の性質や状態を表す形容詞の意味を表す。上接名詞と接辞はそれぞれに独立した意味を持つのではなく、「Xらしい」で1つの意味を持つ語であると考えられる。(44)のように、上接名詞が具象物ではないものに関しても、「Xの性質を有する」ことを表す形容詞であると考えられる。(44)aの上接名詞「女」についても、特定個人の女性を指すのではなく、「女の性質」を表しているものと思われる。

近世において既に「らしい」が自由に派生する接辞であることは述べたが、外来語や指示詞、固有名詞を承ける例が見られるようになるのは今期である。

(46)a 左らば其處へと、車を大宮の一様まで曳かせて、此邊に子爵の邸らしきはと探がすに、それらしき門もみえず。(巖谷小波「昭君怨」1895〈明治 28〉)

b 委員と舎監とは、ひそかに手配りをして、大橋の手から証拠を挙げるのに苦心した。

そこへ丁度それらしい一本の手紙が、大橋に宛て寮務室へ配達された。

(久米正雄「学生時代」1918〈大正 7〉)

(47)a 二人で作るホームだもの、僕だって発言権がなきゃ」と成程哲也らしい佷屈い串戯を言つて笑うと、(二葉亭四迷「其面影」1906〈明治 39〉)

b それにしても、有るにまかせて、大がかりな待合などに手を出さず、全財産の何分の一と云うような資本で、小体な料理屋を始めたところなど、いかにもおもんらしい利口のやり口だ、との評も出た。

(里見弴「多情仙心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(46)a は「子爵の邸のように見える門」、(46)b は「証拠と思われる一本の手紙」を表し、(47)a は「哲也が言いそうな佷屈い串戯」、(47)b は「おもんがしそうな利口なやり口」を表すと考えられる。上接名詞「それ」は、前文脈のものや人と照応し、その X が被修飾語 Y に見えるということを表すため、話者が「それ=証拠」と蓋然的に判断していることが表されているのではないと思われる。

(47)a のような固有名詞を承ける例では、「Y (堅苦しい冗談) は、いかにも X (哲也) が取りそうな言動である」と述べており、「X の取った言動 (Y)」と「X」とを照らし合わせているのではないかと考えられる。

前期から見られた「Y は X に見える」ことを表す例についても、引き続き見られる。

(48)a 事務も上の空となり勝にて退出の刻限来るを待ちつけ直に車を馳せて根津に到り見れば車夫らしき知らぬ男の控へ居て、旦那様でござりまするか、さあ御上りなさいまし、(幸田露伴「新学士」1895〈明治 28〉)

b 男の子はその側で、姉らしい女と共に粉を打った。

(島崎藤村「千曲川のスケッチ」1911〈明治 44〉)

c 星月夜の光に映る物凄しい影から判断すると古松らしいその木と、突然一方に聞こえ出した奔湍の音とが、久しく都会の中を出なかつた津田の心に不時の一転化を与えた。(夏目漱石「明暗」1916〈大正 5〉)

次に、推量用法の例を挙げる。

(49)a 言葉から云うても、様子から云うても、どうも親類らしい。

(夏目漱石「草枕」1906〈明治 39〉)

b 私にくれた名刺の裏にも「竺蒲瓠」と漢字で印刷して、それを仏蘭西の姓のデ

ュボアと読ましてあるのを見ても、もう可成長いこと東洋の方に暮している人らしい。
(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉)

(49)b のようなものは、上接部が「もう可成長いこと東洋の方に暮している人」であり、句になっているものと見てよいと思われる。また、以下の例も、句を承ける「ーらしい」である。

(50)a 翌々日の新聞を見ると年は十九、兵士と通じて懐胎したのが兵士には国に帰って了われ、身の処置に窮して自殺したものらしいと書いてありました、

(国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」1901〈明治 34〉)

b と勢よく云ったが、快く別れを告げたのでは無く、学校の帰りに、何処かで友達と別れる時のように、恚る折には恚う云うものと、規則で口へ出たのらしい。

(田山花袋「婦系図」1908〈明治 41〉)

以上の通り、明治期・大正期以降、「ーらしい」の上接部は近世に比べてより長くなる傾向にある。これは、「ーらしい」が推量用法を獲得していること、活用語の言い切りを承けることによるのではないと思われる。

5. 昭和期以降：接辞用法と推量用法 — 現代語の「ーらしい」 —

昭和期以降は、明治期・大正期に見られた「恐らしい」「親切らしい」などの形容詞／形容動詞語幹接続の語が見られなくなる。また、相手の発話内容を承けて推量する例において、会話の初めに用いられる例が見られるようになる。

まず、形容詞の例を挙げる。

(51)a 私は固いクッションの上に坐りなおすと、飽きる事もなく、なつかしくいじらしい自分の百面相に凝視ってしまった。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和 3〉)

b それでいて、厭らしいように年を取っていた。

(福永武彦「草の花」1957〈昭和 32〉)

c この愛らしい娘が井上塾第一の学才とは一緒に学んだことのある者以外にはとても思えない。

(渡辺淳一「花埋み」1970〈昭和 45〉)

(52)a 二十五だと云っていたが、労働者上りらしいプチプチした若さを持っていた。

(林芙美子「放浪記」1928〈昭和 3〉)

b と、並木はからだごと歓声をあげ、大吉は大吉で兄らしい思慮をめぐらしていたのである。

(壺井栄「二十四の瞳」1952〈昭和 27〉)

c 収穫らしい収穫は、まるでなかった。(安部公房「砂の女」1962〈昭和 37〉)

(51)に挙げたような名詞接続の「ーらしい」については、近世より見られるものが殆どで、一語の形容詞であると考えられる。また、(52)は「ーらしい」が「X の典型的な性質」を表していると考えられる。

(53)a さもないと箸の先で汚ならしくも潰れてしまわないとも限らないのである。

(梶井基次郎「冬の蠅」1928〈昭和3〉)

b あなたって赤ん坊のときは憎らしいほど可愛かったのよ。

(北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和38〉)

(54)a れいの自分の「必死の奉仕」それはたといゆがめられ微弱で、馬鹿らしいものであろうと、

(太宰治「人間失格」1948〈昭和23〉)

b 石炭の欠乏を目睫に控え、六キロの道をしててく歩いて何をしに來たのかと阿呆らしい。

(井伏鱒二「黒い雨」1966〈昭和41〉)

形容詞／形容動詞語幹接統については、先述の通り、明治期・大正期に挙げた「恐らしい」「悪戯らしい」などが見られなくなる。

次に、「YはXに見える」ことを示す「－らしい」の例を挙げる。これまでも挙げた通り、名詞接統であり、連体形を取る。

(55)a 重役らしい人が私の肩を叩いて奥を指差す。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

b おもしろい丸帽を冠り、辮髪を垂れ下げ、金入れらしい袋を背負いながら、上陸する船客を今か今かと待ち受けているような支那人の両替商もある。

(島崎藤村「夜明け前」1929-1935〈昭和4-10〉)

c 「L・M！」

果然、頭文字らしい L・M の二字が、ケースの一隅に刻まれているのを発見した。L・M とは誰であろう。(海野十三「人造人間殺人事件」1931〈昭和6〉)

これらは、「XらしいY」によって「YはXに見える」ことが示される。このとき、上接名詞 X と被修飾語 Y は「X=Y」という同定の関係で示すことができる。(55)ac のような、話者の視点が含まれる場合は、話者が「YはXである」と捉えており、それを「X=Y」と断定せずに「そのように見える」と判断していることを表していると考えられる。

以下、話者の推量を示す例を挙げる。

(56)a なんでも話の様子では、よほど古い家らしい。

(島崎藤村「夜明け前」1929-1935〈昭和4-10〉)

b あの遠くに見えた、どこの山だかちっとも知らずにいたのが、確かにこれらしい。

(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和8-9〉)

(57)a 両足が泥にまみれ、殊に左足は腿のあたりまで長い靴下を穿いたように、真黒によごれているところをみると、泥田の中をひた走りに走りぬけて來たものらしい。

(尾崎士郎「人生劇場」1933-1951〈昭和8-26〉)

b 百合香がおひろめして芸姑にでた最初の客は、清宮兵団の郷参謀長であつた。「湖月」の女将がいちはやく知らせたものらしい。

(中山義秀「宋蓮花」1952〈昭和27〉)

(58)a 店の間では商売物の菜っ葉服を小父さんが縫っているらしい。

(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

- b よろずに物惜みする片野は菊の苗にかけては殊にひどく、その方の好事家達とは随分高値で取引きしているらしい。(中山義秀「厚物咲」1938〈昭和13〉)

(59) 津浦線沿線には未だ敗残兵が頻に出没するらしい。

(火野葦平「麦と兵隊」1938〈昭和13〉)

- (60) a 殆んどもう病人は癒りかけているものと思ひ込んでいたらしいのに、まだそうして寝たきりでいるのを見て、父はすこし不安そうな様子だった。

(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和8-9〉)

- b しかし彼は知識の豊富な岡崎にたいしては一目おいていたらしい。彼のわからぬ事を岡崎に質問して明快な答がえられると、「はアそうですか、はアそうですか」と殊勝げにうなずいていた。

(中山義秀「テニヤンの末日」1948〈昭和23〉)

- (61) a 赤羽主任の声に、一同は女房と共にはっと眼を上げた。そして、赤羽主任の眼が女房の言動に何事か関心を持ったらしいことに気がついて、一層緊張した沈黙が生れた。(海野十三「電気風呂の怪死事件」1929〈昭和4〉)

- b それは分っていて、だから、燃えるような手紙も終始送りたいんだけど、向うからの手紙は、夏に逢って話してみると、半分の私の手には入らず、それは寮長たちに握りつぶされたらしい、というのだった。

(阿部知二「人工庭園」1953〈昭和28〉)

- (62) a 最近の彼女たちの話題は、六十すぎの爺さんと婆さんとの恋愛はどんな風に行われ得るかと言うことであるらしい。

(武田麟太郎「日本三文オペラ」1932〈昭和7〉)

- b しかし人間は偶然を容認することは出来ないらしい。

(大岡昇平「野火」1952〈昭和27〉)

- (63) a この男はもう商売も辛いらしい。(梶井基次郎「交尾」1930〈昭和5〉)

- b そんなもの貰っても肝腎の中身は全然手に入らぬのだから、結構でありますという、なに、と、いって睨みつけられたので、びっくりして貰うことには貰ったそう。とにかく、どうもおかしいらしい。

(火野葦平「青春と泥濘」1950〈昭和25〉)

- c ——そういう瓢太郎の厭味は「吉良常」には一ばん辛かったらしい。

(尾崎士郎「人生劇場」1933-1951〈昭和8-26〉)

以上に挙げた通り、名詞や、動詞のテイル形・ル形・テイタ形・タ形、助動詞、形容詞の終止形、過去形などを承ける。

また、前期に引き続き、上接部を切り出す／省略する用例も見られる。

- (64) 「病気になっていた、——わたくしが。そう思えばよい。お国、そなたもきつ

とそう思いますように」

深芳野はつぶやいた、らしい。らしい、というのは、あとでお国に聞かされて知ったのである。(司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉)

この例は、「一らしい」が上接部から形のうでで切り出されている例である。これは、前文を引用したうでで、上接部を省略して「らしい」のみで「深芳野はつぶやいた、らしい」ことを指していると考えられる。

一方、以下の「一らしい」は、前期の「そうらしい」と同様、話し相手の発話内容を肯定し、話者が推量していることを示している。

(65) 「あれが、話題のブン先生ございますか？」

「らしゅうございますわね」

「汚らしい方ですこと」

「小説『ブン』が売れるまでは乞食同然のおくらしだったとか」

「オホホ。じゃ、急にお金はいったので、このような一流ホテルへ……？」

「らしゅうございますわね」 (井上ひさし「ブンとブン」1970〈昭和 45〉)

(66) 「奥の祭壇の中にいるわ。でも足をくじいているの。逃げるときにくぼみに足をつっこんでしまったんですって」

「でも足をくじきながらここまで辿りつけたんだね？」

「ええ、そうよ。祖父は体が丈夫なの。私の家系はみんな体が丈夫なのよ」

「らしいね」と私は言った。

(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」1985〈昭和 60〉)

(67) 「あいつ意外に恋愛物ですよ。『くそ一何でこんなイイ女のところにこういう男が落ちてこないのよ』とか毒づきながらですけど。後は経済書かなあ、資産運用がどうのメガバンクがどうのって本大好きですよ、業界再編地図とか毎年買ってるし。何おもしろいか全然分かんないけど」

「らしいと言えばらしいな」 (有川浩『図書館革命』2007〈平成 19〉)

「急にお金はいったので、このような一流ホテルへ(来た)」「私の家系はみんな体が丈夫だ」「あいつは意外に恋愛物を好んで読む。後は経済書を読む」という(話し相手の)発話内容を承け、「不確かだがその内容は真である」と肯定していると考えられる。

6. おわりに

以上、「一らしい」の意味用法とその史的変遷を見てきた。

中世から近世前期にかけての「一らしい」は、形容詞性接辞であり、「X の性質を有する」ことのみを表す。また、その上接部は「つべ」「ばけ」など、意味・形ともに接辞「一らしい」から切り出せないものと、切り出せるが「X らしい」で一つの意味を表すものと

に分かれる。

これに対し、近世中期では、「目薬らしいものはなかった」のような、X が目に見えるもの（個体）として解される例が見られるようになる。この場合、X は意味としても形としても切り出され、「一らしい」は「X の特徴を有し、X に見えるもの」を示すと考えられる。そこに話者の視点が加わると、「向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから…」という場合に「(話者から) 向こうの流しにいるやつはその年増に見える」ことが示され、話者が「Y は X である」ことを推量しているのではないかと考えられる。「かの年増らしいやつ」のような「(話者から) Y は X に見える」ことを示す例が見られた後、近世後期（1800 年代以降）になると、終止形「X らしい」で話者の推量を表す例が見られるようになる。

明治期には、「活用語の言い切りを承ける用法が定着する」「一らしい」が上接部から形のうえで切り出されたり、相手の発話を承けて会話文の初めに用いられる例が見られるようになる」ことが挙げられる。これは、「一らしい」の推量用法が成立したことによって生じた変化であると思われる。また、明治期・大正期のみ「形容詞／形容動詞語幹接続の「一らしい」が盛んに見られる」といった特徴を挙げられる。

これに対し、昭和期以降は、「一らしい」の意味用法の区別は、前期までの分類を踏まえ、大きく接辞用法と推量用法（話者の推量を引用する例を含む）とに分かれる。現代語の「一らしい」と考えてよいのではないと思われる。

第6章 「ーらしい」の活用形

0. はじめに

「ーらしい」の活用形について確認する^{*27}。用例数は以下の通りである。

【表1】「ーらしい」の活用形

	中世 ^{*28}	近世	明治	大正	昭和	平成
連体形	22	364	843	912	1453	289
連用形	12	159	680	419	1161	165
終止形	7	310	310	486	1694	736
過去形	0	0	134	290	483	26
未然形	0	0	4	4	8	1
已然形	0	6	0	0	0	0

なお、近世において「らし」で終止する例が見られるが、これについては用例数から省いている。

表1によると、中世から大正期にかけて最も割合が高いのは連体形である。しかし、昭和期以降は終止形の割合が最も高くなる。また、過去形については、湯沢(1954)が近世の例を挙げられているが、今回の調査資料では見当たらなかった。過去形・未然形は明治期より用例が得られ、未然形については用例数の割合は低い。已然形については、近世にのみ見られた。

已然形が見られるのが近世中期であるため、中世・近世前期と近世中期を1期とする。また、推量用法が見られるようになる近世後期を2期とする。続いて、過去形・未然形が見られるようになる明治期・大正期を3期、終止形の割合が最も高くなる昭和期以降を4期とする。

1. 中世・近世前期：接辞用法の「ーらしい」

意味用法の変遷でも述べた通り、「ーらしい」の上接部には、「つべらしい」の「つべ」、「むごらしい」の「むご」など上接部のみでは意味・形を切り出すことができないものが

^{*27} 接辞「さ」「み」が後接して名詞化したものや、語幹のみで用いられて「ーらしげ」のように形容動詞化したものなどについては、用例として採取はしているが、今回は考察対象からは省く。

^{*28} 『日葡辞書』などで、「Xõneraxij. シャウネラシイ(性根らしい)」のような語例のみが挙げられているようなものは省く(28項目)。

存する。今期、連用形・連体形については、切り出せるものと切り出せないものの両方が見られる。ただし、終止形についてはすべて切り出せないものである。

【連用形】

「ーらしい」の初出例(1)aは『沙石集』に見られる^{*29}。連用形を取る。以下、(1)のような名詞接続の例や、(2)のような語基・語根に接続する例は、上接部が接辞から切り出せないものと思われる。

- (1)a 或ル乳母、姫君ヲ養ヒテ、余リニホメントテ、童ワガ養姫ハ、御美目ノウツクシク、御目ハ細／＼トシテ愛ラシクオワシマス〔ゾ〕ヤトイフヲ……

(巻一 86・6)[村上 1981]

- b 少時陰賊ナリ

トハ、上ハナントナイ様テ、内心カ毒ラシウテ、人ヲ傷害スルソ。

(史 一六 546-547・19-20)

- c かたち、かたのごとくにて。いまやうを、うたい、らうゑいし、あふぎおつとり、一ふし、しほらしく。まふたるを。たゆふとなづく、すこししな。

(はんや「あつま物語」1642〈寛永 19〉)

- (2)a 又惠帝ハ、正シク高祖ノ嫡子テ、父ノ位ヲ繼テ、天子ノ位ニ即タレトモ、高后ノアマリツヘラシウテ、妬忌ノアマリニ戚夫人ヲ、手足ヲ、ゝロシ、目ヲ抉り、鼻ヲ熏ヘテ、廁ニ置カレタヲ見テ、アマリノ、アサマシサニ、其カラ天下ノ事ヲモ、マメニモ不思シテ、何事ヲモ、呂后ニウチマカセテ、我ハ不知シテ、イラレタソ。

(史 三 85・2)

- b 國獨智——

ヨイ智ノアル者ト云ヘトモ、人ニ物ヲ問イ談合モセヌモノハ、ハカラシウモナイソ。

(史 一一 402・95)

- c めいとハきりもなくハれかましや、あらゆる大名小名のつきあひにて候に、二字をうけたる人の、はさミ箱一つもたせぬほとなれば、みすほらしく候と、たしかに経文に見えてありと、しめしけれハ、いたハしや、なりかわるからふずとて、唯一つあるはさみはこそほとこしける。

(安楽庵策伝「醒睡笑」1巻 1623〈元和 9〉)

一方、次のような名詞接続の例は、上接部を切り出すことが可能であると考えられる。

- (3)a 京にてある武士と見えたるが、人らしく馬にのりとをるに、坪の内より鞆をけいだしたれハ、中間肝をつぶし、餓鬼め、覚えたるそといふまゝ、鑓をなおしつか

^{*29} 村上(1981)の用例は『日本古典文学大系 85・沙石集』(岩波書店)による。筆者は、調査資料を統一するため、『沙石集 新編日本古典文学全集 52』(小学館)にて確認を行った。用例出典には、確認を行った資料を挙げる。

んとしけり。(安楽庵策伝「醒睡笑」5 巻 1623〈元和 9〉)

- b 三浦が言^{ことば}を戯れ事にして、用ひ給はぬ所、おとなしくさながら侍らしう見へます。(作者未詳「けいせい朝間嶽」中 1698〈元禄 11〉)

【連体形】

連体形についても連用形と同様で、上接部を切り出せるものと切り出せないものが見られる。次に挙げるのは切り出せない例である。

- (4)a 上ニ先ツツヨウ、ウラメシサウニ、云テ置テ、次ニ呂后ノ性カコワウテ、女ノ様ニモナイソ。カウテ毒ラシイ人ナルコトヲ、云タカ、文勢ノ面白處ソ。

(史 七 173・1)[村上 1981]

- b さらに其時のゑにより、いふてしほらしき句ををしへ申さん

(安楽庵策伝「醒睡笑」6 巻 1623〈元和 9〉)

- (5)a 言行ニ尤悔カスクナケレハ、自然ト、禄カ其中ニアルテコソアレ、始カラ禄ヲ干メハ、ナニカ、ハカラシイ事ハアラウソ (史 一〇 336・53)

- b 山中に殿あり。国なかにて、さもとらしき武家より嫂をよぶに、おつぼねの、中居の、おハしたのなどあり／＼とともし、祝言の事すめり。

(安楽庵策伝「醒睡笑」5 巻 1623〈元和 9〉)

次に、切り出せる例を挙げる。

- (6)a 仁物らしき男、枅の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、ある家のぬしよびいれて、(安楽庵策伝「醒睡笑」1 巻 1623〈元和 9〉)

- b うつけらしき友達とものよりあひ、をのれ／＼が妻の噂をかたる中に、一人いひけるハ、我か女房ハ手きいて、所帯ようて、すかたいつくしく、愛敬有、いハんかたなくおほゆれとも、とかく心がたんりよにて、月／＼に一度二度、われをたゝくにくたひれた。(安楽庵策伝「醒睡笑」2 巻 1623〈元和 9〉)

- c 人をへつらはずありままなれば、やがてこの人を、自慢くさき者よ、狂人らしき人よ、理屈者、逸哲者など沙汰するほどに、人皆聞き伝へて、同じやうにいひなし思ひなす。(浅井了意「浮世物語」2 巻 1665〈寛文 5〉)

【終止形】

先述の通り、すべて上接部を切り出せない例である。また、中世から近世前期までは、終止形の例の割合は低く、9 例である。

- (7) 例, Mono mōsuyōdaimo jichiraxij. (物申す様体も実らしい) 話しぶりでも、重厚誠実であることが認められる。(『邦訳 日葡辞書』1603〈慶長 8〉)

- (8) 鳥ノ身アリテ人ノ言アリ……全体ハ鳥テ、モノヲ云ハ、人ノ様ナハ、アマリハケラシイソ (史 四 248・16)[村上 1981]

- (9) あるへいモシ、^{ぶた}豕肉ハたべませんとサ。鴨や白魚をたべますとさ こりんヲヤ、
こわらしい (振鷺亭主人「振鷺亭嘶日記」1626〈寛永 3〉)
- (10) 何条おどろくものかと、をりをを見れば、手の有さふなおいらんの姿にて、ヲヤ
ばかりらしいと、につことわろう。(振鷺亭主人「振鷺亭嘶日記」1626〈寛永 3〉)

2. 近世中期：連体用法における変化

続いて近世中期の例を確認する。近世中期では、連体用法において、意味・形のうえで「ーらしい」から切り出せる例が見られるようになるという変化が生じる。

連用形・連体形・終止形については、前期に引き続き、上接部を切り出せるものと切り出せないものとが見られる。已然形については用例が少なく、すべて上接部が切り出せないものである。

【連用形】

まず、上接部が切り出せない例を挙げる。

- (11)a 座敷に灯かかやかせ、娘を付け置き、「露路の戸の鳴る時しらせ」と申し置きし
に、この娘しをらしくかしこまり、灯心を一筋にして、
(井原西鶴「日本永代蔵」2巻 1688〈貞享 5〉)
- b はやこの寒さわすれて、風をいとはぬかさね小袖、雨ふつて地かたまと、長
柄のさしかけ傘に竹杖のもつたいらしく、むらさきの頭巾して、
(井原西鶴「日本永代蔵」6巻 1688〈貞享 5〉)

続いて、上接部が切り出せる例を挙げる。名詞接続に加えて、(13)のような形容動詞語幹接続の例が見られる。

- (12)a 一かど御褒美に預らんと。乗物を白洲にすへさせ広言らしく言上す。
(近松門左衛門「佐々木先陣」1686〈貞享 3〉)
- b 若い男のこいきすぎたる風俗、正しく町の髪結らしくおもはれける。
(井原西鶴「好色一代女」2巻 1686〈貞享 3〉)
- (13) 米の乏しき鉢ひらき坊主となりて、顔を殊勝らしく作り、心の外の空念仏、思へば心の鬼、狼に衣ぞかし。(井原西鶴「世間胸算用」1巻 1692〈元禄 5〉)

【連体形】

まず、上接部が切り出せない例を挙げる。語基・語根接続の例は見られないが、(14)のような名詞接続の例や、(15)のような形容詞語幹接続の例が見られる。

- (14)a いつとなくつやらしき形をうしなひ、我ながら、かくもまた^{とりなり}采体いやしくなりぬ。
(井原西鶴「好色一代女」4巻 1686〈貞享 3〉)
- b 松が崎のをどりハ花笠をミなきます。田植に笠きたハしほらしい物じや。住

吉の御田ハ五月廿八日でござるの。

(寓言子序「初音草嘶大鑑」1698〈元禄 11〉)

- (15) いや／＼どうしても女子がよい。実かはいらしい女房ぢや。

(近松門左衛門「薩摩歌」1704〈宝永元〉)

続いて、上接部が切り出せる例を挙げる。先に挙げた連用形と同様、名詞接続・形容動詞語幹接続の例が相当する。

- (16) a をれもとりに行ませうといひしが、あくる晩にきたりて、けふよしミねへ行て尋たが、目薬らしい物ハなかつたといふ。

(作者未詳「当世手打笑」1681〈延宝 9〉)

- b 狼と山犬ハ似たやうな物で、しれぬ。『これハしたり。お身ハそのめきゝをしらぬか。』イハヤ、しらぬ 『しらずハ、おれがおしへてやらう。まづ狼らしいやつが出たら、棒をもつてぶつが多い。山犬なればにげる。狼なれば、とびこんでくらみつく

(馬場雲壺「鹿子餅 後篇譚囊」1777〈安永 6〉)

- c 真先神明へ、浅黄うらの理屈らしいやつ来て、『コレおかゝ。聞ケばこの頃爰へ呼と、狐が出るといふが、ほんの事かときく。

(糟喰人月風序・李白散人跋「管巻」1777〈安永 6〉)

- (17) a 身のなりはてのあわれらしきありさまなれとも、心はいまださらにをとろへず、あなたこなたとつとめけるに、(鹿野武左衛門作「鹿の巻筆」1686〈貞享 3〉)

- b 見物の中から高慢らしい男が出て、アゝきつい事だ。おれなら活帰つて、味噌を上るに

(糟喰人月風序・李白散人跋「管巻」1777〈安永 6〉)

ただし、連体用法では、(16) a の「目薬」や(16) b の「狼」は、実際に目で見ることのできるもの・生き物を示す例が見られる点で新しい。性質を示す「理屈」や「仁物(立派な・徳のある人物)」「狂人」などとは区別されると考えられる。

また、被修飾語が省略される例が見られるようになる。

- (18) 又年比三十計なる呉服屋の手代らしきが、さらしの衣唐木綿の香の図の紋つ**ぶじ**たるが、かすかに見えすきておかし。(編者未詳「二休咄」1688〈貞享 5〉)

【終止形】

まず、上接部が切り出せない例を挙げる。

- (19) a 雄次郎 何じやいな、いやらしい。年端も行かいで、あたしつこい。

(桜田治助「御摂勸進帳 第一番目三建目」1773〈安永 2〉)

- b 松嶋は外の名所よりハ又しほらしいとかたるに、

(夢楽庵序「出頼題」1773〈安永 2〉)

- (20) a 煎薬と練薬と、鍼と按摩でやう／＼と。命つないで、たまさかに会うてこなさに甘えうと。思ふところを逆様な、こりや酷らしい、どうぞいの。わしが心変

つたら、踏んでばかり置かんすか、叩いてばかり置かんすか。

(近松門左衛門「夕霧阿波鳴渡」1712〈正徳2〉)

- b 大学柄^{ツカ}の人形をこのうち一つこれかかはいらしい^{ルイ}といふ類これをかまとゝ言といふ也 (陳可憐「会海通窟」1743〈寛保3〉)

上接部が切り出せる例は以下の通りである。

- (21)a 今日のお客は四国のお侍。頭巾で頭は見えねども、角前髪のお小姓らしい。その器量のよさ、おぼこさ。 (近松門左衛門「夕霧阿波鳴渡」1712〈正徳2〉)

- b 紅手拭^{べにてぬぐいくび}首にまとひ茶漬^{ちやづけ}四五盃^{はいそ}蕎麦切^{そばきり}ぐひに流しかけ緋縮緬^{ひぢりめん}の湯具^{ゆぐ}はぐちらしい
紅鬱金^{べにうこん}か藤色^{ふぢいろ}か縹^{はなだいしろい}色^{かう}白^{いふ}も一向^{つがう}ゑいと言には不都合なといひかけ

(鮮仁軒「遊客年々考」1757〈宝暦7〉)

- (22) ヤイあの爺(おやぢ)は仔細らしい。訴訟ならば家老八郎左衛門にいへ

(近松門左衛門「傾城仏の原」1699〈元禄12〉)

【已然形】

已然形は、現代語では用例は見られない。また、いずれも上接部は切り出せないものである。

- (23)a 只何となくあなたさまの心ざしにほだされて、一日あはねば千年へだつるものおもひ、せめてまぎるゝかたもやと、硯にむかへばゆかしとのみ、筆にかゝる辛気さの、我が身ながらも野父らしや。いやらしけれど動もなりませぬ」と、なみだぐまるれば、此のうへは異見する人もなし。

(夜食時分「好色敗毒」2巻 1702〈元禄15〉)

- b あるじ夫婦がはたらきがぬるいなどと、むたいな事を仰せられて、おいぢりなさるゝ旦那がござりまして、あげやの物が年をよらす事とござります。かう申せばつやらしけれど、御器量ようてお気がすいで、客やの為になる事なら、おなぐさみがかけうがおいとひなされぬ、

(八文字自笑「野白内証鑑」1巻 1710〈宝永7〉)

3. 近世後期：終止用法の変化

近世後期は、推量用法が見られるようになり、意味のうえでは変化する時期である。しかし、活用形には大きな変化はない。ただし、連用形において、「一らしくない」という否定表現になる例が見られるようになる。

【連用形】

上接部が切り出せない例は以下の通りである。

- (24) 人一倍片言をぬかす癖に、いやらしく人の詞とまげを」

(滝亭鯉丈『和合人』2編上 1823-1829〈文政6-12〉か)

- (25) 廊下をばた／＼かけて来る内所^{ひっこみ}育の新造お袖、障子をしづかにすこし明てかはゆ
らしく小声、 (為永春水「春告鳥」2巻 1836〈天保7〉)

上接部が切り出せる例は以下の通りである。

- (26)a マア、一体男らしくねへネ。(式亭三馬『浮世風呂』2編下 1810〈文化7〉)

- b そこでこそ南傳馬町の、仙女香の十袋も買つて、二三日か『ツて地を塗りつぶし
でもしたら、ちつとは顔らしくもなりもしやうが、さうしてまアどうするのだ」

(滝亭鯉丈『八笑人』3編下 1823〈文政6〉)

- (27)a どろ「どうなされましたとサ。能^{ようことばとが}言咎めをする。すかねへヨウ した「すかね
へヨウも、ばからし^うございます。きざでありますヨウ

(式亭三馬『浮世風呂』2編上 1810〈文化7〉)

- b 左「コレサ／＼さう時代ではわりい。そして狂言の氣をはなれていかねへと、
まじめらしくねへ。(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之巻 1820〈文政3〉)

(26)a に挙げる通り、今期より「ーらしく」が「ない」を修飾し、一文で「Xの性質を
持たない」ことを表すようになる。

【連体形】

上接部が切り出せない例は次の通りである。

- (28) いも七「コリヤつめたくなつた。もふいけねへ 北八「エ、いぢらしいことをし
た。弥次さん医者をおよびにやつてくんなせへな

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』発端 1814〈文化11〉)

- (29)a 田舎の房さんのやうな、くさらしいきざな客人はねへ。

(三笑亭可楽「新作種がしま」1811〈文化8〉)

- b 増「ヲヤごてへねへなこつた。かはいらしい手だのうトよみかゝる。

(為永春水「春色辰巳園」後編5 1834〈天保5〉)

上接部が切り出せる例は以下の通りである。

- (30)a 下男モシ、入相のかねに花ぞちりけり、と言ふ事ハ、むかしから聞及んでいま
すが、只今鐘ハなりますれど、ねつから花が散ませぬナアと言へハ、案内ハイ。
入相のかねてちるやうな、そんな素人らしい花でハござりませぬ

(桂文治「新選躰の宿かえ」1812〈文化9〉)

- b きついはんじやうな商人店へ、隠居らしき人、『コレハ／＼御精が出升ナ。お店
ハきつうおこと多と見へる 『ホ、御隠居さま。よふおいでなされました。ハ
イ、おかげで相応にいそがしいござり升

(桂文来作「春興嘯万歳」1822〈文政5〉)

- c 増「いらざる異見らしいことも、言出してまた裏に落た。

(為永春水「春色辰巳園」後編 4 1834 〈天保 5〉)

- (31) 此書、^{このほん}両士が^{ふたり}東都^{あづま}神田^{かんだ}の^{ぼり}八丁堀^{たながり}に、^み店借^{うち}し居^{あらは}たりし中のことを著^{つみ}し、終^りに旅行^{りよかう}の^{ほつき}発起^{ゆえん}とする所以^ぼの、^か馬鹿^{さくしや}らしき^{ねざけ}ことを、作者^{のみしろ}が寝酒^{よけい}の飲料^{しごと}に、余計^{しごと}の著述^{しごと}をなすものならし (十返舎一九『東海道中膝栗毛』発端 1814 〈文化 11〉)

【終止形】

上接部が切り出せない例は以下の通りである。

- (32) 女なんじやいナア。今まであいそがつきた、ひまやるといふて居て、あた、いやらしいと突のける。 (桂文来「春興嘶万歳」1822 〈文政 5〉)
- (33) a これハかハゆらしいと、いきもせず、のぞきゐたるに、
(鳥居清経画「頓作万八嘶」1776 〈安永 5〉)
- b そで「ヲヤびつくりしましたは。憎らしい。

(為永春水「春告鳥」2 巻 1836 〈天保 7〉)

上接部が切り出せる例は以下の通りである。

- (34) 兼ておめへにはなすとほり、^{どっちへも}両方共つかれぬ義理と、うぬばれらしいが、私にも顔を立てさせてくれる心になりかねない気性だから、そればつかりおもひ過して、自分／＼の身で、はがいゝ心を出して居るんだアねトすこし聲くもりて眼をおさへて居る (為永春水「春色辰巳園」後編 4 1834 〈天保 5〉)
- (35) a ていしゆ「そじやてゝふたりつれまふて、せつめんへゆくといふことが、あるもんかいなあほらしい 弥次「かんにしてくんなせへ。わつちらがわるかつた (十返舎一九『東海道中膝栗毛』1809 〈文化 5〉)
- b 一ツ釜の飯を喰ながら、野暮らしい。

(談洲楼焉馬序・立川銀馬作「落 はなし笑嘉登」1813 〈文化 10〉)

- c ばゝ「ありやア古風さ。一本をいつこう。一けん、といふは悪いツサ。拳の詞の外に、五ツ六ツと、常の数でいふのはかまはねへさうさ はね「なんの道にも利屈があるのう。面倒らしい。

(式亭三馬『浮世風呂』2 編上 1810 〈文化 7〉)

また、推量用法の例は以下の通りである。

- (36) a てい「サア一ぷくあがらんせ。いつたいおまいは、どこを尋ねさんすのじやいな。参宮じやあるが、おひとりか。但しは、おつれでもおますかいな 弥次「さやうさ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたアございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰瘤のあるおかたじやおませんかいな

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5 編追加 1806 〈文化 3〉)

b 目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいネ

(式亭三馬『浮世風呂』3編 1811〈文化8〉)

c よね「ヲヤ丹さんまだ宅^{うち}へおかへりでないか。今に梅次^{いま うめじ}さんと一^{いつしよ}所にかへるから、ちつと待^{まつ}てお出^{いで}ヨト、いひながら完^{にっこり}尔^{わら}笑^{なま多}ひ、酒^{きやく}乱^たの客^かの^{ぼし}ともして多^た寡^か橋^{はし}の、方^{かた}へ過^{すぎ}行^{ゆく}後^{うしろ}か^かげ、丹はびつくりお長^だはかけ出^だし 長「ヲヤ米八^いさ^まんじやアありませんか 丹「ナニ^よ／＼米八ではねへト、口にはいへど心^こにギツクリ。今米八^いが其^そ近^こ處^らから、かへり來^{きた}らば大^{へん}変^おと、思^{おも}へば何^{なに}かそは／＼して 「サアもふよか^{かへ}ア販^{はん}らふの 長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八^いさ^まん^らしいヨ。かくさずといゝじやアありませんかト

(為永春水『春色梅児誉美』初編3 1833〈天保4〉)

ここでは、話者が聞いたこと・見たことが「AはXらしい」で示されており、「一らしい」は「AはXである」可能性が高いことを示していると考えられる。

なお、今回の調査資料では、過去を表す「一らしかった」の例は得られなかった。湯沢(1954)では以下の例が挙げられている。

(37) そんな物^{もの}ら^らし^しか^かつ^つた^たが……(集成一、二七三)

出典は「不酔照明房情記」であり、年代著者は不詳とある。

4. 明治期・大正期：活用形の増加と連体形・連用形の変化

今期以降、過去形・未然形の例が見られるようになる。

連体形において上接部と「一らしい」が句点で区切られる例が見られるようになり、連用形において上接部が省略される例が見られるようになる。

また、明治期以降、活用語の言い切りを承ける例が定着する。連用形・連体形・終止形いずれでも活用語の言い切りを承ける例は見られる。活用語の言い切りを承ける例は、上接部が切り出せるものと考えられる。また、上接部が切り出せないものとして、一部の名詞接続・形容詞語幹接続の例が挙げられ、上接部が切り出せる例として名詞接続・形容動詞語幹接続が挙げられるのはこれまでと同様である。

【連用形】

新たに上接部が省略される例が見られるようになる。以下の一例である。

(38) 乃ち「らしく」ぶるなの六字を題して與へた、平々凡々たる語の如くなれども貴賤貧富を別たず男女老少を問はず宜しく服膺すべきの價值ありと思ふ、紳士にあらずして紳士ぶるか、紳士にして資格に似合はしからぬ所謂紳士らしくせぬ結果は、自己の一身に止まらず社會の表面にまで種々の弊毒を流布せしむるものである。

(清浦奎吾「社会の腐敗救治意見」1901〈明治34〉)

ここでの「らしく」は、「紳士らしく」など、人物の属性を示す語であれば、概ね上接部に当てはめることが可能である。「紳士」など多数の上接部を承けられることから、省略が可能なのではないかと思われる。

上接部が切り出せない例は以下の通りである。

(39)a いふに被りつ、しほらしくも店の掃除にかゝる

(嵯峨の屋おむろ「浮世新聞」1895〈明治 28〉)

b ひとり、どうやら良いと思われる女給が来た。体つき、身のこなしなど、いやらしく男の心をそそるようで眼つきも据っていて、気が進まなかったが、レットル（顔）が良いので雇い入れた。（織田作之助「夫婦善哉」1940〈昭和 15〉）

(40)a と然も羨しそうに小芳が云うと、お妙はフト打仰向いて、目を大きくして何か考えるようだったが、最う一つの袂から緋天鵝絨の小さな蝦蟇口を可愛らしく引出して、
(泉鏡花「婦系図」1908〈明治 41〉)

b 皮肉でも、負惜みでも、冷淡でもなんでもなしに、あなたが、もうちっとも憎らしくなくなっちゃったんだもの。

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

上接部が切り出せる例は以下の通りである。

(41)a 抑もまた、文三の位置では陥り易い謬、お勢との関係がこのままになってしまつたとは情談らしくてそうは思えんのか？

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治 20〉)

b 余っ程男らしくない性質ですね。（夏目漱石「虞美人草」1907〈明治 40〉）

c 空が秋らしく青空に澄む日には、海はその青より稍・温い深青に映った。

(梶井基次郎「城のある町にて」1924〈大正 13〉)

d これは黒い紋服をきて急に大人らしくみえた、ということばかりではない。

(阿部知二「冬の宿」1936〈昭和 11〉)

(42) 「どうした、それでも汝りや気に入ったか、おっかが物はみんな汝がもんだかな、俺ら汝ッ等がだとなりや幾ら困ったって、はあ決して質になんぞ置かねえから、大事にして汝能うく蔵って置いたえ」と彼は満足らしく見えた。

(長塚節「土」1910〈明治 43〉)

上接部が切り出せる例のうち、活用語の言い切りを承ける例については以下の通りである。

(43)a 両側の夜見世を窺きながら、文三がブラブラと神保町の通りを通行した頃には、胸のモヤクヤも漸く絶え絶えに成って、どうやら酒を飲んだらしく思われて、昇に辱められた事も忘れ、
(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治 20〉)

b 茶の間では、まだその悶着が続いているらしく、お米の早口と主人の緩やかな声とが聞える。
(田山花袋「生」1908〈明治 41〉)

- c 立ちながら、手酌で一杯ぐっとやって、三好は、そとの眺めなどには更に興味がないらしく、促したてた。（里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉）

【連体形】

先述の通り、上接部が句点によって「ーらしい」から切り出される例が見られる。

- (44) [省略]元來大和琴の曲は初は獨奏の物にて發達いたした、らしい事です、それは管搔、又は空搔等の名に就て、考えへて見ても、さう思はれます、

（松本操貞「国楽改良意見」1895〈明治 28〉）

近世中期より、既に「ーらしい」は様々な語（主に体言）を承ける接辞であり、「ーらしい」と上接部が切り出される例が多く見られるようになった結果、(44)のような例が見られるようになったのではないと思われる。

その他の上接部が切り出せない例については、以下の通りである。

- (45)a やがて此娘は、あいらしき笑貌を残して立さりぬ

（小金井喜美子「浮世のさが」1895〈明治 28〉）

- b 描いた愛らしい花はしぼんでしまう （林芙美子「放浪記」1928〈昭和 3〉）

- (46)a 授業の始まるまで、丑松は最後の監督を為る積りで、あちこちあちこちと廻って歩くと、彼処でも瀬川先生、此処でも瀬川先生——まあ、生徒の附纏うのは可愛らしいもので、

（島崎藤村「破戒」1906〈明治 39〉）

- b 昼間来て御覧なさい、随分汚ならしい室ですよ

（夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉）

上接部が切り出せる例については以下の通りである。

- (47)a これは江戸詰らしき延山登。（塚原渋柿園「他流試合」1895〈明治 28〉）

- b 二人で作るホームだもの、僕だって発言権がなきゃ」と成程哲也らしい佷屈い串戯を言って笑うと、

（二葉亭四迷「其面影」1906〈明治 39〉）

- c 古藤は思わず笑いを漏しながら、「間違うと大変ですから」と云う言葉を、時折り葉子の口から聞くチャームに満ちた子供らしい言葉の一つとでも思っているらしかった。

（有島武郎「或る女」1911-1913〈明治 44-大正 2〉）

- (48)a 之を聞て兵卒は皆不満らしき貌をしたが、仕方なく別々に線内へ退ぞいた、

（嵯峨の屋おむろ訳^{*30}「セバストウポルの火花（承前）」1901〈明治 34〉）

- b 管から迸出する水を思う所に遣ろうとするには、まだ余程困難らしい有様が明かに見える。

（田山花袋「重右衛門の最後」1902〈明治 35〉）

- (47)b のような、固有名詞（人名）を承ける例が見られるようになる。これは、近世よ

*30 トルストイ作。以下同様。

り、「ーらしい」が「典型的な性質・特徴を有する」ことを示すようになったことによるのではないと思われる。

- (49) a 「へえ」勘次はその払暁のことをどうしてか内儀さんがまだ知らぬらしいので
ほっと息をついたが又自分から恥じて、簡単に曖昧にこういった。

(長塚節「土」1910〈明治43〉)

- b そこまで行くと人足達の姿も高い墓石に隠れて、唯土でも掘り起すらしい音が
閑寂とした空気にひびけて伝わって来ていた。

(島崎藤村「新生」1918-1919〈大正7-8〉)

- c 「なんだか、薬壇のようだネ」万事を了解したらしい様子の帆村が、^{こごえ}低声で云
った。

(海野十三「西湖の屍人」1932〈昭和7〉)

- d だれひとり先生にあいさつをするゆとりもないらしいなかを、先生もまた、道
にうちあげられた石をよけながら、自転車をおしてやっと学校にたどりついた。

(壺井栄「二十四の瞳」1952〈昭和27〉)

【終止形】

上接部が切り出せない例については以下の通りである。

- (50) a 「アハハハ、何にも言わずに逃出すなぞは未だしおらしいネ」

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

- b クレップシャツの上に毛糸の腹巻きをしている風采がどうもいやらしい。

(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

- (51) a その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。

(夏目漱石「坑夫」1907〈明治40〉)

- b そしたら、あの子の口上が憎らしいではありませんか。

(倉田百三「出家とその弟子」1916〈大正5〉)

上接部が切り出せる例については以下の通りである。

- (52) a あちらの柱に草鞋、こちらの柱に干瓢、壁によせて黄な南瓜いくつか並べてあ
るは、いかにも町はずれの古い茶屋らしい。(島崎藤村「破戒」1906〈明治39〉)

- b 清盛の面相弱々しく覇氣に乏しく、信實の重盛らしい。

(梅沢和軒「帝展の日本画」1925〈大正14〉)

- (53) a 「まあ馬鹿らしい」と嫂が云った。

(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉)

- b 「さうか、それなら可い、で、僕は、意氣地無し間に伍して、團栗の丈比べを
するよりも、他の事業を爲ようと思ふのだ。」

「それは隨意さ。」と、三神は餘程不平らしい。

(柳川春葉「誇」1909〈明治42〉)

(52)b に挙げる通り、大正期には終止形でも固有名詞を承ける例が見られる。

以下、活用語の言い切りを承ける例を挙げる。

- (54)a 上京してきた父親に一度対面しただけで、その臨終にもその葬儀にもついに帰国することなくして熄んだらしい。(島崎藤村「破戒」1906〈明治 39〉)
- b 給仕の一人が来て話すのを聞くと、もう二十八日目でマルセエユの港に着くというらしい。(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉)
- c この男はもう商売も辛いらしい。(梶井基次郎「交尾」1930〈昭和 5〉)
- d 妓は真向いにすわって、加賀の顔を熟視した。しかし、容易に思いだせないらしい。(中山義秀「テニヤンの末日」1948〈昭和 23〉)

【過去形】

過去形についても、上接部が切り出せるものと切り出せないものとに分かれる。また、「ーらしい」と上接部とが切り出せる例のなかには、活用語の言い切りを承ける例も含まれる。

まず、上接部が切り出せない例を挙げる。

- (55)a 飛んだり跳ねたりする騒がしさも名残と思えば寧そいじらしかった。(島崎藤村「破戒」1906〈明治 39〉)
- b 浅黒いつやの皮膚は何よりも葉子には愛らしかった。(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治 44-大正 2〉)
- (56)a 膳の上は汚ならしかった。(夏目漱石「明暗」1916〈大正 5〉)
- b 微笑が、苦々しい不機嫌に変わって行く道程を、すっかり観察されていたと思うと、信之は、なんとなくその娘が憎らしかった。(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

続いて、上接部が切り出せる例を挙げる。

- (57)a それが如何にも晩春の夕暮れらしかった。(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治 44-大正 2〉)
- b ゆいたてのモモ割れから、花カンザシの赤いふさがたれているのが、松ごやの緑に反映して、いかにもお正月らしかった。(山本有三「路傍の石」1923〈大正 12〉)
- (58)a 兄は面倒らしかった。(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正 1-2〉)
- b 弟はいくらか不平らしかった。(久米正雄「学生時代」1918〈大正 7〉)
- (59)a 稲刈連は出てしまつて別に笑うものもなかったけれど、民子はあわてて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかった。(伊藤左千夫「野菊の墓」1906〈明治 39〉)
- b といった趣意は、兜を脱いで降参したら、随分善後策の相談に乗ろうというので有るらしかったが、哲也は何と思つてか、相変らず目を瞑つたまま、何時ま

で経っても唾の如く黙然としているのであった。

(二葉亭四迷「其面影」1906〈明治39〉)

- c その戸棚の一尺ばかり開いている隙間から、御嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらしかったのです。(夏目漱石「ころ」1914〈大正3〉)

【未然形】

未然形は、上接部が切り出せないものとして「わざとらしからぬ」が2例見られるが、それ以外はすべて上接部が切り出せる例である。

- (60)a しかし五分ほど過ぎると、極めて故意とらしからぬ動作で、(僕にはそう感ぜられた) 室から出て行った。(久米正雄「学生時代」1918〈大正7〉)

- b 僕はいかにもその時の山口のわざとらしからぬ声音を驚嘆して聞いていた。(久米正雄「学生時代」1918〈大正7〉)

以上2例については、同一作品に見られる点も注意が必要である。

上接部が切り出せる例については以下の通りである。

- (61)a 薄く掛けた友禅の小夜着には片輪車を、浮世らしからぬ恰好に、染め抜いた。(夏目漱石「虞美人草」1907〈明治40〉)

- b 旅の鞆を載せた一台の俵を先にして、その後からゴトゴト揺られながら随いて行く吾儕二人の車上の姿がいかに観光団の大阪見物らしからうと、ままよ。(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正5-7〉)

- (62) 馬鹿らしからうとも、間拔じみて見えようとも、そんなことは構わない。(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

5. 昭和期以降：終止形・連用形・未然形における変化

昭和期以降は、明治期・大正期と大きく異ならない。そのため、新たに見られるようになるものを取り上げる。なお、鈴木(1988)でも指摘される通り、「恐らしい」や「不平らしい」など、形容詞・形容動詞語幹接続の例に関しては減少する。

今期は、連用形・終止形・未然形において、上接部を省略する例や、固有名詞を承ける例が新たに見られるようになる。

まず、上接部が省略される例を挙げる。

- (63)a 「金川義助らしい男に会ったのがいますよ」

金川しまは濡れた眼を光らせて、

「どこで会ったのです。誰です。会った方は」

喜びの声ではなく、憎悪に近い声だった。

「やはり、ぼくらの同期生で、北村安春という男なんです。きのう、ぼくの同期生がぼくの昇進祝いの会を開いてくれた。その席上での話です。ぼくも気に

なったから、よく聞いて見たのだが、らしいというだけで、金川義助だかどうかは確かめ得なかったそうです。（新田次郎「孤高の人」1969〈昭和 44〉）

- b イランの子供たちがこれほど熱中する番組とはどのようなものなのだろう。
ふと興味を覚え、彼らの頭の上から覗き込むと、どうやらそれはボクシングの試合らしかった。らしいとしかわからなかったのは、不鮮明で、上下二段に分裂し、しかもそれが逆転しているという、凄まじい画像だったからだ。

（沢木耕太郎「一瞬の夏」1981〈昭和 56〉）

- (64)a 「あれが、話題のフン先生ごますか？」

「らしゅうございますわね」

「汚らしい方ですこと」（井上ひさし「ブンとフン」1970〈昭和 45〉）

- b 「小説『ブン』が売れるまでは乞食同然のおくらしだったとか」

「オホホ。じゃ、急にお金がいったので、このような一流ホテルへ……？」

「らしゅうごますわね」（井上ひさし「ブンとフン」1970〈昭和 45〉）

- (65) 「樋口のほうが先に俺に気づいて、話しかけてきたんだ。らしいよな。さばさばしたもんでさ。旦那にも紹介してもらったよ。『学生時代の話、よく、彼女から聞きます』って爽やかに言ってくれたよ。包容力があるんだな」

（伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』2007〈平成 19〉）

(63)は、先に「金川義助らしい男」「どうやらそれはボクシングの試合らしかった」という「一らしい」を含む一文の引用として「らしい」が用いられている。これに対し、(64)では、話し相手の「あれが話題のフン先生か」「急にお金がいったので、このような一流ホテルに来たのか」という問いに対し、話し相手の推量内容を引用して、「フン先生らしい」「急にお金がいったので、このような一流ホテルに来たらしい」と話者自身が推量していることを示していると考えられる。(65)は、話者が直前に話した「樋口」を引用し、「樋口らしいさばさばした対応だった」ことが述べられている。

過去形・未然形に関しては、固有名詞を承ける例が見られるようになる。

- (66) 肺炎の特効薬の知識がまだ一般化されていない時で、それをいち早く身につけているところは、いかにも左山らしかった。

（井上靖「あすなろ物語」1958〈昭和 33〉）

- (67)a この言葉のいいまわし、およそ信長らしからぬ詠歎調だが、武田の謀者たちはそこまで見ぬくほどの頭はない。

（司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉）

- b 加藤は、それまでの加藤らしからぬあわてぶりで、彼のサブザックの中に予備の手袋と靴下と懐中電灯と地図を入れた。

（新田次郎「孤高の人」1969〈昭和 44〉）

なお、未然形に関しては、前期に見られたような、上接部を切り出せない例を承けるも

のは見られない。

6. おわりに

「ーらしい」を活用形ごとに検討すると、どの活用形でも常に上接部が切り出し可能な例と、不可能な例が見られる。ただし、中世では上接部が切り出せる例が全体的に少ない。

これに対し、近世では、上接部が切り出せるものの割合が中世よりも高くなる。「目薬」やまた、近世には「ーらしくない」といった否定表現を伴う例が見られるようになり、「ーらしい」の上接部が切り出され、「典型的な性質・特徴」を示すようになると考えられる。明治期以降に見られる未然形において「ーらしからぬ」という例が見られるのもこれと同様であると思われる。

明治期以降、「ーらしい」は活用語の言い切りを承けるようになり、これは連体形・連用形・終止形において見られる。活用語の言い切りを承ける例では、上接部と「ーらしい」が切り離せると考えられる。同時期、連用形・終止形において、「ーらしい」の上接部が句点によって切り離される例や、上接部が省略される例も見られるようになる。

また、固有名詞を承ける例については、連体形・終止形については明治期以降に見られるが、連用形や未然形では昭和期に下るまで見られなかった。意味用法の変遷と併せて検討すると、連体形・終止形から変化が生じているのではないかと思われる。

第7章 「ーらしい」の連体用法に関する考察

0. はじめに

「ーらしい」は、「可愛らしい」「子供らしい」のような形容詞性接辞としての用法と、「昨夜、雨が降ったらしい」のような話者の推量を表す用法を有する。推量用法の「ーらしい」が、形容詞性接辞の「ーらしい」から派生したものであろうことは、既に先行研究でも指摘されている。

本章では、次のような連体用法の例が見られることに着目する。

(1)a テレビでは、強張った表情の被害者の妻らしい女が映し出されていた。洗いざらしたTシャツにジーンズという質素な服装で髪をひつつめ、ほとんど化粧もしていない。
(桐野夏生『OUT』1997〈平成9〉)

b (真野です。菅野らしき男を発見。古着屋の前にいます。黒のニット帽、サンダラス、服は灰色) 真野の声が聞こえた。(東野圭吾『さまよう刃』2004〈平成16〉)

これらの例では、「テレビに映し出された女は、被害者の妻に見える」「古着屋の前にいる男は菅野に見える」ことが表されているのではないかとと思われる。また、何れの例でも「ある話者から Y が X に見える」ことが表されており、X と Y が同定の関係にあると考えられる。この類は、(1)b のように、「ーらしき」の形を取るものが見られるのも特徴の1つである^{*31}。

こういった「ーらしき」の意味用法について、田野村(1991)や三宅(2006)では現代語の例が指摘されている。また、湯沢(1954)において近世の例が挙げられている点には特に注意される。岡部(2004)や山本(2010)でも、近世を中心として詳しく述べられている。これらを踏まえ、(1)のような話者の推量を表す連体形「ーらしい」の意味・用法について検討し、形容詞接辞の用法と推量用法の関連がどのように示されるかを明らかにする。

1. 先行研究

(1)のような例は、田野村(1991)・三宅(2006)において、助動詞あるいはモダリティとしての意味・用法を有するとされる。

田野村(1991)では、接辞の「ーらしい」と助動詞の「ーらしい」の区別を四点に分けて論じられており、第三の指摘で連体形「ーらしい」の用法について述べられている。

第一に、動詞や形容詞などにも自由に付き得る助動詞の「らしい」とは異なり、接

*31 以下、本論文で連体形「ーらしい」とする場合は、「ーらしき」の形も含めることとする。

尾語の「らしい」はほとんど専ら名詞に付く。

第二に、接尾語の「らしい」を含む「あの男は実に男らしい」の音調は、通常、「～オ「トコラシ」イ」のようになる。これに対し、助動詞の「らしい」を含む「向こうからやって来るのはどうも男らしい」では、「～オ「トコ」ラ「シ」イ」という発音が基本的だと思われる。

第三に、助動詞の「らしい」が連体修飾に用いられるときには、次のように「らしき」という形も使われる。

(28) いまでも山らしき姿はみえないが、この上り勾配は明らかにウラル峠(?)だ。

(アジア・ヨーロッパ)

(29) 海岸は泥の広場。巨大な原木があちこちに積み上げてある。その奥には自動車修理工場らしき建物があり、トラクター類が何台も無造作に置かれていた。

(メラネシア)

他方、接尾語の「らしい」を「らしき」という形にした例は見られなかった。

第四に、接尾語の「らしい」では、「XらしいX」という言い方が可能である。

(30) 何はともあれ、最初の洞窟らしい洞窟だ。(メラネシア)

(31) 山系、次第に近づいてくる。アップ・ダウン烈しい丘陵地帯に入る。殆ど道らしい道はない。(西域(上))

これに対し、助動詞の「らしい」がこのような形で用いられることはない。これは、「Xであると推量されるX」という表現内容の不合理さによるものとして理解することができる。

同様のことは、三宅(2006)でも述べられている。三宅氏は、「ーらしい」を「ラシイに前接する名詞が持つ典型的な属性」を表す「典型的属性表示」と「命題が真であるための証拠が存在すると認識する」ことを表す「実証的判断」に分類し、次の通り記述されている。

「らしき」の形をとって連体修飾する場合は、この「典型的属性表示」にはなり得ず、専ら「実証的判断」になる。

(36) 新たに新聞社に、犯人らしき人物から手紙が届いた。

(37) 埼玉県秩父市で五十万年前の建物跡らしき穴が発見された。

「典型的属性表示」と「実証的判断」は、名詞に直接、後接した場合、どちらの用法かが確定出来ず、あいまいになることも多い。次例のようなものを参照されたい。

(38) 帰り際、新人らしい看護師が一所懸命掃除をしていました。

(39) 最寄りの地下鉄駅に降りると芝居見物らしい人の波が国立文楽劇場の方に続

いている。

(40) 若い学生と一緒に、カウンターでコーヒーを飲む教授らしい老人を見た。
これは、両者が全く異質なものではないということを示している。

以上の通り、両氏によって連体形の「—らしい」、また特に「—らしき」という形において推量の意味を表す例が見られることが指摘されている。

また、日本語記述文法学会(2008)では、モダリティ表現が名詞修飾節に現れるとしており、「—らしい」について以下のように述べられている。

観察や推定を表す「らしい」は、「ようだ」「みたいだ」に比べて現れやすいようである。「らしい」は、「らしき」という形をとることもある。

- ・ 指名手配中の犯人{らしい／らしき} 男を町で見かけた。
- ・ その学生は、友人から借りたらしいノートを試験に持ち込んだ。 (p.62)

ここでも、「指名手配中の犯人らしい／らしき男」といった例を推量とする指摘がある。連体形でも話者の推量を表すとするべきではないと思われる。

では、推量を表す連体用法の例はいつ頃から見られるのか。湯沢(1954)において、推量を表す「—らしい」が近世より見られるとされるが、そのなかに連体形の例も挙げられている(囲み線は岩崎による)^{*32}。

「らしい」は体言に附いて、推量する意味を表わすに用いられる。

○ソリヤほんとうにかへ、どふもうそらしいよ(集成二、五二二)

○是もまづ破談ばならしいノ(八笑人、三下、八オ)

○今のはどふも米八さんらしいヨ(梅暦、六、一七ウ)

○向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらってゐるから……(膝栗毛、五下)

○どうやら実説らしくもあり、誕らしい所もあるてナ(風呂、四上)

○そんな物らしくあったが……(集成一、二七三)

これがまた副詞に附くことがある。

○ム、ゝそふ〔然〕 らしいよ(徳五、八二)

以上の諸例は、「——である」と断定しないで、「——であるようだ」と推量する意味に用いられているので、推量の助動詞と見るべきものと思う。

^{*32} 集成二、五二二……「起承転合」(享和二 十返舎一九) 集成一、二七三……「不酔照明房情記」(年代著者不詳) 徳五、八二……「南閨雑話」(安永二 夢中山人)による。

(湯沢(1954) pp.734-735 参照)

「かの年増らしいやつ」は、「なにかあらっている」ある人物に対し、その特徴などから「年増に見える」ことが示されていると考えられる。「誕らしい所」は、ある話に対して、「(本当のようにも聞こえるし) 嘘のようにも聞こえる」ことが示されていると考えられる。いずれも、「そう見える」「そう聞こえる」ことが示されている点で、推量的判断を表しているのではないかと思われる。

囲み線に示した通り、湯沢(1954)に既に連体形の例は挙げられてはいるが、最初に挙げられている「どふもうそらしいよ」のような終止用法で推量を表す例との関連を通時的に検討しているものは見受けられない。この関連について検討し、「かの年増らしいやつ」のような連体用法において先ず推量的判断が表されるようになり、その後、終止用法で推量を表すようになるというのが目的である。

岡部(2004)でも、体言に承接する「ーらしい」の用例として、『東海道中膝栗毛』の例を挙げられており、次の通り述べられている。

体言に承接するラシイの用例は、今回の調査では、のべ十六例の用例を採集することができた。その中で注目しておきたいのは、以下のような連体法の用例である。

(7) 向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中を、ながして下せへといつたら、ハイとこいて、六十ばかりのばゞアめが、たはしをもつてきやアがつて(膝栗毛 p.241)

この場合、話し手は(その時点では)向こうの流しにいる人が「かの年増」かどうか確認しておらず、「よく分らないが、どうやら例の年増であるようだ」と推定(推量)しているといえそうである。事実、湯澤(一九五七)は、(7)を「「一である」と断定しないで、「一であるようだ」と推量する意味」(p.504)を表すものであるとし、助動詞のラシイの用例の一つに数えている。本稿でも、(7)のような用例を、話し手にとって経験的に把握されていない事態(現実だと確認されていない事態)を語っているという点に注目し、湯澤(一九五七)と同様、助動詞のラシイ(「推定」を表すラシイ)の用例だとみなしておく。

しかし、一方で、(7)の例は「例の年増のような外見をしている(人)」と描写しているだけという解釈も成り立ちそうであり、そうであるならば、(7)は接尾辞のラシイの用例ということになる。

以上に引用した通り、岡部氏は「かの年増らしいやつ」のような連体用法の例を、推定の助動詞とされる一方で、接辞としての解釈も成り立ちそうであるとされる。このように、岡部(2004)では、助動詞の「ーらしい」と接辞の「ーらしい」に、ある面で共通性があることが指摘されている。

既に、第一節で述べたように、体言に承接する助動詞ラシイは、〈様態〉用法をその表す意味の中心としていた。〈様態〉用法とは、話し手が把握している状況を、話し手の印象に基づいて、「実情はわからないが、～のように見える」と述べる用法であった。この、話し手が把握している状況を「実情はわからないが、～のように見える」と述べるということは、とりもなおさず、「実情はよくわからないが」という留保をつけて、その把握された状況を外面的に描写するということであると考えられる。

また、「かの年増らしいやつ」のような連体用法の〈様態〉の例は、

連体法という構文環境によるものと思われるが、話し手が経験的に把握していない事態を不確定的に述べるという推定（行為）的な側面が弱まり、描写的な面が強調されているように思われる。

と述べられている。

岡部氏は、近世後期の用例について検討されているが、こういった意味・用法は近世中期から既に存するのではないと思われる。以下の例を見られたい。

- 彼の若衆は、「先達ておつばねらしき女中の直に御出であそばし、奥さまの見ぬ恋にあこがれ給へば、しばしの間来てお心をなぐさめてかへりてくれ。しからば末／＼はそちが為に成るべし。（八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉）

この例でも、「ーらしき」で「実情はわからないが、Xのように見える人」を表すのではないと思われる。

山本(2010)では、近世以降の「ーらしい」を調査し、形態・統語・意味的観点からモダリティ形式の成立について検討されている。そのなかで、近世において〈「～らしき」「～らしい者」で人・物を表すやや定型化した表現〉が見られるとされており、次の例を挙げられている。

- (8)a. 又年比三十計なる〔呉服屋の手代〕らしきが、

（噺本 - 二休咄：貞享5（1688）年刊）

- b. [知行から此比取られた] らしき中間が封じ文出して、此上書一つお目かりましよと云へば（浮世草子 - 好色盛衰記・五ノ四：貞享5（1688）年：湯沢1936）

- c. 「ハテ マア 誰ぞ〔呑み込んだ〕らしい者があるなら マア それに任せてどうぞそこらへ」ト 隠れい といふ仕方 ※「呑みこむ」事情が分かっている（人）（歌舞伎 - 菊水由来染：寛保3（1743）年初演）

山本氏はこれらを「ーらしい」の上接部分が形態的に変化（句へ拡張）したものと位置

付けられており、推量用法には含まれていない。しかし、「定型化した表現」において句への拡張が起こり、その後、終止用法のモダリティの例が見られるという点に疑問が残る。近世において、

○ まづきせるの湯に成るほどたばこけふらせ、賄らしき男とらへて、芝居のぬれ狂言のうまき所を咄しかけ、
(八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉)

○ 十八九にて美しい妾のよふな者立出、ハア、梨子が落たハと拾ひあげた処へ、旦那らしき人も立出しが、
(随本舎梅山「臍が茶」1797〈寛政9〉)

のような上接部が句になっていない場合でも、「Xに見える」(賄に見える男・旦那に見える人)意味は表されると思われるためである。

以上の先行研究より、(1)のような連体形の「ーらしい」が見られるようになったのは、近世以降であると考えられる。また、現代語では、特に「ーらしき」の形で推量の意を表すとされている。現代語ならびに近世において、推量的判断を表す連体用法は既に指摘されているが、通時的な検討については考察の余地があるのではないと思われる。本稿では、近世の「ーらしい」の意味・用法、特に連体用法を中心に、「ーらしい」の形容詞用法と推量用法の関連について検討する。

2. 近世における「ーらしい」の連体用法

近世における連体形「ーらしい」の意味・用法は、主に「そういう感じがする」「Xの感じが強い」ことを表す形容詞性接辞の用法と、「Xに見える／聞こえる／捉えられる」ことを表す用法とに分かれる。

近世前期では形容詞性接辞の例のみが見られる。

「ーらしい」は、意味のうえで上接部が切り出せない場合は、形容詞と解される。これは、上接品詞によって概ね分類が可能である。まず、形容詞／形容動詞語幹接続の場合は、形容詞である。

(2)a 千年も万年も、藤様との御仲さめぬやうに遊ばせ。そのいとらしいお気だてでは、さめまい／＼。
(近松門左衛門「淀鯉出世滝徳」1708〈宝永5〉)

b ちくヲ、かはひらしい盃じやな はるアイせんど梅枝さんにもろふたわいな
(斗樽堂主人「新月花余情」1757〈宝暦7〉)

(3)a 殊勝らしい坊様が、鉦をはつて、お念仏。
(近松門左衛門「薩摩歌」1704〈宝永元〉)

b 心中の間夫狂ひのといふやうな、気ばねもおれず、式十文で、式十文が情をかくれば、くぜつといふやうな、やばらしいさともなし、
(軽口耳菰「口拍子」1773〈安永2〉)

形容詞／形容動詞語幹を承ける場合、「ーらしい」は一語の形容詞として用いられてい

ると考えられる。このとき、「ーらしい」は「X の性質を有する」ことを表す。

次に、名詞接続の例を挙げる。名詞接続の「ーらしい」も、近世前期では、意味のうえで「ーらしい」から切り出せない。以下の例を見られたい。

- (4)a さらハ其時のゑにより、いふてしほらしき句ををしへ申さん

(安楽庵策伝「醒睡笑」6 巻 1623 〈元和 9〉)

- b 又ざは／＼と悪口を云て、嫌らしい男じやと思へ共、廿も逢ふて、先には誠の
心で誓紙を取、

(作者未詳「けいせい朝間嶽」上 1698 〈元禄 11〉)

「しおらしい」や「いやらしい」は、「X らしい」で一語の形容詞としての意味を表すものと考えられる。このとき、「ーらしい」は、「X の性質を有する」ことを表す。

- (5)a 宿に帰りてこの事を語れば、内儀は後悔らしき顔つき、おやぢはこれを笑うて、

(井原西鶴「世間胸算用」1 巻 1692 〈元禄 5〉)

- b 護国寺の音羽町、権現の門前町はすこしわけらしきゆきかた、料理もさのみふつ
ゝかならず、絹の物など肌付に着て、^{きびす}跟にあかゞりもなく、男の腰をすりむ
く事もなく、しばらくは酒ものまるゝ所也。

(八文字自笑「野白内証鑑」5 巻 1710 〈宝永 7〉)

これらの例における「後悔」や「わけ」は、「ーらしい」を承ける前と「ーらしい」で一つの形容詞として用いられる際とで、大きく意味が異なるわけではなく、上接名詞の意味をそのまま保っている例であると考えられる。しかし、「ーらしい」が後接した場合の意味として「X の感じがする／強い」ことを表し、形容詞と解される。また、この場合の上接名詞 X は、「後悔しているらしい顔つき」「わけがあるらしいゆきかた」というように、人の状態を表している。

次の例も、上接名詞 X の意味は切り出せるが、「X らしい」でみると形容詞であると考えられる。

- (6)a 仁物らしき男、枅の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、ある家のぬしよびいれて、

(安楽庵策伝「醒睡笑」1 巻 1623 〈元和 9〉)

- b 「をの子どものござるたふしと、ひとつにしても大事ないかや」と、白梅はしろとらしい顔して申せば、「それは我／＼卒忽なる事は仕りませぬ」と、

(八文字自笑「野白内証鑑」4 巻 1710 〈宝永 7〉)

- c エ、主人たちから内衆まで人らしい人はない。常磐御前の仕合せとは武士の口から聞きにくい、

(近松門左衛門「平家女護島」1719 〈享保 4〉)

「X の感じがする／強い」ことが表されていると思われる。

先にも述べた通り、(6)ac の上接部は、上接名詞の表す意味と「ーらしい」の上接名詞としての意味が異なる。「じんぶつ」や「ひと」は、「ーらしい」がつくとただの「人（人間）」ではなく、「素晴らしい、立派な人」を表す。(6)の「後悔」や「わけ」が状態を表しているのに対し、これらの上接名詞は特性を表していると考えられる。

(6)b は「素人らしい顔」であり、「顔=素人」のように同定することはできない。連体用法がある人物・物がなんであるかを推量するには、顔や声といった部分を修飾するのではなく、人物・物そのものの全体を修飾する必要があると考えられる。

【形容詞性接辞：意味の変化】

1600 年代の終わり頃には、生き物やものを上接名詞とし、これまでとは異なった意味を表す例が見られるようになる。以下の例を見られたい。

- (7)a とつとぬけたる男聞て、目薬が吉岑に沢山にござるかといふ。一山の内にハどこにもござるといふ。をれもとりに行ませうといひしが、あくる晩にきたりて、けふよしミねへ行て尋たが、目薬らしい物ハなかつたといふ。どうしやつたといへば、木のねにあらうと思ひ、ほりかへしてミましたといふた。

(作者未詳「当世手打笑」1681〈延宝 9〉)

- b 狼と山犬ハ似たやうな物で、しれぬ。『これハしたり。お身ハそのめきゝをしらぬか。』伊ハヤ、しらぬ 『しらずハ、おれがおしへてやらう。まづ狼らしいやつが出たら、棒をもつてぶつがゑい。山犬なればにげる。狼なれば、とびこんでくらみつく

(馬場雲壺「鹿子餅 後篇譚囊」1777〈安永 6〉)

- (8) しんまいの旦那へ、和尚、棚経に参られしが、取付世帯と見へて仏壇らしき物もなし。

(必_レ舎馬有「咄の会七席目時勢話綱目」1777〈安永 6〉)

これらの例では、上接部が具体的な生き物・ものを表しており、(5)や(6)とは異なる。意味としては、「目薬に見えるもの」「狼に見えるもの」「仏壇に見えるもの」など、上接名詞そのものを中心として、「X に見えるもの」を指し示しているのではないかと思われる。「Y は X らしい」という同定は表さないが、1600 年代の終わり頃になると、形容詞性接辞の「-らしい」において上接名詞 X がある属性として切り出されるものが見られるようになる。

1680 年代の終わり頃以降、以下のような「Y は X に見える」ことを表す推量用法の「-らしい」の例が見られるようになる。同時期、既に上接名詞 X がある属性として切り出される例が存することは形容詞性接辞の例からも明らかであり、「-らしい」の意味の変化、ならびに比較的自由に上接部を取ることによって見られるようになったものと思われる。

- (9)a 又年比三十計なる呉服屋の手代らしきが、さらしの衣唐木綿の香の図の紋つ^{ママ}ぶじたるが、かすかに見えすきておかし。 (編者未詳「二休咄」1688〈貞享 5〉)
- b 中小性らしき侍、本町を通りけるに、町のなかはにてせきたのはなをふみきり、おりふし、かひ草履ももたせざれば、僕におゝせて、此あたりにそうりあきなふところやあると云つけける。

(鹿野武左右衛門等「枝珊瑚珠」2 巻 1690〈元禄 3〉)

- c 大名の買物使らしい侍の、挟箱持一人めしつれ、中奉書入るよしにて、三百枚売りわたし、代銀請取り、その人帰られさまに、ひとつふたつ狂言しばゐの物語仕り申候が、財布を取残してゆかれし。

(井原西鶴「万の文反古」3巻 1696〈元禄9〉)

- (10)a 表の戸を明け、手代らしい男が二人づれでずつとはひり、二瀬をまねき、「二階の声は、浦島と替名のおやち様ではないか」ととへば、

(八文字自笑「野白内証鑑」5巻 1710〈宝永7〉)

- b 此やうなあばれ芸子を奴トいふ異名つけて称美すればのりが来て腕まくり上ヶ浜芝居の物まね客の羽織とつて着ておくりがてらのぞめきたいこ持ちらしひものに行合ふて辻で新八よあほよと大声上でのゝしり皆興のさめたるおかしさ也

(外山翁「浪花色八卦」1757〈宝暦7〉)

これらの「-らしい」では、「(新しく登場した人物に対し) XらしいY」という形で表しており、未だ何者であるかはっきりしない人物Yに対し、「YはXに見える」ことを示していると考えられる。「XらしいY」は、「Xらしい男・もの」のような形で現れ、上接名詞Xは人物の属性を示し、被修飾語Yは(ある)人物が示すという形のうえの特徴を指摘できる。また、被修飾語Yは具体的な意味を持たず、表し得るのは男・女といった性別程度で、形式名詞のような働きをしていると考えられる。(10)aのように省略されることもある。

【推量用法の成立】

「YはXに見える」ことを示す連体用法の「-らしい」が見られるようになった後、上接名詞が「事柄」や、「事柄に対する話者の態度」を表す例も見られるようになる。

- (11) 金十郎「明日の朝は茶漬けを食いの、ずい帰りだぜへ。今夜はおゝかた、菊園か菊の井といふ名代らしい晩だ」喜八「悪推ばかりおつせんす。行灯に無駄書き、もう帰るも古いやつね」(奈蒔野馬乎人「啞多雁取帳」1783〈天明3〉)

- (12) 財布持ち「昔は代物を貸した上に、代をば、やつぱり貸した方から取りに回つたそうだが、ほんの事か知りませぬ。どうやら嘘らしい事だぞ」

(万象亭竹杖為輕「従夫以来記」1784〈天明4〉)

(11)は、「XらしいY」で未実現の事柄が表されている。即ち、話者が発話時において「[今夜は、菊園とか菊の井とかいう名代が来る]らしい」と捉えていると考えられる。(12)は、他者から聞いた話について、話者が「[昔は代物を貸した上に、代もやはり貸した方から取りに回ったという話は、嘘]らしい」と捉えていることが示されているのではないかと考えられる。また、以上の例は、副詞「おおかた」や「どうやら」と共起している点にも注意される。4節にも述べた通り、「-らしい」は推量用法において「どうも／どうやら」などの副詞と共起するとされるが、これらのように推量的判断を示す連体用法でも

共起が可能なのである。

また、以下のような、話者の視点を介して「Y は X に見える」ことが示される例も見られるようになる。

- (13) a 向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中を、ながして下せへといつたら、ハイとこいて、六十ばかりのばゝアめが、たはしをもつて、きやアがつて、おせなかを、あらひませうかとぬかしやアがる

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5 編上 1806 〈文化 3〉)

- b 卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたトいふがいひがかりで喧嘩よ。それから聞きねへ、其色男をノ聞きねへ、むごくぶちのめすもんだから、きねへ」アバ「イ、サ聞いてるヨ」

(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之巻 1820 〈文政 3〉)

これらの例は、形や意味・用法については(9)(10)に同様であると考えられる。しかし、「X らしい Y」が話者によって述べられたものであり、話者の推量を示されている点が重要である。

3. 「Xに見える」意を表す連体形「一らしい」と「一らしき」

以上の通り、1680 年代の終わり頃には、「Y は X に見える」ことを表す連体用法が見られ、時代が下ると話者の視点を介して用いられるようになる。ここでは、こういった「X に見える」ことを表す連体形「一らしい」の意味用法について、文体差や修飾・被修飾語の関係性といった観点から考察する。また、近世に続いて近現代の例についても確認しておきたい。

まず、この用法では現代語においても「一らしい」「一らしき」の両形が見られる。近世・近現代の「一らしき」の使用には、言うまでもなく、文語と口語という文体の差が関係する。次の例を見られたい（以下、用例内の●は岩崎による）。

- (14) a 金手ぬぐいをあげふか 谷ウ、貸しなせへ。俺がのは汗手ぬぐひで、役にたゝねへ

二人とも足をあらひあがる内に、盥だいなど用意して、二人が前へ直し置、となりの女房●らしきをよびよせ、みへへ口をあて、何やらさゝやく

(田舎老人多田爺「遊子方言」1770 〈明和 7〉)

- b おさみ「ヲヤ、お鯛さん。お早うございますネ。夕は嘸おやかましう ●らしきもの
おたい「アイ、ゆふべはおねむかつたらうネ。いつでもあの生酔さんは夜がふけるねへ さみ「アイサ、それでも癖がなくて能上戸さ。粕兵衛さんのやうにでないから能よ。

(式亭三馬『浮世風呂』2 編上 1810 〈文化 7〉)

- c トいふところへ、廿四五のよめ●らしき女。七十あまりのめくらばあさま、姑と見えて、法体したる人の手をひき、ざくろ口より付そひいつる。もつとも、手をあてて、はらくするてい
ヨ。お 静 に 遊 しまし しうとめ「アイ／＼ トとめをけのわきへすはる

(式亭三馬『浮世風呂』2 編下 1810 〈文化 7〉)

- (15) 向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中

を、ながして下せへといつたら、

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編上 1806〈文化3〉)

(14)は地の文における例、(15)は会話文における例である。地の文では「ーらしき」、会話文では「ーらしい」が用いられる。勿論、これは「Xに見える」ことを表す連体用法に限った差異ではない。以下、形容詞性接辞の例を挙げる。

- (16) 通り者こりや死人を焼く匂だ。じやが、土手でかげば、死びとの匂も、良いもの
じやないか。今夜は大ぶ土手が永やうだ といふで、しやんと小づまを鳥かぶとと、
上るりを、巧者●らしき声にてかたる

(田舎老人多田爺「遊子方言」1770〈明和7〉)

- (17) 風呂敷包を脊負し小僧、摺違ひしが立止り、過行唄女の後影倩と見送りしが、後
を慕ひて唄女の帰り宅まで見とゞけ、立かへる発明らしき小僧ふるまひの動静、何ゆゑな
るか知らねども、独合点ひとりうなづきはしりゆく。(為永春水「春告鳥」3編 1811〈文化8〉)
- (18) りき「アノウ御家の小僧さんが参りました 鳥「ハテナ誰だか りき「アノお前
さんが御ひみきになさつた発明らしい小僧さんでございますヨ。

(為永春水「春告鳥」4編 1811〈文化8〉)

(17)と(18)のように、同じ筆者であっても、地の文では「ーらしき」が用いられ、会話文では「ーらしい」が用いられるのである。

明治期以降も、連体形「ーらしい」「ーらしき」には、「Xに見える」意を表す例が見られる。近世同様、新しい登場人物や物を示す際に現れやすく、また、「ーらしき」が主に文語文において見られる。

- (19)a おや ちやうすけは親は長助母はおさめと名ばかり知つて土地は知りませんと聞きくに下女を供に連れ
たる此の町家の女房らしき人は驚おどろきて、委くはしい話も聞き共に親御を探して上
げたい私と一途にマアござれ と、 (饗庭篁村「従軍人夫」1895〈明治28〉)
- b 又候角灣の北北東に當り高地に砲臺らしきものありと

(「海内彙報」1895〈明治28〉)

- (20)a 馬を前の柳の蔭に繋いで、百姓らしい朴訥の男が床几に掛けて溢茶を啜つて居
た。(川上眉山「眼前の春光」1901〈明治34〉)
- b 人の氣勢がしたので、只見ると、三十恰好の、達者作りの女房らしいのが、
あねさまかぶり はだし たすきがけ おほ ざる もみがら やまもり かい こ はたけ はう
姉様冠、跣に襷掛、大きな箆に粉売を山盛にしたのを抱へ込んで畠の方へ出
て行つた。(川上眉山「眼前の春光」1901〈明治34〉)
- c 出て来たのは日頃の生意氣な書生では無くて、仲働らしい中年増であつたが、
かれ ひと けいぶ いろ み と かく とりつぎ やが れいそく へや
彼も倅しく輕侮の色は見せながらも、兎も角も取次をして、廳で令息の部屋へ
あんない
案内をした。(小栗風葉「一腹一生(承前)」1901〈明治34〉)

(19)(20)のような連体形の例について検討すると、「XらしいY」は、「XであるY」のように同格で置き換えられる例と、「XのY」のように所属で置き換えられる例に分かれるのではないと思われる。(19)bや(20)bのような、「Xらしい人(男・女)・もの・の」

といった、名詞が準体詞の働きをする場合は、同格に置き換え易い。一方、(19)aや(20)aのような、被修飾語に当たる人物に既に情報が付加されている場合は、上接名詞はその人物に対する一特徴と捉えられ、所属と考えたほうがよいように思われる。

また、以下のような例は同格・所属といった解釈が当てはまらないものと思われる。

- (21) 長者は賈僧に魅されたり今や早して雨らしい雲もなし石の獅子の眼から血が流るゝより此方等の臍の茶が沸溢るゝわ一番嚇してやるべし

(饗庭篁村「暗合か翻案か」1901〈明治34〉)

上接名詞 X は被修飾語 Y に対し、推量し得る事柄になっている。(34)d を例とすると、「雨が降るらしい雲」と解釈されるものである。

なお、明治期以降では、活用語の言い切りを承ける「ーらしい」が定着する。そのなかで、連体形を取るものも見られる。

- (22)a ^{のむら}野村は^{さすが}有^{はんもん}繋に^あ煩悶して居るらしい^{やうす}様子であるが「^{くさ}あんな^{をんな}腐つた女は^さ去つても^を惜しくない！」と、キツパリ言つた。(柳川春葉「誇」1909〈明治42〉)

- b 菊見に行くらしい車が、大分続いて藍染橋の方から来る。

(森鷗外「青年」1910-1911〈明治43-44〉)

- (23)a ^{なか}中には^ま待ち^{まう}設けたりと^{おぼ}覺しき^{をどこ}男の三十四五なるが^{はや}既四五杯は^{はい}傾けたるらしき^{かほいろ}顔色して、(幸田露伴「縁の糸」1901〈明治34〉)

- b さても一行の人々を見れば生れて以來遠慮といふは夢にも見ぬらしき怪男子、而も房州の有志者より招待を受けたる操觚者なりけり。

(長谷川天溪「房州の海岸」1901〈明治34〉)

以上のような、活用語の言い切りを承ける例についても、被修飾語 Y がどういったものであるかが上接部 X によって表されており、「Y は X と見える」「Y は X と捉えられる」ことが示されているのではないかと考えられる。

また、活用語の言い切りを承ける連体形「ーらしい」「ーらしき」については、用例の割合に差がある。「ーらしき」は活用語の言い切りを承けにくく、「ーらしい」にはそういったことはない。今回採取した用例では、連体形「ーらしい」が活用語の言い切りを承ける例は、明治期 23 例、大正期 69 例、昭和期 153 例、平成 32 例であるのに対し、「ーらしき」は明治期 7 例、大正期 3 例、昭和期 0、平成 3 例である。これは、「ーらしき」が同格を表すことに関連するのではないかとと思われる。

以上の通り、推量を表す連体用法の「ーらしい」と「ーらしき」は、ほぼ同じ意味・用法を有するが、X と Y の関係は「ーらしき」のみ同格に偏り、「ーらしい」ではそういった偏りが無い。また、「ーらしい」は活用語の言い切りを承ける割合が高く、「ーらしき」で低いといった点で異なる。

4. 「ーらしい」の推量用法

以上の通り、「ーらしい」の連体用法を中心に、意味・用法を見てきた。これによると、「ーらしい」の推量用法は、まず、以下のような連体用法がきっかけとなって見られるようになるのではないかと考えられる。

- (24) a 是にかぎらず扇屋は、女房に骨ををらせて亭主はらくしてまうける、要は折手共が働き、^{かしざしき}借座敷の台所にあがりて、まづきせるの湯に成るほどたばこけふらせ、賄らしき男とらへて、芝居のぬれ狂言のうまき所を咄しかけ、其のあはひには腕などふいて、まづ売る扇子の事はすておき、下々のふくろび、きやはんのひものはなれたをぬひつけ、さのみしんどうになき、目にたつはたらきをし
ておき、
(八文字自笑「野白内証鑑」3巻 1710〈宝永7〉)

- b 卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたトいふがいひがかりで喧嘩よ。

(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之巻 1820〈文政3〉)

こういった例では、「XらしいY」で「YはXに見える」ことが表され、特に(37)bのような話者の視点が入ることによって、「X=Y」であるという推量的判断を表すと考えられる。

連体用法において「Xに見える」ことを表す例が見られるようになった後、1800年代になると、次のような終止形の推量用法の例が見られるようになる。

- (25) a 弥次「さやうさ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたアございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰瘤のあるおかたじやおませんかいな

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5編追加 1806〈文化3〉)

- b 目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいネ

(式亭三馬『浮世風呂』3編 1811〈文化8〉)

- c ^{いま}今米八が其^そ近^こ處^らから、かへり來^{きた}らば大變と、思^{おも}へば何かそは^{なに}／＼して 「サアもふよかア販^{かへ}らふの 長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八さ^んらしいヨ。
かくさずといゝじやアありませんかト

(為永春水『春色梅児誉美』初編3 1833〈天保4〉)

これらの例では、話者がある根拠に基づいて「[AはXである]らしい」のように推量している。[A=X]は話者にとって真偽不明であり、「ーらしい」によってそうである可能性が高いことが示されていると考えられる。

5. おわりに

以上の通り、「ーらしい」の連体用法について見てきた。結論は以下の通りである。

「ーらしい」は、中世から近世の半ばにかけて、形容詞の例のみが見られる。しかし、1600年代の終わり頃になると、連体用法において、上接部 X と被修飾語 Y が「X=Y」と同定でき、「Y は X に見える」ことが表される例が見られるようになる。その際、「中小姓らしき侍」のように、「ーらしき」の形が見られることも特徴の一つである。こういった連体形の「ーらしい」は、新たに登場した人物や物（Y）に対し、それが X と Y が同定関係であることを断定せずに示しているのではないかと考えられる。その後、1800 年代に「(さっき見たのは) どうも米八さんらしい」のような、終止形で推量を表す例が見られることとなる。

連体用法から意味・用法が変化したのは、もともと「ーらしい」が何かを修飾する形容詞として用いられ、形容詞性接辞の段階から連体用法の例が多く見られることによるのではないと思われる。そのなかで上接名詞を切り出すものが見られ、「X の感じがする／強い Y (仁物らしい男)」「X のように見えるもの (目薬らしいもの)」のように連体形の例から意味が変化していくのではないかと考えられる。

このような、元は接辞であったものが、話者の推測的判断を表すようになる例に「ーばい」が挙げられる（例…形容詞性接辞：子供っぽい鞆 話者の推測的判断：雨が降るっぽい）。「ーばい」に関しても、連体形において「Y は X に見える（X と Y は同定できる）」ことを示す意味・用法が見られ、その後、終止用法において話者の推測的判断を示す例が見られるようになる。接辞が話者の判断を示す用法を獲得するうえで、興味深い共通点なのではないかと思われる。

結論

1. 「ーぽい」の意味変化

近年の「ーぽい」には、以下のような話者の推測的判断を表す例が見られる。

- (1) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DK で、もう一つの部屋は寝室っぽい。

(山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』2004〈平成16〉)

- (2) どのような経緯であの美人はあんなに怒っているのかと論理的に頭を働かせて、正解であろう結論に辿り着く。

「——あの。寝てません。寝てませんから、全然」

「……最悪ですね。いったい今までどんな嫌をされてきたのさ、石杖[イシヅエ]さんは」

ビンゴー！ 間違いない、初日から居眠りぶっこいたっぽいです俺！

(奈須きのこ『DDD』2巻 2007〈平成19〉)

(1)は、話者は「質素な部屋において画材や描きかけの絵が置いてある」状況を見ているが、「ーぽい」で示されるのは「もう一つの部屋は寝室」という、未だ入っていない部屋が何であるかについてである。(2)は、相手が怒っていることや発言などから「初日から居眠りぶっこいた」ことを導いている。どちらも、話者が直接確認できないことに対し、見えている状況から推測していると考えられる。これらの例では、「ーぽい」によって話者が「もう一つの部屋は寝室」「初日から居眠りをぶっこいた」と判断していると思われる。こういった「ーぽい」は、話者の推測的判断を表していると考えられる。

「ーぽい」は、元々は「安っぽい時計」「水っぽい酒」「怒りっぽい人」など、ものや人の性質・性格を表す形容詞である。しかし、近年では、これに加えて話者の推測を示す用法が見られるようになった。

ここでは、(1)(2)のような話者の推測を示す「ーぽい」が見られるようになる経緯を、上接部、意味用法、形の変化に基づき、段階に分けて示す。

1-1. 第1段階：接辞用法の段階

近世から明治期半ばである。「ーぽい」は形容詞性接辞である。形容詞性接辞の「ーぽい」の意味・用法は、主に、どういった上接部を承けるか・「ーぽい」が何に対し用いられるかによって分類される。形としては、活用形に連体形・連用形・終止形が見られ、程度副詞や修飾語句を伴う例が見られる。

まず、第1段階において見られる上接部を挙げる。

(3) [語根]見に行てしめつぽい出る拂藏

(呉陵軒可有等編『誹風柳多留』初編 1765〈明和2〉)

[名詞]役人のほねつぽいのハ猪牙に乗セ (『誹風柳多留』2編 1767〈明和4〉)

[動詞連用形]ほんにお前は余程腹たちつぽいよ

(山手馬鹿人「粹町甲閨」1772-1781〈安永年間〉)

[形容詞語幹]あらつぽい仲人をする庄之介

(『誹風柳多留』15編 1780〈安永9〉)

[形容動詞語幹]花琴ばからしいあわれつぽい事をおいゝなんすかへ

(梅暮里谷峨「廓の癖」1799〈寛政11〉)

語根は、「しめ」「まじ」で、「しめやか」「しめる」などにより^{*33}、「まじ」は「まじまじ」「まじくさ」などによるのではないと思われる^{*34}。

名詞は、ものや人に含有される「骨」「水」と、人の言動の様子を表す「愚痴」「理屈」とに分かれる。

動詞連用形は、「恨み」「飽き」「浮かれ」など、人の感情に関連する動詞が殆どである。「汚れ」のような自然とそうなるものも少数ながら存する。「一ぱい」が承ける動詞は、意図して制御することが難しいものという共通点がある。

形容詞語幹は、「荒」「安」と色彩を表す形容詞の語幹である「白」「黒」「青」に分かれる。「白」「黒」は、人の行為に対して用いられる場合は、「素人のような」「玄人らしい」といった意味を表すものも存する。これに対し、身体部位に対して用いられると色彩を表す。

形容動詞語幹は、全上接部のなかで最も遅くに見られ、唯一の和語として「哀れ」があるが、それ以外は「仇(婀娜)」「気障」など漢語を承ける。

これらの「一ぱい」は、人やものに目立つ特徴を示す。また、上接部に性質・状態を示すものを取るか、行為を示すものを取るかによって用法が二分される。

まず、上接部に行為を示すものを取る例を挙げる。

(4)a 紺染メハよこれつぽいとこなや言イ (『誹風柳多留』33編 1806〈文化3〉)

*33 松井(1983)において、「しめっぽい」「むかっぽい」に対し、

「しめ」は「しめやか」・「じめじめ」などの「しめ」、「むか」は「むかつく」「むかむか」などの「むか」で、語根または語基などと言われる要素と見るべきであろうか。

と述べられている。

*34 目をぱちぱちさせているさまを表す。「まじっぽい」が「まぶしく感じる」ことを表すため、関連があるのではないと思われる。

○羞明(まばゆし)といふ事を、〈略〉東奥にて、まじぽひと云

(越谷吾山「物類称呼」1775〈安永4〉)

○よく見なさろ、金だあよ、コリヤハアまじつぽくでなり申さぬ

(感和亭鬼武「旧観帖」1805-1809〈文化2-6〉)

- b 短「全体、^{ぜんてへ}倦怠^{あきつぽ}いから身が^{おちつ}落着かねへのさ。

(式亭三馬『浮世床』初下 1811〈文化8〉)

- c ほんに客人程疑りツぽいものアおざりいせんよ

(鼻山人「花街寿々女」上巻 1826〈文政9〉)

(4)a のようなものに対して用いられるものも見られるが、基本的には(4)bc のような人が「すぐ／よく～する」ことを表す。これを、「容易性を示す用法」とする。

これに対し、「骨」「荒」「哀れ」のような性質・状態を示すものを取る場合は、「顕著な特徴」を示すものと「割合の高さ」を示すものとに更に二分される。

- (5)a あわれつぽい事だらけゆへとうで乗りかゝった船と力をつけそれから箕が親元へ行委細を咄しとくしんさせ (梅暮里谷峨「白狐通」1800〈寛政12〉)

- b 「都て高田馬場の體、上の方に料理茶屋一軒」卒八「だいぶ荒ツぽい書きやうだネ」 (滝亭鯉丈『八笑人』4 編上 1828〈文政11〉)

- c おれの顔さへ見ると、あわれつぽい事ばかりいふから

(曲山人「仮名文章娘節用」1831-1834〈天保2-5〉)

人やものに対して用いられ、「(上接部に示される)特徴が強い」ことが示される。上接部は動詞連用形「怨み」や名詞「愚痴」「理屈」、形容詞語幹「安」「荒」、形容動詞語幹「哀れ」「気障」などである。この用法は、上接部が最も多様であり、表すものも幅広い。

- (6)a 麦めしもはやくどかべりが来る物なり。ひしきめしは水ツぽく力なし。雑水は咽がかわき。 (鈍九齋章丸「残座訓」1784〈天明4〉)

- b 弥次「ヲツト／＼、なるほどいゝ酒だ。水ツぽくてねからのめぬ。もふいっばいづけよふ (十返舎一九『東海道中膝栗毛』7 編上 1808〈文化5〉)

- c 張吉「其事々々。あんまり白ツぽい顔ぢやア、思ふ様に洒落も地口も出やア爲ねへ」 (為永春水『和合人』4 編上 1845〈弘化2〉)

主にも、及び人の身体部位に対して用いられ、「(上接部の)含有率が高い、濃度が高い」ことが示される。上接部は「水」「骨」などの名詞や語根「湿」、「白」「黒」などの形容詞語幹である。

続いて、「ーぽい」が用いられる際の形について検討する。第1段階では、連体形・連用形・終止形が見られる。連体形では、「ーぽい」のみで修飾するものと、副詞や修飾語句を伴うものが見られる。以下、(8)の波線部が修飾語句・副詞にあたる。

- (7)a 役人のほねつぽいのハ猪牙に乗セ (『俳風柳多留』2 編 1767〈明和4〉)

- b ちよつと覗きやれよと怨みツぽい女 (『俳風柳多留』9 編 1774〈安永3〉)

- c あらつぽい下女ひな皿がわり納メ (『俳風柳多留』21 編 1786〈天明6〉)

- (8)a そして好男ほど浮虚で飽ツぽい物さ。

(式亭三馬『浮世風呂』2 編下 1810〈文化7〉)

- b 女房「ハイ／＼、そしたら皆様およろりと」トかへり行く。茶見「わからなく理窟ツばい嬢アだぞ」 (滝亭鯉丈『和合人』2 編下 1823-1829〈文政 6-12〉か)
- c 喜次「ノホン、其處で今一人の人形は、ぐつと仇ツばい中年増といふのだから、古人段付をしたらば、何程ぐらゐの相場だらう」

(梅亭金鷲『七偏人』2 編上 1857〈安政 4〉)

- d 「為清から口が掛かつたから往つて見ると猿坂さんで、例の氣障ツばいので弱つてゐる所へ」 (朧月亭有人「春色恋廻染分解」初中 1860〈万延元〉)

連用形・終止形では、主に副詞が共起する。

【修飾語句なし】

- (9)a 外へ出てゐるを腹をたつやうなきのふやけふの呼出し買てもねへはなこんやくる事はあいつも承知だから宵とまりをいつてよこさずと心待か泊用事はつけておひてくれさふなもんだおらアぐちツぼくなつたよ

(関東米「客衆一華表」1789-1801〈寛政年間^{*35}〉)

- b 眼七「それだけ尚卒「ヘンその面／＼と安ツぼくくいふけれど、是でも合引を^{あひびき}かけて、拵て見せてへほんにヨ。よつぽどこせへばえのする顔だぜ」

(滝亭鯉丈『八笑人』3 編下 1823〈文政 6〉)

【副詞と共起する】

- (10)a 初手はあだな遊でわかつた客が何かうらみツぼくなつて何の事もないにいゝつればその子はのろくなつたを見ぬいてうちやつておくを

(富か岡の都にすむ流女それかし「部屋三味線」1789-1801〈寛政年間〉)

- b ぬしのうちは水気とやらのある所てさんすかさぞしめつほうさんしやうネウ

(うくひす谷白眼「三千之紙屑」1801〈享和元〉)

【修飾語句なし】

- (11)a 第一やたいぼねが気に入らねへ小便所の二階^{けへ}にあるが大さうらしひよしにしる出しものが水ツぼひ (振鷲亭主人「見通三世相」1796〈寛政 8〉)

- b ソレ酒を吞めば目の淵がほんのりと櫻色になるはサ、所を吞めねへから顔が白ツばいと言つたが惡いか」 (為永春水『和合人』4 編上 1845〈弘化 2〉)

【副詞と共起する】

- (12)a ほんにお前は余程腹たちつばいよ

(山手馬鹿人「粹町甲閨」1772-1781〈安永年間〉)

- b ヘン、隈取といひなせへ。隈ゑどりだけ古風で素つぼひ

(式亭三馬『浮世風呂』4 編下 1813〈文化 10〉)

- c 眼七「之の字を抜くとがうきと安ツばいの。ム、力彌がいに／＼。左いふ貴殿は

*35 寛政 12 年(1800 年)春頃まで。

大星力彌」

(滝亭鯉丈『八笑人』4編上 1835〈天保6〉)

第1段階においては、「一ぱい」のみで用いられることが多く、「一ぱい」を修飾するのは主に程度副詞であると考えられる。

1-2. 第2段階：接辞用法における用法の変化

明治期半ばから終わり頃である。ここでも「一ぱい」は未だ形容詞性接辞であるが、意味・用法と活用形、上接部の長さに変化が見られる。

上接部は、前段階に引き続き、5分類である。

(13) [語根] そう思つて見ると何だか壁が湿っぱい。

(夏目漱石「倫敦塔」1904〈明治37〉)

[名詞] 持参のビイルハ疾にかたむけフラスコの徳利をかたはらへころがし地まはりの水ッぱいさをさしつおさへッして

(暇名垣魯文「^{萬國航海}西洋道中膝栗毛」6編下 1870-1876〈明治3-9〉)

あ「私ア素人っぱい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」

(三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」1885〈明治18〉)

[動詞連用形] 倩夫のうわさから傍で油をかけられると^{あぶらをかけるとハうれしがらせる事也}うかれッぱいのハ乗地になつて

(暇名垣魯文「^{萬國航海}西洋道中膝栗毛」9編上 1870-1876〈明治3-9〉)

[形容詞語幹] 通「ヲツト當時の戯作者輩の顰に倣ふ安ッぱい著述に有ず

(暇名垣魯文「^{萬國航海}西洋道中膝栗毛」6編下 1870-1876〈明治3-9〉)

[形容動詞語幹] 千歳屋の辨吉といふ大姐かぶ。さまで上^{ちとせや}等^{べんきち}といふ兒容にハあらねど。所謂仇^{ねいさん}ッぱき^{じやうとう}中年増^{かほだち}。

(坪内逍遙「^{一読三歎}当世書生氣質」1885-1886〈明治18-19〉)

分類は変化しないが、名詞接続の語に広がりが見られる。一つは、意味・用法に関わる増加として、「素人」や「子供」など「(人物の年齢・性質・職業などに基づく)属性」を承ける「一ぱい」が見られるようになる。これは、意味・用法の変化とも関わる。もう一つは、色彩を表す名詞である。これまでは、色彩を表す「一ぱい」は形容詞語幹につくもの(白っぱい、黒っぱい、青っぱいなど)であったが、第2段階以降は、名詞にもつくようになる。用例は以下の通り。

(14)a 茶っぱい脊広の衣から手巾を取り出して

(幸田露伴「付焼刃」1905〈明治38〉)

b 母は大きな紺っぱい風呂敷の中に内^は職^{おほ}の竹串^{こん}をいつぱい包^ふんで其れを負^ろつて町^{しき}へ行^{なか}かうとした。^{ないしよく} (小川未明「悪人」1917〈大正6〉)

上接名詞は時代が下るにつれてこのように増加していくが、一方で、「骨っぱい」や「水

っぽい」のような含有されるものを表す名詞は大きくは増えないなど、生産性の低いものもある。

意味・用法は、第1段階と同じく3通りであり、意味・用法の分類の条件にも変化はない。ただし、先述の通り、顕著な特徴を示す用法の意味が更に3つに分かれるという変化が生じる。3つの意味は、上接名詞の典型に外れるか否かという観点によって分かれる。

【顕著な特徴を示す用法】

以下は「顕著な特徴」のみを示す、第1段階のものと同じ意味・用法である。

(15) a ^{まわり}包圍には ^{やすつ}安っぽい ^{はでな}虚飾置物や額は見えず、

(若松賤子「小公子」1890-1892〈明治 23-25〉)

b そして、散歩の途中で行き違ふ艶ッぽい婦人は、すべて渠に余り澄まし込んでゐる様に見え、八百屋の百姓馬子と露店の焼きもろこしや林檎などが渠に最も親しみを感じさせるのである。(岩野泡鳴「放浪」1910〈明治 43〉)

c 差し向いの朝酒に、理窟ッぽいお談義を、やや辟易の態で、ならぼうまくほぐらかして了おう了見だった。(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

これに対し、以下の2例では、「典型から外れる」「典型と合う」ことが示される。

(16) a 素人ッぽいことを訊くやうだが、今度の一件について何にも心当りはねえかね(岡本綺堂「半七捕物帳」1923〈大正 12〉)

b 豊頬で、眼鼻だちのちまちまと調った顔つきも子供ッぽく、二十四とはとても受け取れなかった。(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(16)に挙げた「一っぽい」は、「素人らしい素人」「子供らしい子供」のように、典型的な性質を想定することが可能な上接名詞を承ける。この条件を満たした(16)のような例では、(16) a のような「(実際は玄人なのに)素人っぽい」という典型との間にずれが生じることや、(16) b のような「(実際に幼く)子供っぽい」という典型とずれが生じないことを意味するようになる。典型に外れるか否かということは、一種の価値判断であり、話者の視点が入り込むのではないと思われる。

一方、割合の高さを示す用法・容易性を示す用法では、「一っぽい」自体に話者の視点が入り込む例は見られない。

(17) [割合の高さを示す用法]

a 丈の高い紳士は倚子を離れ、彼の鋭い眼で、セドリックを眺め、眺めながら、瘠せた頬を骨ッぽい手で撫てゐましたが、

(若松賤子「小公子」1890-1892〈明治 23-25〉)

b 其人が學校の歸りよ。小倉の白ッぽい縞の袴を穿いて、風呂敷包を抱えて、向ふからてくてく歩いて来るのよ。(田山花袋「手紙」1909〈明治 42〉)

c 私は埃ッぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。(梶井基次郎「檸檬」1923〈大正 12〉)

(18) [容易性を示す用法]

a お花は不審顔、『叔母さんと私と約束した事あつて、何だツたらう。』『おほほゝゝ。お花さんは忘れツぽいわねえ。 (広津柳浪「櫨紅葉」1901〈明治34〉)

b 『お前はよツぽど疑ぐりツぽい女だ。 (岩野泡鳴「断橋」1911〈明治44〉)

これら2つの意味・用法は、顕著な特徴を示す用法に比べて、変化が少ない(固定的な意味・用法)と考えられる。

続いて、「一ぽい」が用いられる際の形について検討する。第2段階では、「一ぽい」が語根のみで用いられる例、過去を表す例が見られるようになる。

(19) [連体形] モー涕泣てるぜ、真正に婦女てエ者は涙ッぽい者ぢゃア無エか。

(桂文楽口演 加藤由太郎速記「燃切り」1891〈明治24〉)

[連用形] 歓迎で国旗を出す、あれが生きていたらと愚痴っぽくなる。

(夏目漱石「趣味の遺伝」1906〈明治39〉)

[終止形] 「あなたはほんとに厭きっぽい」と細君が独言の様にいう。

(夏目漱石「吾輩は猫である」1905-1906〈明治38-39〉)

[語根] 赤くって、黒くって、瘠せていて、湿っぽそうで、それで所々皮が剥げて、剥げた中から緑青を吹いた様な味が出ている。

(夏目漱石「坑夫」1907〈明治40〉)

んで、一日の仕事の疲勞と消化作用の熱っぽさとで睡氣を催して暫く茶の間に假睡をしてか (中村星湖「歌さんの幻影」1917〈大正6〉)

[過去形] 久しぶりで本郷通りを溯って行つたが、街筋は少し埃っぽかつたので、赤門を入り、大学構内の樹の多い方へ、向けるともなく足を向けた。

(久米正雄「学生時代」1918〈大正7〉)

語根で用いられる例と過去形の例が新たに見られるようになる以外にも、

① 連体形・連用形において、第1段階よりも長い修飾語句を伴う例が見られる。

② 連体形において「何やら」「なんだか」と共起し、「(正体不明のものが) 上接名詞 X に見えた」ことを表す例が見られる。

③ 連用形において知覚動詞を修飾する例が見られる。

といった変化が見られる。

まず、修飾語句を伴う例を確認する。以下のようなものである。

(20) a 持參のビールハ疾にかたむけフラスコの徳利をかたはらへころがし地まはりの水ツぽいさをさしつおさへツして

(暇名垣魯文「^{萬國航海}西洋道中膝栗毛」6編下 1870-1876〈明治3-9〉)

b 手前共に口を聞く様な安っぽい男じゃないと、腹の中で慥に申し渡して擦れ違つた。 (夏目漱石「坑夫」1907〈明治40〉)

c 明いてゐる處から、曇つてゐるらしい白ツぽい光線が射し込んでゐた。

(里見弴「恐ろしき結婚」1917〈大正6〉)

(20)aは「地まわりの酒」であり、「水っぽい酒」であると考えられる。(20)bは「半熟の」「白っぽい」が「西瓜」を修飾しており、更に「まだ」が「半熟の」を修飾していると考えられる。また、(20)cのような修飾節を伴うものも見られる。(20)のような例が見られることから、近世に比べて、修飾語句が長くなっていると考えられる。

連用形についても、以下のような例も波線部は修飾語句になっているのではないと思われる。

- (21) 少し儼を持ったように埃っぽくぶくぶくする畳の上には丸盆の上に大学病院から持って来た薬瓶が乗せてあった。

(有島武郎「或る女」1911-1913〈明治44-大正2〉)

また、「一ぱい」の後ろに修飾語句を伴う例も見られる。

- (22)a 雨がはれあがって、しめっぽい六月の空の下に、高原地の古い町が、澱んだような静さと寂しさ とで、彼女の曇んだ目に映った。

(徳田秋声「あらくれ」1915〈大正4〉)

- b 褐っぽいじみな仙台平に、ところどころ黒く滲んだ涙のあとをポンポンとはたいて、

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

- c 取り払はれた人家のあとに、白ぼく、日の光を受けてゐる土の面にも

(吉江喬松「農民と文芸」1922〈大正11〉)

第1段階では、「一ぱい」のみで用いられるか、あるいは程度副詞が修飾する例が殆どである。しかし、第2段階になると、他の語句と共に人やもの(被修飾語)の性質・性格を説明するようになる。終止形ではこういった例は見られず、連体修飾において起こる変化である。

次に、「何やら」「なんだか」と共起し、「(正体不明のものが)上接名詞Xに見える」ことを表す例を挙げる。

- (23)a 凄じき勢で空中に投擧られた、石や、瓦や、砲車や、家屋や、其他種種なる何やらの黒ッぽき物体を、ばつと計火光の裡に照した、

(嵯峨の屋おむろ訳「セバストウポルの落城」1901〈明治34〉)

- b 何しろ、胸はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッぽいものがもやもやしているし、大苦しみの最中で、はっきりとは憶えてませんが、……そうですか、その時にあなたもいらしたんですか」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉)

これらの例では、「物体」「もの」が何であるかはっきりとしないと解される。一方で、正体が分からないなりに、その外見に現れる性質として「黒っぽい」「黄色っぽい」という色彩が示されている。「見える」ことが表されるのは色彩について用いられているためと考えられるが、どのように見えるかということに着目する点で、次の段階で見られる意

味・用法に通じると思われる。

また、連用形において知覚動詞を修飾する例も見られる。

(24) a ガスの深い夜で、店々のあかりが湿ッぽく見える。

(岩野泡鳴「放浪」1910〈明治43〉)

b 畏怖というと仰山すぎるし、同情というともまるで憐れっぽく聞こえるし、この顔から受ける僕の心持は、何と云って可いか殆んど分らないが、

(夏目漱石「彼岸過迄」1912〈明治45〉)

c それは人間の元気な小娘を見るのと少しもかわりがなかった。

美しいより寧ろ艶っぽく感ぜられた。

(志賀直哉「濠端の住まい」1925〈大正14〉)

知覚動詞は話者から「～に見える」「～と聞こえる」ことを表すものである。「一ぱい」のみでは「話者から X に見える」といったことを表せないが、「一ぱく」を含む一文において、話者の視点が入り込んでいると考えられる。

なお、終止形については、前段階から大きな変化はないと考えられる。

(25) a ^{これ}此女を今度或る大名へ奉公に出すのだが、余り^{しもがたふう}下方風も安ッぱい、手数であるうが御殿風に髪を直してくれまいか」

(三遊亭圓朝「後の業平文治」1903〈明治36〉)

b ^{しめ}湿っぱいが、^さ冴えた、^{あた}新しい、^き木の香が^{にほひ}芬とした時、^{とき}姨さんの^{をば}格子戸が^{かうしど}ごろ／＼と^{しま}閉る^{おと}音……

(泉鏡花「貸家一覧」1909〈明治42〉)

c 貴方は定めて飽っぱいと思うでしょう、然しこれは貴方と僕の性質の差違から出るのだから仕方がないのです。

(夏目漱石「明暗」1916〈大正5〉)

d 人づきのわるい無愛想で、怒りっぱい。(武者小路実篤「友情」1919〈大正8〉)

(25) c のような、副詞と共に起る例は見られるが、連体形や連用形のような、修飾語句を伴うものは見られない。これには、終止形の用例数が少ないことも関連しているのではないかとと思われる。終止形の用例数は、近世 19、明治期 10、大正期 8 に対し、昭和期 66、平成 320 である。このことから、「一ぱい」の変化は、まず連体形（連用形）から起こったと考えるのが自然なのではないかと思われる。

最後に、過去形の例を確認する。第2段階に見られる過去形は、初出例である「街筋は少し埃っぽかったので、」(久米正雄「学生時代」1918〈大正7〉)と以下に挙げる例のみである。

(26) 香もなく花も貧しいのぎ蘭がそのところどころに生えているばかりで、杉の根方はどこも暗く湿っぽかった。

(梶井基次郎「笥の話」1928〈昭和3〉)

これらの例は回想の場面で用いられており、過去の一時的状態を表すものではないと考えられる。従って形の変化と考えられる。

1-3. 第3段階：「YはXに見える」ことを示す接辞用法

昭和期初めから終わり頃^{*36}である。第3段階では、属性を示す用法が新たに見られるようになる。この用法における「ーぽい」は形容詞だが、「話者からYはXに見える」ことを表す。

上接部は以下の5分類で、第1・第2段階から変化しない。

(27) [語根]私がやっと湿っぽい蒲団から首を出すと、「高等乞食」は、そのかんこつの突き出た顔を私とおみくじ屋とへかわるがわる向けて、

(武田麟太郎「大凶の籤」1939〈昭和14〉)

[名詞]すると眇眼のおんなが、およそ彼女の顔とは不調和な色っぽい声で、

(尾崎士郎「人生劇場」1933-1951〈昭和8-26〉)

[動詞連用形]「お父さんは、忘れっぽいのね。

(海野十三「空襲葬送曲」1932〈昭和7〉)

[形容詞語幹]気取の無い率直さが荒っぽい土地の人氣に投じたい。

(中島敦「弟子」1943〈昭和18〉)

[形容動詞語幹]哀っぽい橋といふのは、しかし思ひつきや慣用の修辞などではないのである。

(保田與重郎「日本の橋」1936〈昭和11〉)

ただし、名詞接続の例については引き続き増加が見られる。明治期・大正期では、「(人物の年齢・性質・職業などに基づく)属性」を承ける「ーぽい」は「子供っぽい」「素人っぽい」の2語のみだが、昭和期以降、異なり語数が増加する。また、「NのN」という名詞を承ける例が見られるようになる。

意味・用法については、先述の通り、属性を示す用法が見られる。まずは、これまでも見られた3つの意味・用法の例を確認しておく。

【顕著な特徴を示す用法】

(28)a そのころの先生にはまだ非常に若々しい書生っぽいところが多分にあったような気がする。

(寺田寅彦「夏目漱石先生の追憶」1932〈昭和7〉)

b 少年の俤を豊かにとどめた紅頬が見る間に色褪せ痩せこけてゆき、思ひなしか挙措振舞まで落ちついて、大層大人っぽく成って行った

(高見順「故旧忘れ得べき」1936〈昭和11〉)

c 誰やら持病に鼻をわずらったらしいのが、げすっぽい鼻声を張り上げて、

(織田作之助「猿飛佐助」1945〈昭和20〉)

第2段階と同様、意味は3つに分かれている。(28)aは「(実際は先生なのに)書生っぽい」という典型との間にずれが生じる例、(28)bは「(年齢があがって)大人っぽい」

*36 用例を区別するにあたり、1926年(昭和1年)から1969年(昭和44年)までとした。

という典型とずれが生じない例である。(28)cは、典型とのずれを問わない例である。

【割合の高さを示す用法】

(29)a 「繫いでくれ」と黒田は思はずホッとして汗っぼい手に受話器を握った。

(井上友一郎「残夢」1939〈昭和14〉)

b それにクリストの血であるところの、フランス産の上等な葡萄酒がつけばなお結構だが、これは今日では無いものねだりのようだから、まあ配給の水っぼい焼酎で代用しておく。

(石川淳「かよい小町」1947〈昭和22〉)

c 一本の樹木もない埃っぼい埋立地のうえにたちならぶ工場と錆びた金属の堆積がみえた。

(倉橋由美子「聖少女」1965〈昭和40〉)

(28)aのような身体部位に対して用いられる場合と、(28)bcのようなものに対し用いられる例とに分かれる。第2段階と大きな変化は見られず、以降、この用法に大きな意味変化は見られない。

【容易性を示す用法】

(30)a あきっぼくて、気が小さくて、じき人にまいってしまって、ひとになじめない私の性格がいやになってくる。

(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

b あなたは純情なんて何もなくただ浮気っぼいから公明正大に人前に言ったり振舞ったりできないのでせう

(坂口安吾「青鬼の禪を洗ふ女」1947〈昭和22〉)

c ——先生は随分忘れっぼいんですね、と僕は一種の親愛の情をこめて言った。

(福永武彦「冥府」1954〈昭和29〉)

容易性を示す用法については、第1段階から大きな変化はない。人の性格について述べており、上接部にも大きな変動はない。容易性を表す上接部は「飽き、浮かれ、疑り、恨み、怒り、感じ、ひがみ、惚れ、腹立ち、忘れ、浮気、愚痴、涙、理屈」であり、「感じ、ひがみ、惚れ、涙」以外は第3段階以前より見られる。一方、第3段階以降に見られる例は用例数が少なく、「感じっぼい」1例、「ひがみっぼい」6例、「惚れっぼい」7例、「涙っぼい」2例である。古くから見られるものは断続的に用いられるが、新たな語は定着しにくいようであり、「一ぼい」で一語の形容詞として用いられていると考えられる。

【属性を示す用法】

昭和期の初めに次のような例が見られる。

(31)a 田舎に着いた日、その地方は五月の嵐っぼい天候であつた。俵に乗って市から村へ通じる寂しい一本道にかかると、荒い幅広い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。

(宮本百合子「伸子」1928〈昭和3〉)

b 熱くなると、居たまらなくなった風が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪^{あぶら}っぼいコロッとした身体の感触がゾッときた。

(小林多喜二「蟹工船」1929〈昭和4〉)

これらの例では、「X っぽい Y」における X と Y の照らし合わせが可能であり、「田舎に着いた日の天候」は「五月の嵐」、「コロッとした身体の感触」は「皮膚の脂肪」に感じられることを示していると考えられる。こういった、Y の「天候」や「感触」は、それがどういったものであるかを示されなければ内容が不足する語であり、ここではそれが「一っぽい」によって示されていると考えられる。

その後、昭和期の後半^{*37}になると、次のような例が見られる。

- (32) こちらを向いている角刈りのやくざっぽい男がおり、女の髪をつかんでカウンターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っていた。

(五木寛之「こがね虫たちの夜」1969〈昭和 44〉)

これについても、X と Y の照らし合わせが可能である。また、「こちらを向いている男」はどういった人物かははっきりしておらず、「一っぽい」によって「やくざ」の特徴を有していること、「やくざに見える」ことが示されていると考えられる。この例では、「話者から見て、男はどのように見えているか」という話者の視点が踏まえられている。第 3 段階は、このような「話者からどのように見えているか」を「一っぽい」で言い表すようになる点が重要である。

続いて、形について検討する。第 2 段階と同様、5 通りに分かれる。

- (33) [連体形] まっさきに見えたものは、火ぶくれのあのような、てらてらした、白っぽい皮膚の色だった。 (山本有三「路傍の石」1937〈昭和 12〉)

[連用形] 交番に行く道に迷うて、立止った途端、ふと方角を失い、頭の中がじーんと熱っぽく鳴った。 (織田作之助「放浪」1940〈昭和 15〉)

[終止形] あなたのお母さまが、大体、ひがみっぽいからいけないのよ。
(中村真一郎「恋の重荷」1956〈昭和 31〉)

[語根] その眼にはわかかわかしい、いたずらっぽそうな輝きがのこっていた。
(開高健「裸の王様」1957〈昭和 32〉)

[過去形] けさになって、検温器の度盛はさがったようだが、悪夢のあとがまだ熱ぽかった。
(石川淳「処女懐胎」1947〈昭和 22〉)

ただし、第 3 段階では、連体形・連用形のみでなく、終止形でも修飾語句を伴う例が見られるようになる。

- (34) a 青ぶくれの顔が却って透きとほるやうに見え、へんに不気味な大人っぽい感じなのですが、よく見るとさう悪い顔だちでもありません。きつとこの子は父親似なのだらうと思ひました。なんとなくそんな気がしたのです。

*37 前半・後半は戦前・戦後で区別する(1945 年を境とする)。「一っぽい」の意味・用法の変化を見ると、話者の推測を表す例が見られる 1980 年代を境として、その後、約 10 年の区切りで大きく変化しているように思われる。

(神西清「死児変相」1949〈昭和24〉)

- b なみだまでためてよろこぶ子どもっぼいしぐさなのに、じみづくりなかの女は、はたちやそこらとは見えなかった。(壺井栄「二十四の瞳」1952〈昭和27〉)

(35)a その子供っぼくにこにこした表情は、見覚えのある菅とし子だった。

(福永武彦「草の花」1957〈昭和32〉)

- b バスの内部の水っぼく暖かい空気に顔の皮膚がほぐされると、疲れた弱よわしい安堵がまじりあった。(大江健三郎「人間の羊」1958〈昭和33〉)

(36)a するとあなたはわたしの手を握った。いつものようにあたたかくて湿っぼい。

(倉橋由美子「パルタイ」1960〈昭和35〉)

- b そして彼が辛そうに身体を少し屈めると、いつでも飾られた夏子の写真がその華やかさの中心をなすように、眼の片隅に飛び込んで来るのだ。それは無邪気そうな、幸福そうな、子供っぼいともいえる微笑をほころばせて、勝気な黒い瞳に物怖じすることなく自分の命を見詰めている。

(福永武彦「告別」1963〈昭和38〉)

このことから、第3段階では、「一ぱい」が人やものを説明する一つの要素として定着していったのではないかと考えられる。その一方で、属性を示す用法が見られるようになり、「一ぱい」で被修飾語 Y がどういったものであるかを表すようにもなる。これは、上接名詞 X がそれのみで意味としても形としても切り出せるものになっているためではないかと思われる。「やくざ」は、「やくざな商売」のような形容動詞として用いられる場合と、職業としての「やくざ」とに分かれるが、(31)の例では、「こちらを向いている魚刈りのやくざっぱい男がおり」とあり、身体的特徴(外見)について述べられていることから、職業(属性)に解され易いのではないかとと思われる。

第3段階では、属性を示す用法が新たに見られるようになることが重要であると考えられる。この用法は、第2段階において、典型とのずれや正体のはっきりしないものを知覚で表すといった話者の視点が入り込む例が見られるようになったこと(意味上の変化)・他の修飾語句とともに、人やもの(被修飾語)の性質を表すようになったこと(形上の変化)によって生じたものと思われる。

1-4. 第4段階：話者の判断を示す用法

昭和期の終わり頃から平成9年まで^{*38}とする。第4段階における大きな変化は二つある。一つは、話者から目の前の状況がどのように見えているかを示す用法が見られるようになり、「一ぱい」が話者の判断を示すようになることである。もう一つは、上接部に句

^{*38} 第四段階以降、「一ぱい」は急速に広がっていくように思われる。新しい表現が見られる年で区切る。

が加わることである。

まず、上接部について例を挙げる。

(37) [語根]外気は乾燥しているのに、どこの家の毛布も湿っぽい。

(産経新聞 1998.7.7 〈平成 10〉)

[名詞]……やっぱり、夢っぽいな。

(吉本ばなな「ムーンライト・シャドウ」1986 〈昭和 61〉)

[動詞連用形]黒人との混血児には彼のような飽きっぽい性格が多いのだ、と。

(沢木耕太郎「一瞬の夏」1981 〈昭和 56〉)

[形容詞語幹]安っぽい仕立ての青いジャンパーに白いシャツ、

(宮部みゆき『夢にも思わない』1999 〈平成 11〉)

[形容動詞語幹]芥子之助は皮肉っぽく笑った。

(泡坂妻夫「喜劇悲奇劇」1982 〈昭和 57〉)

[句]NHK 第一放送昼のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっぽいじゃない。猫はそうじゃない。」

(言語生活 1986.5 〈昭和 61〉)

句接続の「ーぽい」は、動詞テイル形・タ形・ル形や、形容詞ナイの終止形、助動詞（ナイ・タイ）、副助詞（ダケ）などを承ける（用例については後に挙げる）。

先述の通り、意味・用法において、話者の推測を表す用法が新たに見られるようになる。また、顕著な特徴を示す用法において、以下のような「ーらしい」と置き換えることのできる例が見られるようになる。

【顕著な特徴を示す用法】

(38)a 「私思うんだけどね、つくづく、女っぽい女になりたかったわ」

(曾野綾子「太郎物語 大学編」1973 〈昭和 48〉)

b 先日、東京渋谷駅近くの公衆電話で。しゃべっていたのは学生風の男性。「ダサイなあ。でも、そこがいかにもお前ッポイよ。」旧世代としては、「お前らしいよ」と言わないと、どうも落ち着かないんですが。

(言語生活 1980.1 〈昭和 55〉)

以上の例は、典型とのずれが生じない例であり、尚且つ、「女らしい女」「お前らしいよ」としても意味が通じるものである。特に、(38)b の「お前っぽい」のような人称代名詞を承ける例が見られるようになることから、話し言葉の領域において、「ーぽい」が「ーらしい」の意味・用法へと進出している可能性がある。

これまでも見られた例については次の通りである。

(39)a あの店なら静かだし、全体に洒落た雰囲気、大人っぽい話ができそうな気がした。
(椎名誠「新橋烏森口青春篇」1985-1987 〈昭和 60-62〉)

- b [学校での丸刈り廃止]生徒からも「強制されているような軍隊っぽい感じがなくなかった」とか、「丸刈りを強制していない宇都宮市内を堂々と歩けるようになった」などの感想が出ている。(朝日新聞 1991.10.23〈平成3〉)

句を承ける例については以下の通りである((40)a 初出)。

- (40)a ○「熱っぽい、水っぽい」は耳なれているが、次のような例に出合って、ハッとした。F 女史「自信のありっぽい子どもたちですから……」(NHK 教育 TV 一月二十九日夜) (言語生活 1969.2〈昭和44〉)

- b 「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっぽいじゃない。猫はそうじゃない。」 (37 再掲)

上に挙げる通り、句を承ける例は、初めは人やもの(生き物)の性質を表す。しかし、第6段階になると、句が事柄を表すようになり、話者の推測を示す用法の用例も見られるようになる。

割合の高さを示す用法・容易性を示す用法については、大きな変化は見られない。属性を示す用法は、第4段階以降、用例が増加する。

【割合の高さを示す用法】

- (41)a 片平義雄はワイシャツに黒っぽいネクタイだった。(泡坂妻夫「喜劇悲奇劇」1982〈昭和57〉)
- b 周囲は埃っぽい畑地と小さな自動車整備工場群。空のよく見える平べったい土地だ。(桐野夏生『OUT』1997〈平成9〉)

【容易性を示す用法】

- (42)a 黒人との混血児には彼のような飽きっぽい性格が多いのだ、と。(沢木耕太郎「一瞬の夏」1981〈昭和56〉)
- b 惚れっぽい彼女のことだから、どうせ来月にはもっとかっこいい人を見つけたとはしゃいでいるに違いないと思っていたのだ。(山本文緒『パイナップルの彼方』1992〈平成4〉)

【属性を示す用法】

- (43)a 湘南の海岸でしょうか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぽい男と肩を寄せ合っている。相手の男の名もアルバムに書き込んでいます。藤上千次という組の者です。(泡坂妻夫『花火と銃声』1988〈昭和63〉)
- b さて、転校先の学校で彼女を待ち構えていたのは見るからにはみだし者っぽい3人の女の子たち。(毎日新聞 1997.5.10〈平成9〉)

割合の高さを示す用法・容易性を示す用法・属性を示す用法については、大きな変化は見られないと考えられる。

続いて意味・用法について検討する。新たに、話者が「ーっぽい」によって目の前の状況を示す例が見られるようになる。(44)が初出である。

【話者の推測を示す用法】

- (44) 雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッポメだ」と言うのだそうです。

(言語生活 1982.6 〈昭和 57〉)

「今日は雨っぽい」は、「雨が降りそうな」状況を話者の感覚で表したものであると考えられる。これは、話者が実際に見た状況を、話者が感じた通りに言い表すものであり、いわば、話者がある状況をどう捉えているか（どう見ているか・感じているか）を示したものであると考えられる。

話者がどう見ているか・感じているかを表している点は、属性を表す用法と同様である。しかし、上接部が状況を表すということはそれだけ形容詞としての解釈は不可能となり、「やくざっぽい口調：顕著な特徴を示す用法（やくざっぽい男：属性を示す用法）」や「麦茶っぽい色：顕著な特徴を示す用法（麦茶っぽい液体：属性を示す用法）」のような形容詞としても用いられるものとは大きく区別されるべきである。

続いて、形について検討する。第4段階以降、活用形において広がりは見られなくなる。しかし、連用形「一ぼく」が否定を伴う例が増加することと、過去形において過去の状態を表すようになるという変化が挙げられる。

- (45) [連体形]「そう、装芸。安っぽい社名にしたもんだな。

(泡坂妻夫「折鶴」1987 〈昭和 62〉)

[連用形]種一が熱っぽく言った。

(椎名誠「新橋烏森口青春篇」1985-1987 〈昭和 60-62〉)

[終止形]棚にはいろいろな銘柄の茶の大缶が並んでいるが、店の中はどこも雑然として埃っぽい。

(田久保英夫「辻火」1984 〈昭和 59〉)

[語幹]あいつはおれが、理屈っぽすぎると言って非難した。

(安部公房「砂の女」1962 〈昭和 37〉)

[過去形]兆治は、あの頃のほうが、今よりも大人っぽかったような気がする。分別臭いところがあった。

(山口瞳「居酒屋兆治」1979 〈昭和 54〉)

まず、否定を伴う連用形の例を挙げる。否定を伴う連用形は、疑問形になるものとそうでないものとに分かれる。

- (46) a 家賃はやや高くても、室内の造作があまり安っぽくなく、新しいのが気に入っていたが、それも他人に汚された様子はない。

(田久保英夫「蕾」1979-1981 〈昭和 54-56〉)

- b あなたはあなたよ。そんなふうに慰める時の彼女は、大人びているけれども決してお姉さんぽくはない。彼女は、妹のような存在や、どこかに連れだって歩く仲間のような友だちを持たない。(山田詠美『放課後の音符』1989 〈平成元〉)

- c でもやっぱり友達じゃなくて/彼女でもなくて/仲間っぽくもない

(やまざき貴子『っポイ!』1巻 1992〈平成4〉)

これらの例は、上接部 X の性質・特徴を持たない／X の属性に属さないことを示すと考えられる。連体形において既に典型との照らし合わせを行う例が見られ、意味自体は前段階から存する。

(47) 「ねエ…あの子の/つけてる宝石/本物っぽくない？」

「まっさか/あんな大きな/^{イミテーション}偽物に決まってる/わよ」

「そっ…/そうよ/ねエ」 (樹なつみ『花咲ける青少年』1巻 1990〈平成2〉)

この例では、「Y は X」(あの子のつける宝石は本物)と話者が判断しており、それを聞き手に問い掛けていると考えられる。

続いて過去形の例について検討する。第3段階では、地の文に現れ、文体により過去形を取っていたと思われるものだったが、第4段階以降、「一ぽかった」で過去の状態を表すようになる。

(48)a 「少しはまじめに恋をしなさいよ。」全くかげりのない明るい口調だったので、かえってずっしりきた。「昔っから君、大人っぽかったものね。年上の人が好きなんだね。」 (吉本ばなな『白河夜船』1988〈昭和63〉)

b 「松山先生なんて、私より、ずっと大人の男の人って気がしてた。でも、今日、見た時は、なんだか、ちょっと少年ぽかったわ」

(山田詠美『放課後の音符』1989〈平成元〉)

(48)a は現在でも「年齢より大人びた」となる可能性があるが、既に大人になっている「君」に対し「大人っぽい」を用いることはやや不自然であり、過去における性格と考えるとよいのではないと思われる。また、(48)b は既に少年ではない「松山先生」が一時的に「少年ぽかった」のであり、過去の状態を表していると考えられる。

1-5. 第5段階：相手の発話を引用する用法

平成10年から平成14年までとする。活用形については前段階と同様である。しかし、上接部と意味・用法の変化として、以下のような、上接部が省略されて会話の初めに用いられる「一ぽい」が見られるようになる。

(49) 「今日、テストあるっぽいよね」と、確信的な事柄の問いかけに「ぽいよね」と相づちをうつ。 (産経新聞 1998.2.21〈平成10〉)

ここでの「一ぽい」は、「テストあるっぽいよね」という相手の発話を承け、「(テストある) ぽいよね」と繰り返している。相手の発話を引用し、上接部を省略して「ぽい」のみで肯定する例である。

これまで、話者からどう見えているかを示していた「一ぽい」が、話し相手の発言に対しどう思うかを示すようになる点で、変化していると考えられる。

1-6. 第6段階：話者の推測を示す用法・相槌を示す用法

平成 15 年以降である。話者が直接知覚できないことに対し推測する例が見られるようになる。また、話者から見えている状況を示す「ーぽい」において、連用形でも用いられる、過去にどのように見えたかということを示すようになるという用法の広がりが見られる。

「ーぽい」が会話の初めに用いられる例では、第 5 段階とは異なり、相手の発話に「ーぽい」が用いられていないものが見られるようになる。

まず、話者の推測を示す用法の例を挙げる。

(50) a 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DK で、もう一つの部屋は寝室っぽい。(1 再掲)

b 「だからね、俺が辞めて、で、俺がいないとどれだけ困るか、上司たちに分からせてやろうと思ったんすよね」

「で、おまえが辞めて、みんなは困ったのか」

「いやあ」とカズは笑う。「全然、困ってないっぽいです」

「早まったな、カズ」

「早まりました。毎日、後悔してますよ」と言うのがどこまで本心なのか判然としなかったが、カズはつらそうに言った。

(伊坂幸太郎『ゴールデンランバー』2007〈平成 19〉)

第 3・4 段階より見られる属性を示す「ーぽい」ならびに話者から見えている状況を示す「ーぽい」は、話者の知覚による判断を表していると考えられる。これに対し、近年にのみ、話者が観察している状況に基づいて、話者からは直接知覚できない内容（もう一つの部屋は寝室／職場のみんなは自分がやめても全然困っていない）を推測する例が見られるようになる。

会話の初めに用いられる「ーぽい」の新しい例は、以下のような話し相手の発言に「ーぽい」が用いられないものである。

(51) a 「またふられたの？」

夕食のためにようやく二階から降りてきた直ちゃんに声をかけた。

「っぽいね」

直ちゃんは肩をすくめると、自分の席に着いた。

(瀬尾まいこ『幸福な食卓』2004〈平成 16〉)

b 「なんや!？」

「何か逃げた一つ そっちいった一つ」

「サルか!？」

「…っぽい！」

(西炯子『甥の一生』2 巻 2009〈平成 21〉)

第5段階に見られた「今日テストあるっぽいね」に対し「っぽいね」と答える例では、相手の発話にも「ーっぽい」が使用されていた。これに対し、この例では相手が「またふられたの?」「サルか!?!」のように Yes-No の疑問を投げかけており、話者は相手の推測である「またふられた」「サル」を「っぽい」によって肯定している。こういった例は、話者の推測を示す用法が成立したことにより、見られるようになったのではないと思われる。

また、第6段階では、連用形・過去形でも話者が「Xに見えた」と推測する例が見られるようになる。

- (52) 「犯人は、男が二人に、女が一人だったそうだ。男はホストっぽくて、女は露出度の高い服を着ていた」という河崎の説明を聞いた瞬間、わたしはその場に座り込みそうになった。

(伊坂幸太郎『アヒルと鴨のコインロッカー』2006〈平成18〉)

- (53)a 「何のために、つけたんだ」響野が、納得いかない、という顔つきで問い質す。
「深い意味はないけど、さっきも言った通り、怪しい男っぽかったからだよ。掏った財布の中にはさ、免許もなかったんだ。仕方がないから、あの発信機、ちょろどいいや、と思って、あの男の居場所を後で調べようと思ったんだ」

(伊坂幸太郎『陽気なギャングの日常と襲撃』2006)

- b 「そっか、それもそうだよね……大丈夫だってわかったら、駅員さんから連絡、あると思う？」

「どうかなあ。でもあの駅員さん、いい人っぽかったから、連絡はくれると思う」

(柴田よしき『やってられない月曜日』2010〈平成22〉)

これらの例は、過去において「Xに見えた」ことを表しているが、現時点でも「YはXっぽい」ことを表すと考えられる。

1-7. おわりに

以上の通り、「ーっぽい」が話者の推測的判断を示すに至る過程について検討してきた。「ーっぽい」が話者の判断を示すようになるに際しては、第3段階において、「ーっぽい」が内容不十分な人やものに対し、「Y(人・もの)はXに見える」ことを表すようになることが重要であると考えられる。この変化は連体用法から起こり、これを承けて、第4段階以降に話者の判断を示す用法が見られるようになると考えられる。第4段階では、話者がある状況に対して判断を行う例が見られるようになり、ここでは「ーっぽい」は終止形を取る。

第5段階・第6段階における「ーっぽい」は、話し相手の推測内容を引用し、それに対する肯定を示すようになる。さらに、話者が直接知覚できていないものごとにも用いられるようになり、その場合は話者の推測を示すと考えられる。

「ーっぽい」の意味変化は、次の通りまとめられる。

1800 年以前	形容詞					
近世後期	形容詞	修飾語句＋「ーぽい」				
明治／大正期	形容詞	意味の分化 活用形の増加				
昭和期初め	形容詞	接辞	意味用法の増加			
1970 年代	形容詞	接辞	上接部(形容動詞語幹)／活用形の増加			
1980 年代	形容詞	接辞	話者の判断	上接部(句)の増加	意味用法の変化	
1990 年後半	形容詞	接辞	話者の判断	発話の引用	意味用法の変化	
2003 年以降	形容詞	接辞	話者の判断	発話の引用	推測的判断	相槌

「ーぽい」は、近世後期から明治期・大正期にかけて形容詞のみが見られる。これは、「湿っぽい」「水っぽい」など一語で形容詞として用いられるものである。形容詞の「ーぽい」の用法は、「顕著な特徴を示す用法」「割合の高さを示す用法」「容易性を示す用法」の3つに分かれる。

形容詞の「ーぽい」に生じる変化として、近世後期以降に修飾語句を伴う例が見られること、明治／大正期以降に「顕著な特徴を示す用法」の意味が3通りに分かれること、過去形・語幹のみで用いられる例が見られるようになることが挙げられる。

その後、昭和期の初め以降に、新たに「属性を示す用法」が見られるようになる。このとき、「ーぽい」は上接部を自由に取り取る接辞である。また、初めは主に名詞を承け、連体形を取る。1970 年代以降、接辞の「ーぽい」にも変化が生じる。上接部が増加し、形容動詞語幹接続の例が見られるようになる。また、過去形を取る例や語幹のみで用いられる例が見られるようになる。

1980 年代以降になると、上接部に句が見られるようになる。また、話者の判断を示す用法が加わり、話者が見ている状況を「ーぽい」で示すようになる。これに対し、1990 年代後半には、話者が見ている状況ではなく、話し相手が「ーぽい」を用いて判断した内容を引用し、それを「ーぽい」によって肯定する用法が加わる。

2003 年以降、話者が直接見ていない（知覚不可能）なものに対して、「A は X である」と推測する用法が見られるようになる。また、話し相手の判断内容を肯定する例において、相手の発言に「ーぽい」が用いられていない場合にも相槌を示すようになる。

2. 「ーらしい」の意味変化

「ーらしい」には、形容詞接辞の用法と、推量用法とが見られる。

(1) [形容詞性接辞]

- a その声音までがしおらしい。（司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉）
- b 美紀ちゃんがじっと見ているので、「食べさせてあげようか」と言うと、「美紀、赤ちゃんじゃないもん！」と真剣な顔で言う。そう言いながら、薫が口を開けると自分も思わず口を開けるのがかわいらしい。

（角田光代『八日目の蟬』2007〈平成 19〉）

(2) [推量]

- a 今の話の様子では、大畑は伸子を社長にしたことなど、まるで忘れてしまっているらしい。（赤川次郎「女社長に乾杯！」1982〈昭和 57〉）
- b 誠の足元では鮎村が転がったままだった。呻き声を漏らしながら立ち上がろうとした彼の腕を、どこからか現れた男が掴んだ。その様子から、この男も刑事らしいと誠は思った。（東野圭吾『さまよう刃』2004〈平成 16〉）

「ーらしい」は中世より見られるが、推量用法が見られるようになるのは近世の終わり頃（1800 年代）以降である。また、(2)a のような、活用語の言い切りを承ける形が定着するのは明治期以降であり、中世から現代にかけて意味用法が変化していると考えられる。

ここでは、「ーらしい」の意味変化を、上接部・意味用法・活用形に基づき、段階に分けて示す。

2-1. 第1段階：接辞用法

中世から近世前期までである。今期、「ーらしい」は、形容詞性接辞である。まず、中世の用例を挙げる。

- (3)a 全體ハ鳥テ、モノヲ云ハ、人ノ様ナハ、アマリハケ[化け]ラシイソ。

（史 四 248・16）[村上 1981]

- b 酷吏ハ、キツク、ツベラシク、人ニアタル事カ、慘酷ナル者ヲ云ソ。

（史 一五 522・27）

- (4)a カウテ毒ラシイ人ナルコトヲ、云タカ、文勢ノ面白處ソ。

（史 七 173・1）[村上 1981]

- b 太史——

人ノ怨ト云モノ、毒ラシイハ、甚シイ事ソ。（史 一〇 331・42）

中世の「ーらしい」は、以上のような、上接部（化け・つべ・毒）が接辞「ーらしい」から切り出せないものである。特に、(3)のような語基や語根を承けていると考えられる例については、形のうえでも意味のうえでも切り出せない。これに対し、(4)のような名

詞を承けるものは、形のうえでは切り出せるが、意味としては「Xらしい」で一語であると考えられる。このとき、「ーらしい」は「Xの性質を有する」ことを示すと考えられる。

近世前期では、以下のような例が見られる。

- (5) ロもとしほらしき事、おもひやられた。

(編者未詳「きのふはけふの物語」1596-1644〈慶長-寛永年間〉)

- (6) 国なかにて、さもとらしき武家より嫂をよぶに、おつぼねの、中居の、おハしたのなどあり／＼ととし、祝言の事すめり。

(安楽庵策伝「醒睡笑」5巻 1623〈元和9〉)

- (7) 仁物らしき男、枅の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、ある家のぬしよびいれて、

(安楽庵策伝「醒睡笑」1巻 1623〈元和9〉)

- (8) 何条おどろくものかと、をりるを見れば、手の有さふなおいらんの姿にて、ヲヤばからしいと、につことわろう。(振鷺亭主人「振鷺亭嘶日記」1626〈寛永3〉)

以上に挙げた例についても、上接部が切り出せない例である。(5)(6)は形・意味双方の切り出しが困難である。(7)は名詞接続だが、「仁物らしい」で「立派な・徳のある人物」の意を表す。(8)のような形容動詞語幹接続の例でも、上接部は人の性質を表しており、目に見えるもの・人を指すわけではない。「ーらしい」の意味は、中世と同様で、「Xの性質を有する」ことを示すと考えられる。

また、今期は、連体形・連用形・終止形が見られるが、すべて形容詞の例であり、上接部にも偏りは見られない。

2-2. 第2段階：接辞用法の広がり

近世中期(1680年代)から近世後期までである。

連体用法において、以下のような上接部が意味のうえでも形のうえでも切り出せる例が見られるようになる。

- (9)a とつとぬけたる男聞て、目薬が吉岑に沢山にござるかといふ。一山の内にハどこにもござるといふ。をれもとりに行ませうといひしが、あくる晩にきたりて、けふよしミねへ行て尋たが、目薬らしい物ハなかつたといふ。どうしやつたといへば、木のねにあらうと思ひ、ほりかへしてミましたといふた。

(作者未詳「当世手打笑」1681〈延宝9〉)

- b 狼と山犬ハ似たやうな物で、しれぬ。・これハしたり。お身ハそのめきゝをしらぬか。・イハヤ、しらぬ ・しらずハ、おれがおしへてやらう。まづ狼らしいやつが出たら、棒をもつてぶつがゑい。山犬なればにげる。狼なれば、とびこんでくらみつ

(馬場雲壺「鹿子餅 後篇譚囊」1777〈安永6〉)

- c しんまいの旦那へ、和尚、棚経に参られしが、取付世帯と見へて仏檀らしき物も

なし。和尚うろ／＼しらるれば、夫婦気の毒さうに、まだ午前ハとゝのへませぬ。
何所ぞそこらへ見合に、御回向なされて下さりませ。

(必^し舎馬宥「咄の会七席目時勢話綱目」1777〈安永6〉)

これらの例では、上接部が目に見えるもの・生き物を表している。また、意味のうえで第1段階の「Xの性質を有する」とは異なり、「Xと判断できるものを広く指す」ことを示していると考えられる。たとえば(9)aでは、話者は目薬そのものを探しているが、発話時には探している（見付からなかった）段階である。ここでの「ーらしい」は、話者から目薬と判断できるものを広く指している。

「ーらしい」によってXと断定せず、「Xと判断できるもの」を指しているため、話者の思い浮かべる「目薬／狼／仏壇」と、聞き手（話し相手）の思い浮かべる「目薬／狼／仏壇」にずれが生じても、許容されるのではないかと考えられる。

(9)のような例が見られるようになったのにやや遅れて、以下のような例が見られるようになる。

- (10)a 中小性らしき侍、本町を通りけるに、町のなかはにてせきたのはなをふみきり、おりふし、かひ草履ももたせざれば、僕におゝせて、此あたりにそうりあきなふところやあると云つけける。

(鹿野武左右衛門等「枝珊瑚珠」2巻 1690〈元禄3〉)

- b 大名の買物使らしき侍の、挟箱持一人めしつれ、中奉書入るよしにて、三百枚売りわたし、代銀請取り、その人帰られさまに、ひとつふたつ狂言しばめの物語仕り申候が、財布を取残してゆかれし。

(井原西鶴「万の文反古」3巻 1696〈元禄9〉)

これらの例では、被修飾語にあたる人物の正体が示されておらず、且つ「ーらしき」によってその特徴が表されている。(9)の例が、「目薬らしいもの」「狼らしいやつ」では、それらが未実現の文脈に用いられていることにより具体的な一つのものとして指し示されなかったが、ここではある場面に登場する人物に対して「XらしいY」と示している。このことにより、「その侍は大名の買物使である」という「X=Y」の関係が成り立つのではないかと考えられる。

さらに、1700年代後半では、「ーらしい」の上接部が「AはXである」ことを示していると考えられる例も見られる。

- (11) 金十郎「明日の朝は茶漬けを食いの、ずい帰りだぜへ。今夜はおゝかた、菊園か菊の井といふ名代らしい晩だ」喜八「悪推ばかりおつせんす。行灯に無駄書き、もう帰るも古いやつね」(奈蒔野馬乎人「啞多雁取帳」1783〈天明3〉)
- (12) 財布持ち「昔は代物を貸した上に、代をば、やつぱり貸した方から取りに回つたそうだが、ほんの事が知りませぬ。どうやら嘘らしい事だぞ」

(万象亭竹杖為輕「従夫以来記」1784〈天明4〉)

(11)は未実現の事柄について、(12)は話者が他者から聞いた話について、「ーらしい」によって自分の態度を述べている。(11)は「[今夜来るのは、菊園とか菊の井とかいう名代である]らしい」、(12)は「[昔は代物を貸した上に、代もやはり貸した方から取りに回ったという話は、嘘]らしい」のように、真偽の分からない話に対する話者の判断になっていると考えられる。

また、1700年代には、「(話者が)それにふさわしい特徴を有する」と判断することを表す例が、連体形・連用形において見られる。亀井(2003)で、次のようなものを挙げられている(用例下線は亀井氏、出版年は岩崎補足)。

(13)a せめて一ごんいさぎよく弓取らしい詞をきかせ。はちをすゝいでくれよとて

(浄近松「嫗山姥」詞七一 707 1712〈正徳2〉)

b きりやうのよい人を斯波ノ左衛門よし将と名付。心にいさみをつけたらばをのづとくすりもまはらんと。いしやしゆのさしづなれ共ほんのおとこはならぬ故。
男らしい女中のお尋にてかく迄談合なりしこと

(浄近松「雪女五枚羽子板」詞五一 295 1708〈宝永5〉)

c 不気転な幽霊じやな 幽霊なら幽霊らしい 怖い事も何もない そのやうに震わずとも あら恨しやと あの十三さんを悩ましたがよいわいなア

(歌「けいせい陸玉川」詞二一 67 1767〈明和4〉)

これらの例では、話者のなかにある上接名詞の典型的なイメージが発話に関わっており、「(話者のなかの) 典型的なイメージにふさわしいかどうか」が表されているのではないかと考えられる。

これに対し、終止形では大きな変化は見られない。また、連体形・連用形についても、「Xの性質を有する」ことを示す接辞の例は引き続き見られる。「ーらしい」から切り出せる上接部と切り出せない上接部に分かれる点についても、前期と同様である。

【連体形】

(14)a 又ざは／＼と悪口を云て、嫌らしい男じやと思へ共、廿も逢ふて、先には誠の心で誓紙を取。
(作者未詳「けいせい朝間嶽」上 1698〈元禄11〉)

b 中にも旅功者ぶる奴をとらへて、「長の旅やつれでさへいとらしき男」と、菅笠のひものあたりしほうげたをなでて、

(八文字自笑「野白内証鑑」5巻 1710〈宝永7〉)

(15)a 其の跡にて小せんは、中にも浮気らしき末社はそばにゆきて、何とやらん心のある風をしかけてよろこばせ、手などしめつめられつしてうれしがる最中に、

(八文字自笑「野白内証鑑」5巻 1710〈宝永7〉)

b エ、主人たちから内衆まで人らしい人はない。常磐御前の仕合せとは武士の口から聞きにくい。
(近松門左衛門「平家女護島」1719〈享保4〉)

【連用形】

- (16) a 琴弾き歌をよみ、茶はしをらしくたてなし、花を生替へ、土^{とけい}圭を仕懸けなほし、
(井原西鶴「好色一代男」5巻 1682〈天和2〉)
b 三世の諸仏はにくませ給ふべけれど、我は女心ゆゑにや、さのみいやらしいも
おもはぬゆゑ、しばし夢中にま見ゆるなり。
(夜食時分「好色敗毒」2巻 1702〈元禄15〉)
(17) a 若い男のこいきすぎたる風俗、正しく町の髪結らしくおもはれける。
(井原西鶴「好色一代女」2巻 1686〈貞享3〉)
b はみ出し鰐も神さびて、錨詰りし師走の果、うさんらしく吉田屋の内を覗いて。
(近松門左衛門「夕霧阿波鳴渡」1712〈正徳2〉)

【終止形】

- (18) a 物ひとついふて二つめには、「いやらしい」、「ア、うるさ」など、おさだまりの
詞つき。(八文字自笑「野白内証鑑」5巻 1710〈宝永7〉)
b お川「角のあとが痛みはせぬか。むごらしい」
(明誠堂喜三二「桃太郎後日晰」1777〈安永6〉)
(19) a 今日のお客は四国のお侍、頭巾で頭は見えねども、角前髪のお小姓らしい、そ
の器量のよさ、おぼこさ。(近松門左衛門「夕霧阿波鳴渡」1712〈正徳2〉)
b 藤「アリアア、今夜灸をすゑる筈で、ごふんで點をおろして置いたのさ。」崑「ほ
んにかえ。馬鹿らしい。」(唐來參和「和唐珍解」1785〈天明5〉)
(19) a の「頭巾で頭は見えねども、角前髪のお小姓らしい。」は、頭巾で中身が見えて
いない頭を見て、「角前髪のお小姓らしい」としており、「角前髪のお小姓に見える」こ
とが示されているようにも思われる。連体用法と同様、「角前髪のお小姓らしい侍である」
の意かと考えられる。

2-3. 第3段階：推量用法の成立

近世後期である。1800年代になると、次のような「主体(A)は上接名詞(X)らしい」
の形で、「AはXに見える」という話者の推量を示す例が見られるようになる。このとき、
「ーらしい」は終止形を取る。

- (20) てい「サア一ふくあがらんせ。いつたいおまいは、どこを尋ねさんすのじやいな。
参宮じやあるが、おひとりか。但しは、おつれでもおますかいな 弥次「さやう
さ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたア
ございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、

今おひとり、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰瘤のあるおかたじやお
ませんかいな (十返舎一九『東海道中膝栗毛』5 編追加 1806〈文化 3〉)

- (21) 目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいネ

(式亭三馬『浮世風呂』3 編 1811〈文化 8〉)

- (22) 丹「ドレちつと障子^{しやうじ}をあけよふト、表^{おもて}のしやうじをがらりと開^{あけ}、何心なく手す
りへ手をかけ見おろす往來^{み おうらい}、米八^{よね}が梅次^{うめじ}と二人でお客^{きやく}をさきだて來かゝり、二階
を目標やく見つけ よね「ヲヤ丹さんまだ宅^{うち}へおかへりでないか。今に梅次さん
と一^{いつしよ}所にかへるから、ちつと待てお出ヨト、いひながら完尔笑^{まつ}ひ、酒乱^{につこりわら}の客^{なまゐひ}
のともして多寡橋^{た かばし}の、方へ過行^{かた}後かげ、丹はびつくりお長はかけ出し 長「ヲ
ヤ米八さんじやアありませんか 丹「ナニ／＼米八ではねヘト、口にはいへど
心にギツクリ。今米八が其近處^{いま}から、かへり來^{そ ころ}らば大變^{きた}と、思へば何かそは／＼
して 「サアもふよかア販^{かへ}らふの 長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八さ
んらしいヨ。かくさずといゝじやアありませんかト

(為永春水『春色梅児誉美』初編 1833〈天保 4〉)

これらの例では、話者が見た人物や聞いたことに対し、「A は X である（ひとりは江戸
出身である・目のふちへ紅をつけるのは役者から始まったことである・今の人は米八であ
る）」と推量していると考えられる。判断の根拠は話者が見聞きしたことや、人の様子・
言動であり、「らしい」は「(A は X である) 可能性が高い」ことを示していると考え
られる。

以下、接辞用法の例を活用形ごとに挙げる。

【連体形】

連体形は、(23)のような上接部を切り出せないものと、(24) (25)のような上接部を切り
出せるものとに分かれる。

- (23) a そこで鼠どもがこいつはふしぎだ 六部や順礼のふんどしは、みなかはいらし
い歌三味せんのねがするに なぜ北八とやらがふんどしは、義太夫三味せんの
ねがするだろふといふと

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』2 編下 1804〈享和 4〉)

- b 丹「おかみさんは米八より十段もうつくしいかわいらしい娘がありやす。

(為永春水『春色梅児誉美』後編 4 1833〈天保 4〉)

上接部を切り出せる例は、(24)のような上接部が人やものの性質であり「X の性質を有
する」ことを示すものと、(25)のような上接部が実在する人やものであり「Y は X に見
える」ことを示すものとに分かれる。

- (24) a あんまりべら坊らしい旦那だと、そしりちらすを、だんなきゝつけて、

(洒落堂主人序・桜川慈悲成作「珍学問」1803〈享和 3〉)

- b 串戯にもそんなことをいはれたことのない私、馬鹿らしい程一途の氣性、何が證古にいふのだへ。
(為永春水「春色辰巳園」初編 3 1833〈天保 4〉)
- (25) a 向ふのながしに、かの年増らしいやつが、なにかあらつてゐるから、コレ背中を、ながして下せへといつたら、ハイとこいて、六十ばかりのばゞアめが、たはしをもつて、きやアがつて、おせなかを、あらひませうかとぬかしやアがる
(十返舎一九『東海道中膝栗毛』5 編上 1806〈文化 3〉)
- b 卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて表へ出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたトいふがいひがかりで喧嘩よ。それから聞きねへ、其色男をノ聞きねへ、むごくぶちのめすもんだから、きねへ」
(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之卷 1820〈文政 3〉)

【連用形】

- (26) a 「水塞^{すいさい}ト。○ウ、左右^{さゆう}々々、みなア水塞^{すいさい}に、そぶて、そぶて、傍^そふてエ、弩^{いし}弩^{いし}、伏^{ふせ}々^お置き、自^{みづ}かアらア。
ソリヤ／＼またみづからだ。唐人のくせにいや●らしく、みづから／＼トぬかすぜ。ひげだらけなお姫さまだらう。
(式亭三馬『浮世床』2 編下 1812〈文化 9〉)
- b 仲「ナア＝私こそ左^さ様だけれど、おまへは女をつかまへると、誰にも左様だろふとおもふと、またにくらしくなるヨウ。
(為永春水「春告鳥」2 編 1836〈天保 7〉)
- (27) a マア、一体男らしくねへネ。(式亭三馬『浮世風呂』2 編下 1810〈文化 7〉)
- b 左「コレサ／＼さう時代ではわりい。そして狂言の氣をはなれていかねへと、まじめらしくねへ。
(滝亭鯉丈『八笑人』春の部壹之卷 1820〈文政 3〉)
- c 夫に嫁を貰はふとは啞^おらしくござぬますネエ。
(為永春水「春告鳥」5 編 1836〈天保 7〉)
- (27) ab のような、「一らしく」に否定の「ない」が続く場合は、一文で「X の性質を持たない」ことを示すと考えられる。

【終止形】

- (28) a ヲツトよしさ、こうつちやアおかし^おらしいが、つき合が広いから一年の内二百六十日はあすんでくらすのだ。(通りものになりたがる人の癖)
(式亭三馬『四十八癖』初編 1811〈文化 8〉)
- b 喜次「どうしたンだい汚^おらしい」
(梅亭金鷲『七偏人』4 編上 1862〈文久 2〉)
- (29) a それでハさだめて、いさうろうもおくだろうし、なぐさミもやりかねハしめへ。また、きさまの相をミたところが、いたつて女ずき^おらしい。まをとこなぞもしかねぬようす。
(欣堂間人序・作「新作はなしのいけす」1822〈文政 5〉)

- b 奥女中といふと、何か不自由らしいから格別しんかうがあるのだ。

(滝亭鯉丈『八笑人』2編下 1821〈文政4〉)

2-4. 第4段階：接辞用法と推量用法

明治期から大正期までである。意味・用法は、「Xの性質を有する」「YはXに見える」ことを示す接辞用法と、話者の推量を示す用法とに分かれる。

第4段階では、以下の変化が見られる。

- ① 活用語の言い切りを承けるようになる。
- ② 上接部が省略される例が見られる。
- ③ 未然形・過去形の例が見られる。

また、明治期・大正期のみの特徴として、形語幹・形動語幹接続の例が盛んに見られることが挙げられる。

まず、活用語の言い切りを承ける例を挙げる。連体形・連用形・終止形と新たに見られる過去形すべてにおいて、活用語の言い切りを承ける例は見られる。

- (30) a ^な何^ぜ故^き貴^{さま}様^そ其^{つち}方^をの^{きれ}を^い奇^お麗^かにして置^しな^しかつ^ゆた^うの^ねだ、始^ば終^{かり}寝^をて斗^を居^を居^をツて、
とミハイロフは怒^{おこ}ツた^{おこ}ら^{やう}しい^す様^{いつ}子^でで^い言^つた、

(嵯峨の屋おむろ訳「セバストウポルの火花」1901〈明治34〉)

- b 友よ。君は海邊に踞して、都の空に此の激動する當今思想界に觸れて噪ぐらし
い僕を、或は嘯いて笑ふかも知れぬが、之れは僕の切實の告白だ。

(児玉花外「翺雲」1909〈明治42〉)

- c 鼬の姿は何時か消え、遠くで吹くらしい口笛の音が、幽に聞えてみた。

(国枝史郎「長篇小説 鼬つかひ(第一回)」1925〈大正14〉)

- (31) a さればよ、妻の病氣の思はしからねば、醫者の勸むるまゝに、此處には移り來つ。と澁り勝ちに答ふる様子の、如何にも覺束無くて、他に深き仔細のあるらしく覺え、果は氣の毒なる心地して、其まゝ旅中の噂に移りぬ。

(巖谷小波「昭君怨」1895〈明治28〉)

- b 其等の人達は洋服の一つでも着たり新しい文明風の職業にでも従事したりすると、何となく平生羨んで居る官公吏と同じやうな心理状態になつて、官公吏のするやうな風に威張りちらすことが無上に嬉しいらしく見受けられます。

(与謝野晶子「心頭雜草」1917〈大正6〉)

- (32) a 家は随分広いが、向う二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間の外は、居室台所は知らず、客間と名がつきそうなのは大抵立て切つてある。客は、余をのぞくの外殆んど皆無なのだろう。又た部屋は昼も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。

(夏目漱石「草枕」1906〈明治39〉)

b 給仕の一人が来て話すのを聞くと、もう二十八日目でマルセエユの港に着くというらしい。
(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉)

c 何しろ、表面のあたりはどこまでも明るく気さくで、それで肚の底になんかし
っかりしたものが感じられる、——そう云うのが一番今時の女の心を惹くらし
いし、また本統にそう云う風なら、出来てる人間に違いないんだが……。

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(33)a お松は翌朝自分の眠ってる内に帰ったらしい。

(伊藤左千夫「野菊の墓」1906〈明治 39〉)

b 養父は二三年そんな事にかかっていたが、今は単にそればかりでなく、抵当流
れになったような家屋敷も外に二三箇所はあるらしい。

(徳田秋声「あらくれ」1915〈大正 4〉)

続いて、明治期・大正期より見られる未然形・過去形の例を挙げる。

未然形は、明治期より見られるが、明治期 3 例、大正期 2 例、昭和期 8 例、平成 1 例と
用例数は少ない。

(34)a 薄く掛けた友禅の小夜着には片輪車を、浮世らしからぬ恰好に、染め抜いた。

(夏目漱石「虞美人草」1907〈明治 40〉)

b 旅の鞆を載せた一台の俵を先にして、その後からゴトゴト揺られながら随いて
行く吾儕二人の車上の姿がいかにも観光団の大阪見物らしからうと、ままよ。

(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉)

(35)a 僕はいかにもその時の山口のわざとらしからぬ声音を驚嘆して聞いていた。

(久米正雄「学生時代」1918〈大正 7〉)

b 馬鹿らしからうとも、間拔じみて見えようとも、そんなことは構わない。

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(34)のような上接部を切り出せるものと、(35)のような上接部を切り出せないものとに
分かれる点については他の活用形と同様である。

過去形については、明治期 134 例、大正期 288 例、昭和期 483 例、平成 20 例であり、
連体形・連用形・終止形に比べて割合は低い。過去形についても、上接部が切り出せない
例・切り出せる例とに分かれる。

(36)a 女の児の笑顔がいかに可愛らしかった。(田山花袋「生」1908〈明治 41〉)

b 殊に中央停車場から汽車に乗ろうとする間際、そっとこの手紙を彼女に渡した
照子の姿を思い出すと、何とも云われずにいじらしかった。

(芥川龍之介「秋」1920〈大正 9〉)

(37)a 小作で、才気の溢れているようなところも、その人らしかった。

(島崎藤村「春」1908〈明治 41〉)

- b ただ一遍「よくまあお一人でお留守居が出来ます事」と云ったのは誠らしいかった。
(夏目漱石「行人」1912-1913〈大正元-2〉)

続いて、上接部が省略される例を挙げる。連用形に見られる。

- (38) 乃ち「らしく」ぶるなの六字を題して與へた、紳士にあらずして紳士ぶるか、紳士にして資格に似合はしからぬ所謂紳士らしくせぬ結果は、自己の一身に止まらず社會の表面にまで種々の弊毒を流布せしむるものである。

(清浦奎吾「社会の腐敗救治意見」1901〈明治34〉)

これは、以下のような句点で「一らしい」と上接部が切り出される例が見られることと関連するのではないかと思われる。

- (39) [省略]元來大和琴の曲は初は獨奏の物にて發達いたした、らしい事です、それは管搔、又は空搔等の名に就て、考えへて見ても、さう思はれます、

(松本操貞「国楽改良意見」1895〈明治28〉)

以上のような例が存することから、第4段階における「一らしい」には、「Xらしい」で一語の形容詞として用いられているものが見られる一方、上接部と分かれるものが見られるようになったと考えられる。

前段階より見られる活用形ならびに意味・用法については以下の通りである。

【連体形】

- (40)a ニッコリとした口元の塩らしいところを見ては是非を論ずる違がない。
(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20〉)

- b そのお政の半面を文三は畏らしい顔をして佝と睨付け、
(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治20年〉)

- (41)a 直臣は實に男らしき男なりき。(巖谷小波「昭君怨」1895〈明治28〉)

- b 二人で作るホームだもの、僕だって発言権がなきゃ」と成程哲也らしい佝屈い串戯を言つて笑うと、
(二葉亭四迷「其面影」1906〈明治39〉)

- c それを聞く度に、高柳は不快らしい顔付。(島崎藤村「破戒」1906〈明治39〉)

上接部が切り出せないものは、「しおらしい」など一部の名詞接続の例と、(40)bのような形容詞語幹接続の例である。一方、上接部が切り出せる例は、名詞接続・形容動詞語幹接続の例と、先に挙げた活用語の言い切りを承ける例である。

上接部を切り出せる「一らしい」では、前段階に引き続き、(41)aのような典型を示す例が見られる。上接部には広がりが見られ、(41)bのような固有名詞を承ける例が新たに見られるようになる。(41)bでは、「堅苦しい冗談」というのが、いかにも哲也が言いそうなことであるという、哲也を特徴づける言動として照らし合わされていると考えられる。

また、以下のような「YはXに見える」ことを示す例も見られる。

(42) a 幹事らしい男に案内せられて、梯子を登って来る、拊石という人を、どんな人かと思って、純一は見ていた。 (森鷗外「青年」1910-1911〈明治 43-44〉)

b 「この船には僧侶らしい人が乗っています、ああいう人に物を聞けば親切に教えてくれます」 (島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正 5-7〉)

これらの例では、「男=幹事」「人=僧侶」というように上接部と被修飾語とを同定することが可能である。

【連用形】

連用形については、前段階と同様、上接部が切り出せるものと切り出せないものに分かれる。また、「-らしく+ない」で「X の性質を持たない」ことを示す例も引き続き見られる。

(43) a 母に物云はせて苦しませじと、態とらしく首肯く娘。

(広津柳浪「狂言娘」1895〈明治 28〉)

b 先月中旬寺内首相及び後藤内相の訓示演説は憲政會側より見れば常識を逸したるだけそれだけ憎らしく又た政友會側より見れば地獄で佛に逢ふた如く有難く感じたであらう。

(浮田和民「寺内首相及後藤内相の訓示演説を読む」1917〈大正 6〉)

(44) a ……イ、ヤ田宮そりやア可ねエ、金は返さず玉は渡さず、虻蜂取らずぢやア話に成らぬワ、夫ぢやア貴様も悪黨らしく無からうぜ、

(福地桜痴「夜の鶴(下)」1895〈明治 28〉)

b 『怠け者だからあんな事をやつてゐるのだ。』とか『小使ならば小使らしく、ちやんと筒袖袴天に股引で歩いたらいいぢやないか、長衣の裾を端折つたあのずる／＼したざまは！』などゝ村人から嘲られてゐた兼さんは何年か後には一躍して収入役になった。 (中村星湖「歌さんの幻影」1917〈大正 6〉)

また、次の例では話者の推量が表示されるのではないかと思われる。

(45) a 今一人は、前の男より二ツ三ツ兄らしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のパッチリとした所は仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせこせしているので、何となく品格のない男。

(二葉亭四迷「浮雲」1887〈明治 20〉)

b これを聞いてしばらく考えた鏡花は、やがてこの小説の構想を立てたものらしく、執筆を承諾したという。 (泉鏡花「婦系図」1908〈明治 41〉)

【終止形】

まず、形容詞の例を挙げる。

(46) a その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。

(夏目漱石「坑夫」1907〈明治 40〉)

b そしたら、あの子の口上が憎らしいではありませんか。

(倉田百三「出家とその弟子」1916〈大正5〉)

(47)a どうも山嵐の方がおれよりも利巧らしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

(夏目漱石「坊ちゃん」1906〈明治39〉)

b その町幅は三台の俵が並んで僅に通られる程の狭さで、こうした昔からの意匠をさながらに固守しようとする古風なものと、飽くまで流行を競おうとする新奇なものと一緒にあるところは、いかにも大阪らしい。

(島崎藤村「海へ」1916-1918〈大正5-7〉)

続いて、推量を示す例を挙げる。

(48)a 三四郎は勝手口に立って考えた。婆さんは気を利かして、まあ御這入りなさい。先生は書斎に御出ですからと云いながら、手を休めずに、膳碗を洗っている。

今晚食が済んだばかりのところらしい。(夏目漱石「三四郎」1908〈明治41〉)

b 「如何にも君らしいね……いや、Oに占領されるところは君らしいよ」

(梶井基次郎「雪後」1926〈大正15〉)

固有名詞や人称代名詞を承ける例は、大正期より見られる。「YはXの性質を有する」ことが示される場合と、「YはXと推量する」ことが示される場合とがある。

形容詞の例である(47)bは、「古風なものと新奇なものと一緒にある」というのは、「いかにも大阪が有する性質である」ことが示されているのではないかと考えられる。「大阪」の典型的な性質が「ーらしい」によって示されている。これに対し、(48)bは、話者が「Oに占領される」というのは、いかにも君に起こりそうな事態である」と述べられており、話者によって「君に起こりそうな事態」が推量されているのではないと思われる。双方とも、「いかにも」という副詞と共起するが、上接部が示すのが単にY(大阪・君)にとっての性質なのか事柄なのかという差異によって意味・用法が分かれると考えられる。また、上接部が接辞から切り出される例が副詞「いかにも」と共起するのは明治期以降であり、「ーらしい」の推量用法と典型を示す用法は同時期より派生、定着していったのではないと思われる。

2-5. 第5段階：相槌を示す用法の成立

昭和期以降である。以下のような、話し相手の発話内容を肯定し、推量する例が見られるようになる。

(49) 「あれが、話題のフン先生ですか？」

「らしゅうございますわね」

「汚らしい方ですこと」

「小説『ブン』が売れるまでは乞食同然のおくらしだったとか」

- 「オホホ。じゃ、急にお金がいってしたので、このような一流ホテルへ……？」
「らしゅうがますわね」 (井上ひさし「ブンとフン」1970〈昭和 45〉)
- (50) 「奥の祭壇の中にいるわ。でも足をくじいているの。逃げるときにくぼみに足をつっこんでしまったんですって」
「でも足をくじきながらここまで辿りつけたんだね？」
「ええ、そうよ。祖父は体が丈夫なの。私の家系はみんな体が丈夫なのよ」
「らしいね」と私は言った。
(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」1985〈昭和 60〉)
- (51) 「あいつ意外に恋愛物ですよ。『くそ一何でこんなイイ女のところにこういう男が落ちてこないのよ』とか毒づきながらですけど。後は経済書かなあ、資産運用がどうのメガバンクがどうのって本大好きですよ、業界再編地図とか毎年買ってるし。何おもしろいか全然分かんないけど」
「らしいと言えばらしいな」 (有川浩『図書館革命』2007〈平成 19〉)
「急にお金がいってしたので、このような一流ホテルへ(来た)」
「私の家系はみんな体が丈夫だ」
「あいつは意外に恋愛物を好んで読む。後は経済書を読む」という(話し相手の)発話内容を承け、「不確かだがその内容は真である」と肯定していると考えられる。
前段階と同様の活用形・意味用法については以下の通りである。

【連体形】

- 形容詞で上接部が切り出せないものを(52)、切り出せるものを(53)(54)(55)に挙げる。
- (52) a そしてそういう自分の犠牲を犠牲ともしないで、自分の軽はずみなことばかりを責めているように見える病人のいじらしい気持が、私の心をしめつけていた。
(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和 8-9〉)
- b (三味線をひいている若い芸妓が無表情な顔にわざとらしい微笑をうかべた)
(尾崎士郎「人生劇場」1933-1951〈昭和 8-26〉)
- c その向うは、街並が汚ならしい屋根屋根を並べ、工場の煙突が煙を吐き出し、海が鼠色に霞んで見える。
(福永武彦「草の花」1957〈昭和 32〉)
- (53) a 十年程の家庭生活の間に、S は三人の子の父として、良人として、社会人としてほとんど破綻らしい影さへ見せずに来てゐた。
(葛西善三「酔狂者の独白」1927〈昭和 2〉)
- b 赤星探偵は、ただフンフンと聴聞しているばかりで、あまり機敏らしい様子ありません。
(海野十三「赤耀館事件の真相」1929〈昭和 4〉)
- c 物腰だけはいんぎんだが、見まわしている眼は、後年、蝮の道三といわれたこの男らしい眼である。
(司馬遼太郎「国盗物語」1963-1966〈昭和 38-41〉)
- (54) a 僕は緊張に赧くしてそれに答えると、その瞬間、鼻先に幼稚園がえりらしい女

の子の赤い靴が小さな音をたてて時計の振子のように揺らいで行ったのを、「一ツ」と数えて「幼年女生徒」の欄へ線を一本横にひっぱった。

(海野十三「階段」1930〈昭和5〉)

- b 時々少女は顔を上げて、兄らしい男の方へ何か喋っては笑いかけていたが、いかにも都会の少女しか持っていない伶俐さがその美しい顔には溢れていた。

(井上靖「あすなろ物語」1958〈昭和33〉)

- c トモギ村らしい集落がその海べりに、まるで牡蠣のようにしがみついています。

(遠藤周作「沈黙」1966〈昭和41〉)

- (55) a 暫くそこを見ていると、そこが階段の上り口になっているらしい部屋の隅から、日本髪に頭を結った女が飲みもののようなものを盆に載せながらあらわれて来た。

(梶井基次郎「ある崖上の感情」1928〈昭和3〉)

- b するとひさは炬燵の中から——彼女は春になってもまだ炬燵にはいっていた——隠しておいたらしい鉢に盛ったさつま芋のふかしたのを取りだし、「お食べ」と言って差出した。

(北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和38〉)

【連用形】

上接部が切り出せない例を(56)、切り出せる例を(57)(58)に挙げる。

- (56) a 彼女はわざとらしく顔をしかめて見せた。

(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和8-9〉)

- b 小さな私立病院の院長がしかつめらしく言うのを徹吉は多少後ろめたい気持ちで聞いた。

(北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和38〉)

- (57) a 私は彼女とそんな風に子供らしく言い合いながら、無理にカンバスを引ったくると、それを自分の肩にあてがいながら、彼女と並んで村の街道を宿屋の方へと歩いていった。

(堀辰雄「美しい村」1933-1934〈昭和8-9〉)

- b 大人げない、医者らしくもない。(渡辺淳一「花埋み」1970〈昭和45〉)

- (58) a 博士は今、何か喋っているらしく口を開閉している。

(海野十三「国際殺人団の崩壊」1931〈昭和6〉)

- b 彼のためらいには気づかなかつたらしく、女の声は、はずんでいた。

(安部公房「砂の女」1962〈昭和37〉)

【終止形】

上接部が切り出せない例を(59)、切り出せる例を(60)(61)(62)に挙げる。また、(59)(60)は接辞用法の例であり、(61)(62)は推量用法の例であると考えられる。

- (59) a 虫の食ったおヒナ様のようにしおらしい。(林芙美子「放浪記」1928〈昭和3〉)

- b 「憎らしい、誰が飽きないのよ」(山本周五郎「さぶ」1963〈昭和38〉)

- (60) a 剃り落した眉のあとも、青々として女らしい。
 (島崎藤村「夜明け前」1929-1935〈昭和4-10〉)
- b なんや阿呆らしいと思ったが、しかし毛布を取り戻す勇氣は出なかった。
 (織田作之助「放浪」1940〈昭和15〉)
- c しかしこの人は真面目で学才もあり、氣立ても男らしい。
 (田辺聖子「新源氏物語」1978-1979〈昭和53-54〉)
- (61) a なんでも話の様子では、よほど古い家らしい。
 (島崎藤村「夜明け前」1929-1935〈昭和4-10〉)
- b 明子自身は、十分に確信があるとはいえないが、あの人影はどうも平戸喜平らしいと、さっきちらと思ったのである。
 (阿部知二「人工庭園」1953〈昭和28〉)
- c パパは未紀の母の昔の恋人らしいけれど、ひょっとすると、未紀のほんとの父親かもしれない。
 (倉橋由美子「聖少女」1965〈昭和40〉)
- (62) a 然し、幸い薄氷を踏む思いの長い三十分は、どうやら無事に過ぎたらしい。
 (海野十三「白蛇の死」1929〈昭和4〉)
- b 先頭部隊は相当敵と衝突して居るらしい。百善でも激戦をしたと云う。
 (火野葦平「麦と兵隊」1938〈昭和13〉)
- c 副司さんは十分に目ざめているのではないらしい。
 (三島由紀夫「金閣寺」1956〈昭和31〉)

2-6. おわりに

以上、「－らしい」の意味変化について検討した。

「－らしい」は、第1段階・第2段階(中世から近世後期まで)では、形容詞性接辞である。ただし、第2段階(近世中期以降)以降、連体用法において、Xと判断できるものを広く指す例(目薬らしいもの)や、YはXに見えることを示す例(中小姓らしい侍)が見られるようになる。「目薬らしいもの」「狼らしいやつ」といったときの上接名詞「目薬」「狼らしいやつ」は、第1段階で見られる「うつけらしい友達」や「狂人らしい人」のような上接名詞とは異なると考えられる。第1段階の上接名詞は、人の性質・性格を表している。これに対し、第2段階に見られる「目薬」「狼」は、実際に目に見えるもの・生き物を指している。

第3段階では、話者が「AはXである」と推量する例が見られるようになる。このとき、話者が見聞きしたことや、人の様子・言動を根拠として、知覚に基づいて判断していると考えられる。第4段階以降、「－らしい」の意味用法は、接辞用法と推量用法とに大きく二分される。第4段階では、活用語の言い切りを承ける例や、上接部が省略される例

が見られるようになる。第 5 段階における、話し相手に対する相槌を表す「ーらしい」は、第 4 段階における変化を承けて成立したものと思われる。

「ーらしい」の意味変化については、以下の通りである。

中世・近世前期	形容詞			
近世中期	形容詞	接辞	意味用法の変化	
近世後期	形容詞	接辞	推量	意味用法の増加
明治／大正期	形容詞	接辞	推量	上接部／活用形の増加
1970 年代以降	形容詞	接辞	推量	相槌 意味用法の変化

まず、中世から近世前期にかけては、「ーらしい」は一語の形容詞であると考えられる。これに対し、近世中期になると、「ーらしい」は上接部を自由に取り取る接辞としても用いられるようになる。接辞の「ーらしい」は、連体用法において、「X と判断できるものを広く指す（狼らしいやつ：狼に見えるもの）」意や「Y は X に見える（中小姓らしき侍：侍は中小姓に見える）」意を示す。

近世後期になると、「ーらしい」は話者による推量を示すようになる。このとき、「ーらしい」は終止形を取る。明治期・大正期になると、「ーらしい」は活用語の言い切りを承けるようになる。また、形容詞・接辞・推量のいずれの用法でも、過去形が見られるようになる。ただし、同時期に未然形の例も見られるようになるが、これについては接辞用法に偏る。

1970 年代以降、相手の発話を承けてそれに相槌を示す「ーらしい」が見られるようになる。

3. 形容詞性接辞の意味変化

以上の通り、「ーぽい」と「ーらしい」の意味変化をまとめた。これによると、「ーぽい」「ーらしい」に共通の変化として、

1. 形容詞性接辞から意味用法を変化・増加させていくが、元の用法は現代まで残る。
2. 前段階に見られる意味用法の分化／変化を通して、新しい意味用法が見られるようになるという過程を繰り返す。
3. 接辞用法が見られるようになる際、連体用法において意味の変化が起こる。その後、終止用法において話者の判断（推測・推量）を示す用法が見られるようになる。
4. まず話者自身が知覚したものへの判断を示す用法が見られるようになり、その後話し相手の発話内容に対する判断を示すようになる。

ことが挙げられる。

差異としては、

5. 「ーばい」は形容詞あるいは接辞としての用法のなかで変化する期間が長く、話者の判断を示す用法・話者の発話を引用する用法・相槌を示す用法がごく短期間で見られるようになる。これに対し、「ーらしい」は近世後期に推量用法が見られるようになり、その後、接辞用法・推量用法の両方に変化が生じる（上接部・活用形の増加は、接辞用法にも推量用法にも起こる変化である）。
6. 「ーらしい」は接辞用法において「典型的な性質を有する」ことを示す例が近世中期より見られる。これに対し、「ーばい」は昭和期の終わり頃以降、話し言葉において「ーらしい」に意味・用法が近づいていると思われる例（固有名詞・人称代名詞を承けるもの）が見られるようになる。

といったことが挙げられる。

「ーばい」や「ーらしい」と同様に形容詞性接辞としての用法と推測など話者の判断を示す用法を有する接辞として、「ーみたい」「ーようだ」「ーそうだ」が挙げられる。今後は、これらの接辞についても視野に入れ、形容詞性接辞が意味変化を起こす際のプロセスを示したいと考える。

【参考文献】

- 青木博史(2006)「近代語における述部の構造変化と文法化」『九州大学国語国文学会』 2006
年6月4日 於九州大学(口頭発表)
- 青木博史(2007)「近代語における述部の構造変化と文法化」『日本語の構造変化と文法化』
ひつじ書房
- 青木博史(2010)「第2章 古典語における「句の包摂」について」『語形成から見た日本
語文法史』ひつじ書房
- 井上史雄・鏑水兼貴(2002)『<辞典>新しい日本語』東洋書林
- 内富純江(2006)「句接辞「ーがち」の史的展開」『語文研究』100・101
- 梅津聖子(2009)「現代日本語にみる接尾辞「ぽい」の広がり」『拓殖大学日本語紀要』19
- 大鹿薫久(1995)「本体把握 ―「ーらしい」の説―」『日本語の研究 宮地裕・敦子先生
古稀記念論集』明治書院
- 大鹿薫久(2004)「モダリティを文法史的に見る」『朝倉日本語講座⑥ 文法Ⅱ』北原保雄
監修 尾上圭介編 朝倉書店
- 岡部嘉幸(2000)「江戸語における終止形承接のソウダについて」『国語と国文学』77-9
- 岡部嘉幸(2002)「江戸語におけるソウダとヨウダ ―推定表現の場合を中心に―」『国語
と国文学』79-10
- 岡部嘉幸(2004)「近世江戸語におけるラシイについて」『近代語研究』第12集 武蔵野書院
- 岡部嘉幸(2011)「江戸語の推定表現」青木博文編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- 尾谷昌則(2000)「接尾辞「ぽい」に潜むカテゴリー化のメカニズム ―「女っぽい人」
は女ですか?―」『日本言語学会第120回予稿集』於千葉大学
- 尾谷昌則(2005)「接尾辞ポイのモダリティ化」『日本語用論学会第8回大会研究発表論文
集』創刊号
- 尾谷昌則(2011)「5. 4. 3 ポイ構文 ―語レベルから文レベルの構文へ―」『構文ネ
ットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ―』山梨正明編 尾谷正則・二枝
美津子著 研究社 pp.269-272
- 紙谷栄治(1995)「助動詞「ようだ」「らしい」について」『日本語の研究 宮地裕・敦子先
生古稀記念論集』明治書院 pp.549-573
- 亀井裕子(2003)「近世上方語における接尾語「ラシイ」について」『國學院大學 大學院
紀要』35
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 北原保雄編(2005)『続弾! 問題な日本語』大修館書店 pp.110-114
- 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎編(1998)『新選 国語辞典 第七版/ワイド版』小学館
- 金田一春彦(1953)「不變化助動詞の本質(上) ―主觀的表現と客觀的表現の別について―」
『国語国文』22-2

- 金田一春彦(1953)「不變化助動詞の本質(下) —主観的表現と客観的表現の別について—」
『国語国文』22-3
- 工藤真由美(2001)「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊言語』30-13
大修館書店
- 国松 昭(1970)「「ぽい」 雑考(接尾語ノートⅠ)」『日本語と日本語教育』2
- 久保有佐(2009)「現代語における 接尾辞「ぽい」の用法」『玉藻』44
- グループ・ジャマシイ編(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
pp.233-234
- ケキゼ・タチアナ(2003a)「「ぽい」の意味分析」『日本語教育』118
- ケキゼ・タチアナ(2003b)「現代日本語における表現の「やわらげ」 ～「そうだ」、「げ」、
「ぽい」などの場合～」『言葉と文化』4
- 見坊豪紀(1977)「ことばのくずかご」『言語生活』311号
- 小出慶一(2005)「接辞「～ぽい」の用法の広がり —「雪が降るっぽい」という表現はど
のように成立したか—」『群馬県立女子大学紀要』26
- 黄 其正(1998)「認知過程からみた接尾辞「ーらしい」と「ーっぽい」」『広島大学日本語
教育学科紀要』8
- 国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 小島聡子(1996)「「らしい」について」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院
- 小島聡子(2003)「接尾語「ぽい」の変化」『明海日本語』8
- 此島正年(1973)『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社
- 佐藤喜代治編(1977)『国語学研究事典』明治書院 pp.222-224
- 杉村 泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
- 鈴木英明(1988)「明治期以降のラシイの変貌」『国語国文』57-3
- 鈴木 浩(2002)「近世上方語のミルヤウナ ——ミタイダ成立前史——」『文芸研究』87
- 仙波光明(1976)「終止連体形接続の「げな」と「さうな」 —伝聞用法の発生から定着ま
で—」『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』表現社
- 外山映次(1969)「九 らしい —推量<現代語>」松村明編『^{古代語}助詞助動詞詳説_{現代語}』學燈
社
- 竹島奈歩(2010)「接尾辞「ぽい」と共起する名詞について —新聞記事の見出しを例に—」
『同志社大学日本語・日本文化研究』8
- 田中春美編(1988)『現代 言語学辞典』成美堂 pp.120-121 pp.156-157
- 田野村忠温(1991)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10
- 田野村忠温(2004)「現代語のモダリティ」『朝倉日本語講座⑥ 文法Ⅱ』北原保雄監修
尾上圭介編 朝倉書店
- 田村泰男(2004)「接尾辞「ぽい」が結び付く語句について」『広島大学留学生教育』8

- 鶴橋俊宏(2002)「江戸語の比況表現 ——ミルヨウダ・ミタヨウダについて——」『言語文化研究』1
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 新山茂樹(1960)「形容詞の接尾語「…っぽい・…っぽい」の生成」『国語研究』10
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法 3 第5部アスペクト 第6部テンス 第7部肯定』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6 第11部複文』くろしお出版
- 濱田佳苗(2010)「接尾辞「ぽい」について」『愛知大学 国文学』49 愛知大学国文学会
- 原口 裕(1971)「活用語に接続する「らしい」 ——明治期におけるその定着の状態——」『語文研究』31・32
- 原口 裕(1973)「「みたやうだ」から「みたいだ」へ」『静岡女子大学紀要』7
- 堀口和吉(1992)「助辞「～的」の受容」『山辺道』36
- 前田桂子(1995)「近世文芸作品におけるラシイについて」『筑紫語学研究』6
- 松尾捨治郎(1961)『国語法論攷 追補版』白帝社 p.727
- 松村 明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 ——疑いと確認要求——』ひつじ書房 pp.145-147
- 三宅知宏(1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11
- 三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化 ——内容語と機能語の連続性をめぐって——」『日本語の研究』1-3
- 三宅知宏(2006)「「実証的判断」が表される諸形式 ——ヨウダ・ラシイをめぐって——」『日本語文法の新地平 2』益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編 くろしお出版
- 宮地幸一(1968)「「～みたやうだ」から「～みたいだ」への漸移相」『国語国文学』3 東京学芸大学
- 村上昭子(1981)「接尾辞ラシイの成立」『国語学』124
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 山下喜代(1995)「形容詞性接尾辞「～っぽい・～らしい・～くさい」について」『講座日本語教育』30
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』くろしお出版
- 山本佐和子(2010)「モダリティ形式「ラシイ」の成立」「日本語における名詞節の脱範疇化」第35回 関西言語学会 ワークショップ 6月26日 於京都外国語大学(口頭発表)

湯沢幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院

湯沢幸吉郎(1962)『徳川時代言語の研究』風間書房

吉田金彦(1971)『現代語助動詞の史的研究』明治書院

岩崎真梨子(2009)「形容詞性接尾辞「ーぽい」の展開」『岡大國文論稿』第37号

岩崎真梨子(2011)「「ーぽい」の意味用法と展開」『岡山大学大学院 社会文化科学研究科紀要』第31号

岩崎真梨子(2011)「「ーらしい」の連体用法に関する考察」『岡山大学大学院 社会文化科学研究科紀要』第32号

【用例出典】

■ 先行研究

『言語生活の耳』沢木幹栄編 筑摩書房 1989年

『叢書・ことばの世界 国語辞典にない言葉』松井栄一 南雲堂 1983年

(井上友一郎「残夢」/桂文楽口演 加藤由太郎速記「燃切り」/幸田露伴「付焼刃」/坂口安吾「青鬼の禪を洗ふ女」/三遊亭圓朝「松枝宿の子」/芝木好子「面影」/薄田泣菫「茶話」/武田泰淳「腹のすゑ」/田村泰次郎「肉体の悪魔」/寺田寅彦「写生紀行」/徳富蘆花「思出の記」/深田久弥「あすなろう」/細田源吉「Wee」/森茉莉「或殺人」所収)

■ 辞典

『補訂版 国書総目録』国書研究室 岩波書店 1989年

『日本国語大辞典 第二版』小学館国語辞典編集部編 小学館 2001年

(岡本綺堂「半七捕物帳」/感和亭鬼武「旧観帖」/越谷吾山「物類称呼」/高見順「故旧忘れ得べき」/谷川士清「和訓栞」/田村俊子「あきらめ」/近松門左衛門「傾城仏の原」/中村真一郎「恋の重荷」/広津和郎「若き日」/作者未詳「難波物語」/作者不明「小夜嵐物語」所収)

『邦訳 日葡辞書』土井忠夫・森田武・長南実編 岩波書店 1980年

『現代形容詞用法辞典』飛田良文・浅田秀子 東京堂 1991年

『時代別 国語大辞典 室町時代編』室町時代語辞典編修委員会編 三省堂 1991年

『江戸語大辞典』前田勇 講談社 1974年

(山手馬鹿人「粋町甲閨」/梅暮里谷峨「廓の癖」/曲山人「仮名文章娘節用」/朧月亭有人「春色恋廻染分解」/似実軒編「俳風末摘花」/松亭金水「兩個女兒郭花笠」所収)

■ 文学作品

『史記桃源抄の研究』本文篇1・2 亀井孝・水沢利忠 日本学術振興会 1965年

『史記桃源抄の研究』本文篇3 亀井孝・水沢利忠 日本学術振興会 1970年

『史記桃源抄の研究』本文篇 4 亀井孝・水沢利忠 日本学術振興会 1971 年

『史記桃源抄の研究』本文篇 5 亀井孝・水沢利忠 日本学術振興会 1973 年

『エソポのハブラス』本文篇 大塚光信 来田隆編 清文堂出版 1999 年

『湯山聯句抄』本文と総索引 来田隆編 清文堂出版 1997 年

『中華若木詩抄』如月寿印著 中田祝夫編・解説 勉誠社 1970 年

『玉塵抄』惟高妙安著 中田祝夫編 勉誠社 1970 年

『噺本大系』第 1 卷 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1975 年（編者未詳「きのふは
けふの物語」中川喜雲編「私可多咄」所収）

『噺本大系』第 2 卷 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1976 年（安楽庵策伝「醒睡笑」
所収）

『噺本大系』第 4 卷 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1976 年（編者未詳「二休咄」
所収）

『噺本大系』第 5 卷 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1975 年（作者未詳「当世手打
笑」所収）

『噺本大系』第 6 卷 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1976 年（鹿野武左右衛門等「枝
珊瑚珠」/寓言子序「初音草噺大鑑」所収）

『噺本大系』第 10 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（軽口耳朶「口拍子」/談洲楼焉
馬序・立川銀馬作「落 はなし笑嘉登」所収）

『噺本大系』第 11 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（糟喰人月風序・李白散人跋「管
卷」/馬場雲壺「鹿子餅 後篇譚囊」/必咄舎馬宥「咄の会七席目時勢話綱目」所収）

『噺本大系』第 12 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（振鷺亭主人「振鷺亭噺日記」
所収）

『噺本大系』第 13 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（西口舎可候「臍が茶」所収）

『噺本大系』第 14 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（桂文治「新選臍の宿かえ」/玉
路堂左牛「新撰軽口麻疹噺」/三笑亭可楽作「新作種がしま」/矢木ひれすけ作・序「軽
口腹太鼓」所収）

『噺本大系』第 15 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（桂文来「春興噺万歳」所収）

『噺本大系』第 17 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（鳥居清経画「頓作万八噺」所
収）

『噺本大系』第 18 卷 武藤禎夫編 東京堂出版 1979 年（欣堂間人序「新作はなしのい
けす」所収）

『洒落本大成』第 1 卷 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1978 年（仲夷治郎「白
増普言経」/偷空斎主人「阿房枕言葉」/陳可僖「会海通窟」所収）

『洒落本大成』2 卷 洒落本大成編集委員会 中央公論社 1978 年（外山翁「浪花色八卦」/

- 斗樽堂主人「新月花余情」所収)
- 『洒落本大成』第3巻 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1981年(鈍九斎章丸「殘座訓」/鮮仁軒「遊客年々考」所収)
- 『洒落本大成』第16巻 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1982年(振鷺亭主人「見通三世相」所収)
- 『洒落本大成』第19巻 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1983年(作者未詳「大門雛形」/富岡の都にすむ流女某「部屋三味線」所収)
- 『洒落本大成』第20巻 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1983年(梅暮里谷峨「白狐通」/うくひす谷 白眼「三千之紙屑」所収)
- 『洒落本大成』第23巻 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1987年(鼻山人「花街寿々女」/五岳山人「通客一盃記言」/滅放海^{後篇}「契情実之巻」所収)
- 『洒落本大成』第28巻 洒落本大成編集委員会編 中央公論社 1989年(馬鹿清「青楼奇談 初夢草紙」所収)
-
- 『沙石集 新編日本古典文学全集 52』小島孝之校注・訳 小学館 2001年
- 『仮名草子集 新編日本古典文学全集 64』井上和人・谷脇理史・岡雅彦校注 小学館 1999年(浅井了意「浮世物語」所収)
- 『浮世草子集 新編日本古典文学全集 65』長谷川強校注・訳 小学館 2000年(八文字自笑「野白内証鑑」/夜食時分「好色敗毒」所収)
- 『井原西鶴① 新編日本古典文学全集 66』暉峻康隆・東明雅校注・訳 小学館 1996年(「好色一代男」「好色一代女」所収)
- 『井原西鶴③ 新編日本古典文学全集 68』校注・訳者：谷脇理史 神保五彌 小学館 1996年(「世間胸算用」「日本永代蔵」「万の文反古」所収)
- 『近松門左衛門集① 新編日本手婚文学全集 74』鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注・訳 小学館 1997年(近松門左衛門「女殺油地獄」「五十年忌歌念仏」「薩摩歌」「平家女護島」「冥途の飛脚」「夕霧阿波鳴渡」「淀鯉出世滝徳」所収)
- 『近松門左衛門集③』新編日本古典文学全集 76 鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之 小学館 2000年(「出世景清」所収)
- 『東海道中膝栗毛 新編日本古典文学全集 81』中村幸彦校注 小学館 1995年
- 『洒落本 滑稽本 人情本 新編日本古典文学全集 80』中野三敏 神保五彌 前田愛校注・訳 小学館 2000年(田舎老人多田爺「遊子方言」/山東京伝「江戸春一夜千両」/為永春水「春告鳥」/奈蒔野馬乎人^{左通}「^{健而}啞多雁多帳」/万象亭竹杖為輕「従夫以来記」/明誠堂喜三二「桃太郎後日晰」所収)

『浮世風呂 日本古典文學大系 63』式亭三馬著・中村通夫校注 1957 年 岩波書店
『春色梅児誉美 日本古典文學大系 64』中村幸彦校注 1962 年 岩波書店（為永春水「春色辰巳園」所収）

『浮世床 四十八癖 新潮日本古典集成(第 52 回)』本田康雄校注 新潮社 1982 年

『上方歌舞伎集』新日本古典文学大系 95 土田衛・河合眞澄校注 岩波書店 1998 年（作者未詳「けいせい朝間嶽」所収）

『江戸歌舞伎集 新日本古典文学大系 96』1997 年 11 月 20 日 古井戸秀夫・鳥越文蔵・和田修校注 岩波書店（桜田治助「御撰勸進帳 第一番目三建目」所収）

『廓の大帳』上 笹川臨風著 展望社 1981 年
（唐來參和「和唐珍解」/夢中山人「辰巳之園」「南閨雜話」所収）

『近松全集』第一卷 岩波書店 1985 年（「佐々木先陣」「主馬判官盛久」所収）

『滑稽本集』日本名著全集刊行會 1927 年（式亭三馬「客者評判記」所収）

『誹風柳多留全集 索引篇』岡田 甫偏 三省堂 1999 年

『假名草子集成』第 1 卷 朝倉治彦編 東京堂出版 1980 年
（はんや「あつま物語」所収）

『花暦八笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人』三浦理編 有朋堂書店 1915 年
（滝亭鯉丈『八笑人』/滝亭鯉丈(初～ 3 編)・為永春水(4 編)『和合人』梅亭金鷲『七偏人』)

『明治開化期文學集(一) 明治文學全集 1』著者代表 暇名垣魯文 筑摩書房 1966 年（暇名垣魯文「^{牛店}安愚樂鍋」「西洋道中膝栗毛」/坪内逍遙「^{一読}当世書生気質」^{三歌}所収）

『明治開化期文學集(二) 明治文學全集 2』著者代表 暇名垣魯文 筑摩書房 1967 年（轉々堂主人「巷説兒手相」所収）

『女學雜誌・文學界集 明治文學全集 32』笹淵友一編 筑摩書房 1973 年（若松賤子「小公子」所収）

『三遊亭圓朝集 明治文學全集 10』三遊亭圓朝 筑摩書房 1965 年

『坪内逍遙集』坪内逍遙著・稻垣達郎編 筑摩書房 1969 年

『和英語林集成〔第3版〕復刻版』J.C.ヘボン著・松村明解説 講談社 1974年

『海野十三全集』第1巻 海野十三 三一書房 1990年

(「階段」「空襲葬送曲」「国際殺人団の崩壊」「壊れたバリコン」「西湖の屍人」「白蛇の死」「人造人間殺人事件」「赤耀館事件の真相」「電気風呂の怪死事件」所収)

『幸田文集 新潮日本文学 38』幸田文 新潮社 1973年(「きもの」所収)

『宮本百合子集 新潮日本文学 21』宮本百合子 新潮社 1973年(「伸子」「播州平野」所収)

『昭和文学全集』第13巻 織田作之助・武田麟太郎・阿部知二・尾崎士郎・火野葦平・中山義秀 小学館 1989年(阿部知二「人工庭園」「冬の宿」/尾崎士郎「人生劇場」/織田作之助「勧善懲悪」「猿飛佐助」「夫婦善哉」「放浪」/武田麟太郎「釜ヶ崎」「市井事」「大凶の籤」「日本三文オペラ」/中山義秀「宋蓮花」/中山義秀「厚物咲」「宋蓮花」「テニヤンの末日」/火野葦平「青春と泥濘」「麦と兵隊」所収)

『昭和文学全集』第23巻 吉田健一 丸谷才一 吉井由吉 福永武彦 三浦哲郎 小学館 1987年(福永武彦「告別」「冥府」/丸谷才一「だらだら坂」所収)

『昭和文学全集』第24巻 辻邦夫 小川国夫 加賀乙彦 高橋和巳 倉橋由美子 田久保英夫 黒井千次 小学館 1988年(倉橋由美子「パルタイ」/田久保英夫「辻火」「蕾」所収)

『昭和文学全集』第25巻 深沢七郎 瀬戸内晴美 有吉佐和子 水上勉 曾野綾子 小学館 1988年(瀬戸内晴美「みれん」所収)

『昭和文学全集』第26巻 吉村昭 立原正秋 宮尾登美子 山口瞳 新田次郎 五木寛之 野坂昭如 井上ひさし 小学館 1988年(五木寛之「こがね虫たちの夜」/野坂昭如「エロ事師たち」/山口瞳「居酒屋兆治」所収)

『昭和文学全集』第28巻 唐木順三 保田與重郎 亀井勝一郎 竹山道雄 加藤周一 佐伯彰一 篠田一士 大岡信 山崎正和 小学館 1989年(保田與重郎「日本の橋」所収)

『昭和文学全集』第30巻 清岡卓行・上田三四二・高橋たか子・竹西寛子・日野啓三・後藤明生・高井有一・坂上弘・阿部昭 小学館 1988年(坂上弘「遠足の秋」所収)

■データベース

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社 1995年

赤川次郎「女社長に乾杯!」/阿川弘之「山本五十六」/安部公房「砂の女」/石川淳「処女懐胎」「焼跡のイエス」/五木寛之「風に吹かれて」/伊藤左千夫「野菊の墓」「浜菊」/井上ひさし「ブンとフン」/井上靖「あすなろ物語」/井伏鱒二「黒い雨」/遠藤周作「沈黙」/

大岡昇平「野火」/大江健三郎「飼育」「戦いの今日」/開高健「裸の王様」「パニック」/梶井基次郎「ある崖上の感情」「笥の話」「交尾」「城のある町にて」「雪後」「冬の蠅」「檸檬」/川端康成「雪国」/北杜夫「楡家の人びと」/倉橋由美子「聖少女」/沢木耕太郎「一瞬の夏」/志賀直哉「雨蛙」/椎名誠「新橋烏森口青春篇」/司馬遼太郎「国盗物語」/太宰治「人間失格」/島崎藤村「破戒」/曾野綾子「太郎物語 大学編」/田辺聖子「新源氏物語」/筒井康隆「エディプスの恋人」/壺井栄「二十四の瞳」/夏目漱石「こころ」/新田次郎「孤高の人」/林芙美子「放浪記」/福永武彦「草の花」/藤原正彦「若き数学者のアメリカ」/堀辰雄「美しい村」/三浦哲郎「忍ぶ川」/三島由紀夫「金閣寺」/水上勉「越前竹人形」/宮本輝「錦繡」/村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」/山本周五郎「さぶ」/山本有三「路傍の石」/渡辺淳「花埋み」

『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』新潮社 1997 年

泉鏡花「婦系図」/尾崎紅葉「金色夜叉」/国木田独步「牛肉と馬鈴薯」「小春」「酒中日記」/田山花袋「婦系図」「重右衛門の最後」「生」「蒲団」/長塚節「土」/夏目漱石「草枕」「虞美人草」「行人」「坑夫」「三四郎」「趣味の遺伝」「彼岸過迄」「坊ちゃん」「道草」「明暗」「倫敦塔」「吾輩は猫である」/二葉亭四迷「浮雲」「其面影」「平凡」/森鷗外「キタ・セクスアリス」「雁」「青年」

『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』新潮社 1997 年

芥川龍之介「秋」「お富の貞操」「戯作三昧」「さまよえる猶太人」「煙草と悪魔」「雛」「報恩記」/有島武郎「或る女」「生れ出づる悩み」「惜しみなく愛は奪う」/岩野泡鳴「断橋」「憑き物」「毒薬を飲む女」「放浪」/葛西善三「酔狂者の独白」/久米正雄「学生時代」/倉田百三「出家とその弟子」/里見弴「多情仏心」/島崎藤村「家」「海へ」「新生」「千曲川のスケッチ」「春」「夜明け前」/徳田秋声「あらくれ」/武者小路実篤「友情」

『インターネット図書館 青空文庫』はる書房 2005 年

神西清「死児変相」/小林多喜二「蟹工船」/三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」「後の業平文治」/寺田寅彦「夏目漱石先生の追憶」

『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』国立国語研究所編 博文館新社 2005 年

饗庭篁村「暗合か翻案か」「従軍人夫」/泉鏡花「貸家一覽」/今東光「青い夜の飛躍—或は招魂祭に於ける小さな歴史—」/巖谷小波「昭君怨」/浮田和民「寺内首相及後藤内相の訓示演説を読む」/梅沢和軒「帝展の日本画」/小川未明「悪人」/川上眉山「眼前の春光」/清浦奎吾「社会の腐敗救治意見」/国枝史郎「長篇小説 鮎つかひ（第一回）」/小金井喜美子「浮世のさが」/児玉花外「鰯雲」/嵯峨の屋おむろ「浮世新聞」/嵯峨の屋おむろ【訳】トルストイ【作】「セバストウポルの火花（承前）」「セバストウポルの落城」/佐野天声「銅

山王」/小栗風葉「一腹一生（承前）」/川上眉山「左巻」/幸田露伴「新学士」「縁の糸」/
里見弴「恐ろしき結婚」/塩沢昌貞「欧米の労働組合並に労働団体」/柴田流星「実印と預金
帳」/鈴木禎二「旧都の春を訪ねて」/田山花袋「手紙」/塚原洪柿園「他流試合」/田村俊
子「第一印象」/中村星湖「歌さんの幻影」/長谷川天溪「房州の海岸」/広津柳浪「狂言娘」
「櫛紅葉」/福地桜痴「夜の鶴（下）」/北条民雄「望郷歌」/松本操貞「国策改良意見」/南
新二「滑稽 道中すごろく」/三宅花圃「露のよすが」/柳川春葉「誇」/与謝野晶子「心頭
雑草」/吉江喬松「農民と文芸」/「海内彙報」

■小説

- 『ちーちゃんは悠久の向こう』 日日日 新風舎 2005 年
『うそつき』 日日日 新風舎 2005 年
『ガールズ・ブルー』 あさのあつこ 文春文庫 2006 年
『グランド・フィナーレ』 阿部和重 講談社文庫 2005 年
『図書館内乱』 有川浩 メディアワークス 2006 年
『図書館戦争』 有川浩 メディアワークス 2006 年
『図書館革命』 有川浩 メディアワークス 2007 年
『図書館危機』 有川浩 メディアワークス 2007 年
『別冊図書館戦争Ⅰ』 有川浩 アスキー・メディアワークス 2008 年
『喜劇悲奇劇』 泡坂妻夫 角川書店 1982 年（「野生時代」1982 年五月号に掲載したもの
を著者が加筆・修正）
『花火と銃声』 泡坂妻夫 講談社 1982 年
『折鶴』 泡坂妻夫 文藝春秋 1988 年（「別冊文藝春秋」181 号 1987 年 10 月初出）
『オーデュボンの祈り』 伊坂幸太郎 講談社 2000 年
『陽気なギャングが地球を回す』 伊坂幸太郎 祥伝社 2003 年
「透明ボーラーベア」 伊坂幸太郎 『I love you』 所収（伊坂幸太郎・石田衣良・市川拓
司・中田永一・中村航・本多孝好著） 祥伝社 2005 年
『ラッシュライフ』 伊坂幸太郎 新潮文庫 2005 年
『陽気なギャングの日常と襲撃』 伊坂幸太郎 祥伝社 2006 年
『重力ピエロ』 伊坂幸太郎 新潮社 2006 年
『チルドレン』 伊坂幸太郎 講談社 2007 年
「ライトヘビー」 伊坂幸太郎 Victor Entertainment 『アイネクライネ／ライトヘビー』
所収 2007 年
『ゴールデンランバー』 伊坂幸太郎 新潮社 2010 年（単行本：2007 年）
『夜のピクニック』 恩田陸 新潮社 2006 年
『ビート・キッズⅡ』 風野潮 1998 年 講談社
『八日目の蟬』 角田光代 2007 年 中央公論社（文庫本 2011 による。初出は「読売新聞」
夕刊 2005.11.21～2011.7.24）
『キーリ』 VI 壁井ユカコ 角川書店 2004 年

『キーリ』Ⅴ 壁井ユカコ 角川書店 2004 年
『キーリ』Ⅸ 壁井ユカコ メディアワークス 2006 年
『鳥籠荘の今日も眠たい住人たち②』壁井ユカコ 電撃文庫 2007 年
『センセイの鞆』川上弘美 『太陽』1999.7-2000.12 連載 文藝春秋 2004 年
『OUT』桐野夏生 講談社 1997 年
『東京島』桐野夏生 新潮社 2008 年
『やっつけられない月曜日』柴田よしき 新潮社 2010 年
『幸福な食卓』瀬尾まいこ 講談社 2004 年
『檸檬のころ』豊島ミホ 幻冬舎 2005 年
『DDD』2 巻 奈須きのこ 講談社 2007 年
『空の境界 the garden of sinners』上 奈須きのこ 講談社 2004 年
『零崎曲識の人間人間』西尾維新 講談社 2006 年
『反乱のボヤージュ』野沢尚 集英社 2004 年（単行本：2001 年）
『夜明けの街で』東野圭吾 角川書店 2010 年（単行本：2007 年）
『さまよう刃』東野圭吾 角川書店 2008 年（単行本：2004 年）
『誰にも見えない』藤谷治 小学館 2007 年
「おしゃべり怪談」藤野千夜 『文学 1999』所収 講談社
「午後の時間割」藤野千夜 ベネッセコーポレーション 「海燕」1995 年 11 月号初出
『少年と少女のポルカ』1996 年所収
『少年と少女のポルカ』藤野千夜 ベネッセコーポレーション 「海燕」1996 年 2 月号
初出 『少年と少女のポルカ』1996 年所収
『山ん中の獅見朋成雄』舞城王太郎 講談社 2003 年
『みんな元気。』舞城王太郎 新潮社 2004 年
「Dead for Good」舞城王太郎 『みんな元気。』所収 新潮社 2004 年
『阿修羅ガール』舞城王太郎 新潮社 2005 年（単行本：2003 年）
『SPEEDBOY！』舞城王太郎 講談社 2006 年
『世界は密室でできている。』2005 年 講談社（単行本：2001 年）
『告白』湊かなえ 双葉社 2008 年
『夢にも思わない』宮部みゆき 角川書店 2002 年（単行本：1999 年）
『人のセックスを笑うな』山崎ナオコーラ 河出書房新書 2004 年
『放課後の音符』山田詠美 新潮社 1989 年
『パイナップルの彼方』山本文緒 1992 年 角川書店
『恋愛中毒』山本文緒 1998 年 角川書店
『とかげ』吉本ばなな 新潮社 1993 年
『N.P』吉本ばなな 角川書店 1990 年
『白河夜船』吉本ばなな 福武書店 1988 年（「海燕」1988.12 月号初出）
『キッチン』吉本ばなな 福武書店 1986 年（「ムーンライト・シャドウ」所収）

■新聞記事

『CD-毎日新聞' 97』1998年・『CD-毎日新聞' 98』1999年 毎日新聞社
『読売新聞縮刷版 CD-ROM』紀伊国屋 1997年
『産経eテキスト』産経新聞社 1997年-1998年
『聞蔵Ⅱ』朝日新聞社 <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>

■漫画

『GUNSLINGER GIRL』相田裕 メディアワークス 2008年
『花咲ける青少年』樹なつみ 白泉社 1990年
『八雲立つ』樹なつみ 白泉社 1992年,1995年
『Pumpkin Scissors』岩永亮太郎 講談社 2007年
『君に届け』椎名軽穂 集英社 2009年,2010年
『銀魂』空知英秋 集英社 2004年,2005年
『フルーツバスケット』高屋奈月 白泉社 2004年,2006年
『星は歌う』高屋奈月 白泉社 2008-2010年
『愛してナイト』多田かおる 白泉社 1982-1984年
『甥の一生』西炯子 小学館 2009年
『っポイ!』やまざき貴子 白泉社 1992年

■雑誌

『non-no』集英社/『ダ・ヴィンチ』メディアファクトリー/『an・an』マガジンハウス/『FRaU』講談社/『H』rockin'on/『KERA』インデックス・コミュニケーションズ/『mina』株式会社主婦の友社/『MORE』集英社/『popteen』角川春樹事務所/『spring』宝島社/『steady』宝島社/『週刊文春』文藝春秋

謝辞

本論文の執筆にあたり、お世話になった方々に、感謝致します。

江口泰生先生・京 健治先生・宮崎和人先生・田仲洋己先生には、拙い予備論文・学位論文を審査頂き、今後の課題を多くご指摘頂きました。先生方のご指摘を参照し、より考察を深め、研究を発展させたいと思います。

江口泰生先生には、論文やレポート、レジュメなどをいつも丁寧に添削して頂き、自分の見落とししている間違いなどご指摘頂きました。あまり言うことを聞かず、堂々と締め切りを破り、何かと口答えの多い私を最後まで根気よくご指導頂きました。今後は、江口先生のような緻密さや慎重さを身につけられるよう精進します。

京 健治先生には、大学院への進学を勧めて頂いたことを、一番感謝しています。また、論文執筆・学会発表の際には、申し訳ないくらい時間を割いて頂きました。一向に分かり易くならない発表レジュメを、毎日のように添削頂きました。京先生にため息をつかせない学会発表ができるよう、頑張ります。

宮崎和人先生には、演習授業での論文指導のほかに、学会会場でもしばしばお世話になりました。宮崎先生の「研究者は孤独だから」という言葉は妙に頭に残っており、つらいときにふと思い出しました。これからも、宮崎先生の言葉を思い出しながら研究を続けていきたいと思います。

田仲洋己先生には、予備論文・学位論文の審査のほかに、『岡大國文論稿』に投稿する際や、研究室の行事などで大変お世話になりました。学位論文の審査の折には、自分では気づけないようなご指摘を頂き、今後の課題を得ることができました。特に資料の扱いについて、不勉強であることを痛感しました。

研究室で出会った友人・先輩・後輩、研究会で出会った先生方・大学院生の方々にも、学位論文執筆までの気力を保たせて頂いたことを、感謝します。もう研究をやめようかと悩みつつ、「途中で投げ出すような先輩では、後輩に示しがつかない」という意地で続けた時期もありました。

また、忙しいときは連絡もせず勝手気ままに研究を続ける私に、文句を言いつつも「もうやめなさい」とは言わずにいてくれた家族にも、感謝します。

皆様の支えがあって初めて無事に学位論文を提出できたことを、今後とも忘れないようにしたいと思います。ありがとうございました。